

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第220集

いっ しき じょう あと
一 色 城 跡

2023

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

近年、歴史遺産ブームの中で最も注目を浴びているのは古墳と城跡であるといえます。これらは史跡となっているものも多いのですが、大多数は地表における痕跡もおぼろげな埋蔵文化財であります。特に城跡は石垣のイメージが強いのですが、山に行けば山城、平野に行けば平城、と戦国時代の城は大半は土で固められたものです。

稲沢市の西島本町と片原一色町に所在する一色城跡は、「片原一色城」として城跡めぐりではよく知られた存在でしたが、正確な所在地は不明のままとなっていました。これが今回行われた発掘調査によって所在地の確定のみならず、規模の一部も判明するなどの成果を上げることができました。

そして「片原一色城」を著名にしているのは、『信長公記』に記される、かの織田信長に鉄砲を教授したという橋本一巴をはじめとする橋本伊賀守の一族が城主だということです。このように、ある埋蔵文化財が文献史料との関連づけられることによって、より歴史資料としての重要度を増すことはいうまでもありません。今後は明らかになった城跡の内実をともなった「片原一色城」が語られ続けることになるでしょう。

このたびの成果を導くために、地元の西島本町や片原一色町の皆さまには多大なご理解とご協力をいただきました。また関係する諸機関のご配慮をいただきました。ここに深く感謝を申し上げますとともに、地域の歴史資料として本書が活用されますことを祈念いたします。

令和5年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 岡本範重

例 言

- (1) 本書は、愛知県稲沢市西島本町および片原一色町に所在する一色城跡（県遺跡番号 090029、県埋文遺跡記号 1EIJ）の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は、愛知県建設局道路建設課による県道給父稲沢線道路改良工事に伴う事前調査で、愛知県教育委員会（現愛知県県民文化局文化芸術課文化財室）を通じた委託事業として公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（令和元～2年度）が実施した。
- (3) 発掘調査期間は、令和元年度は令和元（2019）年6月24日～令和2（2020）年1月31日、令和2年度は令和2（2020）年11月4日～令和3（2021）年3月26日である。
- (4) 発掘調査面積は、令和元年度は2,500㎡、令和2年度は1,350㎡で、総面積は3,850㎡である。
- (5) 発掘調査は、令和元年度は樋上昇（主任専門員）・永井邦仁（調査研究専門員）、令和2年度は池本正明（調査課長）・永井邦仁が担当した。
- (6) 発掘調査にあたり、令和元年度は株式会社島田組（現場代理人：中川健二、調査補助員：島田裕弘、測量士：平井利尚）、令和2年度は株式会社イビソク（現場代理人：水谷誠、調査補助員：生駒昌史、測量士：加納翔太）に調査支援を受けた。
また、地質の試錐（ボーリング）調査は、株式会社アーキジオの協力を得た。
- (7) 発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。
愛知県県民文化局文化芸術課文化財室・愛知県一宮建設事務所・愛知県埋蔵文化財調査センター・稲沢市片原一色区・稲沢市上方区・稲沢市西島東地区・稲沢市教育委員会生涯学習課・尾崎綾亮・城ヶ谷和広・田中俊輔・高田徹・館英二・日野幸治・北條献示・吉田さよ子（敬称略、五十音順）
- (8) 本書作成のための整理作業は永井が担当し、遺物実測・デジタルトレースで株式会社四門、遺物写真撮影で有限会社写真工房・遊、科学分析で株式会社パレオ・ラボ、保存処理で株式会社東都文化財保存研究所の協力を得た。なお、石製品の石材鑑定は堀木真美子（主任専門員）による。
- (9) 整理作業期間は令和3年4月から令和4年3月である。
- (10) 本書の編集および主要項目の執筆は永井邦仁がおこなったが、一部は鬼頭剛（主任専門員）が執筆した。また小林克也（株式会社パレオ・ラボ）ほかにより提出された分析結果報告も編集の上掲載した。執筆者名は目次および文末に記載した。
- (11) 本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第七系（以下、国土座標VII系と呼ぶ）に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- (12) 本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- (13) その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。
- (14) 遺構一覧および遺物一覧のデータは愛知県埋蔵文化財センターのホームページで公開されている。
- (15) 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161 / E-mail: doki@maibun.com）
- (16) 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

目次

第1章 調査の概要

- | | | | |
|-----|---------------|------|---|
| 第1節 | 調査に至る経緯と調査の工程 | (永井) | 1 |
| 第2節 | 遺跡の地理的・歴史的環境 | (永井) | 4 |

第2章 遺構と遺物

- | | | | |
|-----|-----------------|------|----|
| 第1節 | 基本土層と概観 | (永井) | 7 |
| 第2節 | 一色城の遺構と遺物 | (永井) | 12 |
| 第3節 | 古墳時代～江戸時代の遺構と遺物 | (永井) | 30 |
| | 遺構基本図 | | 69 |

第3章 自然科学分析

- | | | | |
|-----|----------------|----------|----|
| 第1節 | 放射性炭素年代測定 | (パレオ・ラボ) | 72 |
| 第2節 | 樹種・種実の同定 | (パレオ・ラボ) | 76 |
| 第3節 | 一色城跡における層序と古環境 | (鬼頭) | 97 |

第4章 総括

- | | | | |
|-----|---------------|------|-----|
| 第1節 | 一色城跡について | (永井) | 103 |
| 第2節 | 一色城跡における集落の変遷 | (永井) | 106 |
| | 写真図版 | | 107 |

挿図目次

図 1	遺跡位置図	1	図 55	19A 区 034SD・035SD・044SD・045SD・052SD 遺構図	52
図 2	調査区割図	2	図 56	19Ba 区 522SD・530SD・534SD・540SD 遺構図	53
図 3	一色城跡周辺の遺跡分布図	5	図 57	19Cb 区 095SD 遺構図	54
図 4	一色城跡の歴史的環境	6	図 58	19Bb 区 256SD 遺構図	55
図 5	19A 区調査区北壁土層断面図	8	図 59	19A 区中世区画溝等 遺物図	56
図 6	19A 区調査区北壁土層断面図 (図 4 部分拡大)	9	図 60	19A～D 区 139SK・200SK・232SK・238SK・239SK・ 361SK・449SK・556SK・578SK・579SK・580SK 遺構図	57
図 7	19Ba 区・Ca 区・Cb 区土層断面図	9	図 61	19Ca 区 194SD 遺構図	58
図 8	20B 区調査区北壁土層断面図	10	図 62	19Ca 区 193SD 遺構図	59
図 9	20A 区調査区南壁断面図	11	図 63	19Ba 区 194SD・494SD 遺物図	60
図 10	19Ba 区 464SD 遺構図	13	図 64	19A～D 区各遺構 遺物図	61
図 11	19Ba 区 464SD 遺物図	14	図 65	19A～D 区各遺構 遺物図	62
図 12	19Ba 区 464SD 木製品遺物図	15	図 66	19Ba 区 507SX・574SD 遺構図	63
図 13	20B 区 230SD 遺物図	16	図 67	19Ba 区 518SI 遺構図	63
図 14	20B 区 230SD 遺構図	17	図 68	19A 区 507SX 遺物図	64
図 15	20B 区 230SD 木製品遺物図	18	図 69	19A～D 区検 1 面 遺物図	64
図 16	一色城跡出土の古銭拓影	19	図 70	19A～D 区検 1 面 遺物図	65
図 17	20C 区 035SD 遺構図	19	図 71	19A～D 区検 2 面 遺物図	65
図 18	20A 区調査区東壁 090SD 土層断面図	20	図 72	19A～D 区検 2 面 遺物図	66
図 19	20B・C 区 056SD 遺構図	21	図 73	19A～D 区検 2 面 遺物図	67
図 20	20A・C 区 090SD 遺構図	22	図 74	19A～D 区トレンチ・表土 遺物図	68
図 21	056SD 遺物図	23	図 75	遺構基本図 (20A～C 区第 1 面、同東部第 2 面)	69
図 22	090SD 遺物図	24	図 76	遺構基本図 (19A・Ba・Bb・Ca 区第 1 面、同第 2 面)	70
図 23	20A・C 区 056SD・090SD 木製品遺物図	25	図 77	遺構基本図 (19A・Bb・Ca・Cb・Cc・D 区第 1 面、同第 2 面)	71
図 24	20A・C 区 056SD・090SD 木製品遺物図	26	図 78	暦年代較正図【その 1】	73
図 25	一色城跡出土石製品遺物図	27	図 79	暦年代較正図【その 2】	75
図 26	20A 区 130SD・133SD・136SK・154SD 遺構図	28	図 80	一色城跡出土の漆碗の光学顕微鏡写真	77
図 27	20A 区 130SD・133SD・154SD 遺物図	29	図 81	一色城跡出土の大型植物遺体	79
図 28	20A～C 区各遺構 遺物図	31	図 82	一色城跡出土の自然樹木の光学顕微鏡写真 (1)	90
図 29	20A 区 273SI 遺構図	32	図 83	一色城跡出土の自然樹木の光学顕微鏡写真 (2)	91
図 30	20A 区 357SZ 遺構図	33	図 84	一色城跡出土の材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (1)	92
図 31	20A 区検 2 面掘立柱建物跡 遺構図	34	図 85	一色城跡出土の材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (2)	93
図 32	20A 区 273SI・357SZ 遺物図	35	図 86	一色城跡出土の材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (3)	94
図 33	20A 区古代包含層～中世整地層 遺物図	35	図 87	一色城跡出土の材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (4)	95
図 34	20A～C 区検 1 面 遺物図	36	図 88	一色城跡出土の材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (5)	96
図 35	20A～C 区表土 遺物図	36	図 89	試錐調査地点と地下層序観察地点	97
図 36	20A～C 区攪乱 遺物図	36	図 90	試錐地点 (19Cb 区) における地質柱状図	98
図 37	19A 区 128SD 遺構図	37	図 91	19A 区北壁における遺構 128SD を含む地質柱状図 (左) と 19Ba 区の深掘における地質柱状図 (右)	100
図 38	19A 区 128SD 遺物図	38	図 92	20C 区北東隅の深掘における地質柱状図 (左) と 19Ba 区南壁の深掘における地質柱状図 (右)	101
図 39	19Bb 区 392SD 遺物図	39	図 93	片原一色村絵図北端部	103
図 40	19Bb 区 392SD 遺構図	40	図 94	一色城跡の発掘調査の概要図	105
図 41	19A 区 072SD・19Bb 区 380SD 遺構図	41	図 95	一色城跡関連の遺構	106
図 42	19A 区 033SD・072SD・20Cb 区 199SD 遺物図	41			
図 43	19A 区 066SI・067SI・070SI・071SI・101SI 遺構図	42			
図 44	19A 区 073SI・078SI・093SI・158SD 遺構図	43			
図 45	19A 区 097SI・107SI・108SI・124SI・125SI 遺構図	44			
図 46	19A 区 170SI・199SD 遺構図	45			
図 47	19A 区 190SK・355SI・359SK・379SI・389SI・398SI 遺構図	46			
図 48	19A 区古代竪穴建物跡 遺物図	47			
図 49	19A 区 416SI・424SI・441SI・450SI 遺構図	47			
図 50	布掘り掘立柱建物跡 19Bb 区 282SD 遺構図	48			
図 51	19Bb 区 376SK 遺構図	49			
図 52	一色城跡出土製塩土器 遺物図	49			
図 53	19Cb 区 463SK 遺構図	50			
図 54	19A 区 017SD・038SD 遺構図	51			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と調査の工程

(1) 遺跡の位置と調査に至る経緯

稲沢市明治地区 愛知県稲沢市は名古屋市の北西約14kmに所在する人口約13万4千人の都市で、大国霊神社（国府宮）とその周辺に古代から中世の尾張国府が推定されている。一色城跡の所在地は、市域西部の明治地区に属し、西島町（旧・西島村）と片原一色町（旧・片原一色村）にまたがっている。一色城跡の周辺は、国道155号と日光川の間広がる田園地帯となっているが、20世紀後半に進められた土地地区画整理によって平坦で直線的な道路や畦畔で構成される景観に変貌している。また西島町と片原一色町の境界付近には、昭和37（1962）年に整備された名古屋市上下水道局の水道送水幹線（朝日取水場～大治浄水場）が北西から南東方向へ横切っている。同導水路には昭和54（1979）年に名古屋市上水道の上に尾張サイクリングロード（現：尾張水道みち）が設置されており、直線道路が景観的なアクセントとなっている。その一方で、一部には微高地の一部が切り崩されずに2m以上の高低差となって残存しているところもある。

片原一色城跡 ところで「一色城跡」は、埋蔵文化財包蔵地の名称である（県遺跡番号090029、埋蔵文化

財センター記号1EIJ）。これに対して愛知県教育委員会1991『愛知県中世城館調査報告』では「片原一色城」という名称であり、一般でもそのように呼ばれることが多い。ただしこの呼称は、第4章総括で述べるように天保15（1844）年成立の『尾張志』が初出で、宝暦2（1752）年成立の『張州府志』では「一色城」とされている。さらに城が機能していた時期の呼称については不明である。たしかに愛知県内だけでも「一色城跡」が複数所在し（例：名古屋市名東区・尾張一色城跡、知多郡南知多町・尾張知多一色城跡、豊川市牛久保町・三河一色城跡）、城の特定には「片原一色城」が便利ではある。しかし「一色城」が判明する最古の呼称であることから、本書では城跡の名称としても「一色城跡」を用いる。

ところで、一色城跡の詳細な所在地は長らく絞り込んでいなかったが、近年、館英二氏や高田徹氏（高田徹2018「稲沢市の中世城館」『愛城研報告』第22号 愛知県中世城郭研究会）が地籍図から神明社北西側の耕作地に推定する案を相次いで提示しており、発掘調査を進めるうえで大いに参考となった。

県道稲沢給父線改良工事 当該遺跡の所在地には、昭和34（1959）年認定された県道133号祖父江稲沢線が東西に延びている。この道路は稲沢市役所から一直線で西進し、その先の日光川西方には稲沢市祖父江町がある。ただしその渡河には南方の県道67号線まで迂回するルートとなっている。このルートにおける交通量の増大もあり、拡幅工事が計画された（県道512号給父稲沢線）。その計画対象地内に埋蔵文化財包蔵地である一色城跡の一部が含まれる可能性があり、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室（現・愛知県県民文化局文化芸術課文化財室）と事業者である愛知県建設局との間で協議が行われ、遺跡の範囲を検証する確認調査を行い、その後の対応を決めることとなった。

確認調査 一色城跡の確認調査Bは、平成30年5～6月に、愛知県埋蔵文化財調査センターによって行われた。調査は対象となる東西約380mの事業用地内において22か所のトレンチ（T1～T22、1m×2m）を設定し、バックホウによる掘削で遺構・遺物の有無と堆積土



図1 遺跡位置図

層を確認するものである(総面積44㎡)。その結果、対象地の東端から約240mの範囲(T11～T22)において土師器や須恵器など古墳時代～奈良時代の遺物が出土し、それらの包含層が良好に残存している状況が確認された、一方、当該範囲から西側(T1～T10)では粘質シルトと細粒砂を主体とする湿地状堆積が広がっており、遺跡の存在は考えにくいと判断された。出土遺物は、尾張水道みちを挟むT9～T18において最も濃密に分布しており、遺跡の重要部分に相当すると考えられた。ただしそれは、一色城よりも古い時代である古墳時代～古代の集落遺跡である可能性が想定されていた。

(2) 発掘調査と室内整理の経過

本発掘調査の実施 以上の範囲確認調査の成果を受けて、文化財保護室を通じて愛知県建設部から委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、令和元～2年度に当該遺跡の事業用地における本発掘調査B(本発掘調査)を行った。

令和元(2019)年度は尾張水道みちから東側で2,500㎡の調査範囲であったが、交差する現道の用水路の付け替えなどを伴うものであったため、調査区は東西に細長く分割する必要があった(図2)。発掘調査は愛知県埋蔵文化財センター調査課の樋上昇と永井邦仁が担当し、調査支援は株式会社島田組(現場代理人:中川健二、調査補助員:島田裕弘、測量士:平井利尚)が参画した。調査工程は令和元年6月24日より、19A区にて開始され、19Ba区・19Cb区・19D区へと進行した。19A区では第1面で中世の区画溝等、第2面で古墳時代～奈良時代の遺構・遺物等が検出された。しかし他の調査区では第2面で全ての時代の遺構が検出された。そして11月以降に着手した19Ba区・19Ca区では一転して戦国時代～江戸時代の遺物が出土する大溝状の遺構が検出され、その一部を一色城の東堀と想定することと

なった。現場作業は令和元年12月27日に終了し、図面・遺物の第一次整理は令和2年1月31日までに完了することができた。なお、調査と平行して地元自治会に4回の調査速報の回覧を行い、令和元年11月2日には現地での説明会を開催し、100名の参加があった。

令和2(2020)年度は尾張水道みちから西側で1,350㎡の調査範囲が設定され、排土置き場を関係から3調査区(20A～C区)に区分して進めることとなった。調査担当は調査課の池本正明と永井邦仁が担当し、調査支援は株式会社イビソク(現場代理人:水谷誠、調査補助員:生駒昌史、測量士:加納翔太)が参画した。前年度の調査地点はすでに仮舗装までの工事が完了していたため現場詰所などをそこに設置した。調査は令和2年11月4日に北東部の20C区から着手し、用水路の撤去とともにその北側を進めた。同区南辺では東西方向の溝を検出し、天目茶碗など一色城関連の遺物を検出し、その主郭内に相当することが考えられた。ついでその南側に位置する20A区の調査に着手し、東西溝の続きや、城の整地層上で遺構を検出することができた。それと同時に整地土層下に古代集落の遺構があることも確認され、20A区の一部は上下2面調査となった。この下面遺構の調査とほぼ同時に調査範囲西部の20B区の表土掘削を進めたところ、昨年度検出の東堀と平行する幅約9mの大溝状遺構が確認され、これが西堀になると想定され、ここに一色城の東西規模が外郭線で約106mになることが明らかとなった。また20A区下面遺構では奈良時代の竪穴建物跡と前年度にも検出された直径約6mの周溝状遺構が確認され、一方で城の整地によって中世区画溝までが埋められていることも判明し、遺跡変遷の概要を掴むこととなった。当該年度も調査速報の地元回覧を配付し、令和3年2月20日には地元対象の現地説明会を開催した。これには加藤錠司郎稲沢市長らの参加もあった。その後図面と遺物の第一次整理を進め、令和3年3

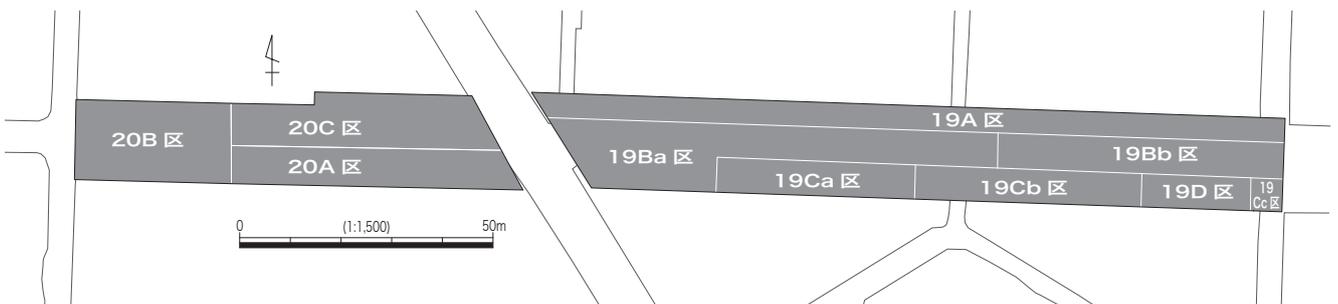


図2 調査区割図

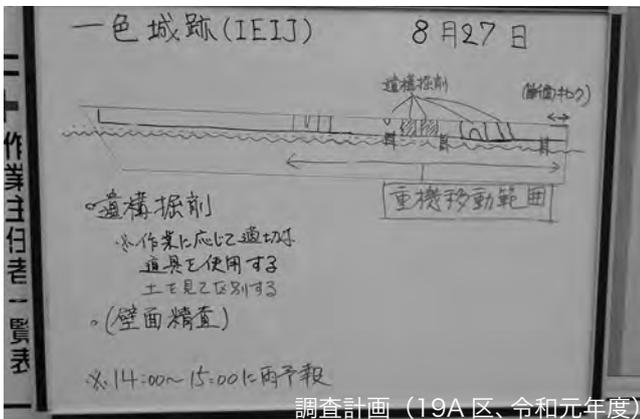
月3日に現地での業務を完了した。

以上2年度にわたる発掘調査においては、遺構検出および土層の分層は永井が行い、写真撮影と土層注記は島田と生駒が行った。また遺構測量と製図は平井と加納が行った。また現場での各種作業には、県内外の遠隔地からだけでなく地元からも多数の発掘作業員の参加があった。それによって担当者が地元ならではの情報を得られたことも付言しておきたい。

室内整理 以上2か年度の発掘調査で得られた遺物と調査データ(写真・図面・各種一覧・メモ類)を整理する業務は令和3年度に行われた。その主体は遺物の復元および実測作業であり、令和3年4月～令和4年

3月まで、愛知県埋蔵文化財調査センター内(愛知県弥富市)で行われた。担当は永井邦仁で、滝智美、時田典子、山本孝枝がこれを補佐した。遺物実測点数は約800点に上り、その大半を株式会社四門(担当:清水香枝、藤森紀子、平井美典)に委託した。また写真撮影は有限会社写真工房遊(カメラマン:金子知久)に委託した。その他、漆碗の保存処理は株式会社東都文化財保存研究所、年代測定や樹種・種実同定については株式会社パレオ・ラボ(担当:小林克也)に委託した。

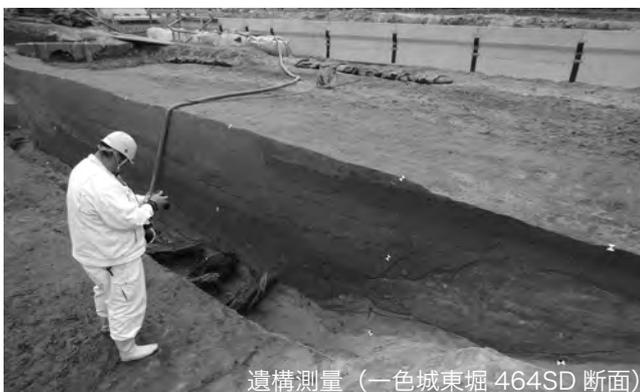
報告書の執筆は主に永井が行い、遺跡の地質構造については鬼頭剛、自然科学分析の各報告はパレオ・ラボから提出されたものを編集した。



調査計画 (19A区、令和元年度)



遺構掘削 (19A区、令和元年度)



遺構測量 (一色城東堀 464SD 断面)



遺物洗浄 (W-30、令和2年度)



地元説明会 (令和2年度)



遺物実測 (点検)

作業工程写真

第2節 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

浜堤と自然堤防 前節でも述べたように、一色城跡の所在地は尾張平野の中央部にある。地形区分では沖積低地になり、河川堆積によって陸地化が進んだ地域である。概ね近代以前の河川は尾張平野を網状に流れ、河道の周辺の氾濫原に自然堤防とよばれる微高地とその背後に後背湿地を形成する。また弥生時代以降に徐々に後退する海岸線に伴って形成される浜堤に由来する微高地も存在する（石黒立人・服部俊之 1994『跡ノ口遺跡 一色長畑遺跡 船橋宮裏遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第51集）。そのひとつが、一色城跡の南側で北西から南東方向に延びているとみられ、一帯にみられる名称に「一色」を冠する遺跡の分布域が相当すると考えられる。この浜堤は向きが示しているように河川堆積を遮るかたちになっているため、そこから上流側で河川の乱流を引き起こす要因にもなっている。このことから一色城跡の発掘調査でも多様な方位の水流を伴う旧河道の存在が明らかにされており、この点については地質構造について鬼頭が後述する。

一方の自然堤防由来の微高地は、河川堆積の方向から概ね北東から南西方向に細長い形状となる。一色城跡で最も顕著となるのは日光川沿いの自然堤防で、一色城跡を含む周辺の水田地帯における標高が約2.3～3.3mであるのに対して、恵日寺の所在する片原一色町高山付近では標高約7.2mで4～5mの高低差がある。ここまででなくとも、一色城跡に東部に当たる西島本町の現集落の中心地は標高約3.3mで周囲の水田（標高2.2～2.7m）に比べて1m前後の微高地である。この微高地は集落の形状から東西約100m南北約300mの規模で、時代が遡るほど利用可能な範囲は狭かったと推測される。

光堂川 日光川に合流する小河川の1つに光堂川がある。現在の合流点は江戸時代に開通したもので、そこから北東方向へ遡る直線的な河道は人工のものである。したがって一色城跡の南側に接して横切る景観は比較的新しいもので、一色城やそれ以前の古代・中世集落の時代にはないものである。一方その上流は、一宮市内で大江山から分岐する光堂井筋という灌漑用水である。

しかしながら光堂川の存在は完全に人工開削によるものとは考えにくく、河川の存在は史的にも古く遡る可

能性があるという。これはかつての地境や旧地形を参照すると、直線的な河道へ転換する下屋町付近から中野川端遺跡東側の低地（水田）から蛇行しながら南下して平・山口遺跡と一色竹橋遺跡・一色市場遺跡の境界付近の中野宮町東側を抜けて一色青海遺跡の方向へ抜ける河道が考えられる。実際、一色青海遺跡では遺跡の北方から流下する旧河道が遺跡内で大きく蛇行してその脇で弥生時代注記後葉の集落が立地していることが判明している（樋上昇ほか 2008『一色青海遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第147集）。

(2) 遺跡の歴史的環境

一色青海遺跡 次に遺跡周辺の歴史的環境について概観する。まずは、一色城跡周辺における遺跡（埋蔵文化財包蔵地）に分布状況をみてみよう。実は一色城跡が存在する稲沢市明治地区（旧中島郡明治村）では遺跡の分布や各遺跡の広がりについて十分な情報が得られていない。遺跡分布図（図3）で明らかだが、光堂川を挟んだ北西側の地域は遺跡の所在は示されているものの、その広がりには小さく示されている。これに対して南東側の「一色」を冠する地域では、多数の遺跡分布がみられる。とりわけ跡ノ口遺跡や一色青海遺跡では1990年代の初頭から発掘調査が行われており、弥生時代中～後期の遺跡であることが判明している。一色青海遺跡では先述のように遺跡内を旧河道が蛇行し、その右岸に大型竪穴建物で構成される弥生時代中期後葉の集落域が展開し、中には桁行6間の大型の掘立柱建物SB017が中心的位置を占めている。また集落域に隣接して30基以上の方形周溝墓からなる墓域も存在し、地域における拠点集落であったと考えられている。

竹腰城跡 近隣で発掘調査された中近世の城館跡として、稲沢市竹腰西町に竹腰城跡がある。当該遺跡では昭和63（1988）年7月に試掘調査が行われ、方1町規模と推測される城の東堀の一部とみられる落ち込みが検出されている。城主と築城年代については、江戸時代の尾張藩の地誌『寛文村々覚書』に「祖父江大膳」の城とだけ記され、明治時代に記された『明治村誌』には1600年の関ヶ原の戦いの後に祖父江大膳亮五郎左エ門信勝が軍功により与えられた土地に築城したという。また一



図3 一色城跡周辺の遺跡 (国土地理院発行 1:25,000 竹鼻・津島・一宮・清洲を改変)

色城跡から北に約330mと近接する西島城（藪田遺跡）も同氏による築城と伝えられている。しかし信勝は慶長19（1614）年大阪冬の陣で大阪方に内通したとして切腹となったため城も廃絶したようである。このように尾張平野に分布する「中世城館跡」には慶長年間（16世紀末～17世紀初頭）に築城されたものも含まれており、地域における城館の分布状況を理解するうえで存続時期も十分考慮しておく必要がある。

善応寺と橋本氏 一色城跡から約1km南に所在する旭照山善応寺は浄土宗の寺院である。建仁年間（1201～1204年）に一色満吉によって創建されたと伝えられるが、13～14世紀の来歴はほとんどわかっていない。しかし応永年間（14世紀末）に築城されたという一色城の、橋本伊賀守寛勢が城主の時に、父宣都寺の菩提を弔うため善応寺を中興したとされる。また天文元（1532）年に浄土宗に改宗したともいわれる。このように橋本氏と善応寺の関係は伝承のみで、確実な史料が見当たらない。これに対して、天文7（1538）年に橋本一巴が城主の時に、横井孫六時勝が銅製大日如来坐像（全高57.5cm、愛知県指定文化財）が厨子とともに奉納している。同坐像の背面に年号や「羽黒与次郎宗久」などの

製作者銘が記されているが、「羽黒」とあるので犬山あたりの鋳物師と推測される。横井時勝は海西郡赤目城主（愛西市、旧八開村）で、橋本氏との関係は不明であるが、ともに織田氏の配下となっていく経緯は共通している。むしろ特定の豪族によって地域が支配されていたわけではないことがうかがえ、これらがやがて織田信長によって統合されていく数十年前の状況を示しているのかもしれない。

八神街道 善応寺の門前を東西に延びる道が名古屋と八神（岐阜県羽島市）を結ぶ八神街道である。これは美濃国中島郡八神城主の毛利氏が、尾張藩の名古屋城へ登城するために元和元（1615）年に整備したとされる街道である。八神街道は先述した浜堤上の尾根筋に位置しており、周囲より高いところを進む街道の要件を備えている。その意味において、善応寺や遡って一色青海遺跡の弥生中期の集落も浜堤から南方を見下ろすような立地を選んでいることに注目される。つまりそれら要衝を結ぶ交通路としてそれ以前から機能していた可能性が高く、一色城が浜堤に北接する微高地に所在する点も交通路との関係で理解することが可能であろう。

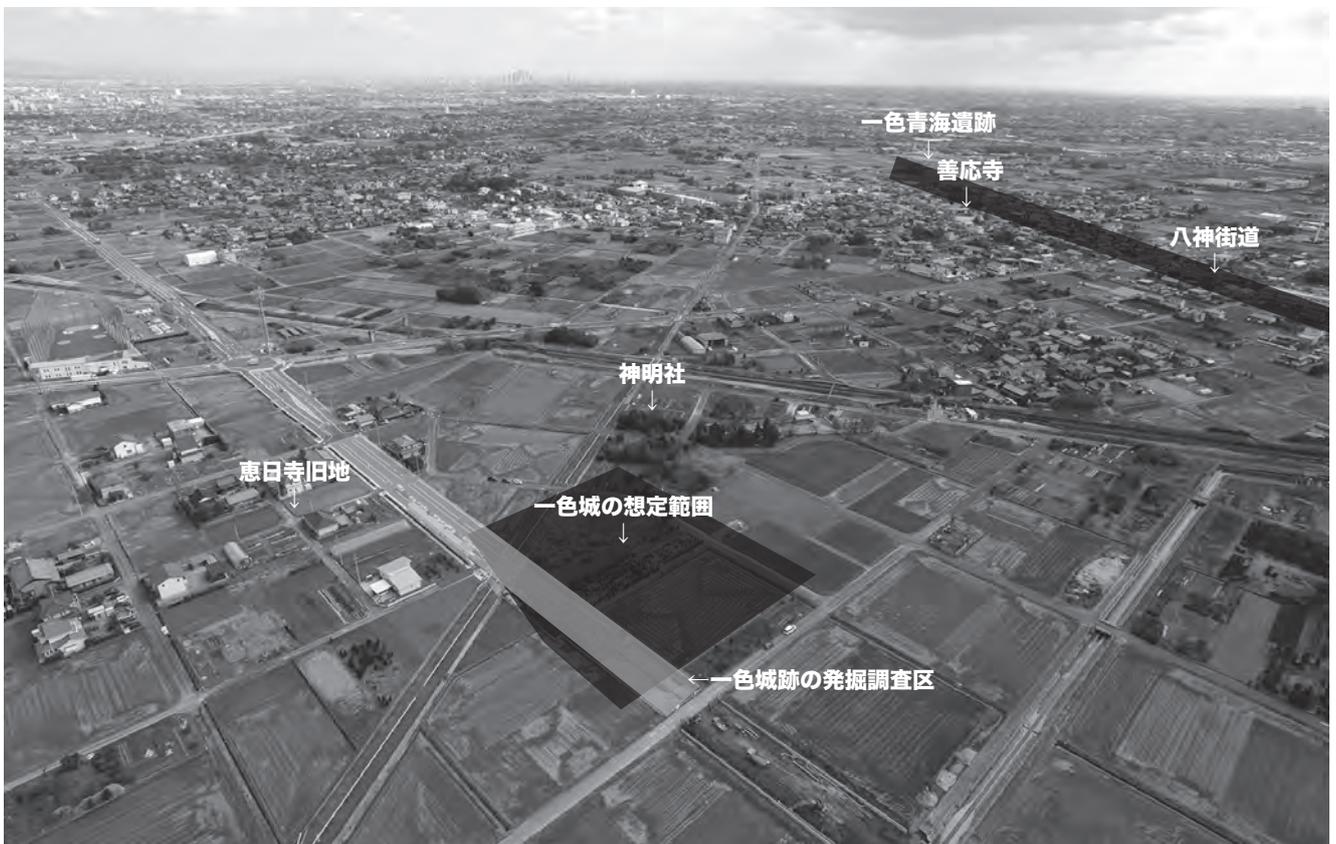


図4 一色城跡周辺の歴史的環境（北西から、空撮写真を加工）

第2章 遺構と遺物

第1節 基本土層と概観

(1) 基本土層と遺構との関係

遺跡東半部 一色城跡の発掘調査は令和元年度に調査対象地の東半部、同2年度にその西半部を行っている。そのため基本土層の把握も東半部と西半部で分かれている。ここではまず東半部の状況から説明する。調査工程順に、①19A区の調査区北壁と②19Ba・19Ca・Cb・19Dの調査区北壁の2ラインで記録を行った。

①19A区調査区北壁(図5)では、西端部(西端から約25m)で村境の溝や近代以降の攪乱(19A区004SXなど)によって大きく攪乱を受けており、基盤層の状況もわかりにくい。セクション図西端から20～25m付近でシルト質の水平堆積(57・62層など)がみられるのでそこから東方では当該層が遺跡の基盤層として認識できる。ただしこれらの層に対して深掘り(約1m)をかけると、古墳時代前期の土師器E-1などが出土することから、当該地点における基盤層の形成は比較的新しい時期であると考えられる。もっとも後述するように、基盤層上に古墳時代前期後半の土師器が出土する包含層19A区507SXが広がっていることから、旧河道の埋没過程と集落形成の開始時期はほぼ平行していたものとみてよいだろう。なお、57・62層の下位にある17層は細粒砂～中粒砂であり、同層は西端から47m付近でも確認できるので、基盤層となる微高地(自然堤防)の基部は同層によって形成されているとみられる。当該層からの遺物出土はなかった。

19A区調査区北壁セクションを水平方向に圧縮かつ垂直方向に強調したのが図5上であるが、これによれば遺構の掘り込みによる凹みはあるものの、おおむね調査区中部(西端から50～125mの範囲)で基盤層の隆起をみることができ、これが微高地の頂部に相当する。そして125m付近から調査区東端にかけては東方へ下り傾斜となっているので、微高地の端部にかかっていることになる。ちなみに夏季に行った発掘調査時には当該地点での湧水が激しかった。

以上の基盤層上面で検出される遺構は、一部大きく掘り込まれた中世以降のものも含まれるが大半は古墳時代

～古代である(検2面遺構)。そして19A区西半部では、古墳時代前期後半の包含層507SXの下位でも遺構が認められる。逆に基盤層より上には検2面遺構に関わる古代の須恵器までを含む遺物包含層(黒褐色～暗褐色シルト)があり、それをさらに中世に行われたとみられる整地層(33層など)が覆っている。33層はやや明るい黄褐色系粘質シルトを主体とするが粒度の異なる土がブロック状に混じっていることから、人為的な埋め立て(整地)であることは明らかである。ここからは山茶碗が出土する。当該層に対しては中世区画溝(屋敷地などを囲う)が掘り込まれている(19A区044SD・045SD・052SDなど写真図版1、後述)おり、ここでも整地層とほぼ同時期の山茶碗類E-374などが出土する。このことから、おそらくその施工に先立ってなされた一連のものという理解となる。また基本土層の調査は遺構の先後関係の解明にもつながる。例えば上に挙げた区画溝044SD・045SD・052SDであるが、北壁でその掘り込み開始点をみると044SDのみが6層の下位にあることから044SDが一旦埋没してから整地(6層)された上で045SDと052SDが掘り込まれているという解釈になる。つまり3条の溝のうち044SDだけは同時に存在していなかったことになり、整地を伴いながら区画が維持されていた状況をうかがうことができる。ところで中世整地層は遺跡東半部では大半が削平されており、19A区の中部～西部にかけて部分的に検出されている。そのため19A区では当初中世整地層上面で遺構検出(検1面)を行った。しかし区画溝以外は大半が近世以降の耕作痕とみられる。

中世整地層のさらに上位には近世の遺物を包含する黄色系粘質シルトが覆っている(7層など)。当該層は全体的に攪拌を受けており、耕作に伴うものと推測される。

これに対して②19Ba・19Ca・Cb・19D区の調査区北壁では、大半が県道施工時などの攪乱を受けているため基盤層直上の状況がわずかに判明するのみである。それでも19Cb区では攪乱の下位で古代の溝状遺構(199SDなど)を検出しており、若干ながら遺構が残存

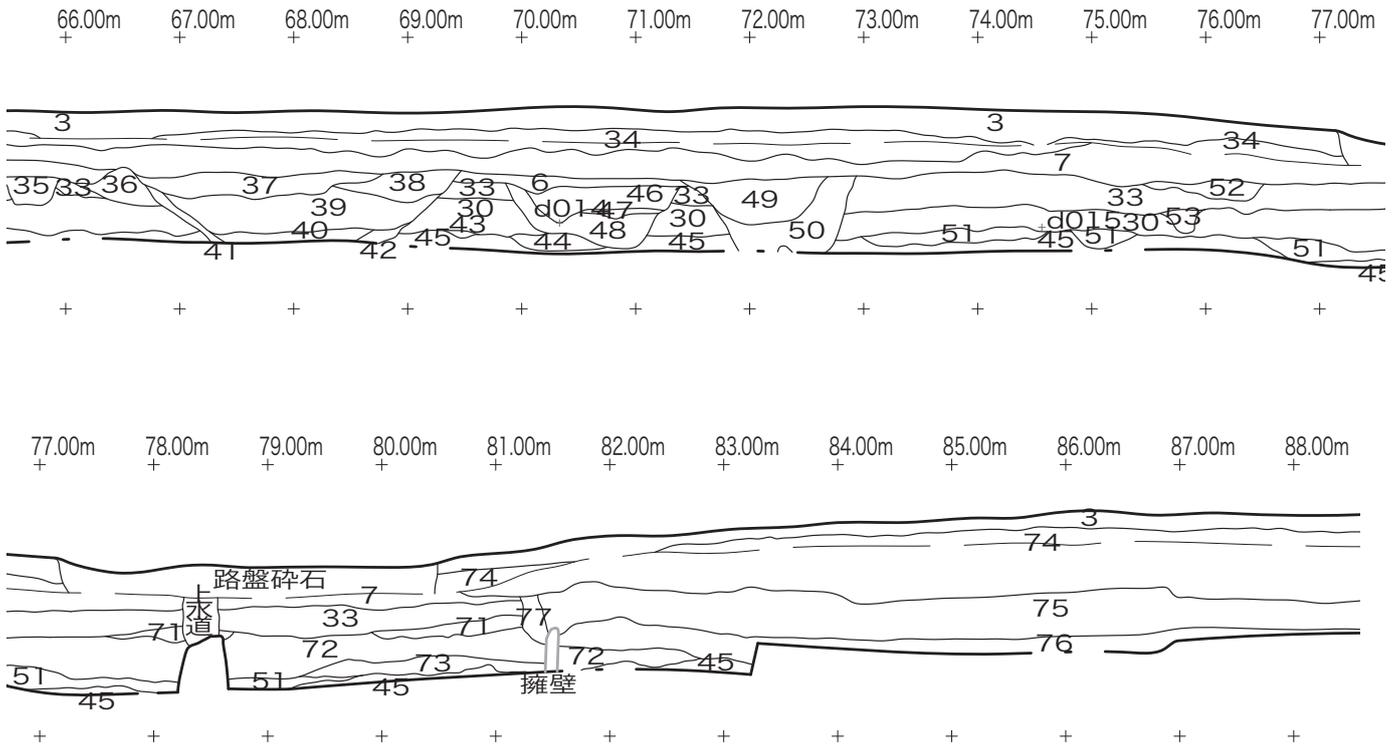


図6 19A区北壁土層断面図(図4部分拡大)

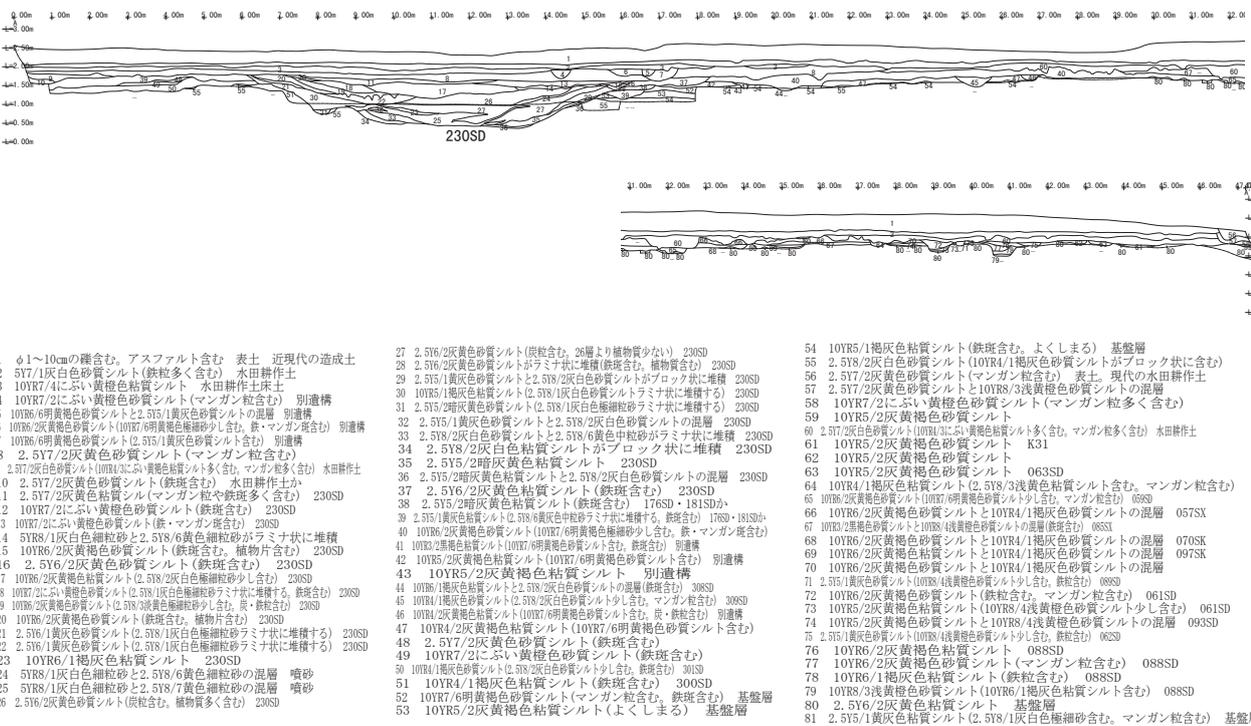


図7 19Ba区・Ca区・Cb区土層断面図

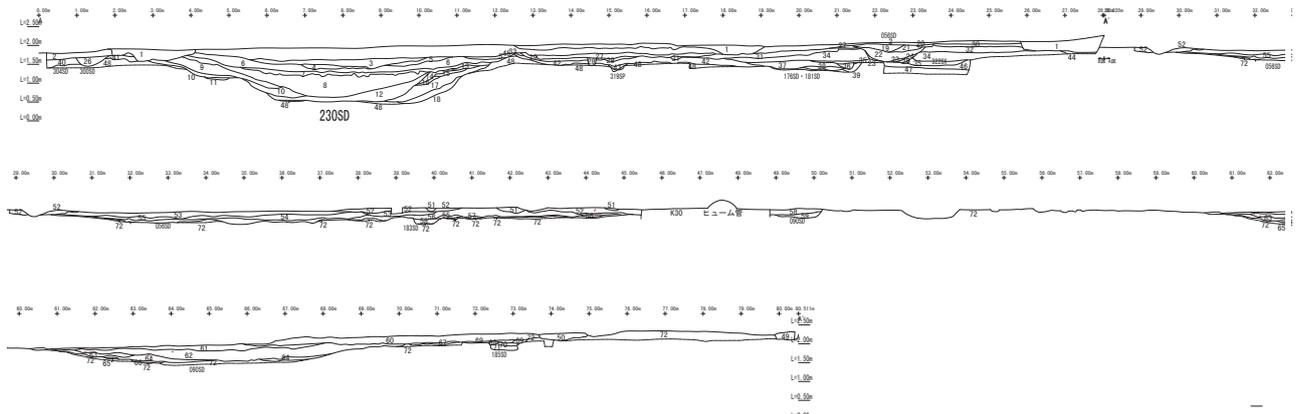
一色城跡

していた。一方、調査区西部では一色城の東堀（19Ba区464SD）が基盤層から下のみであるが確認されている。つまり堀の掘り込み開始位置は滅失していたが、それや基盤層よりもはるかに深い規模であることが判明したのである（後述）。堀の検出面直上は近代の水田とみられる暗青灰色シルトである。また近世以降に堀が改作されたとみられる村境の溝194SDなども同様に掘り込み開始面は不明である。しかし先述したように①断面の近世整地・攪拌層の付近からである可能性は高い。

遺跡西半部 尾張水道みちから西側の令和2年度調査区（20A～C区）では、20C区から調査を開始し同区北壁と最後に行われた20B区北壁での状況が基本土層となる。しかし両調査区の大半は区画整理後の水田であることから、有効な情報はほとんど得られていない。ただし、20B区では若干ながら中世整地層、さらに一色城築城時の整地層がわずかに残存している。一方、20A区南壁は調査対象地南側は隣接してイチョウの樹林と耕作地であることから大きな削平がなされておら

ず、各層の状況を確認することができる。

まず基盤層であるが、遺跡東半部の項で示したように微高地西側が古墳時代前期段階まで河道となっている。しかし尾張水道みちで分断されているため連続する状況は把握できていない。しかし20C区北東隅（一色城北堀035SDの位置）で行った深掘りによれば、基盤層の砂質シルト堆積の下位に顕著な粗粒砂層がなく、大半は粘質シルトであることからここまで河道は達していなかった可能性がある。おそらく河道の規模は東堀464SDに近い規模と推測される。そして河道の西側に別の微高地が存在したと考えられる。これが基盤層となっており、20A区などで古代の遺構（273SI・357SZなど）が検出されている（検2面）。そして検2面の上位には厚さ0.1～0.2mの黒褐色シルトを主体とする遺物包含層が広がっている。遺物は弥生土器から山茶碗類までを含み、弥生時代後期～鎌倉時代で、最も多いのは8世紀の須恵器蓋・杯である。ただし同層直上には中世の整地層が覆っていることから、整地層の遺物が混入し



- | | | | | |
|----|--|----|---|---------------------|
| 1 | 農水管の擾乱(K43) | 39 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 176SD・181SD |
| 2 | 2.5Y7/2灰黄色砂質シルト(鉄斑含む) | 40 | 10YR7/1灰白色粘質シルト(鉄斑含む) | 304SD |
| 3 | 2.5Y7/2灰黄色粘質シルト(マンガン粒や鉄斑多く含む) | 41 | 10YR6/3に多い黄褐色砂質シルト(鉄斑含む) | |
| 4 | 10YR7/2に多い黄褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する。鉄斑含む) | 42 | 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂少し含む) | |
| 5 | 10YR7/2に多い黄褐色砂質シルト(鉄・マンガン斑含む) | 43 | 10YR5/1褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色砂質シルト少し含む) | 319SP |
| 6 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト(2.5Y8/2灰白色極細砂がラミナ状に堆積したものが多い) | 44 | 10YR3/2黒褐色粘質シルトと10YR7/6明黄褐色砂質シルトの混層 | |
| 7 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂少し含む。炭、鉄斑含む。表層付近で植物物多く含む) | 45 | 10YR5/1褐色粘質シルト(鉄斑含む) | |
| 8 | 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト(灰粒含む) | 46 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(よくしめる) | 基盤層または旧表土 |
| 9 | 10YR5/1褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する。植物質含む) | 47 | 10YR5/1褐色粘質シルト(鉄斑含む。よくしめる) | 基盤層 |
| 10 | 10YR5/2暗灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する) | 48 | 2.5Y8/2灰白色砂質シルト | 基盤層 |
| 11 | 2.5Y5/2暗灰色砂質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する) | 49 | 現代の埋め立て土 | |
| 12 | 2.5Y4/1黄褐色粘質シルト(灰粒含む) | 50 | 10BG6/1青灰色砂質シルト(鉄斑含む) | K07 |
| 13 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(鉄斑含む。植物質含む) | 51 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルトと10YR8/4淡黄褐色砂質シルトの混層(2.5Y8/1灰白色極細砂がラミナ状に堆積。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む) | X18(層に7から15cmまでが剥き) |
| 14 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(鉄斑含む) | 52 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルトと10YR8/4淡黄褐色砂質シルトの混層(2.5Y8/1灰白色極細砂がラミナ状に堆積。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む) | X18 |
| 15 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する。植物質含む) | 53 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルトと10YR8/4淡黄褐色砂質シルトの混層(2.5Y8/1灰白色極細砂がラミナ状に堆積したものが多い。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む。層下に木片含む) | 66SD |
| 16 | 2.5Y5/1黄褐色粘質シルト(2.5Y8/2灰白色砂質シルトの混層) | 54 | 5YR8/2灰白色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルト少し含む) | 056SD |
| 17 | 10YR4/1褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂がラミナ状に堆積したものが多い) | 55 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルトがラミナ状に堆積 | 056SD |
| 18 | 2.5Y5/2暗灰色砂質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂ラミナ状に堆積する) | 56 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂少し含む) | 056SD |
| 19 | 10YR5/3に多い黄褐色粘質シルトと10YR7/2に多い黄褐色粘質シルトの混層(2.5Y8/1灰白色極細砂含む。炭粒・マンガン粒含む) | 57 | 2.5Y5/1黄褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂少し含む) | マンガン粒含む) 056SD |
| 20 | 2.5Y7/2灰黄色粘質シルト(マンガン粒含む) | 58 | 2.5Y3/2黒褐色粘土(2.5GY7/1明オリープ灰色極細砂少し含む) | 183SD |
| 21 | 10YR7/2に多い黄褐色粘質シルト(鉄・マンガン斑含む) | 59 | 2.5Y3/2黒褐色粘土と2.5GY7/1明オリープ灰色極細砂がラミナ状に堆積 | 090SD |
| 22 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト | 60 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(10YR5/2灰黄褐色粘質シルト含む) | 090SD |
| 23 | 10YR5/1褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 61 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(10YR5/2灰黄褐色粘質シルト含む) | 090SD |
| 24 | 2.5Y7/2灰黄色粘質シルト(マンガン粒含む) | 62 | 2.5Y5/1黄褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂含む) | マンガン粒含む) 090SD |
| 25 | 10YR5/1褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 63 | 5YR8/2灰白色砂質シルトと2.5Y7/2灰黄褐色極細砂の混層 | 090SD |
| 26 | 10YR7/1灰白色砂質シルト | 64 | 10YR5/1褐色粘質シルト(マンガン粒含む) | 090SD |
| 27 | 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト | 65 | 10YR3/3暗褐色粘質シルト(2.5Y7/2灰黄褐色極細砂含む) | 090SD |
| 28 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 66 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト | 090SD |
| 29 | 10YR6/3灰黄褐色粘質シルト | 67 | 10YR5/1褐色粘質シルトと10YR7/6明黄褐色砂質シルトの混層 | |
| 30 | 10YR7/4に多い黄褐色粘質シルト | 68 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(10YR7/6明黄褐色砂質シルト少し含む) | 185SD |
| 31 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細砂含む) | 69 | 10YR7/2に多い黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 185SD |
| 32 | 10YR8/3淡黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | 70 | 10YR7/6明黄褐色粘質シルト(マンガン粒含む。10YR5/2灰黄褐色粘質シルト層上にラミナ状に堆積する) | 185SD |
| 33 | 2.5Y7/2灰黄色粘質シルト(鉄斑含む) | 71 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(10YR7/6明黄褐色極細砂ラミナ状に堆積する) | 185SD |
| 34 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(鉄・マンガン斑含む) | 72 | 10YR7/6明黄褐色粘質シルト(マンガン粒含む。鉄斑含む) | 基盤層 |
| 35 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト | | | |
| 36 | 10YR6/2灰黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | | | |
| 37 | 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(鉄斑含む) | | | |
| 38 | 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト | | | |

図8 20B区北壁土層断面図

第2節 一色城の遺構と遺物

(1) 概要

一色城跡の発掘調査では多様な時代(時期)の遺構と遺物が検出されている。本章ではそれらを時代別に整理して提示するが、そのうち最も主体になるのが遺跡名にもなっている一色城にかかわるものである。

一色城に関わる遺構は、個々の規模が大きいものの数的には多くない。その最大のものが堀で、東堀(19Ba区464SD)、北堀(20C区0035SD)、西堀(20B区230SD)が検出されている。

堀の内側が城内となるが、堀に伴って構築されたとみられる土塁はほとんどその痕跡がない。これは基本土層でも述べたように中世整地層の上位に構築されたため、同層が後世に大きく削平されている状況からすれば、同時に土塁もほとんどが切り崩されたものとみるしかない。しかし、西堀東側に基盤層(図8の48層)が残存しており、さらにその東側となる凹地状の堆積(27層)が中世整地層に対応する可能性がある。また230SD東側および北堀0035SDの南側には戦国時代の遺物がほとんど出土しない遺構の希薄な範囲が内堀056SD・090SDまで広がっている。このことから、堀の内側に土塁が存在したと推定できる。その下底幅は230SDと056SDとの距離から約9.6mと推測される。

そしてさらに土塁の内側にのびる溝状遺構056SD・090SDがある。これを外周する堀に対して内溝と呼ぶ。内溝に囲まれた内側に城の施設があったことになるが、一色城築城に伴う整地層は20A区に若干残るだけなので、その上面で検出された遺構に限られる。そのほとんどが南北方向にのびる溝状遺構(130SDなど)である。

以上が一色城に関わる遺構である。一方、遺物は上記した遺構から出土する戦国時代のものに限定し、関連がある遺物として取り上げることとする。

(2) 遺構各説

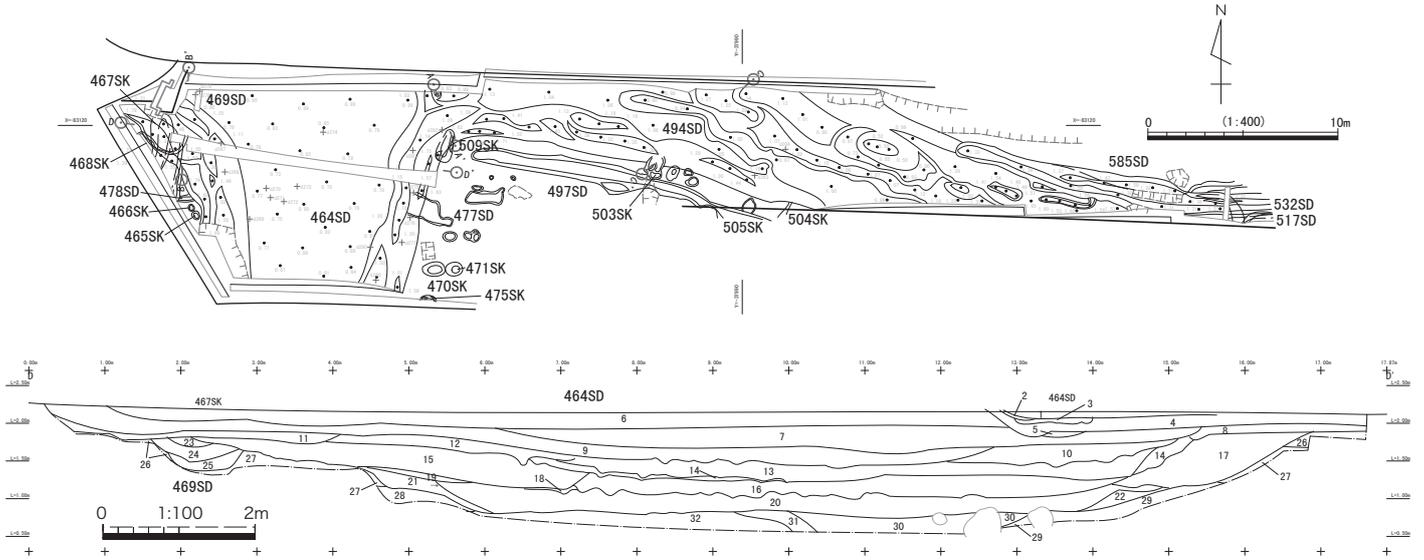
19Ba区464SD 一色城の東堀に相当する遺構である。Ba区西端で尾張水道みちのすぐ東脇に位置する。概ね南北方向に延びる断面逆台形の大溝状を呈する遺構である。検出された南北長は約11.4mで検出面における最大幅は約14.5m、底面における幅約8.5m、検出面からの深さ約1.2mを測る。堀の法面の角度は西側(城

内側)で約47°、東側(城外側)で約25°で全体的に急傾斜な箇所がなく、断面は皿状に近い。

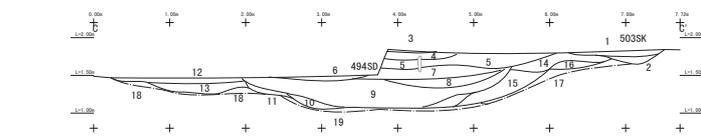
464SDの方位は概ね南北方向であるが、比較的掘り返しの少ない東側をもとに方位をみるとグリッド北から東へ8°振れている。そして西側の上端は調査区北西隅で西に直角に折れており、埋土の状況に変化がみられなかったことから、当該地点で東堀から北堀へ屈曲しているものと考えられる。一方東側の上端もこれに対応する位置で東へ直角に折れている。この屈曲点から東側部分は村境の溝494SDとして調査している。当該溝遺構については工期の限界があったため上層部分を中心に重機を併用した掘削となったため、平面的に464SDと494SDの重複関係は確認できておらず、また土層断面は部分的なものとなっている(図10中段の断面図2点)。このうち右の断面図は464SDと494SDの屈曲点に位置するが、確認できた埋土の最上層は464SDと共通するもので、494SDの一部は464SDと同時に存在していたことを示すものである。一方で、494SDからは近世の陶器類も出土しているので、これより上層部分では494SDが464SDの埋土を切り込んで延びている状況があったと思われる。

そこで464SDの埋土について下位から示す。断面図の最下層に見える29～31層は基本土層でも述べたように基盤層形成過程ある古墳時代以前の河川堆積であり、堀の堆積ではない。当該層は粗粒砂を含むラミナ状堆積をしていることから、水流の中心に位置していたと思われる。そこからは自然状態の樹木が多数出土している。これらの樹木は全てそこから上位(20層との境界付近)で水平に断ち切られており、堀の開削時に旧河道を掘り込んで露出した埋没樹木を切断除去したものであろう。

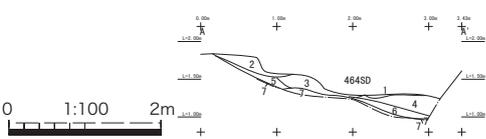
464SD下層(20層)は中央付近ではシルトの湿地堆積であるが、両脇付近では砂質シルトとのラミナ状となっている。同層から若干の木製品や漆碗などが出土している。一方で陶磁器はほとんどみられず、生活遺物の少なさに比べて樹木の枝などが目立つ(これらの樹種同定は後章で報告)。同層の上位にあるのが464SD中層(17層)で、東側の法面でのみみられる。同層は下層



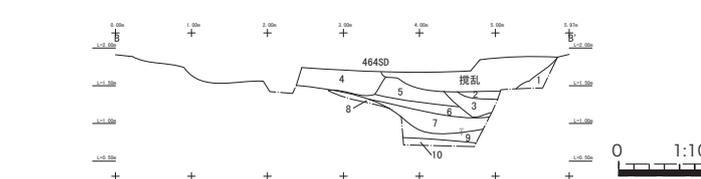
2. 515/1黄灰色砂質シルト(中粒砂含む。2. 516/1黄灰色粘土質シルトブロック含む。10/3/1オリーブ黒色砂質シルトブロック含む。しりみや強い。) 現東西道造成に関する盛土・掘削
- 10/4/1灰白色砂質シルト(2. 516/1黄灰色粘土質シルトブロック含む。わずかに含む。しりみや強い。) 現東西道造成に関する盛土・掘削
2. 515/1黄灰色砂質シルト(2. 516/1黄灰色粘土質シルトブロック含む。10/3/1オリーブ黒色砂質シルトブロック含む。しりみや強い。) 現東西道造成に関する盛土・掘削
- 10/3/1オリーブ黒色砂質シルト(中粒砂少し含む。10/4/1砂質シルトブロック少し含む。炭片わずかに含む。) 現代耕作土か
- 10/4/1灰白色砂質シルト(下方に2. 515/1黄灰色砂質シルトに変化。現代耕作土か
2. 515/4黄褐色砂質シルト(2. 517/2黄褐色細粒砂～中粒砂小ブロック含む。右方にグライ化。) 464SD上層(廃絶後埋戻土)
2. 515/3黄褐色砂質シルト(2. 516/2黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック含む。右方にグライ化。) 464SD上層(廃絶後埋戻土)
2. 516/2黄褐色砂質シルト(右方にグライ化。) 464SD上層(廃絶後埋戻土)
2. 515/2暗灰色砂質シルト(2. 515/2暗灰色細粒砂～中粒砂ブロック含む。下方にグライ化。) 464SD上層(廃絶後埋戻土)
- 514/1灰白色砂質シルト(514/1灰白色細粒砂～中粒砂ブロック含む。2. 514/1暗灰色粘土質シルトブロック少し含む。) 464SD上層(廃絶後埋戻土)
2. 516/2暗灰色砂質シルト(左方に2. 516/2黄褐色粘土質シルト小ブロック多く含む。) 467SK
2. 515/2暗灰色砂質シルトと2. 516/2黄褐色細粒砂～中粒砂の混土 464SD上層(廃絶後埋戻土)
- 514/1灰白色シルト～極細粒砂(下位層との層界付近に2. 517/1灰白色細粒砂を薄層状に含む。植物遺体含む。粘性や強い。しりみや弱い。) 464SD中層(新段階機能層)
7. 517/1灰白色細粒砂と7. 515/1灰白色極細粒砂の互層 464SD中層(新段階機能層)
2. 516/1黄灰色砂質シルトと2. 518/2灰白色中粒砂の互層(2. 516/2黄灰色砂質シルトブロック少し含む。植物遺体含む。) 464SD中層(新段階機能層)
- 513/1オリーブ黒色粘土～極細粒砂(下方に1. 515/1灰白色シルト～極細粒砂ブロック含む。植物遺体多く含む。粘性や強い。しりみや弱い。) 464SD中層(新段階機能層)
2. 516/2黄褐色砂質シルトと2. 518/2灰白色中粒砂の互層(上方に2. 516/2黄褐色砂質シルトブロック含む。植物遺体含む。) 464SD中層(新段階機能層)
- 517/1灰白色細粒砂と515/1灰白色砂質シルトの互層(植物遺体わずかに含む。) 464SD中層(新段階機能層)
- 515/1灰白色極細粒砂と2. 516/2黄褐色粘土質シルトの互層(植物遺体わずかに含む。) 464SD下層(古段階機能層)
7. 514/1灰白色粘土～シルト(左・右端は砂質が優勢となり互層状を呈す。植物遺体多く含む。粘性や強い。しりみや弱い。) 469SD
- 515/1灰白色細粒砂と517/1灰白色中粒砂～粗粒砂の互層(2. 516/1黄褐色砂質シルトブロック少し含む。) 464SD下層(古段階機能層)
- 515/1灰白色細粒砂と517/1灰白色中粒砂～粗粒砂の互層 464SD下層(古段階機能層)
2. 516/2暗灰色砂質シルト(2. 517/2黄褐色粘土質シルトブロック少し含む。) 469SD
2. 514/2暗灰色粘土質シルト(下方に516/2オリーブ色細粒砂～中粒砂小ブロック含む。) 469SD
2. 514/2暗灰色砂質シルトと517/2灰白色細粒砂～中粒砂の混土(2. 513/1黒褐色粘土質シルトブロック少し含む。) 469SD
- 516/2オリーブ色極細粒砂～中粒砂 基盤層
- 517/2灰白色細粒砂～中粒砂(下方に水平ラミナあり。しりみや弱い。) 基盤層
- 517/1灰白色中粒砂～粗粒砂(水平ラミナ顕著。植物遺体わずかに含む。しりみや弱い。) 基盤層
- N7/0灰白色中粒砂～粗粒砂(植物遺体・流木含む。しりみや弱い。) 基盤層
2. 515/1黄灰色極細粒砂～細粒砂(粗粒砂含む。植物遺体多く含む。しりみや弱い。) 基盤層
- N7/0灰白色中粒砂～粗粒砂(しりみや弱い。) 基盤層



- 515/2オリーブ色砂質シルト(右方に517/1灰白色細粒砂含む。) 503SK
2. 515/2オリーブ色砂質シルト 503SK
2. 516/2黄褐色砂質シルト(2. 516/2黄褐色細粒砂～中粒砂小ブロック含む。) 494SD
2. 515/1黄褐色砂質シルト(下方に2. 515/2暗灰色砂質シルトブロック多く含む。) 494SD
2. 515/2暗灰色砂質シルト(左方に2. 515/2暗灰色粘土質シルトブロック含む。右方に516/1灰白色細粒砂～中粒砂との互層に変化。) 494SD
- 514/1灰白色粘土質シルト(514/1灰白色細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 494SD
2. 515/2暗灰色粘土質シルト(上方に516/1灰白色細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 494SD
- 514/2オリーブ色粘土質シルト(515/2オリーブ色砂質シルトブロック少し含む。左方に514/1灰白色砂質シルトに変化。炭片わずかに含む。植物遺体含む。) 494SD
- 514/1灰白色粘土質シルト(左・右方に514/2オリーブ色に変化。炭片含む。植物遺体含む。しりみや弱い。) 494SD
- 514/1灰白色砂質シルト(炭片わずかに含む。植物遺体少し含む。しりみや弱い。) 494SD
- 514/1灰白色極細粒砂と516/1灰白色中粒砂の互層(514/2オリーブ色砂質シルトブロック少し含む。植物遺体わずかに含む。) 494SD
- 514/1灰白色粘土質シルト(下方に516/1灰白色細粒砂～中粒砂層状に含む。) 494SD
- 515/2オリーブ色砂質シルト(下方に515/1灰白色細粒砂と部分的に互層となる。) 494SD
- 515/2オリーブ色砂質シルト(516/1灰白色細粒砂～中粒砂ブロック含む。植物遺体わずかに含む。) 464SD上層か
2. 515/2暗灰色極細粒砂～細粒砂と517/1灰白色細粒砂～中粒砂の互層(下方に層理乱れる。植物遺体含む。) 464SD中層か
2. 515/2暗灰色極細粒砂～細粒砂と517/1灰白色細粒砂～中粒砂の互層(上方に515/2オリーブ色砂質シルトブロック含む。) 464SD中層か
- 517/1灰白色細粒砂～中粒砂(水平ラミナあり。しりみや弱い。) 基盤層
- 517/1灰白色中粒砂(水平ラミナあり。しりみや弱い。) 基盤層
- 515/1灰白色極細粒砂と7. 507/1灰白色細粒砂～粗粒砂の互層 基盤層



2. 515/2暗灰色砂質シルト(2. 517/2黄褐色中粒砂ブロック含む。) 村境溝か
2. 515/1黄褐色細粒砂～中粒砂(2. 516/2黄褐色砂質シルト小ブロック含む。) 464SD中層(新段階機能層)
2. 515/1黄褐色細粒砂と2. 517/2暗灰色中粒砂の互層(2. 516/2黄褐色砂質シルト小ブロック少し含む。) 464SD中層(新段階機能層)
- 514/1灰白色シルト～極細粒砂(517/2灰白色細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。植物遺体含む。粘性や強い。しりみや弱い。) 464SD中層(新段階機能層)
- 515/1灰白色砂質シルトと517/2灰白色中粒砂の混土(514/1灰白色粘土質シルトブロック含む。) 464SD中層(新段階機能層)
- 514/1灰白色砂質シルトと517/2灰白色中粒砂の互層(左方に層理乱れる。植物遺体少し含む。) 464SD下層(古段階機能層)
7. 517/2灰白色細粒砂～中粒砂(下方に水平ラミナあり。しりみや弱い。) 基盤層



2. 515/1黄褐色砂質シルト(2. 517/2黄褐色細粒砂ブロック少し含む。)
2. 515/2暗灰色砂質シルト(2. 517/2黄褐色細粒砂をマール状に含む。下方に2. 515/2暗灰色シルト～極細粒砂ブロック含む。)
- 515/2オリーブ色砂質シルト(517/2灰白色細粒砂～中粒砂をマール状に多く含む。2. 515/2暗灰色シルト～極細粒砂ブロック少し含む。)
- 516/2オリーブ色砂質シルト(2. 517/2黄褐色細粒砂を部分的に薄層状に含む。2. 515/2暗灰色砂質シルトブロック少し含む。)
2. 516/1黄褐色砂質シルトと2. 518/2灰白色中粒砂の互層(2. 516/2黄褐色砂質シルトブロック少し含む。植物遺体少し含む。)
- 514/1灰白色砂質シルト(517/2灰白色細粒砂を部分的に層状に含む。植物遺体含む。しりみや弱い。) 464SD下層(古段階機能層)
7. 514/2オリーブ色極細粒砂～細粒砂と7. 517/2灰白色中粒砂の互層(左方に砂質優勢となる。植物遺体含む。しりみや弱い。) 464SD下層(古段階機能層)
7. 517/2灰白色細粒砂～中粒砂(下方に水平ラミナあり。しりみや弱い。) 基盤層
7. 516/1灰白色細粒砂～中粒砂(下方に水平ラミナ顕著。植物遺体含む。しりみや弱い。) 基盤層
7. 515/1灰白色極細粒砂～細粒砂(水平ラミナ顕著。植物遺体わずかに含む。しりみや弱い。) 基盤層

図10 19Ba区464SD遺構図

から一転して砂主体となりシルトはブロック状である。464SD 東側の基盤層は細粒砂～中粒砂の砂質主体であることから同層の形成は人為的な流し込みによる可能性が考えられる。その後、植物質を多く含む粘質シルト主体の16層が堆積するが、16層下端(20層の境界)付近でもブロック状シルトがみられることから、人為的な埋め立てとともに20層に対する掘り返しがあったと考えられる。さらに16層の上位となる13層もシルト主体の湿地状堆積であるが、それに至る前に砂とシルトのラミナ状堆積(15層)や砂のみのラミナ状堆積(14層)があることから、464SD内に水流があった段階を想定できる。ここまでで20層、16層、13層と3段階の工期があったことになる。これに対して9・10・12層は

ブロック状堆積が全面を覆っており、この段階に埋め立てがなされたと考えられる(464SD 上層)。そして6・7層は比較的新しい水田耕作層で、堀が完全に埋没している。

464SDの出土遺物は先述のように少なく、一色城機能時の遺物は特に少ない。E-1は古墳時代前期後半の土師器小型壺。全面にミガキのある短頸で、より大型品をモデルとしたミニチュア品である。E-2～6は須恵器・灰釉陶器で、E-4は堀西側に平安時代の集落を想定する根拠となる。E-7～16は中世の山茶碗類や土師器伊勢型鍋E-15、羽付鍋E-16で城に先行する時期であろう。E-17～19は瀬戸・美濃窯産陶器の播鉢で、古瀬戸後期様式～大窯期第1段階で、一色城に関わる遺物であ

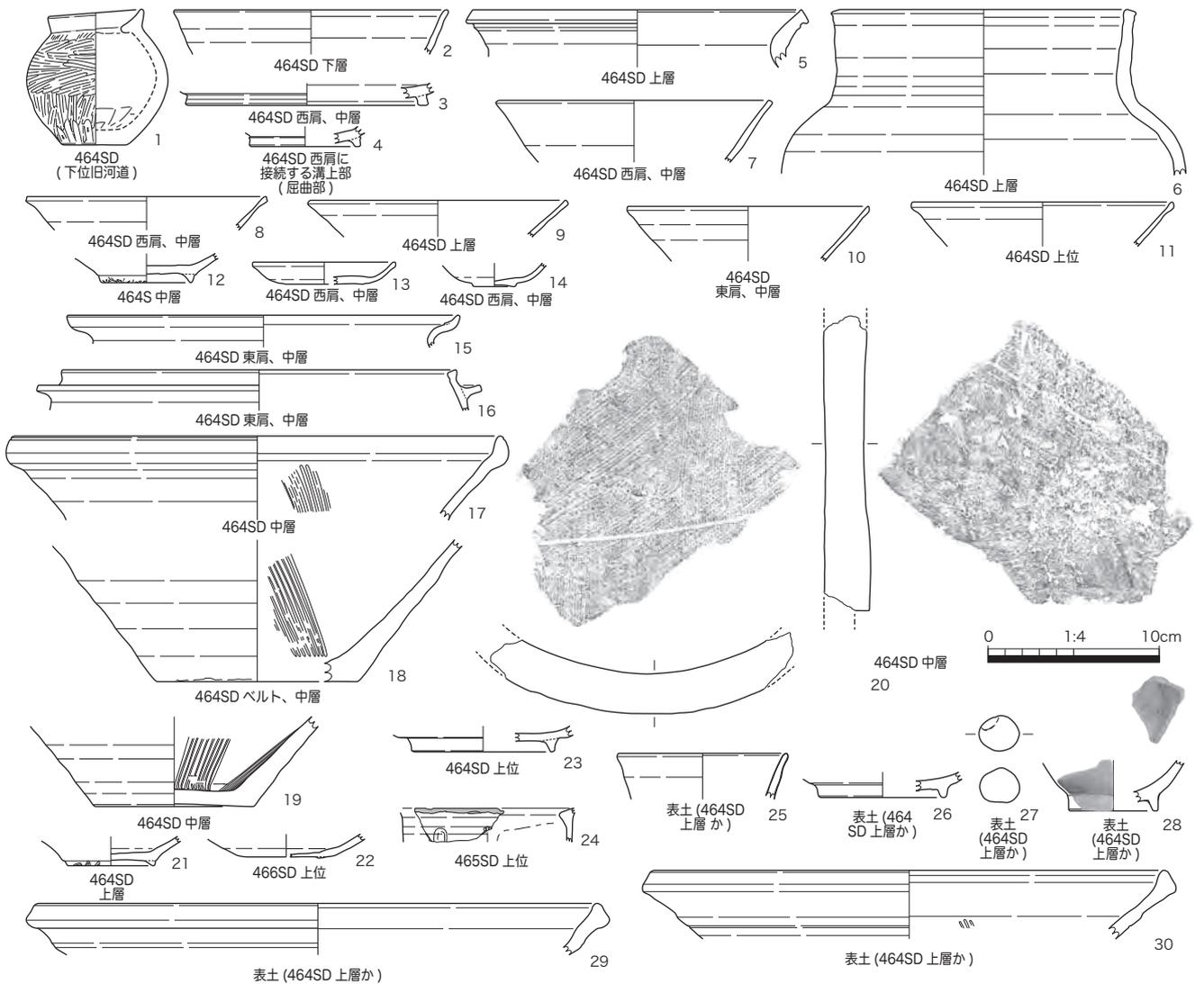


図11 19Ba区464SD遺物図

ろう。これらは下層ではなく中層からの出土で、堀開削（築城）後数度の開削を経て堀に落ち込んだものと位置付けられる。20は一転して古代の平瓦である。凹面にタタラからの粘土板切り出し糸切り痕、凸面は全面不定方向のへら削り痕がある。図の下端付近に段差のようなへら切り痕があり、なんらかの道具瓦だったかもしれない。須恵質で硬く、無釉である。尾張国分寺併行期の8世紀後半であろう。21以降は上層の出土遺物で、近世陶器類も混じる。27は山茶碗類の陶丸である。

464SDでは木製品や自然樹木が多数出土している。木製品はいずれも小型品や小さな破片で板状・棒状のものが主体である。W1は漆碗で、樹種はトチノキ、内外面に赤（朱）色漆、底外面に黒色の漆を施し、底外面に朱色の漆で「日」字のような描込みがある。体部は全体に丸く、ほぼ口縁部とみられる箇所まで残存している。中層で出土し、炭素年代測定によって15世紀後半の暦

年代（A.D.1445～1503）が最も可能性が高い数値として報告されている。一方、極めて劣化の進んだ同質の赤色漆碗片が464SD中層（取り上げ番号d-274）でも出土しており、こちらは15世紀後半～17世紀前葉（A.D.1455～1634）の年代が示されている。W2は箸で樹種はヒノキ、一端は切り折りとなっている。W3は一部に焦げのある板で樹種はヒノキ、W4（樹種：ヒノキ）とW5（樹種：アスナロ）は端部がすり減ったように丸みがある板と角棒である。同じくW6（樹種：サワラ）とW7（樹種：ヒノキ）も使用摩滅した板状木製品である。W9は戸板の隅部で軸ズリの突起が一部残っている。残存部から推測すると相当厚みのある戸板が考えられる。この樹種はカバノキ属である。

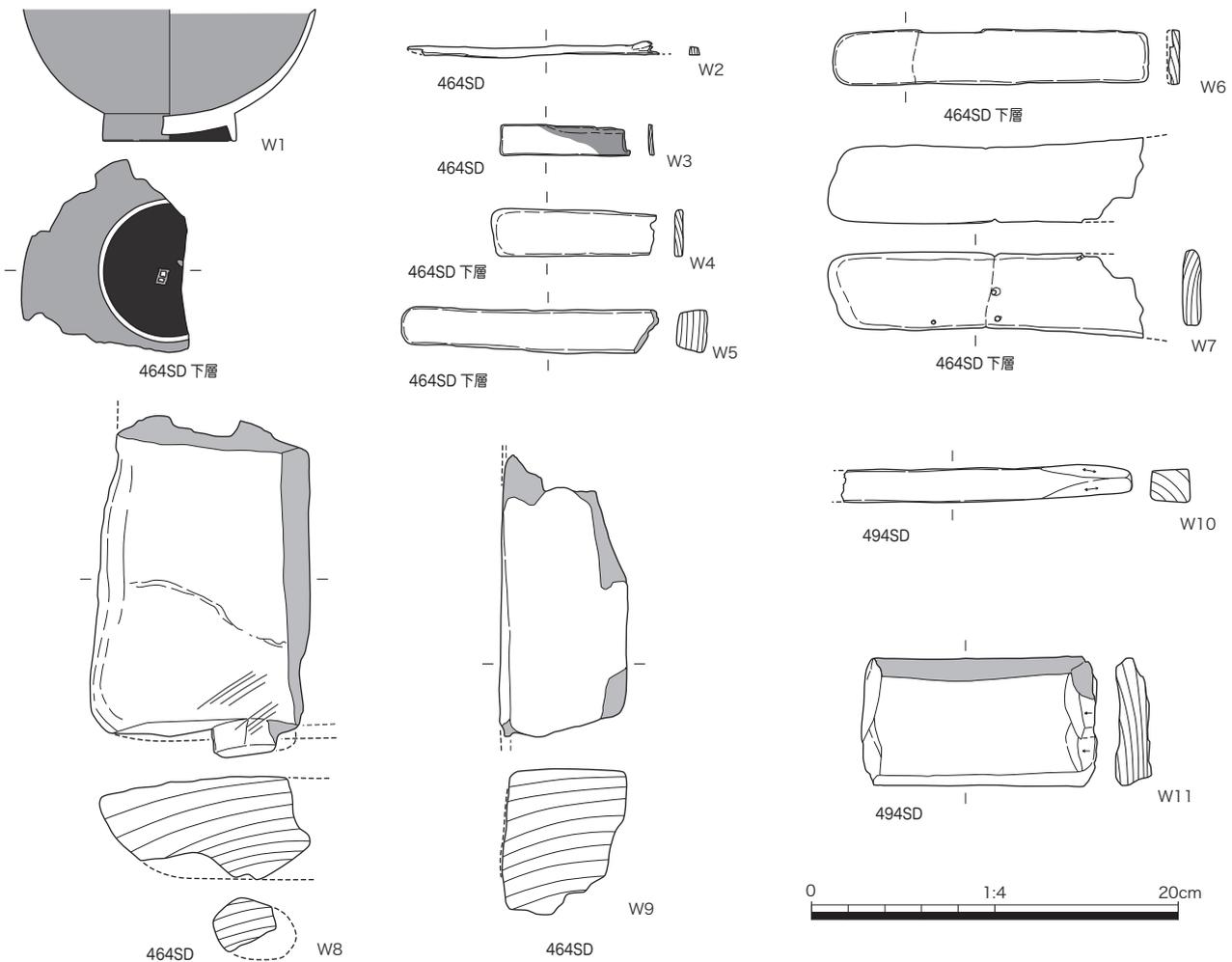


図12 19Ba区464SD木製品遺物図

20B区 230SD 一色城の西堀に相当する遺構である。遺構検出面での最大幅約9.2m、底面での幅約3.7m、遺構検出面からの深さ約1.1mを測る、断面は東堀464SDと同様の緩い傾斜（法面30°）の皿状に近い逆台形をしている。調査区内ではほぼ南北方向に検出されているが、比較的直線的な西側の上端によれば、グリッド北から東へ15°振れている。

230SDと東堀464SDで形状的に異なるのは、西側（城外側）に小溝状の凹みを伴っていることで、堆積状況からみると小溝状部分が先行して存在したところをシルト堆積（8層など）がなされる前に大きく削り込まれている。このことから少なくとも8層堆積時には小溝部分が埋没していたことになるが、それ以前には堀の本体に伴って犬走りのような機能をもっていたのかもしれない。なお同部分ではラミナ状堆積がみられるので水流があったものと思われる。当該部分からは漆碗が出土したり、その上位230SD西側上端付近で明銭（永楽通寶）が複数枚出土している。一方230SDの西寄りの底では手捏ね土師器皿（E-41など）や内耳鍋（E-47）が出土しており、城外側から落ち込んだと理解するのが妥当な出土状況である。

230SDの底面は粘質の強いシルトであり、冬季でも止むことのない湧水によってさらに泥湿地化が激しく、水を抜いても足がとられるほどの状況である。これは周囲の基盤層が砂質であること比較して極端な違いとなっている。埋土は大部分が攪拌されたシルト層であり、水

堀というより泥堀という表現が近いといえよう。一方シルト堆積に連続する東側法面付近には植物質を多く含む層（調査区北壁8層）があり、その多くはタケの地下茎である。泥堀の際から土塁へと隆起する法面にはタケ（矢竹？）が繁茂する景観が想像される。

堆積状況も464SDのような明瞭な掘り返しが少なく、小溝状部分を切り崩した後に湿地状のシルト堆積が長らく続いていたと考えられる。そしてほぼ埋め尽くされた状態で段階で溝状の凹地が生じて細粒砂が堆積しているので堀跡となった部分で一時的な水流があったと推測される。ただし当該層は現水田耕土に削平されており、近代以降の可能性がある。

230SDの出土遺物は、周囲に先行時期の遺構が少ない分、一色城関連の遺物でほぼ占められているといえてよい。31～33は山茶碗類でいずれも東濃型の薄手のものである。先行する中世区画溝に伴う可能性がある。35～37は瀬戸・美濃窯産陶器の天目茶碗で36は古瀬戸後期様式IV期新段階、37はタイプが異なるが同後期様式である。41～45は土師器小皿で手捏ね成形である。色調に灰褐色系のものであり、赤みのある黄褐色の一群とは対照的となっている。播鉢（46）は口縁部のみであるが大窯期第1段階後半で16世紀前葉である。47は尾張地域に分布の中心がある半球形内耳鍋である。胴部最大径に1条の沈線を一周させている。外面は指オサエ痕、内面は横ハケ調整痕がある。使い込まれており、外面全面に煤が付着している。16世紀

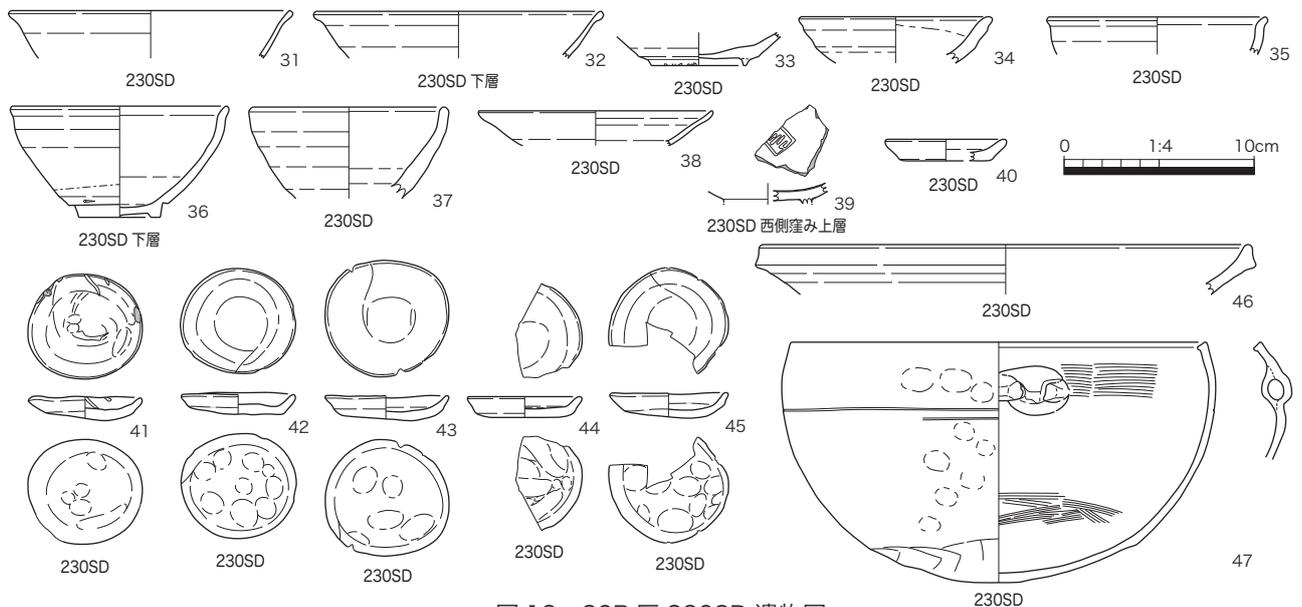


図13 20B区 230SD 遺物図

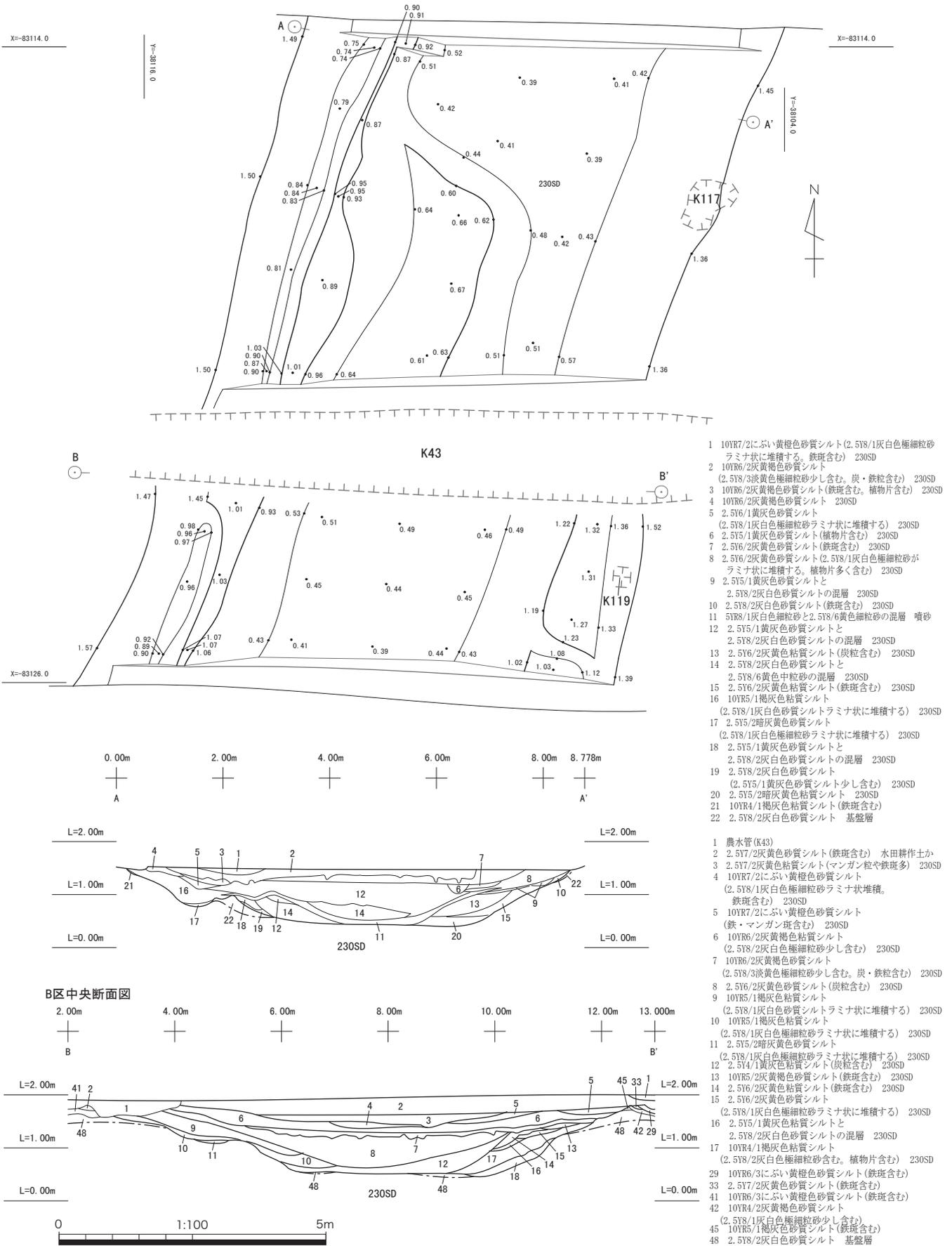


図14 20B区 230SD 遺構図

初頭～前半にかけての時期に比定され、天目茶碗に近い時期である。内耳鍋は伏せた状態で出土し一部はすでに失われていたので破損したものを投棄したのであろう。なお1mの範囲内から土師器小皿が出土している。以上の時期相から230SDにこれらが廃棄されたのは16世紀前葉に絞込まれる。

一色城の西堀230SDでの樹木・草本類の出土は東堀464SDに比べてはるかに少ない。先述のように東側(城内側)でタケの地下茎が繁茂していた以外には粘質シルト層中にヒシ(菱)の実が散見されている。いずれもその場所に自生していたもので廃棄されたものではない。また木製品についても数は少ない。W12は漆碗で西側(城外側)の小溝部分で出土している。高い高台の丸碗である。黒色漆に赤色漆で楓または笹の文様が描かれている。炭素年代測定によれば16世紀後半～17世紀前葉(A.D.1551～1634)もしくは15世紀後葉～16世紀前葉(A.D.1473～1527)という年代数値が得られている。W13も漆碗で、体部下半のみが残存している。W12と同様に黒色漆に赤色漆で文様が描かれている。当該資料は炭素年代測定によれば15世紀中葉(A.D.1435～1474)がきわめて可能性の高い年代数値として示されている。W14は折敷で、側板の部分である。W15は、曲物の一部、W16・W17は薄板状で食器や・容器の類が廃棄された状態である。W19は角棒状で一部が焼け焦げている。

古銭6点(M1～6)は230SDの埋土からではなく、

その西側検出面直上での出土、厳密には20B区調査区南壁からの出土である。したがって具体的な所属遺構は明らかではなく、包含層とすべきかもしれない。しかし壁面精査中に数枚ずつが相次いで出土したことから、まとめて原位置にあったと考えられる。M-1は北宋銭(熙寧元宝)、M-2は永樂通寶(1411年初鑄)で文字の鑄出しが最も明瞭である。M-3～M5は北宋銭(判読不能)、M6は祥符元寶である。

20C区035SD 20C区北東隅図で検出された調査区外へ続く落ち込み状遺構である。当該地点は尾張水道みちのすぐ脇で名古屋市上水道導水管の設置で攪乱を受けていたが、そこから北西方向へ直線で延びる遺構上端が検出された。それを掘削すると約0.5m下ったところで水平面があり、そのまま調査区外へ続いている(図7の断面A-A')。さらに最初に検出をおこなって見出した不定形遺構006SXにかかる断面(図7のB-B'断面)によれば、調査区北側へ向かって標高約1.5mまで下っている。これらはいずれも顕著な遺物が出土していないので時期比定が難しいが、北西方向へ延びる溝の肩とみることができる。これを南東方向へ延長すると19Ba区464SDの西方向への屈曲点に達する。屈曲点から先は近世溝494SDによって掘り返されている部分があつてその延長である可能性もあるが、ほぼ一色城の北堀の南側上端に相当するものと考えてよい。

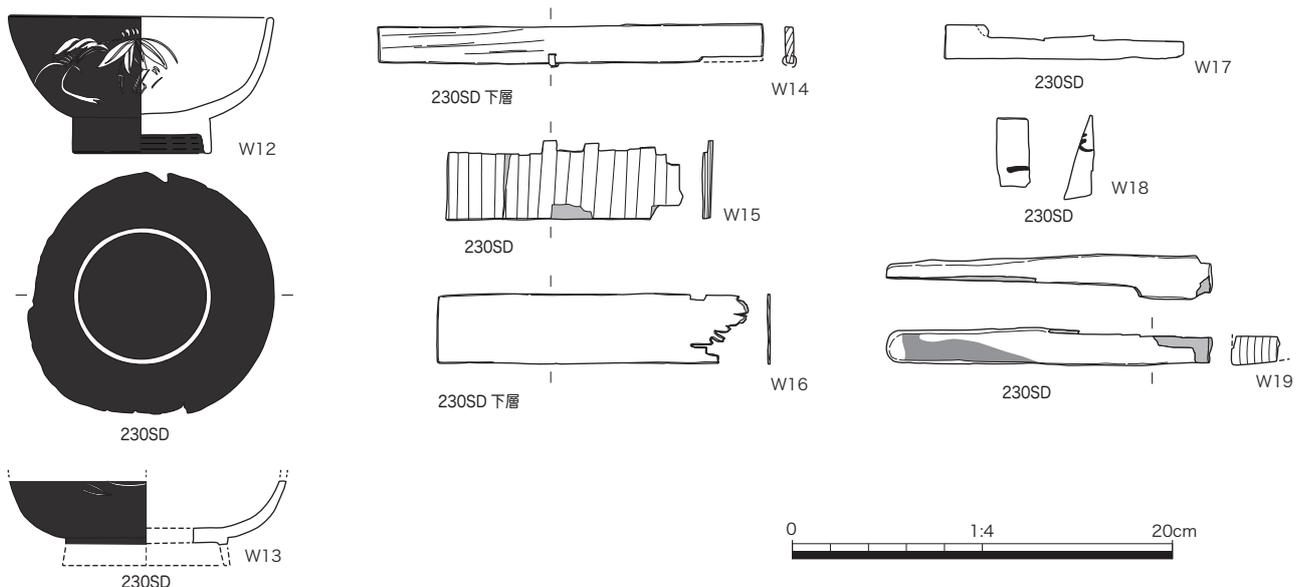


図15 20B区230SD木製品遺物図

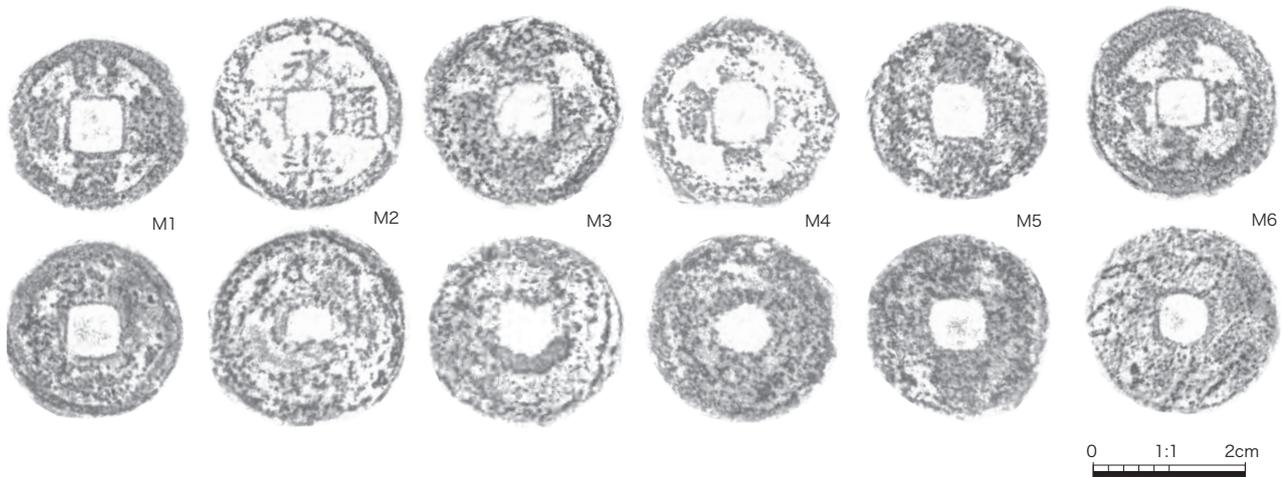


図16 一色城跡出土の古銭拓影

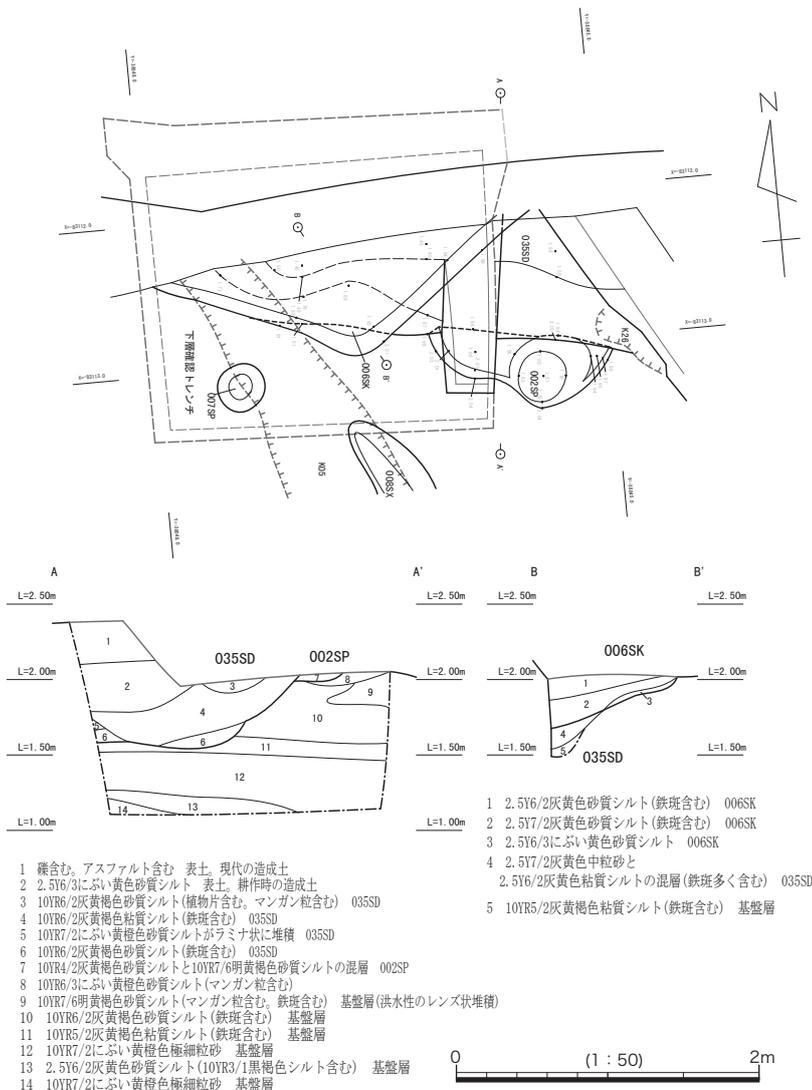


図17 20C区035SD遺構図

20A・C区056SD・090SD 令和2年度調査対象地の東西方向ほぼ中央には東から延びてくる用水路と稲沢市上水道本管があるため、用水路部分は遺構滅失、上水道部分は調査不能地となっている。用水路については20A区西方で南へ屈曲するが、上水道はそのまま西進するため西堀20B区230SDでも掘削不能範囲がベルト状に掘り残されている(図14のK43)。

したがって20A区と20C区の調査区分も上水道によって区切られているが、その区分と重複する位置で東西方向に延びているのが一色城の内溝とする056SD・090SDである。検出の経緯は、20C区調査時に調査区南辺にて056SDを確認し、それが南北方向の用水路のヒューム管を越えた東側にも同様の遺構を確認した。しかし深さや法面傾斜に違いがあることから、いったんは別遺構として090SDという番号を付している。

056SDについては、20C区調査時に全体を掘れなかったものの、20A区調査時に南側上端を確認して全掘することができ、さらに20B区で屈曲して南方調査区外へ抜けることを確認した。一方、090SDは20A区調査時に引き続き南側

一色城跡

上端を確認したものの上水道部分はベルト状に未掘とせざるを得なかった(図20参照)。

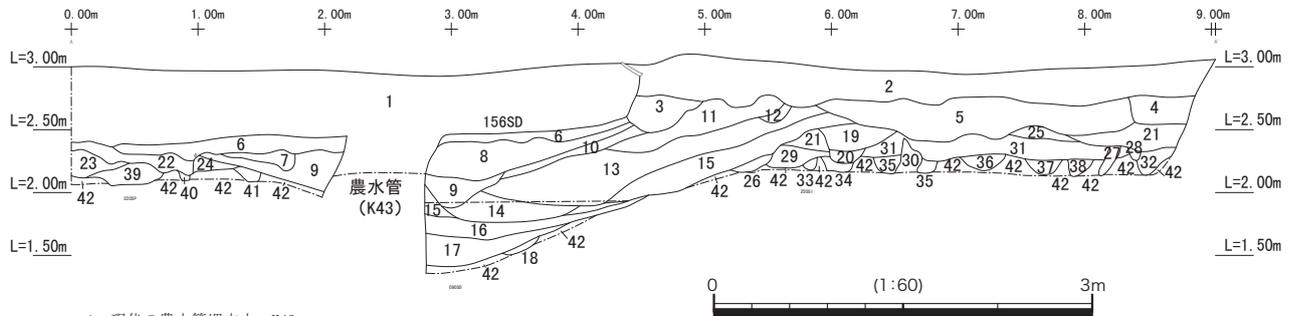
056SDは20B区での北西隅屈曲点から南へ約8.0m(南北部分)、東へ約20.0m(東西部分)の長さが検出された。先述のように東端はヒューム管によって056SDへの接続が不明瞭となっている。遺構検出面での最大幅(図18のA-A'断面)は約3.7m、同位置での底面幅約1.0m、深さ約0.7mを測る断面が逆台形を呈する。法面の角度は南側(城内側)で60°、北側(城外側)で40°で差があり、これは東西部分で共通している。

埋土は、粘質シルトが主体となっている。ただし中ほどに薄い極細粒砂層(A-A'の9層、B-B'の8層、C-C'の6層)があり、後述するように遺物の出土がそ

こから上位に多いことを考えると、当該層を境に上下に大別することが可能である。おそらく開削後のシルト堆積を一度掘り返し、その後城の廃絶などによって陶器類が廃棄されたものと思われる。なお最上層は昭和30年代の耕地整理に伴う攪乱(K18)が入り込んでおり埋没後の状況は不明となっている。

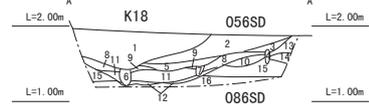
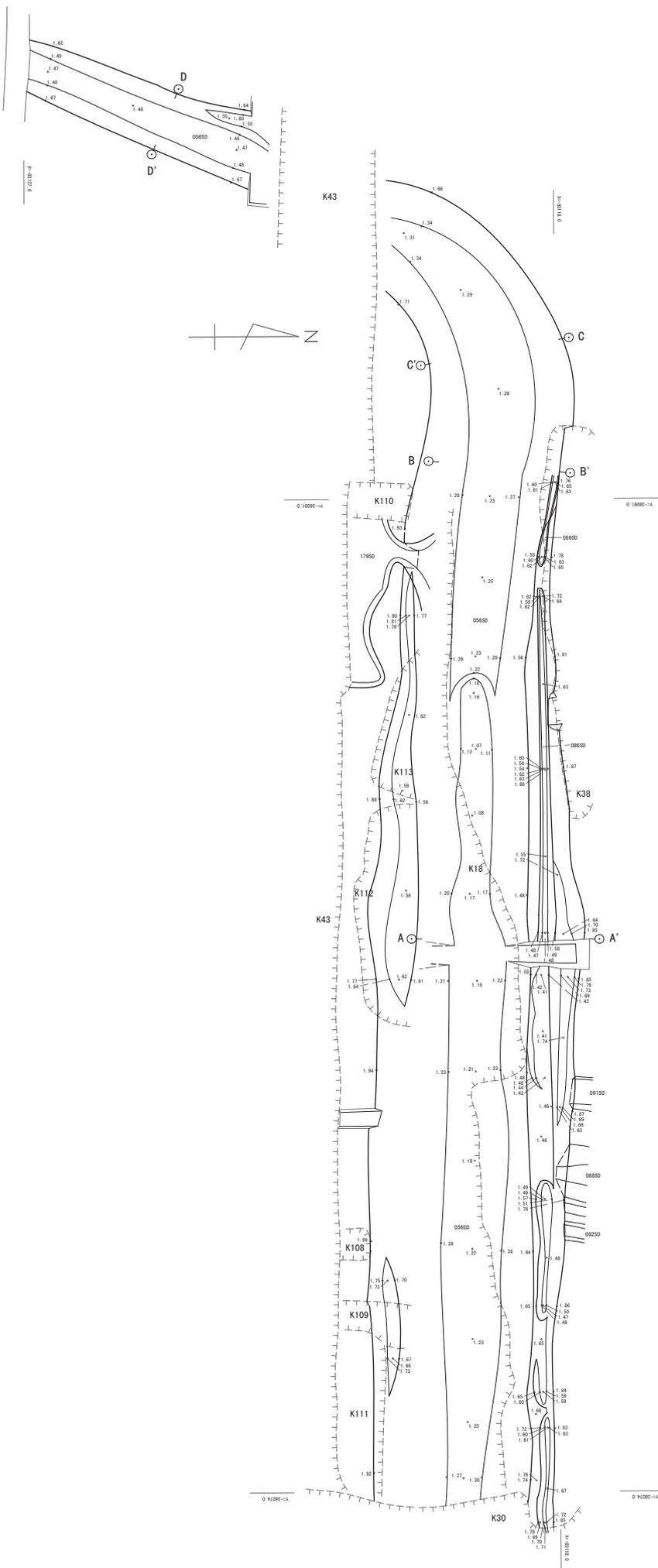
056SDの南北部分は、屈曲点から急に溝の形状が浅くかつ不明瞭となる。しかし西堀230SDと平行関係にあることから、これに伴って掘削されたことを示している。

090SDは、ヒューム管から東へ進み20A区東壁から調査区外(尾張水道みち)へと続いている。056SDの北西隅屈曲点が西堀に連動していることから、090SD東端も東堀464SDに連動して屈曲している可

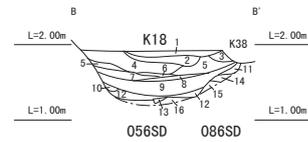


- 1 現代の農水管理立土 K43
- 2 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(炭粒含む) 表土
- 3 10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂少し含む)
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(ビニール片含む。植物片含む) 近現代の攪乱
- 5 10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/1褐灰色砂質シルト少し含む)
- 6 2.5Y7/2灰黄色砂質シルト(10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト少し含む) 水田耕作土
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(マンガン粒含む)
- 8 10YR7/2にぶい黄褐色砂質シルト(鉄斑・中粒砂含む) 156SD
- 9 10YR7/1灰白色粘質シルトがラミナ状に堆積(鉄・マンガン斑含む) 156SD
- 10 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂含む) 090SD
- 11 10YR7/2にぶい黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂含む)がブロック状に堆積 しまり弱い 090SD
- 12 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂含む) 090SD
- 13 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂含む。10YR5/1褐灰色砂質シルトがブロック状に多く含む。鉄斑含む) 090SD埋め立て土
- 14 2.5Y6/2灰黄褐色粘質シルト(10YR5/2灰黄褐色砂質シルト含む)がラミナ状に堆積 090SD埋め立て土
- 15 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト(マンガン粒含む)がブロック状に堆積 090SD埋め立て土
- 16 2.5Y3/2黒褐色粘土 090SD機能時堆積
- 17 2.5Y3/2黒褐色粘質シルトと2.5GY7/1明オリブ灰色極細粒砂の混層 090SD機能時堆積
- 18 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(鉄粒含む) 090SD機能時堆積
- 19 10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細粒砂含む) 中世以降の土坑
- 20 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(10YR7/1灰白色極細粒砂含む) 中世以降の土坑
- 21 10YR6/3にぶい黄褐色粘質シルト(2.5Y8/2灰白色極細粒砂含む。炭含む。マンガン粒含む) 中世整地層(下層)
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(10YR7/1灰白色極細粒砂含む)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質シルト(マンガン粒含む)
- 24 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(10YR6/2灰黄褐色砂質シルト含む)
- 25 7.5YR5/1褐灰色砂質シルト(マンガン粒含む) 古墳～古代包含層
- 26 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(10YR6/2灰黄褐色砂質シルト含む)
- 27 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 根跡
- 28 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト 根跡
- 29 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト少し含む。鉄粒含む) 250SI
- 30 10YR7/2にぶい黄褐色中粒砂 噴砂
- 31 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト少し含む。鉄斑含む) 250SI
- 32 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト含む) 250SI
- 33 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)
- 34 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)
- 35 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト
- 36 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)
- 37 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)
- 38 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト含む)
- 39 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト(10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト含む) 220SP
- 40 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)
- 41 2.5Y8/3淡黄色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色砂質シルト含む)

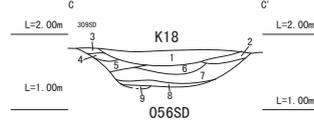
図18 20A区調査区東壁090SD断面図



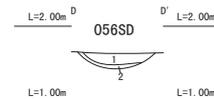
- 1 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR8/4浅黄褐色砂質シルトの混層 (2.5Y8/4淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む) K18(特に上から深さ15cmまでが該当)
- 2 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR8/4浅黄褐色砂質シルトの混層 (2.5Y8/4淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む。層下位に木片含む) 056SD上層
- 3 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(10YR5/1褐色粘質シルト含む。鉄粒含む) 056SD下層
- 4 2.5Y6/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂少し含む) 杭跡
- 5 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト 056SD上層
- 6 2.5Y6/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂がラミナ状に堆積) 杭跡
- 7 2.5Y6/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂少し含む) 杭跡
- 8 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂含む。マンガン粒含む) 径5~10cm以下のブロック状堆積多い 056SD下層
- 9 2.5Y5/2暗灰黄色シルトと極細粒砂がラミナ状に堆積
- 10 2.5Y8/4淡黄色砂質シルト(2.5Y6/1黄灰色粘質シルト含む。鉄粒含む) 径5~10cm以下のブロック状堆積多い 086SD
- 11 2.5Y3/2黒褐色粘土 056SD(戦国期か)
- 12 2.5Y3/2黒褐色粘土と2.5G7/1明オリブ灰色極細砂がラミナ状に堆積 066SD(戦国期か)
- 13 5Y6/2灰オリブ色砂質シルト 基盤層
- 14 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂(鉄斑含む) 基盤層
- 15 2.5Y6/1黄灰色粘質シルト 基盤層
- 16 5G7/1明オリブ灰色極細粒砂 基盤層



- 1 10YR7/2にぶい黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂がブロック状に堆積。鉄粒含む) K18
- 2 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。鉄粒含む) K18
- 3 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂少し含む。鉄粒含む) K38
- 4 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR8/4浅黄褐色砂質シルトの混層 (2.5Y8/4淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む) K18
- 5 10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと10YR8/4浅黄褐色砂質シルトの混層 (2.5Y8/4淡黄色極細砂がラミナ状に堆積したもののが攪拌される。マンガン粒多く含む。鉄粒多く含む。層下位に木片含む) 056SD
- 6 2.5Y6/2灰黄色粘質シルトがラミナ状に堆積 056SD
- 7 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂含む。マンガン粒含む)ブロック状に堆積 056SD
- 8 10YR6/1褐色粘質シルト(2.5Y8/3淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。鉄粒含む)5の近くはブロック状堆積が顕著 056SD
- 9 2.5Y3/2黒褐色粘土 056SD
- 10 2.5Y3/2黒褐色粘土(2.5G7/1明オリブ灰色極細砂少し含む) 056SD
- 11 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(10YR8/4浅黄褐色砂質シルト含む) 086SD
- 12 2.5Y3/2黒褐色粘土と
- 13 2.5Y6/1明オリブ灰色極細砂がラミナ状に堆積 056SD(戦国期か)
- 14 2.5Y3/2黒褐色粘土 056SD(戦国期か)
- 15 2.5Y6/1黄灰色粘質シルト 基盤層
- 16 5G7/1明オリブ灰色極細粒砂(植物片含む) 基盤層



- 1 10YR7/2にぶい黄褐色砂質シルト (2.5Y8/3淡黄色極細砂がブロック状に堆積。鉄粒含む) K18
- 2 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト (2.5Y8/3淡黄色極細砂がラミナ状に堆積。鉄粒含む) K18
- 3 10YR4/1褐色粘質シルト(2.5Y8/2灰白色砂質シルト少し含む。マンガン粒含む) 309SD
- 4 2.5Y8/2灰白色砂質シルト(10YR4/1褐色粘質シルト含む) 309SD
- 5 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(2.5Y8/2灰白色砂質シルト含む) 056SD
- 6 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト(2.5Y8/1灰白色極細粒砂含む。マンガン粒含む) 056SD
- 7 2.5Y3/2黒褐色粘土(2.5G7/1明オリブ灰色極細砂少し含む) 056SD
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(10YR8/4浅黄褐色砂質シルト含む) 056SD
- 9 2.5Y8/2灰白色砂質シルト 基盤層



- 1 2.5Y6/2灰黄色粘質シルト(鉄斑含む)
- 2 10YR5/1褐色粘質シルト(鉄斑含む)



図19 20B・C区 056SD 遺構図

能性は高いが調査区内でみられなかった。その土層断面(図17)によれば、090SDの堆積は中世整地層(21層)よりも上位にまで達しており同層より新しいことは明らかである。しかし東壁では一色城の築城に伴う整地層は攪乱(4・5層)でほぼ滅失しているため不明である。また南側から流れ込む13・15層はいずれもシルトブロックを主体とする埋め立て土であり、江戸時代以降に城跡周辺を耕作地化した痕跡とみられる。したがって東壁で確認できる090SDの南側法面は14・16・17層の堆積に伴うものに限られ、上半部が大きく削平されていることがわかる。ともあれ090SDは基底(標高約1.5m)から約0.5m分が残存しているのみで、城の整地層上面(標高約3.0m前後、図8参照)から掘り込まれていることを想定すると、実際の深さは約1.5m以上と推測される。また、その断面形状は断面A-A'やD-D'を参照するとV字形になりいわゆる葉研堀に近い形状になるだろう。これと056SDの断面形状を比較すると、図19の断面B-B'での状況は056SDの箱堀形断面と同一であり、そのすぐ東側で溝幅が極端に狭くなる箇所をもって掘削形状の違いとみなすと、056SDと090SDの境界をここに求めることができる。

以上のことから、検出された090SDは堀底の状況

であり、090SD上層で遺物が少ないことは、その埋没にあたって多量の廃棄がなされたわけではないと想定することになる。遺物の出土、基底から0.1～0.2mまでで集中している。また西端(056SDとの境界)から約20mの範囲では埋土の粘質シルトに多量の炭化物や焼土粒が混じっており、火災や燃やしたものを集中的にこゝへ廃棄したと考えられる。当該地点での最大の遺物は全長約3.6mの建築部材W-30で、全面が焼け焦げている。ただし中まで完全に炭化しているようではないので、折れることなく取り上げることができた。またその周辺では陶器小皿E-74や茶臼S-1も出土しており、いずれも同じ層中にあることからこれらは一括して廃棄されたものと思われる。

056SDでは090SDのような炭化した木片や焼土の分布は少ない。大半を占める瀬戸・美濃窯産陶器では、天目茶碗E-48～51や灰釉小皿E-52、鉄釉大皿E-54、鉄釉瓶・甕類E-55や鉄釉四耳壺E-57、管状土錘E-59、播鉢E-60・61などが一色城に関わる遺物である。天目茶碗や播鉢は大窯期第1段階、一方大皿は大窯期第3段階からみられ、高台が小さいので初期の製品であろう。これらの陶器類は出土地点にばらつきがあり、時間的に幅がある。特に大皿は056SD北側上端近くで出土していること

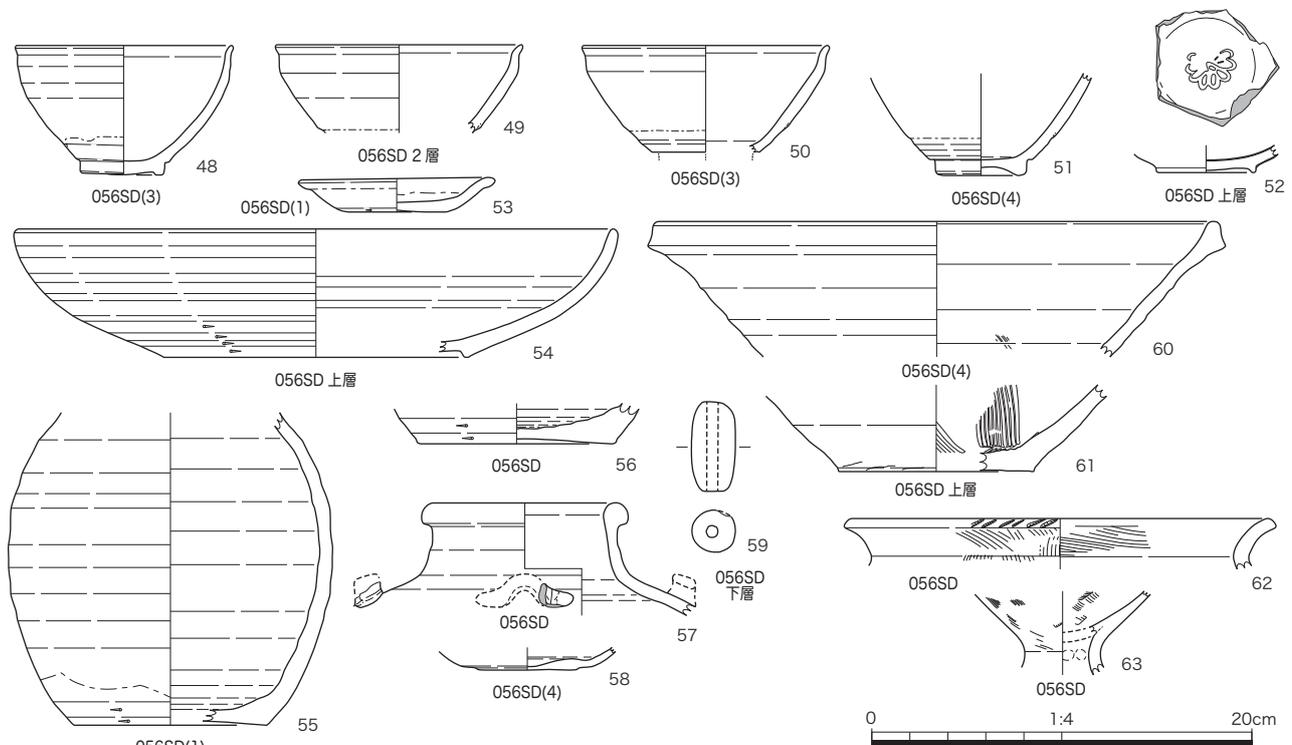


図21 056SD 遺物図

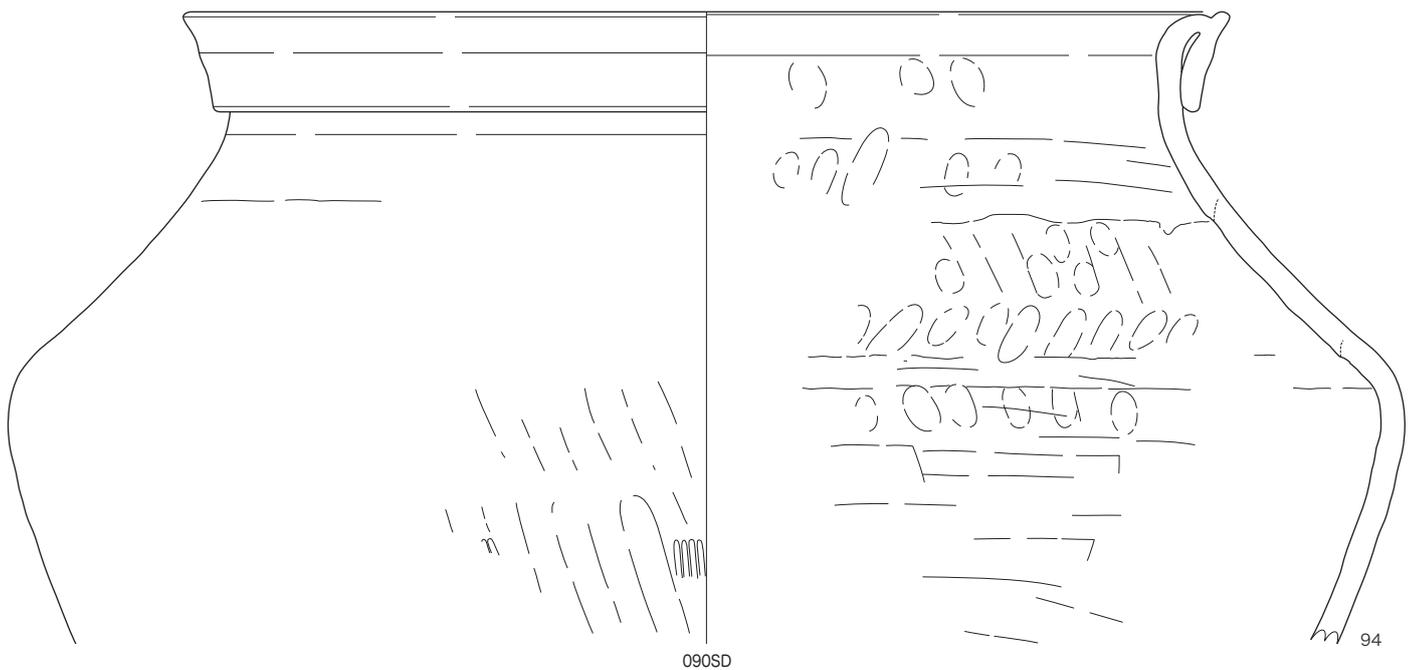
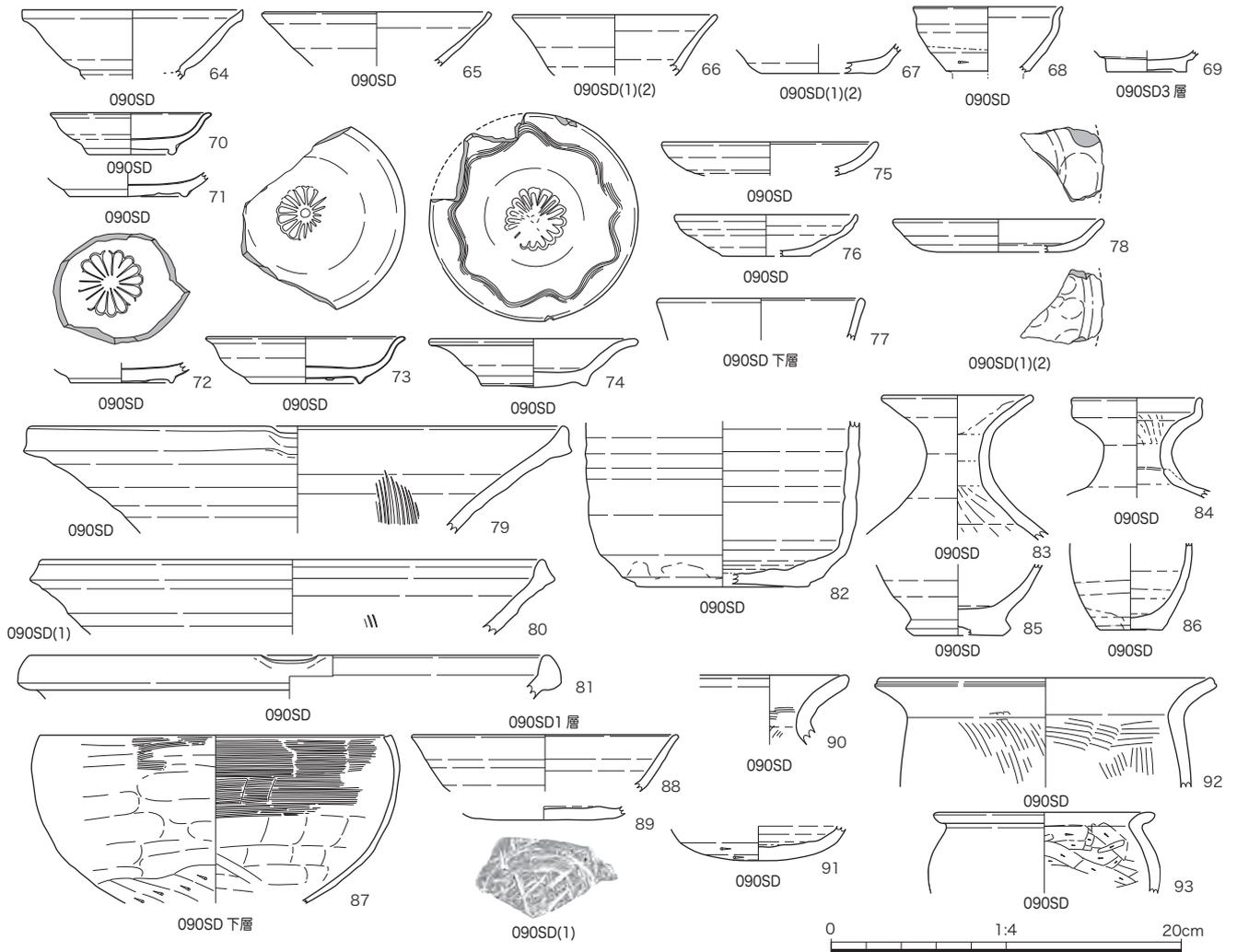


図 22 090SD 遺物図

から、最も新しい時期となる。天目茶碗 E-48 は漆碗 W-20 とともに 056SD 下層で出土しており、当該層の形成が概ね 16 世紀前葉段階であることを示している。

090SD でも瀬戸・美濃窯産陶器が主体であり、土師質土器は少数である。ただし陶器類の器種構成は異なり、灰釉小皿類が目立ち、逆に天目茶碗は少なく小型のもの E-68 が含まれる。山茶碗類 E64～66 は城に先行する時期である。小皿 E-70～75 は古瀬戸後期様式～大窯期で端反皿や丸皿、菊文の有無が混在している。E-74 が最古段階に位置付けられるであろう。他

に大窯期第 1 段階の播鉢 E-79・80 や瓶類・仏供 E-83～86 がある。内耳鍋は尾張地域に多い半球形である。E-90・91 は古代の土師器甕で混入資料である。常滑甕 E-94 は常滑窯第 8 型式に相当し、14 世紀後半である。時期的には山茶碗類に近いのであるが、小片にとどまらない出土状況であることから、一色城機能時（または後）に廃棄された可能性が高い。城内で長らく使用されていたものかもしれない。

木製品は 056SD 下層で漆碗 W-20 が出土している。黒色漆に赤色漆の文様が施されている。炭素年代

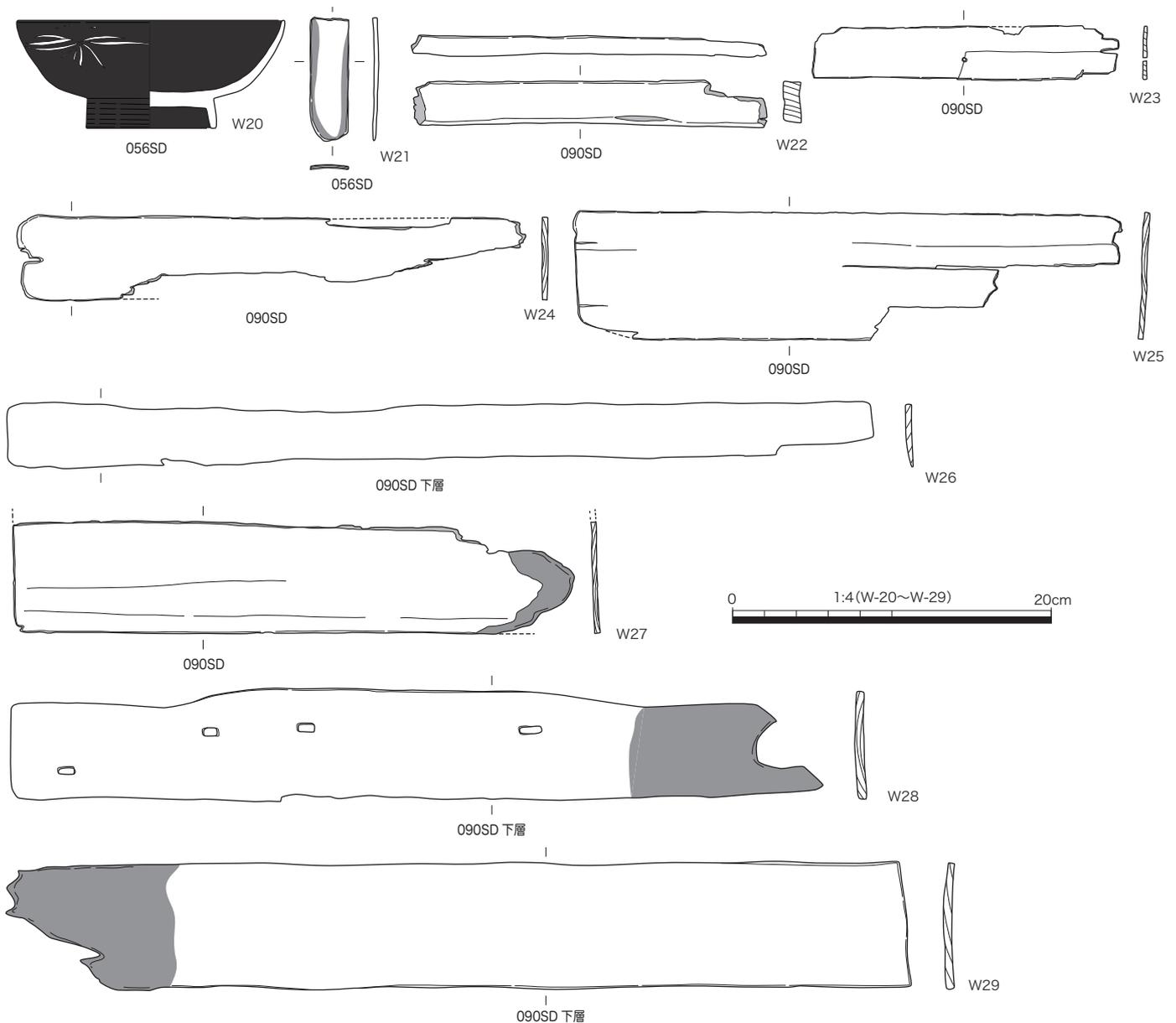


図 23 20C 区 056SD・090SD 木製品 遺物図

測定によれば15世紀末～17世紀初頭（A.D.1491～1604）と幅のある暦年代数値が示されているが、下層の最上部に位置し上層の堆積過程でも露出していた状況を踏まえるとこのような数値も考えらえよう。W21～29は大小あるが薄板状の木製品である。特にW27～29は一部が焼けて欠損している。W-30は最大の木製品で柄穴が2か所ある角材である。全面が焼けて炭

化しているため加工痕はほとんどみえない。W-31～34は再び薄板状でやや大きいものである。一部に焼け焦げがある。またW-35～37は円柱状で柱ないしは杭に使用されたものであろう。以上のように焼け焦げのあるのはいずれも何らかの部材である点が注意される。

090SDからは石製品も出土したので、ここで一色

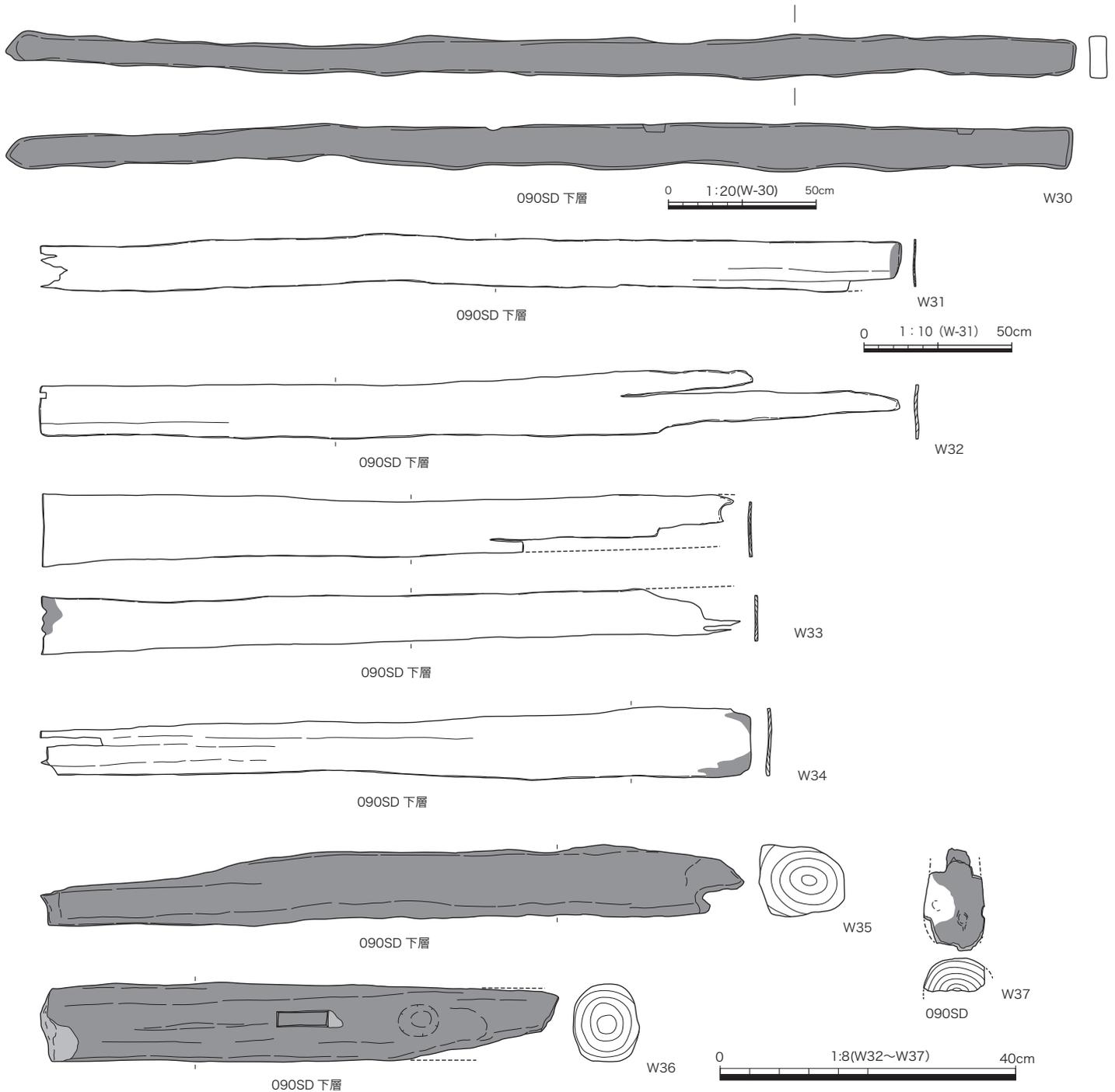


図24 20A・C区090SD木製品遺物図

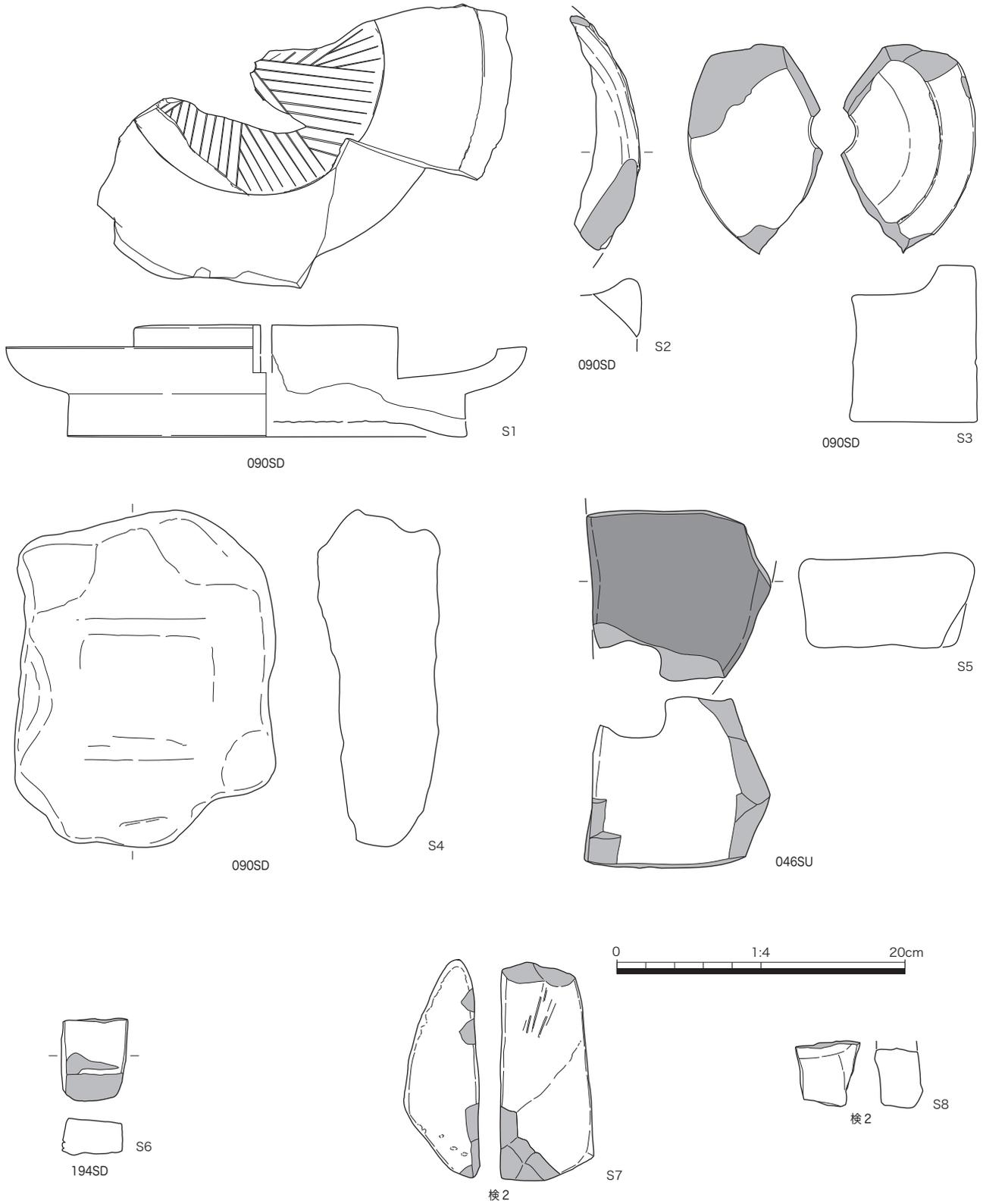


図 25 一色城跡出土石製品遺物図

一色城跡

城跡出土の石製品を集成しておく。S-1 はの茶臼の下臼で、破断された一部が出土した。石材は玄武岩で若干青みがかかった黒褐色の色調で、器面はきわめて滑らかである。溝幅は1mmに達しない部分もあるほど細く、摺り合わせの手前で溝が途切れているため端部まで達していない。裏面は鑿で加工した痕跡が全面に見える。S-2は石臼の上臼の端部、S-3も上臼で端部の形状から別個体とみられる。S-3の溝はS-1とは異なり幅のあるタイプである。S-4は台石状の石材で、中央に方形のわずかな凹みがみられる。この凹みは削るなどして加工したものではなく、摩耗によって生じたものである。角材の柱が載っていた痕跡とすると礎石の可能性もある。全体に煤けており、建築部材などとともに被熱したと考えられる。S-5は中世陶器の集積遺

構19A区046SUで出土した。台石状を呈し被熱痕がある。金床石の可能性もある。S-7～9は砥石でS8は194SD出土で近世、それ以外は中世以降である。

130SD・133SD・154SD 堀・内堀以外の遺構で時期が特定できるものは少ない。20A区にのみ残存していた一色城整地層・中世整地層の上面(検1面)で複数の南北南小溝が検出されている。130SDと133SDは北端が攪乱などで失われているので不明だが、154SDのみは調査区南壁から約2.0mのところ北端がある。いずれも検出面での幅約0.8mである。133SDは検出面からの深さが0.4mあってやや深く(下層部分は233SD)、幾度かの掘り返しを想定可能であるのに対して130SDと154SDは浅い皿状の断面である。

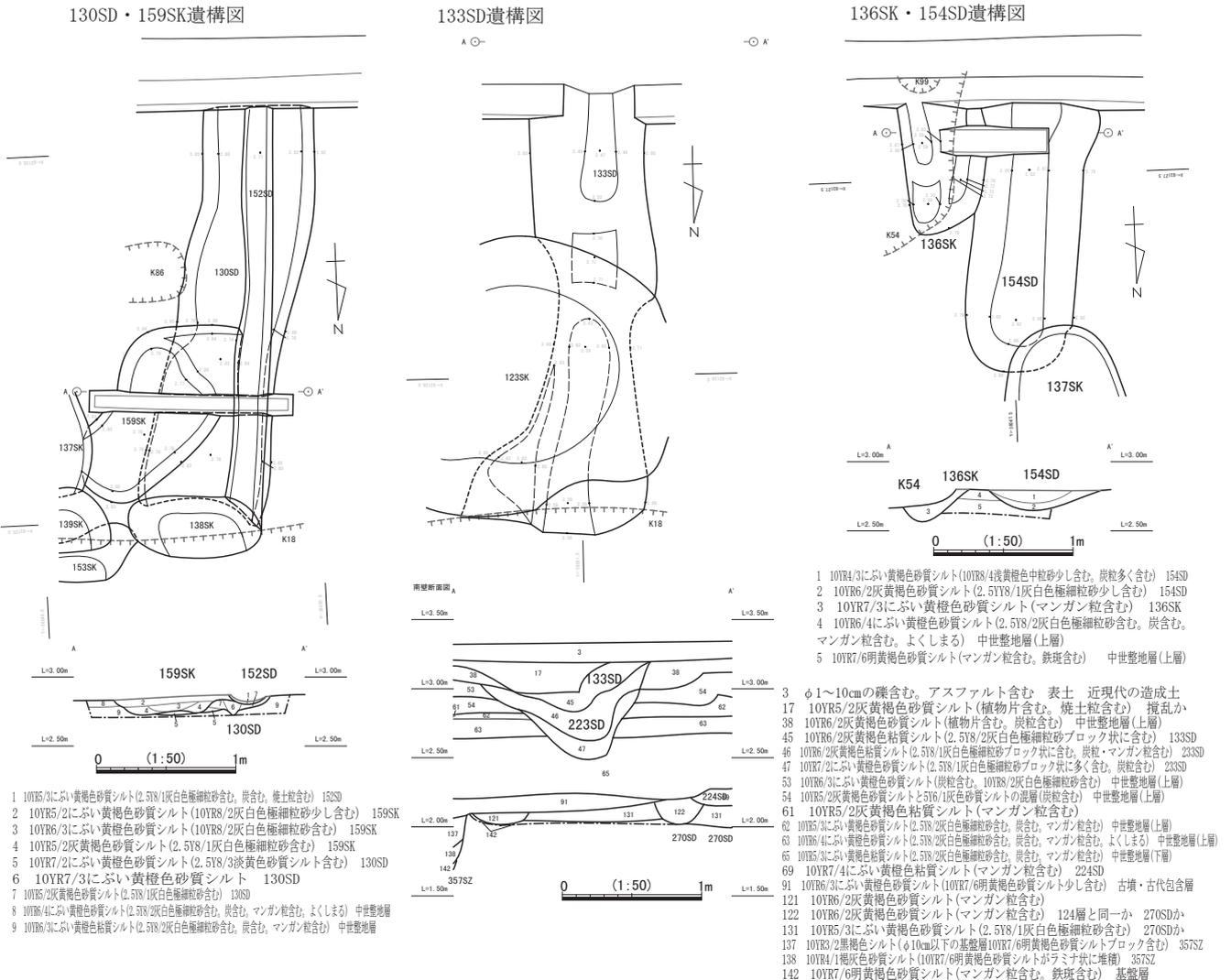


図26 20A区130SD・133SD・136SK・154SD遺構図

154SDでは、戦国時代の陶器・土器が破片であるが多数出土している。95・96は東濃型山茶碗と小皿である。E-97～100は瀬戸・美濃窯産陶器の灰釉端反皿でE-99・100はほぼ完存で底面に菊文がある。E-101～107は土師器小皿でE-107が唯一手捏ね成形でそれ以外はロクロ成形である。播鉢E-108～111は大窯期第1段階で、口縁部ばかりが出土している。E112・113はロクロ成形土師器小皿でE-113は比較的大口径となる。E-114は時期不詳の管状土錘である。E-115・116は手捏ね成形の土師器小皿、E-117・123は山茶碗類に伴う陶丸、E-118は東濃系の灰白色無釉小皿、E-119・120はロクロ成形土師器小皿、E-121は瀬戸・美濃窯産陶器播鉢（大窯期第1段階）、E-122は土師質土器の底部だが比較的底径が大きい。これらのうち陶器類は、この北側にある内溝090SDで出土したものと共通点が多いが、土師器小皿が目立つのは注意される。もちろん一部を除き破片（小片）で出土しているので、使用後にまとめて捨てたなどの一括性は認め

がたい。むしろ溝を埋めるに際して土とともに流し込まれたような状況が考えられる。このことから、一色城内で使用された可能性は高いものの、廃棄の時期にはばらつきがあるものとして捉えておきたい。

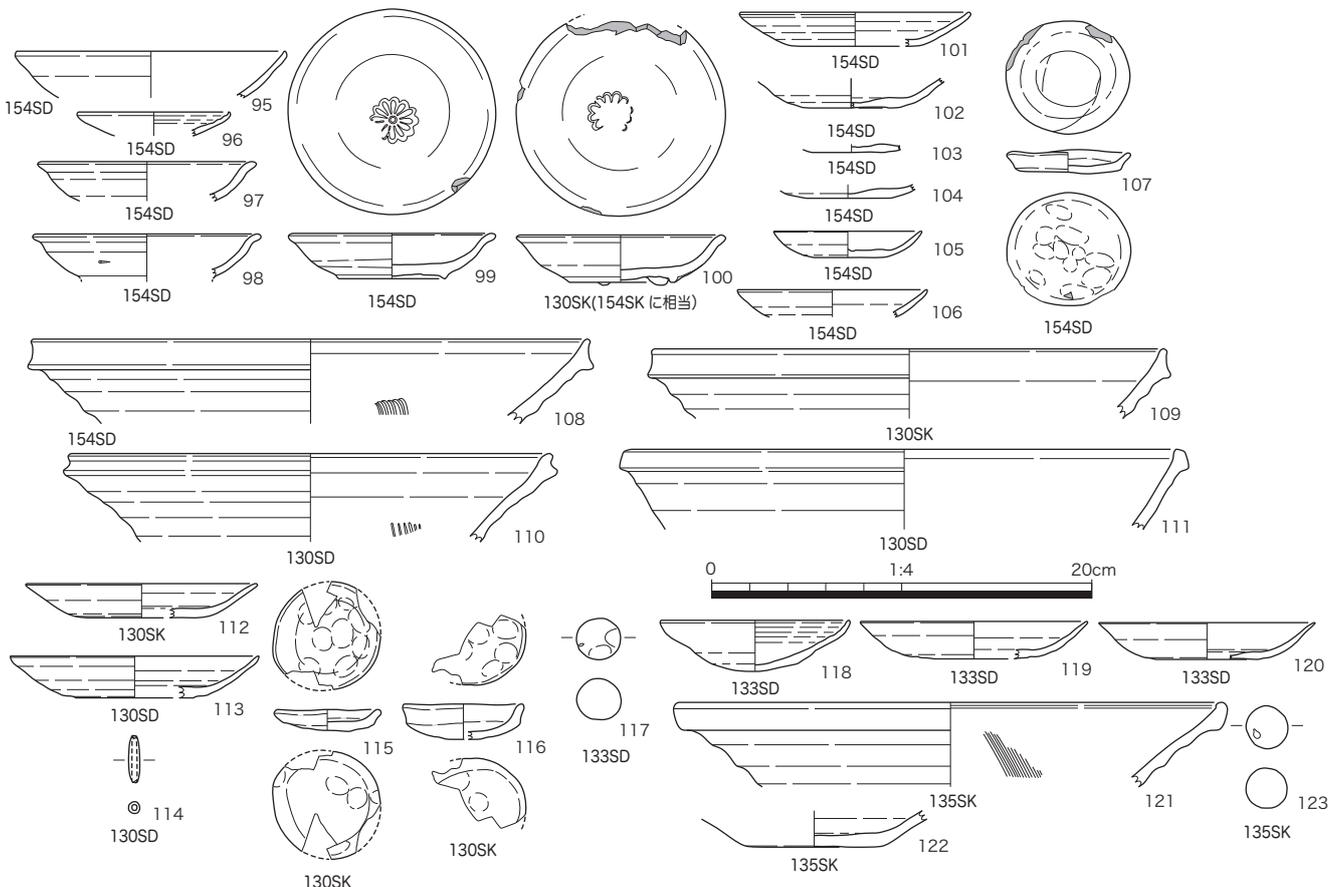


図27 20A区154SD・133SK・133SD遺物図

第3節 古墳時代～江戸時代の遺構と遺物

(1) 概要

時代別分布状況 前節では一色城に関わる遺構と遺物について記述した。本節ではそれ以外の遺構と遺物について解説する。

まず、一色城跡における時代別の分布状況を示す。第1節の基本土層でも述べたように、一色城跡の発掘調査で最古段階に位置付けられる遺物は弥生時代中期である。しかし当該期の遺構は調査区内では検出されず、河川埋没から陸地化の進んだ古墳時代前期後半の包含層および柱穴等が遺物とともに検出されている。その分布は20B・C区でも若干みられたが、不定形なものばかりであり、むしろ中心は19A区と19Ba区東半部にある。ついで古墳時代後期～飛鳥時代の7世紀の土器はほぼ調査対象地全域で見られるが、その中心は19A区(128SD)にある。

奈良時代の竪穴建物跡は19A区・Ba区・Bb区・Cb区・20A区に分布する。これは微高地ほぼ全域に相当する。また中世の区画溝は東端の19Cc区から西端の20B区ほぼ全調査区で検出されており、奈良時代以降に活動域が拡大したことになる。これに対して一色城の時期は、前節のとおり20Ba区から西方に限定的で、当該期の遺物もほとんどその範囲内となる。一色城廃絶後となる江戸時代には、北堀と重複する村境の溝494SDとその周辺で近世陶磁器が出土する。

(2) 遺跡西半部 (20A～C区)

遺構出土の遺物 検1面～検2面を通じて、数点ずつ出土した遺構出土の遺物を提示する。内容については一覧表(埋蔵文化財センターHPで公開)を参照されたい。

20A区 254SI 20A区検2面で検出された竪穴建物跡である。長径2.8m、短径2.1mの規模を測る。一方深さはほとんどなく、竪穴建物跡としてもやや疑わしいところもある。なお周溝状遺構357SZとの重複関係は明らかでない。出土遺物は口縁端部に連続刺突文のあるハケ甕E-183、内外面に縦ミガキが施された高杯杯部で碗型を呈する。これら以外に顕著な遺物がみられないことから古墳時代前期前半の可能性が高い。

20A区 273SI 20A区検2面で検出された竪穴建

物跡である。長径4.0m、短径3.2mの長方形となる。検出面からの深さ0.1mで、底面とそれに付する壁溝が一部で検出されるのみである。この底面は掘り方のそれか床面に該当するのかは決め難いが、壁溝の断面がそこから掘り込まれた土層であることは確認されている。なおカマドや柱穴は全く不明となっている。また断面A-A'では下位に11層の存在が認められるが、これが別記する周溝状遺構357SZの上層部分に該当する。調査工程では、237SI調査段階で重複関係にある357SZの存在は未検出でありA-A'にはその記録がない。つまり237SIが掘り終えた時点で357SZの平面形が初めて確認できた。この経緯からもわかるように357SZが273SIの下位にある先行遺構である可能性が高い。

237SIからは、7世紀代の須恵器杯蓋E-186や杯類の口縁部E-187が出土しているがきわめて小片で、埋土からの顕著な遺物として7世紀代の土師器長胴甕E-188が挙げられる。なおE-185は古墳時代初頭の土師器甕で連続刺突文のある受口状口縁が特徴である。

20A区 357SZ 20A区の検2面で検出された周溝状遺構である。その平面形は外径をみるとおおむね円形であるが、内径は一部で直線的な部分もみられるので隅丸方形と表現することもできよう。その規模は、東西方向の長径において周溝外径5.6m、同内径4.2mを測る。周溝の深さは遺構検出面から0.5mで、底面はきわめて平らに掘られており、断面は逆台形となっている。その埋土は、断面A-A'とE-E'で見ると下半部はほぼ単層となっているが、半ばで複数回の掘り返しがあつてそれに対応して元は箱形であつたものが上端に向かってやや開いている(例:A-A'の1～4層)。ここで注目されるのがE-E'の4層がラミナ堆積であることで、水流が一時的にせよあつたことの証左である。遺物は須恵器と土師器が破片で出土しており、掘り返しの最下部とみられる位置に集中する。したがって構築後一定時間を経たものと考えられる。356SDからは土師器高杯の脚部が出土している。357SZの周溝からは土師器鍋の把手E-190、須恵器杯身E-191は全体に小型化が進んだI-17号窯式期、E-192は無蓋高杯の杯部である。E-193は箱形を呈

する高杯杯部として図化した。壺類の蓋である可能性もある。いずれも時期は7世紀後半と考えられる。

古代の掘立柱建物跡 20A区第2面で検出された大型の柱掘り方で構成される掘立柱建物の柱列である。現地で認識できたものとして、時計回りに柱穴379SK・375SK・252SK・261SKで構成される側柱建

物がある。柱穴は長径0.7～1.6m、深さ0.4～0.8m前後の隅丸方形で、379SK・375SK・261SKの断面において掘り方埋土と柱痕(抜き取り)が1時期ずつ確認された。261SKの柱痕底部直径が約0.13mありこれが概ね柱底径に相当するものと思われる。ここから想定される柱筋は、梁行2間(約4.3m)×桁行1間(約4.0m)

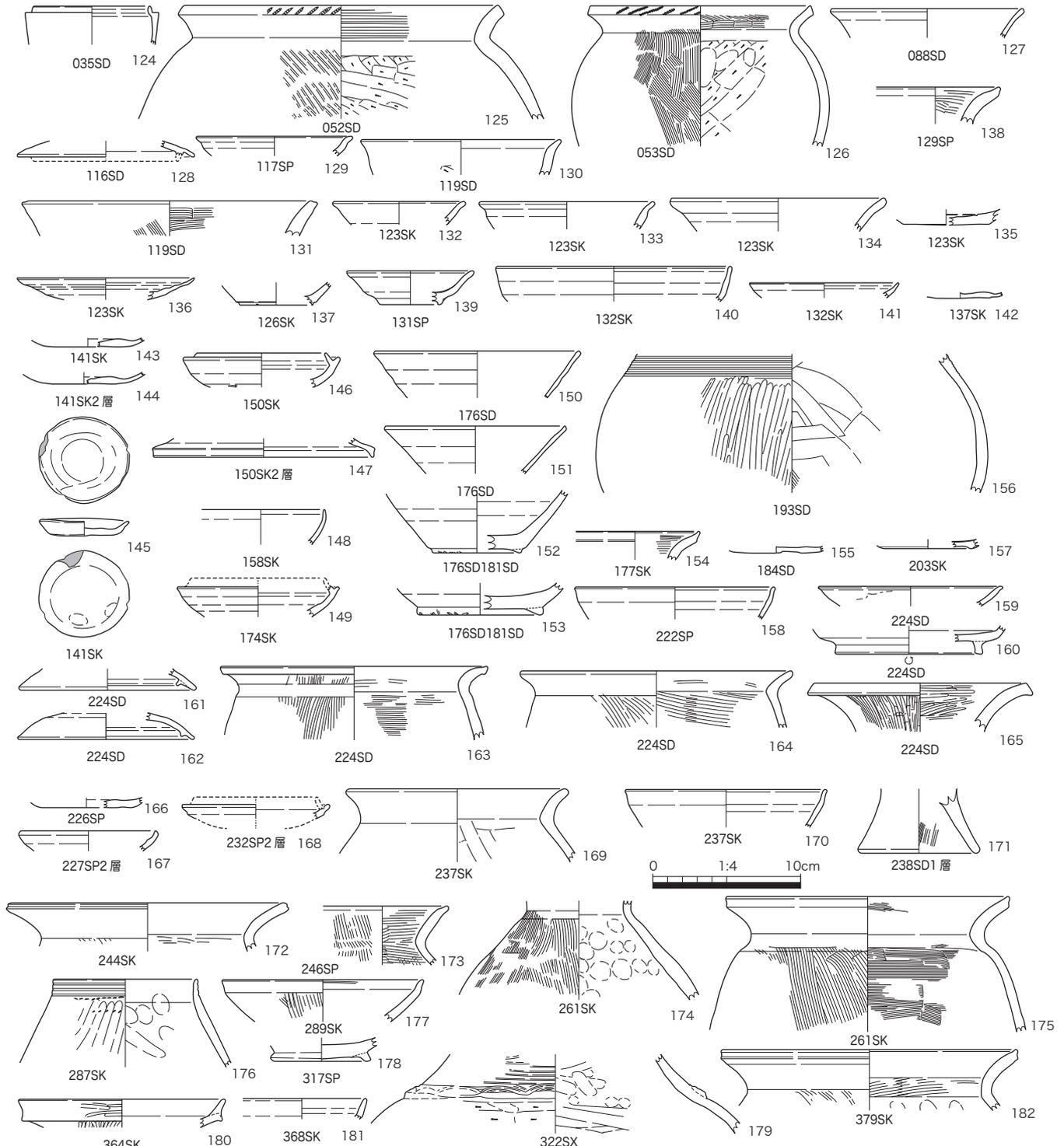


図28 20A～C区各遺構遺物図

一色城跡

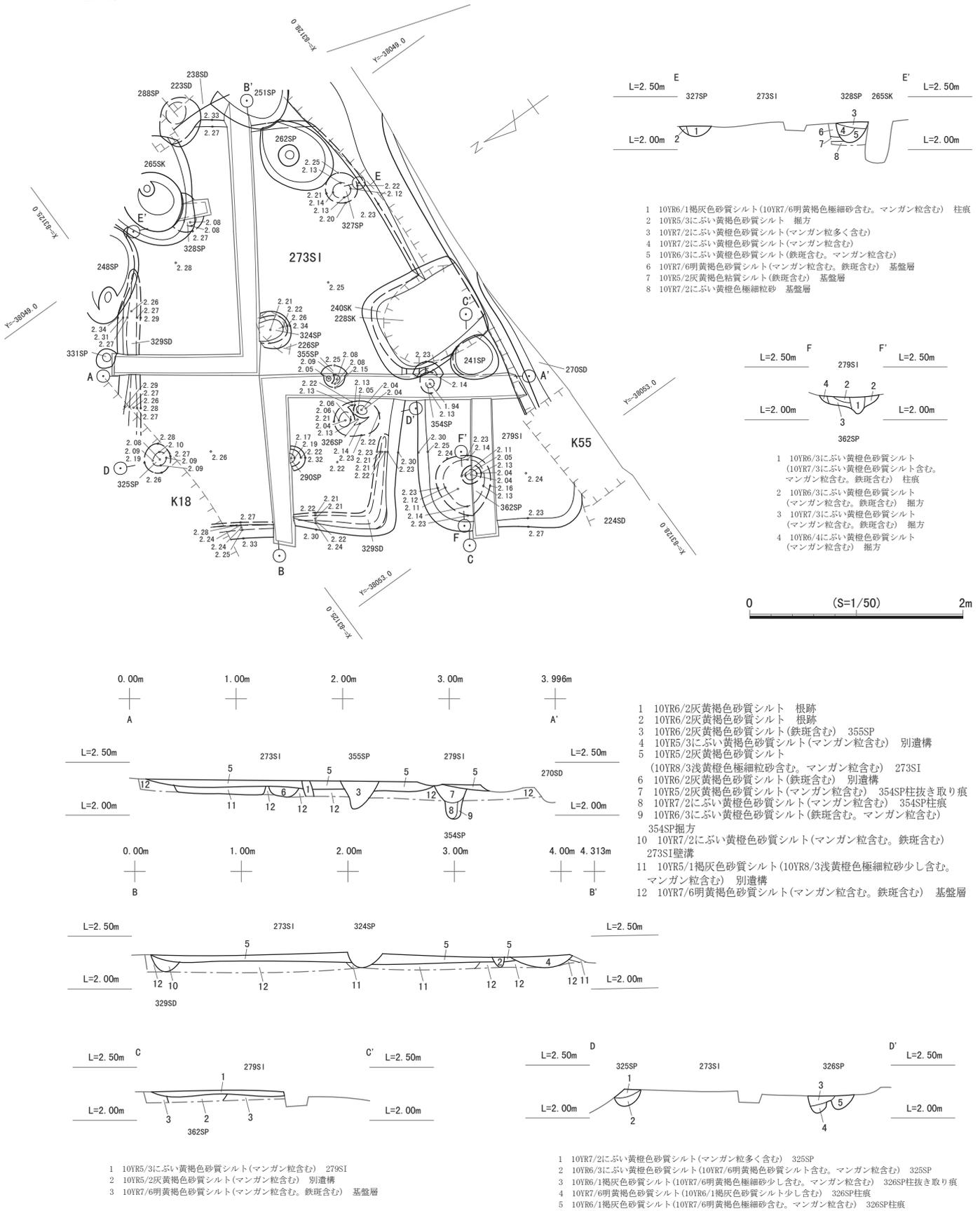


図29 20A区273SI遺構図

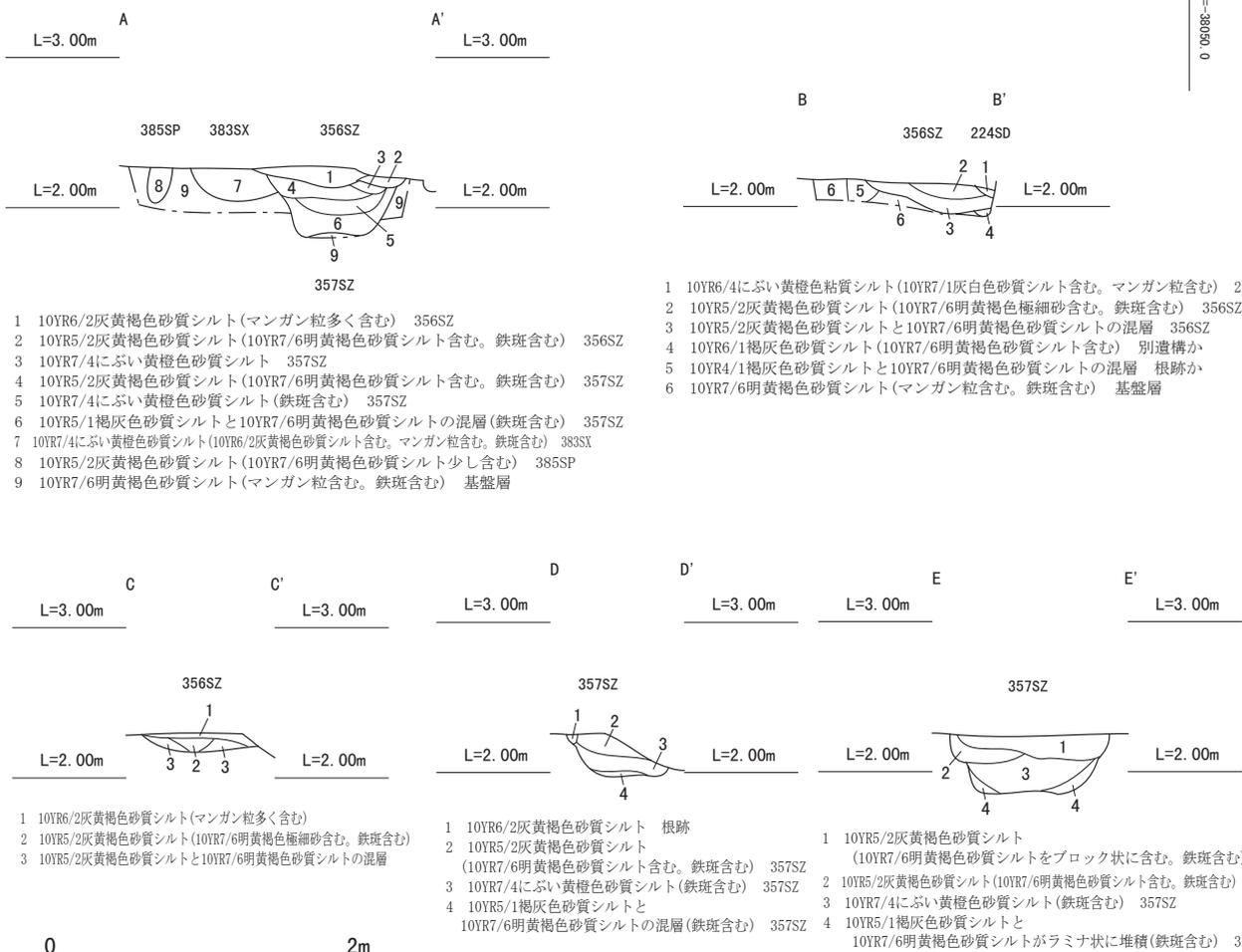
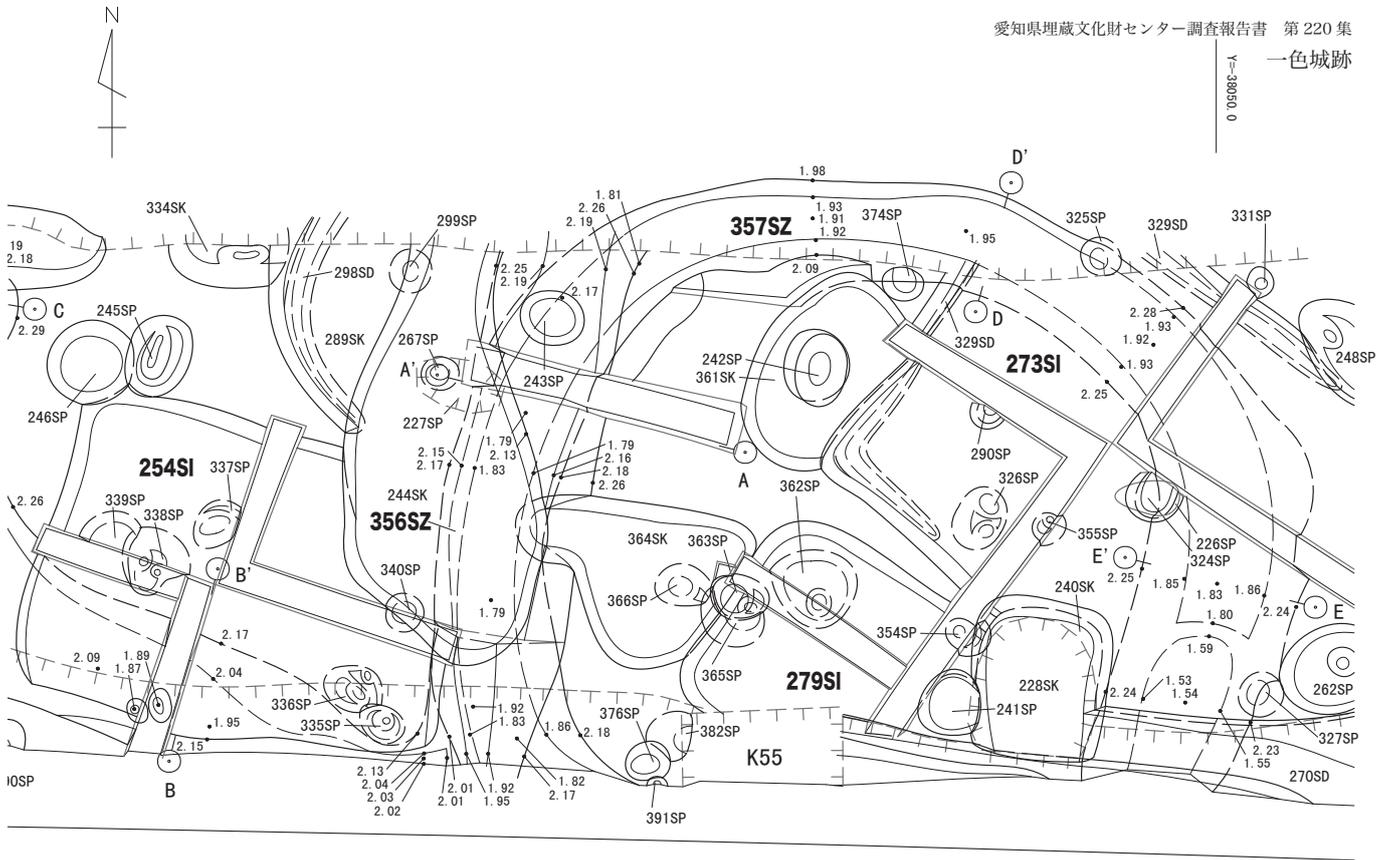


図30 20A区 357SZ 遺構図

以上の規模となる。出土遺物は、261SKの掘り方から土師器濃尾型長胴甕E-175が、また379SKからも土師器濃尾型長胴甕E-182が出土しており、建物の時期は概ね7世紀後半と考えられる。

上記の掘立柱建物跡の西側には不整形なピット359SKと292SKがあり、さらにその西側には439SK・265SK・262SPが並んでいる。これらは建物に近い方位で柵の可能性はある。

20A区中世整地層 一色城の築城に伴って、古代～中世の旧表土上に盛土整地を行った痕が20A区で検出されている。基本的には一色城の遺構が検出された検1面(検1)下となる。検2面へ調査を進める過程で掘削したところ、古代～中世の遺物が出土した(E-194～203)。大半は旧表土上面に散布していたもので、須恵器E-194～198、灰釉陶器碗E-199、山茶碗E-200～203である。須恵器は蓋E-194がC-2号窯式期で8世紀初頭、無台杯E-198は底部ヘラ切りで同時期とみら

れる。灰釉陶器はごく微量であり、山茶碗も須恵器に比べると少ない。山茶碗E-201は東濃型第8～9型式で14世紀代となる。基盤層の黄褐色砂質シルト系の盛土内に遺物が少ないのは当然として、山茶碗類が築城時期の上限を示す遺物となる。

20A区検2面 中世整地層下に黒褐色シルトの包含層が広がっている。こちらは整地層から一転して古代の須恵器E-206～210が大半で弥生～古墳時代の土器E211・214がごく少数混じる。須恵器蓋E-206・207はI-25号窯式期で8世紀前葉、杯蓋E-210がI-101号窯式期で7世紀中葉であることから、検2面遺構の時期が7世紀後半～8世紀前半と見積もられる。

20A～C区検1面 検1面での遺物は、20B・C区古代～近世が同一遺構面であることから、各時期の遺物が混在している。特記すべきは弥生土器E-223～E226で、当該期の遺構は検出されなかったが、弥生時代後期の集落が近くに存在したものと考えられる。

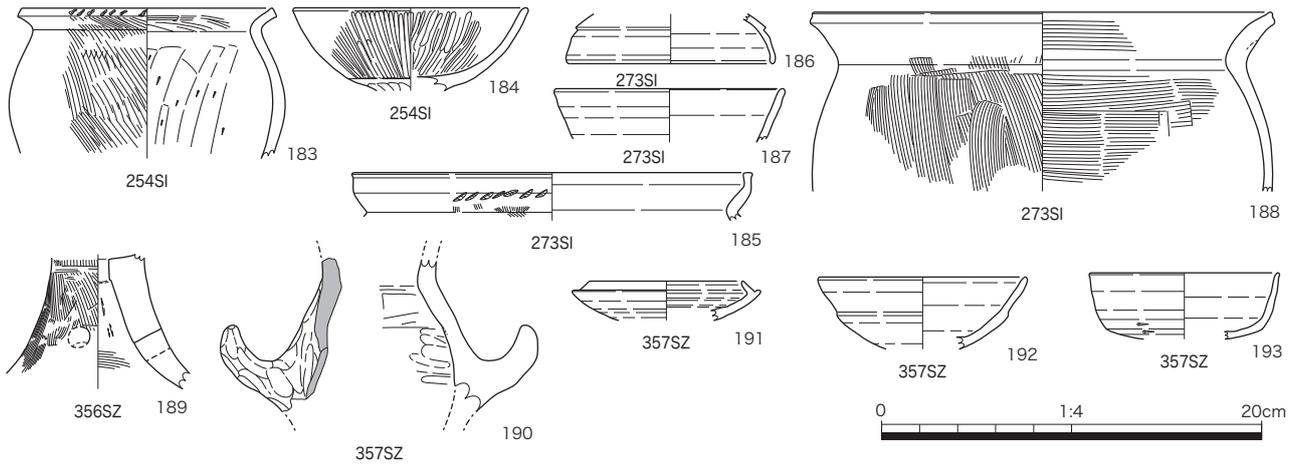


図32 20A区273SI・357SZ遺物図

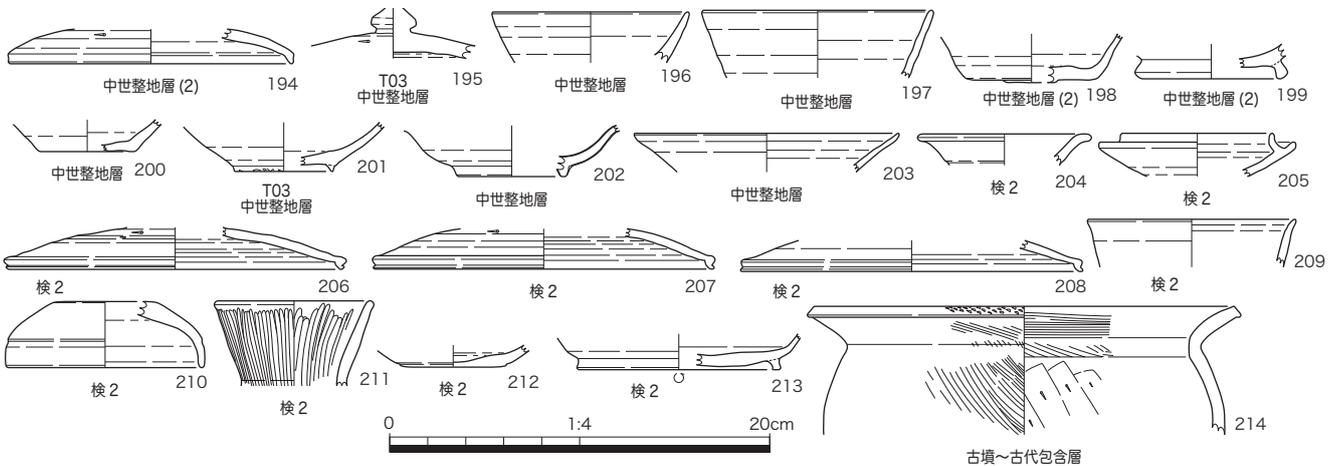


図33 20A区古代包含層～中世整地層遺物図

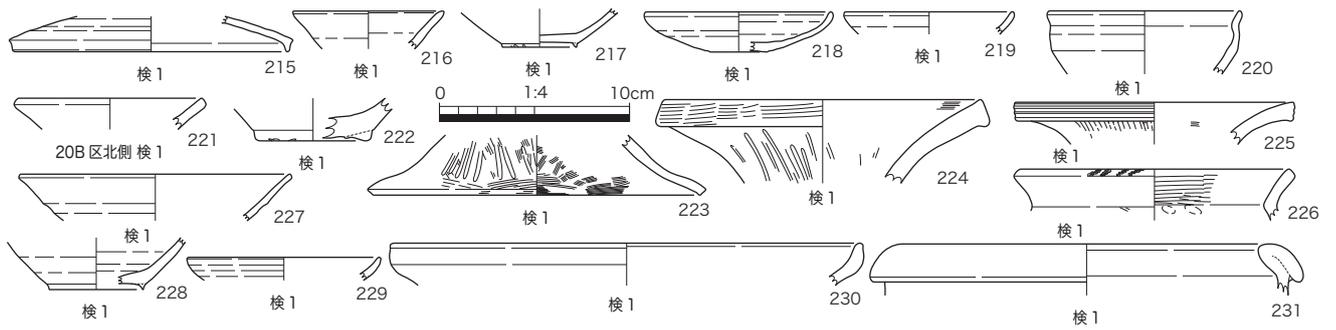


図34 20A～C区検1面遺物図

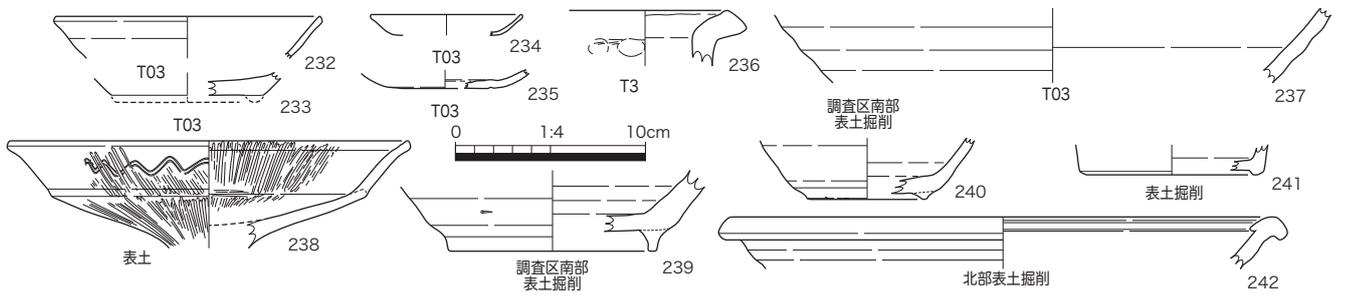


図35 20A～C区表土遺物図

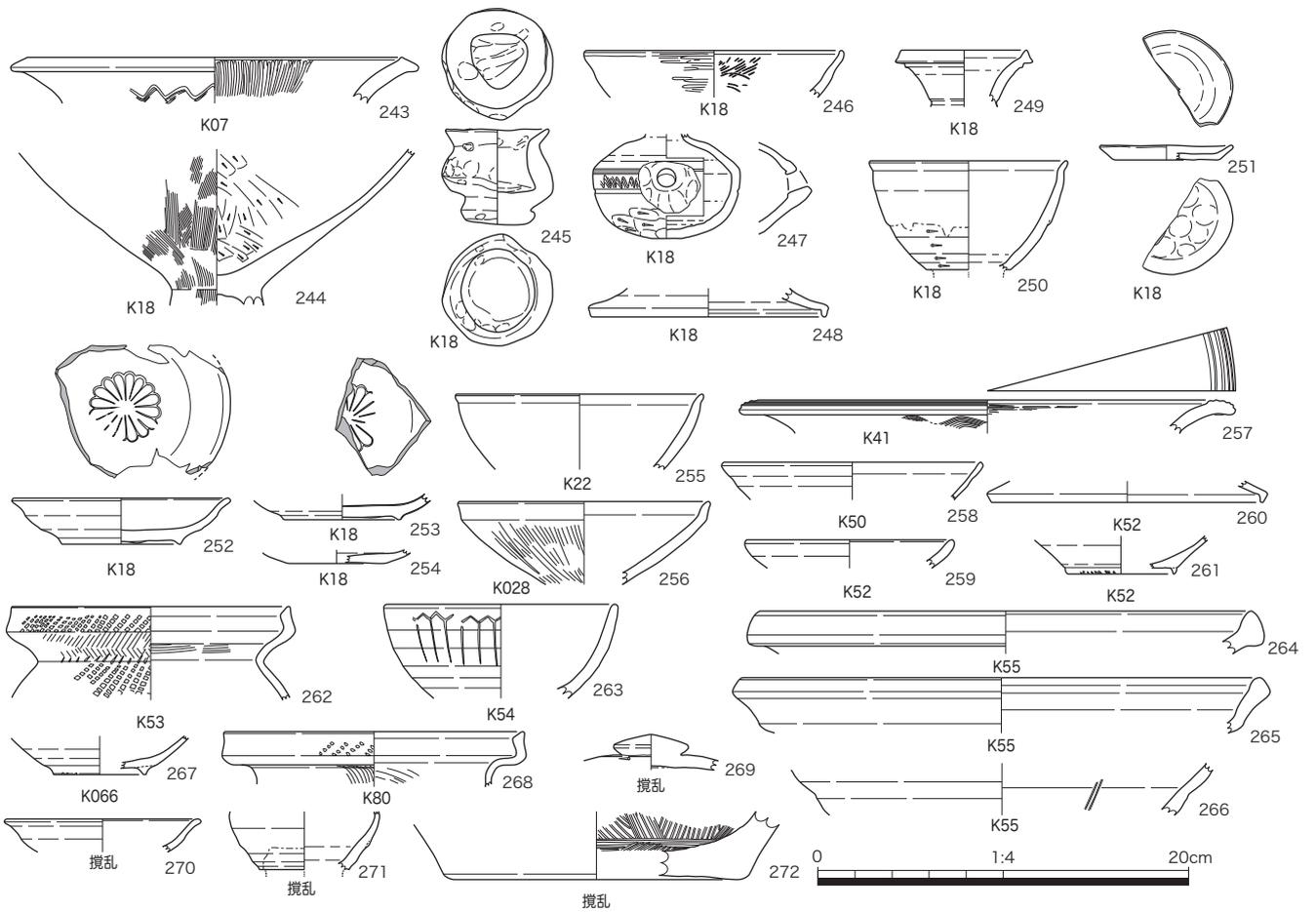


図36 20A～C区攪乱遺物図

20A～C区表土・攪乱 検1面と同様に表土中の遺物も弥生時代後期～江戸時代を示す。土師器鍋E-236は清郷型鍋で初期段階の山茶碗に伴うとみられる。中世陶器の鉢は山茶碗第5型式と併行期で12世紀後半～13世紀初頭である。また攪乱は昭和時代に行われた土地区画整理によって生じた落ち込みや攪拌層で、20C区で広範囲にみられ、一部は一色城の内溝056SD・090SD検出面にもかかっている。時期は弥生時代後期以降となるが瀬戸・美濃窯産陶器の古瀬戸後期～大窯期のものは056SDや090SDに含まれていたものであろう。

(3) 遺跡東半部 (19A～D区)

19A区128SD 19A区西部の検2面では緩い曲線で延びる幅約1.7mの溝が検出された。検出長は約25.0mである。検出時は黒褐色シルトが上位を覆っており(図37左断面図1層)、それを掘り下げる過程で遺物が多量

に出土した(検2、E-273～293)これらは位置関係から128SDに含まれる。その後検出面レベル以下を上層・下層に区分したが、検2ほど遺物はない。検出面からの深さは約0.5mで、断面は皿状や逆台形を呈し一定していない。溝の形状から、その北側に存在する集落を囲っていた可能性が考えられる。

遺物は遺構検出までに7世紀代の須恵器と土師器甕がある。杯蓋E-273、杯身E-274、台付鉢E-275、高杯E-276(美濃産か)、長頸瓶E-278、など器種は多岐にわたる。そのうち下限を示す蓋E-296はC-2号窯式期で、8世紀初頭にはほぼ埋没したと考えられる。一方、土師器で特記すべきは破片が完存状態であった長胴甕E-292・293である。いずれも丸底の伊勢型で7世紀後半である。口縁部以外の外面に煤付着が著しく、カマドに固定して使用されたものと思われる。

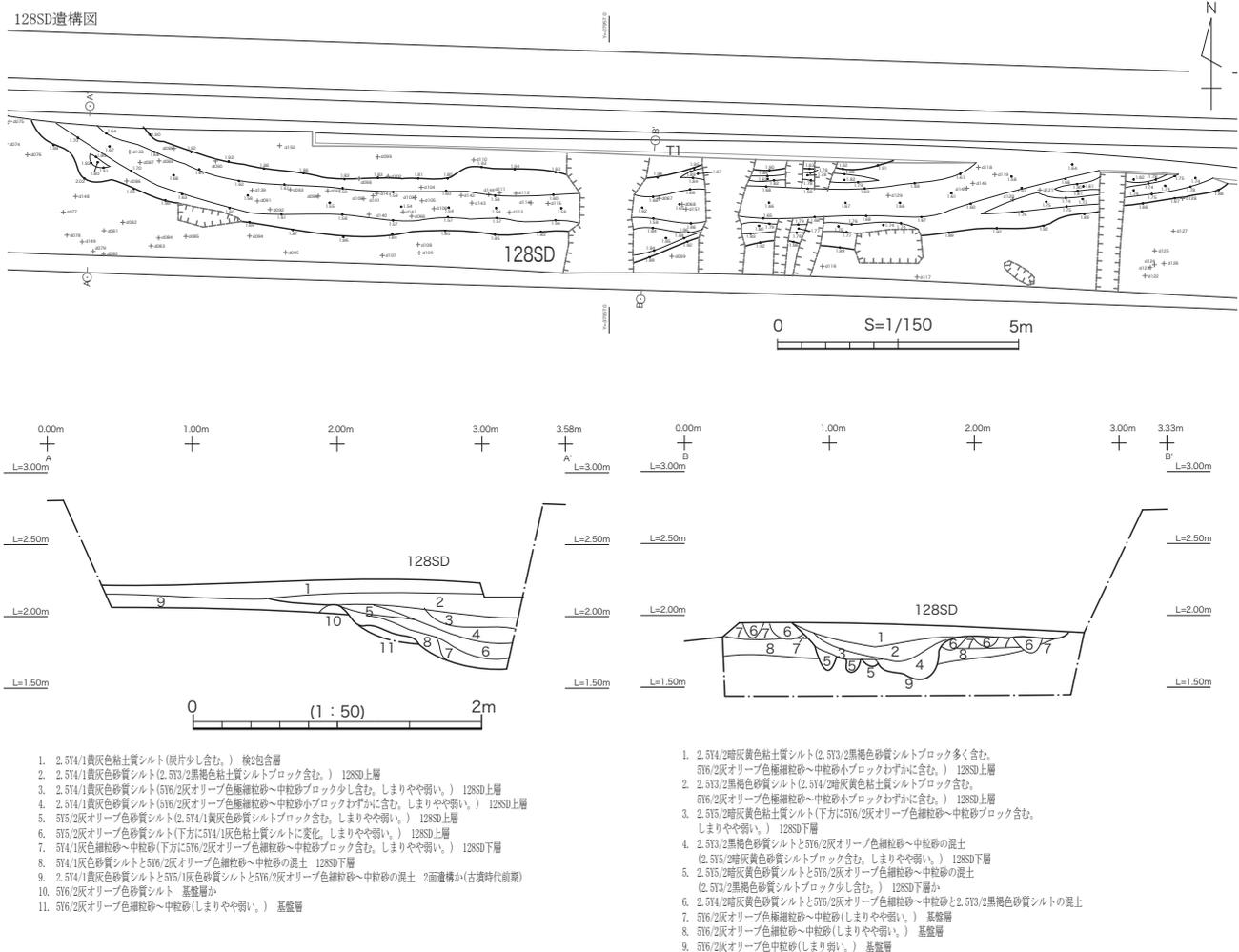


図37 19A区128SD 遺構図

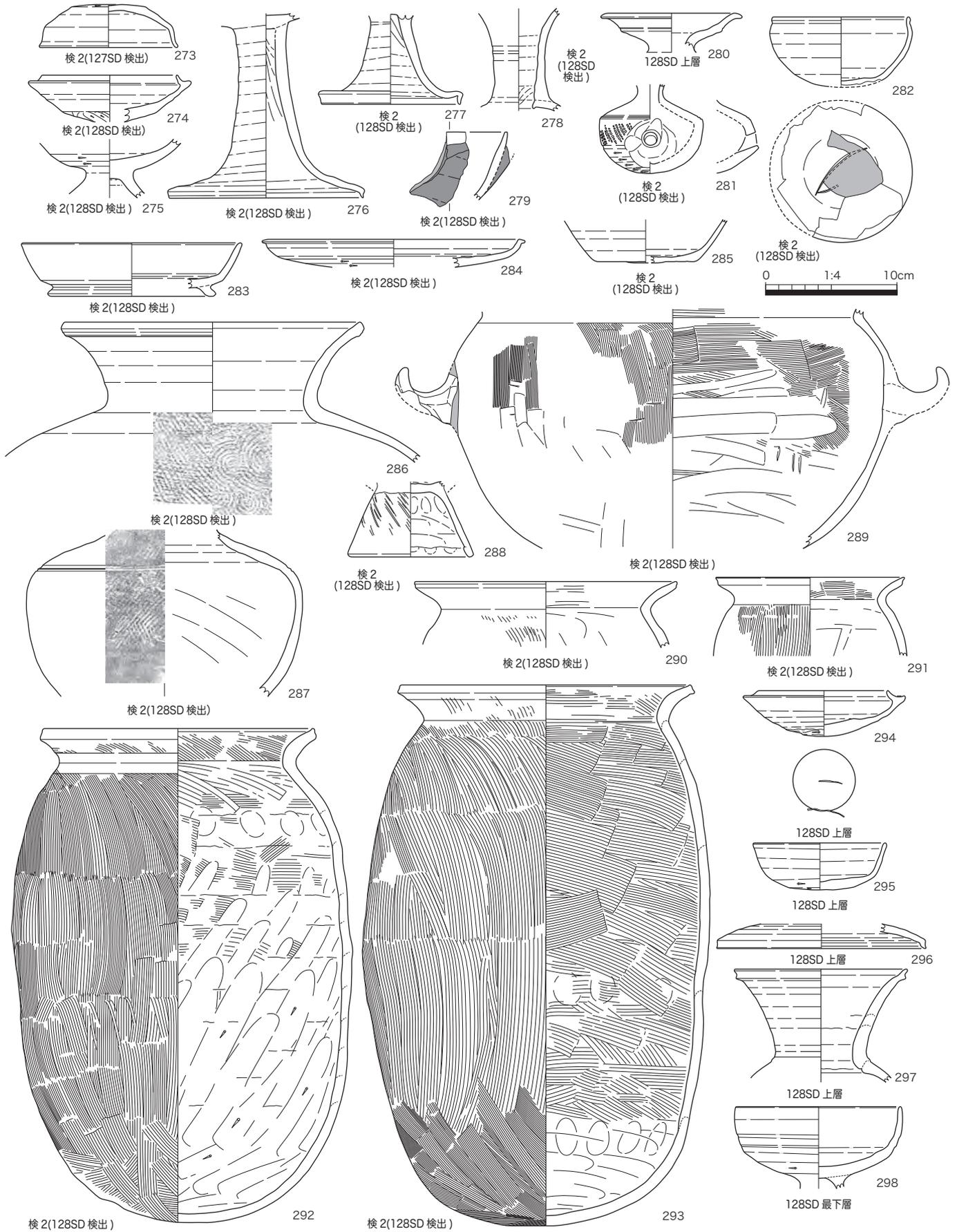


図 38 19A 区 128SD 遺物図

19Bb区 392SD・19A区 158SD 19A区 東部～19Bb区の検2面で検出された周溝状遺構である(図40)。その平面形は外径をみるとおおむね円形で、西辺の一部で直線的な部分もみられる。北縁は19A区の第2面で検出された溝状遺構158SDが相当する。規模は、東西方向の長径において周溝外径6.3m、同内径4.3mを測る。周溝の深さは遺構検出面から0.5mで、底面はきわめて平らに掘られており、断面は逆台形となっている。遺構のかなりの部分が用水路と排水路によって破壊されており、その内側中心それらが直交している。遺構埋土は、C-C'断面で顕著であるが複数回の掘り返しが認められる。埋土の大半にブロック状の基盤層由来の砂質シルトが混じっているため、それを掘り上げた土が流れ込み(あるいは投げ込まれて)堆積していると考えられる。

遺物(図39)は、須恵器と土師器が破片で出土した。須恵器は蓋E-299と杯E-300～304がある。E-302が約半分の残存で、I-17号窯式期である。また特徴的なものとして壺蓋E-305があり、一見すると無台杯であるが口径が大きい。土師器長胴甕E-311・313は遺構の北部で出土した。これらはいずれも底面近くでの出土であり、ほぼ構築年代を示している。須恵器杯身E-308・309も合わせると時期はI-17号窯式期で7世紀後半であるが、土師器長胴甕の底部E-314・315は平底の濃尾型であるから8世紀初頭まで下る。また158SDからは土師器伊勢型甕E-343や須恵器蓋E-344も出土している。

当該遺構の性格は周溝の内側に求められるが、ほぼ壊滅していたのと、遺構の重複関係で古代の竪穴建物跡276SIによって削平されていたことによりその手がかりがない。しかし壺蓋E-305は集落の土器としては特殊であり、短頸壺とともに使用されていたとみられることから、火葬墓の可能性も考えておきたい。しかしそれが築造からさほど間がないうちに削平された点は理解しがたく、20A区357SZとともに類例の検討が必要である。

19A区 072SD・19Bb区 380SD 北西～南東方向へ抜ける古墳時代後期の溝である(図41)。検出長は約12.5mで、幅約1.1m、深さ約0.6mで断面形は丸みのあるV字形をしている。埋土は3～4層ありいずれもシルトブロックがみられることから、水流がない状態での堆積である。よって何らかの区画が目的だったと考えられる。また検1面でその上位で幅広の溝033SDが検出されているが、072SDの凹地に相当する。

遺物(図42)は長頸瓶E-317や杯蓋E-320、土師器甕E-321は7世紀中葉～後葉であるが、上位の033SDではC-2号窯式期とみられる蓋E-322もあるので、最終的な埋没は8世紀初頭と推測される。

19Cb区 199SD 攪乱と調査区北壁の間でわずかに残存していた遺構で形状から溝としているが、平らな底面があり焼土・炭化物が多いことから、竪穴建物のカマド周辺の可能性もある(図46)。出土遺物は須恵器蓋E-327、鉄鉢形須恵器E-329・330、土師器伊勢型長胴甕E-331に同濃尾型長胴甕底部E-322があり、8世紀

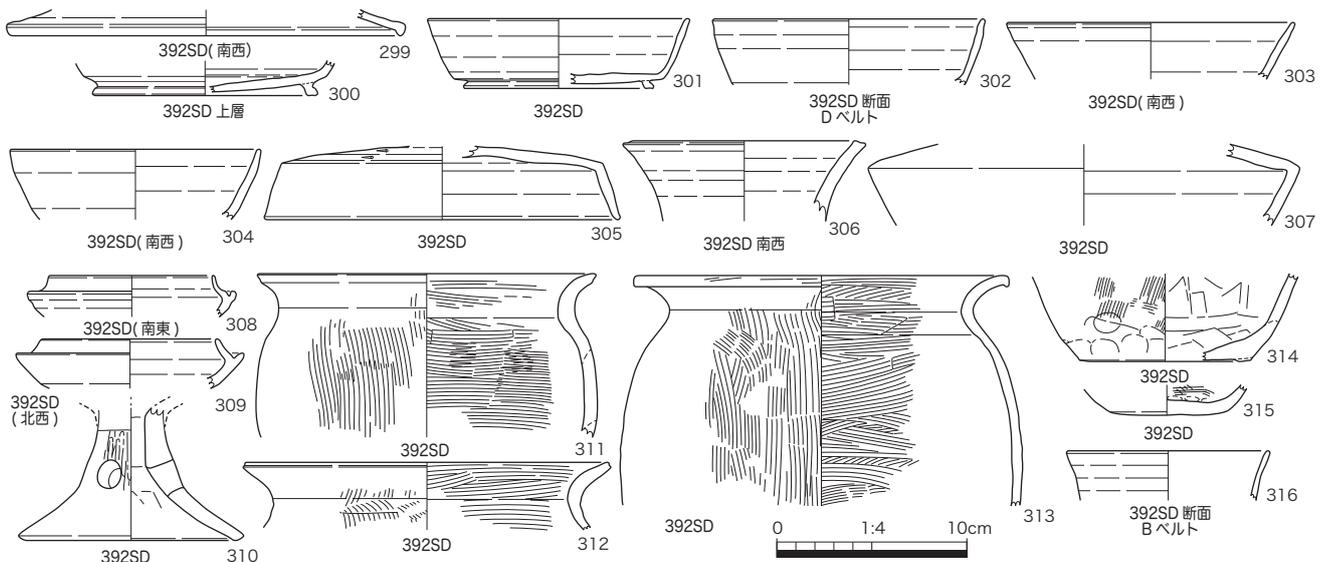
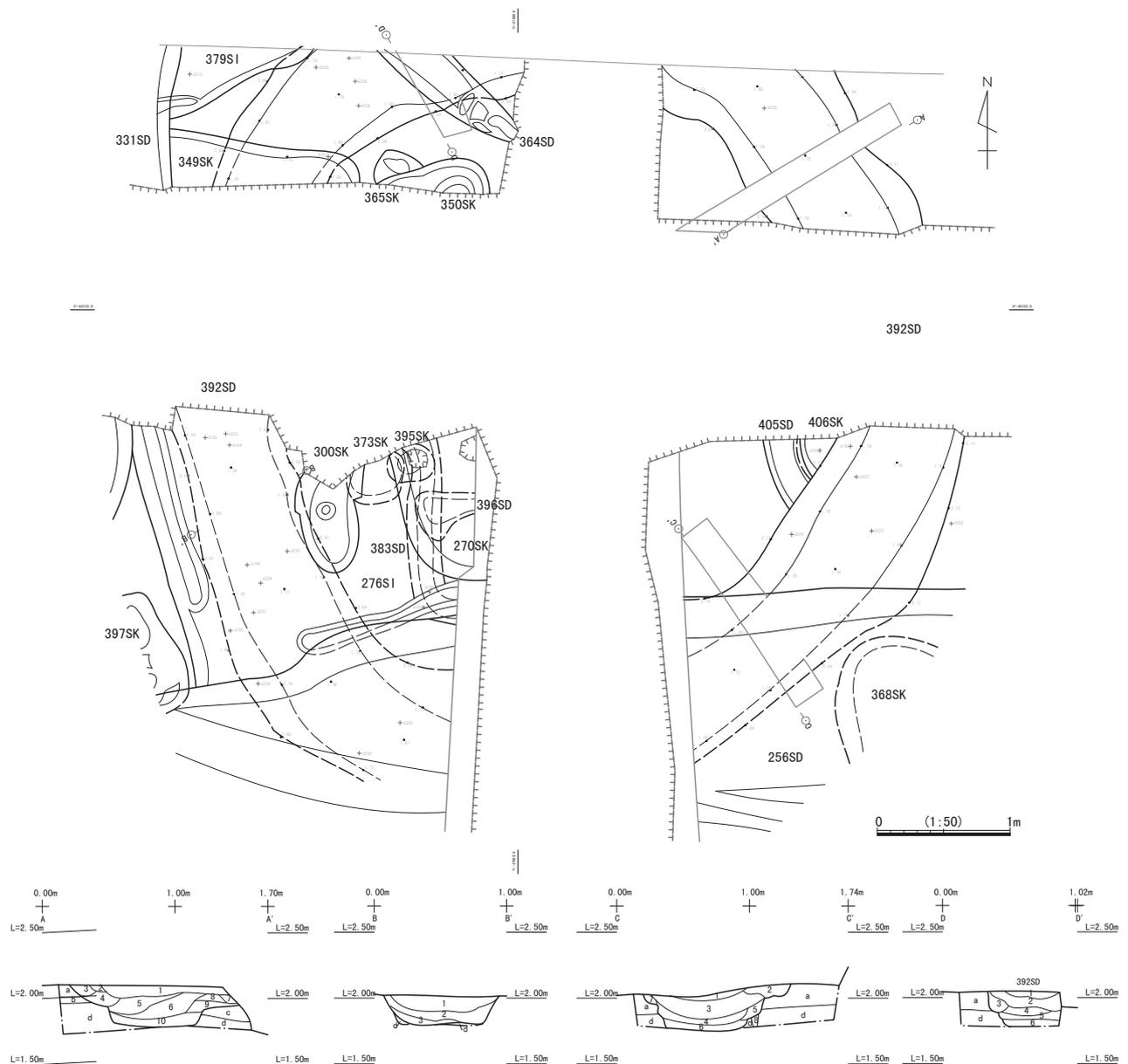


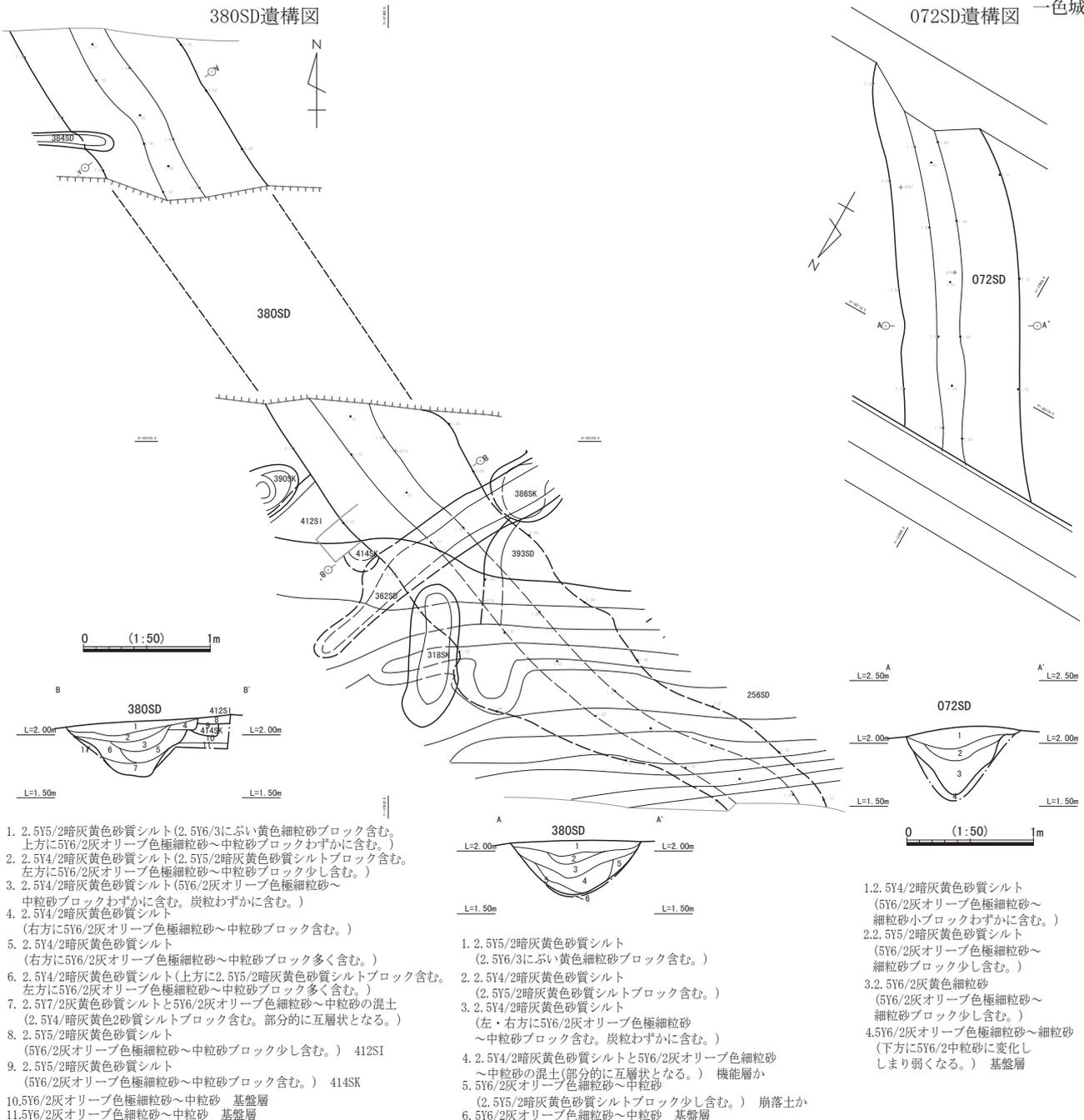
図39 19Bb区 392SD 遺物図

一色城跡



- A断面.**
2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(右端は2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルトに変化。)
 2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(左方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック多く含む。)
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ細粒砂(2. 5Y3/2黒褐色砂質シルトブロックわずかに含む。)
 2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック少し含む。炭粒わずかに含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(中央に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック多く含む。)
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂(2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂小ブロック含む。)
 2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(下方に2. 5Y3/2黒褐色砂質シルトブロック含む。5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂小ブロック少し含む。)
 2. 5Y3/1黒褐色砂質シルトと2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂の混土(各層のブロックが部分的に層状を成す。)
- B断面.**
2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(左・右方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 2. 5Y3/1黒褐色砂質シルトと2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂の混土(各層のブロックが部分的に層状を成す。)
- C断面.**
2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック少し含む。炭粒わずかに含む。)
 2. 5Y3/1黒褐色砂質シルトと2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトの混土
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック少し含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック含む。炭片少し含む。)
 2. 5Y3/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック多く含む。)
 2. 5Y3/1黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック含む。各層のブロックが部分的に層状を成す。)
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂(2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ細粒砂(2. 5Y6/1黄灰色砂質シルトブロック少し含む。)
- D断面.**
2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂小ブロック少し含む。炭粒わずかに含む。)
 2. 5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂の混土(2. 5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂(2. 5Y3/2黒褐色砂質シルトブロックわずかに含む。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(左方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック少し含む。各層のブロックが部分的に層状を成す。)
 2. 5Y3/2黒褐色砂質シルト(左方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ中粒砂ブロック多く含む。各層のブロックが部分的に層状を成す。)
- 基盤層.**
- 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ細粒砂
 - 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂へ細粒砂(2. 5Y6/1黄灰色砂質シルトブロック少し含む。)
 - 10Y6/2オリブ灰色極細粒砂へ細粒砂
 2. 5GY7/1明オリブ灰色極細粒砂へ中粒砂

図 40 19Bb 区 392SD 遺構図



1. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂ブロック含む。上方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。)
2. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。左方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。)
3. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。炭粒わずかに含む。)
4. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(右方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。)
5. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(右方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。)
6. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(上方に2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。左方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。)
7. 2.5Y7/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリブ色細粒砂～中粒砂の混土(2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。部分的に互層状となる。)
8. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。)
9. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。)
10. 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂 基盤層
11. 5Y6/2灰オリブ色細粒砂～中粒砂 基盤層

1. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂ブロック含む。)
2. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
3. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(左・右方に5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。炭粒わずかに含む。)
4. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリブ色細粒砂～中粒砂の混土(部分的に互層状となる。)
5. 5Y6/2灰オリブ色細粒砂～中粒砂(2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
6. 5Y6/2灰オリブ色細粒砂～中粒砂 基盤層

1. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂小ブロックわずかに含む。)
2. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。)
3. 2.5Y6/2暗灰黄色細粒砂(5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。)
4. 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂(下方に5Y6/2中粒砂に変化ししまり弱くなる。)

図41 19A区072SD・19B区380SD遺構図

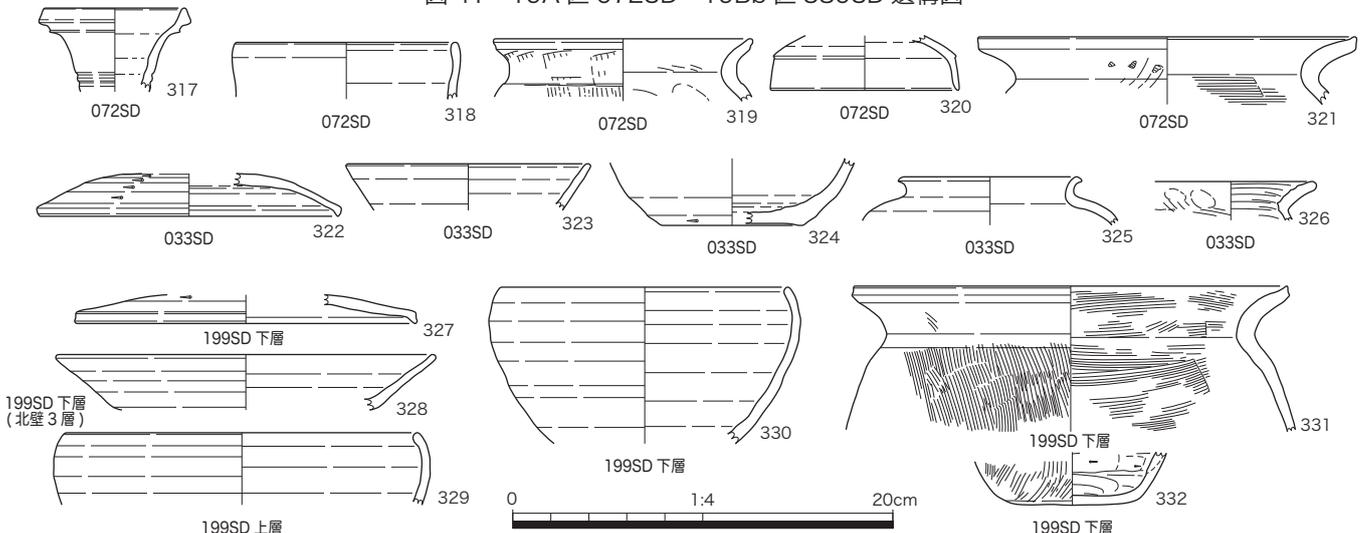


図42 19A区033SD・072SD・20Cb区199SD遺物図

初頭頃を下限とする時期である。

19A区の竪穴建物跡 19A区の検2面では20基の遺構を竪穴建物跡に類別した。その多くが部分的検出であり柱穴や壁溝がなく、竪穴建物跡と断定する要素に欠ける。

19A区066SI 平らな底面の有する遺構。側縁の線が不定形である。須恵器無台杯E-333が出土しているので奈良時代前半とみられる。

19A区067SI 不定形な遺構で西辺の一部が検出さ

れている。遺物はなく時期の特定はできない。

19A区070SI 西辺と北辺の一部が検出されている。ほぼ掘方が検出された状態で、かろうじて壁溝もある。顕著な遺物がなく時期の特定はできない。

19A区071SI 東辺と南辺の一部が検出されている。検1面からの堆積層を残した断面B-B'によれば、底面は基盤層に掘り込まれているが、その掘り込みは検2包含層の途中から掘り込まれたような形になっており、

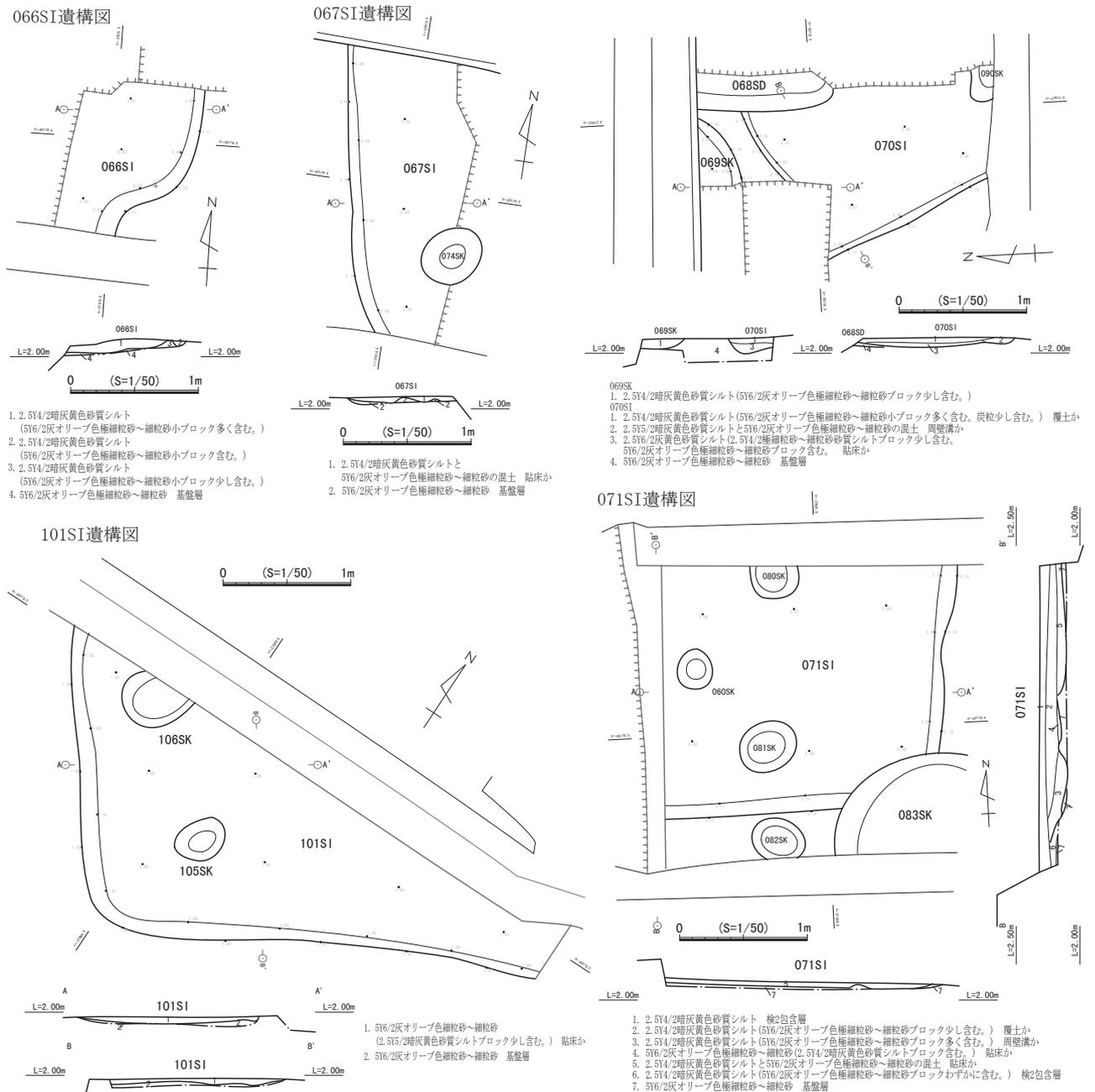


図43 19A区066SI・067SI・070SI・071SI・101SI遺構図

基盤層（検2面）で検出しようとする大部分が滅失した状態となる。遺物はなく時期は不明である。

19A区 073SI・078SI・093SI 19A区東部、周溝状遺構 392SDの北側に位置する。重複する竪穴建物跡群で、いずれもグリッド北から45°以上振れる方位である。重複関係は093SIが最下位で、ごくわずかな確認（断面E-E'）によればそれを周溝状遺構の北縁部158SDが上から掘り込まれている。そして158SDの埋土上から078SIが掘り込まれている。もっとも093SIと078SIは形状も不整形で竪穴建物跡である可能性は低いものの、平らな底面で掘り込まれている点は注意される。そして093SIの埋土上から073SIが掘り込まれており、

当該遺構は比較的明瞭に検出されている。それは南東辺と北東辺の一部が検出されたのみであるが断面A-A'によれば幅15cmほどの壁溝も認められる。またその床面には土坑171SKが掘り込まれており位置的に柱穴と考えられる。071SIは床面下は貼床（断面A-A'の11層）が施されている。

遺物は078SIから土師器甕の口縁部E-337・338が出土しているが、下位に存在する158SDに関わる可能性がある。一方、073SIからは土師器小型甕口縁部E-334があり8世紀代とみられる。一方土師器甕E-335は丸底であるため7世紀代の伊勢型甕である。しかし他の遺構との重複関係から推測して8世紀でも後半代

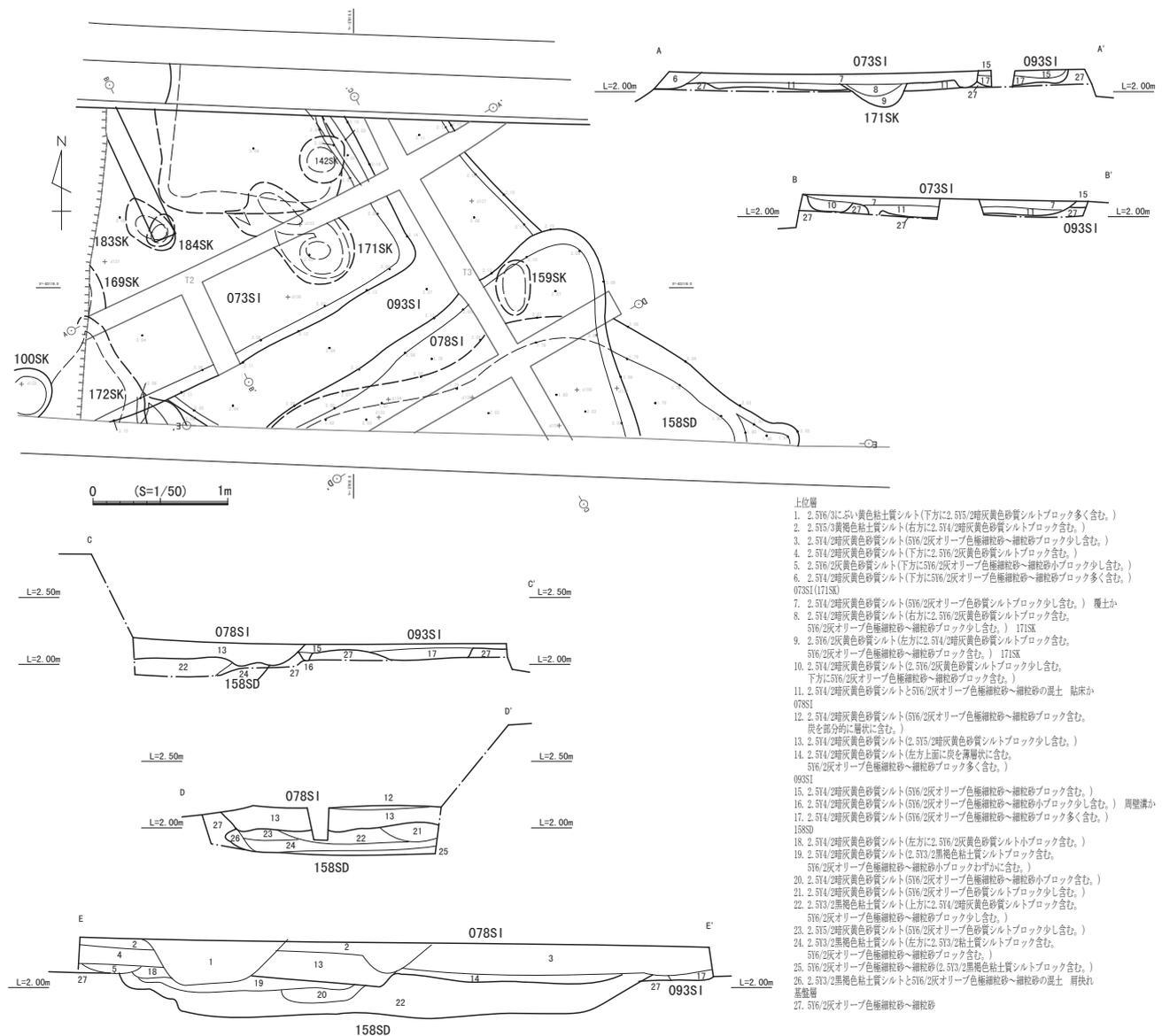


図44 19A区 073SI・078SI・093SI・158SD 遺構図

- 上位層
1. 2.5V6/3にぶい黄色粘土質シルト(下方に2.5V5/2暗灰黄色砂質シルトブロック多く含む。)
 2. 2.5V5/3黄褐色粘土質シルト(右方に2.5V4/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 3. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック含む。)
 4. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(下方に2.5V6/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 5. 2.5V6/2暗灰黄色砂質シルト(下方に5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂小ブロック含む。)
 6. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(下方に5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック多く含む。)
- 073SI(171SK)
7. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色砂質シルトブロック少し含む。)
 8. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(右方に2.5V6/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 9. 2.5V6/2暗灰黄色砂質シルト(左方に2.5V4/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 10. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5V6/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 11. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルトと5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂の混土
- 078SI
12. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック含む。)
 13. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5V5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 14. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(左方上面に炭を薄層状に含む。)
 15. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(左方に2.5V6/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 16. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂小ブロック少し含む。)
 17. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック多く含む。)
- 093SI
18. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(左方に2.5V6/2暗灰黄色砂質シルト小ブロック含む。)
 19. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5V3/2黒褐色粘土質シルトブロック含む。)
 20. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂小ブロック含む。)
 21. 2.5V4/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色砂質シルトブロック少し含む。)
 22. 2.5V3/2黒褐色粘土質シルト(上方に2.5V4/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
 23. 2.5V5/2暗灰黄色砂質シルト(5V6/2灰オリブ色砂質シルトブロック少し含む。)
 24. 2.5V3/2黒褐色粘土質シルト(左方に2.5V3/2粘土質シルトブロック含む。)
 25. 5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂ブロック含む。)
 26. 2.5V3/2黒褐色粘土質シルトと5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂の混土
 27. 5V6/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂

の可能性が高いと考えられる。

19A区 097SI 19A区東部に位置する。大部分が調査区北壁から北側に存在するため南辺のみの検出された。南辺長は約3.2mで比較的小型に位置付けられる。壁溝はなく柱穴の所在も不明である。遺物は調査区北壁トレンチ T1 から完形の須恵器無台杯 E-789 が出土しており、当該遺構に含まれる。底部糸切、暗褐色を呈し一部焼成が甘く赤褐色を呈する。O-10号窯式期で8世紀後葉で、097SIの時期を示していると考えられる。

19A区 107SI 097SIと同様におよそ半分が19A区調査区北壁から北側に存在する。南辺が確認できており、その規模は約2.6mできわめて小型である。貼床や壁溝、柱穴は確認されていない。遺物は須恵器無台杯 E-339、土師器甕 E-340、同小型甕 E-341 である。遺物と規模から時期は8世紀後半代と考えられる。

19A区 108SI 19A区東部に位置する。小溝群の重複関係の下位で南辺のみが検出されたが、出土遺物はなく時期は不明である。

19A区 124SI・125SI・170SI 19A区東部で、097SI

の南側に位置する。攪乱で不明であるが097SIと重複関係にある。さらに125SI→124SIの順である。しかしながら124SIが東西に寸詰まりな形状であり底面も水平でないことから、溝状の落ち込みである可能性が考えられる。なお124SIからは須恵器蓋 E-342 が出土しており8世紀前半とみられる。

170SIは19A区調査区南壁で断面を確認した遺構で、

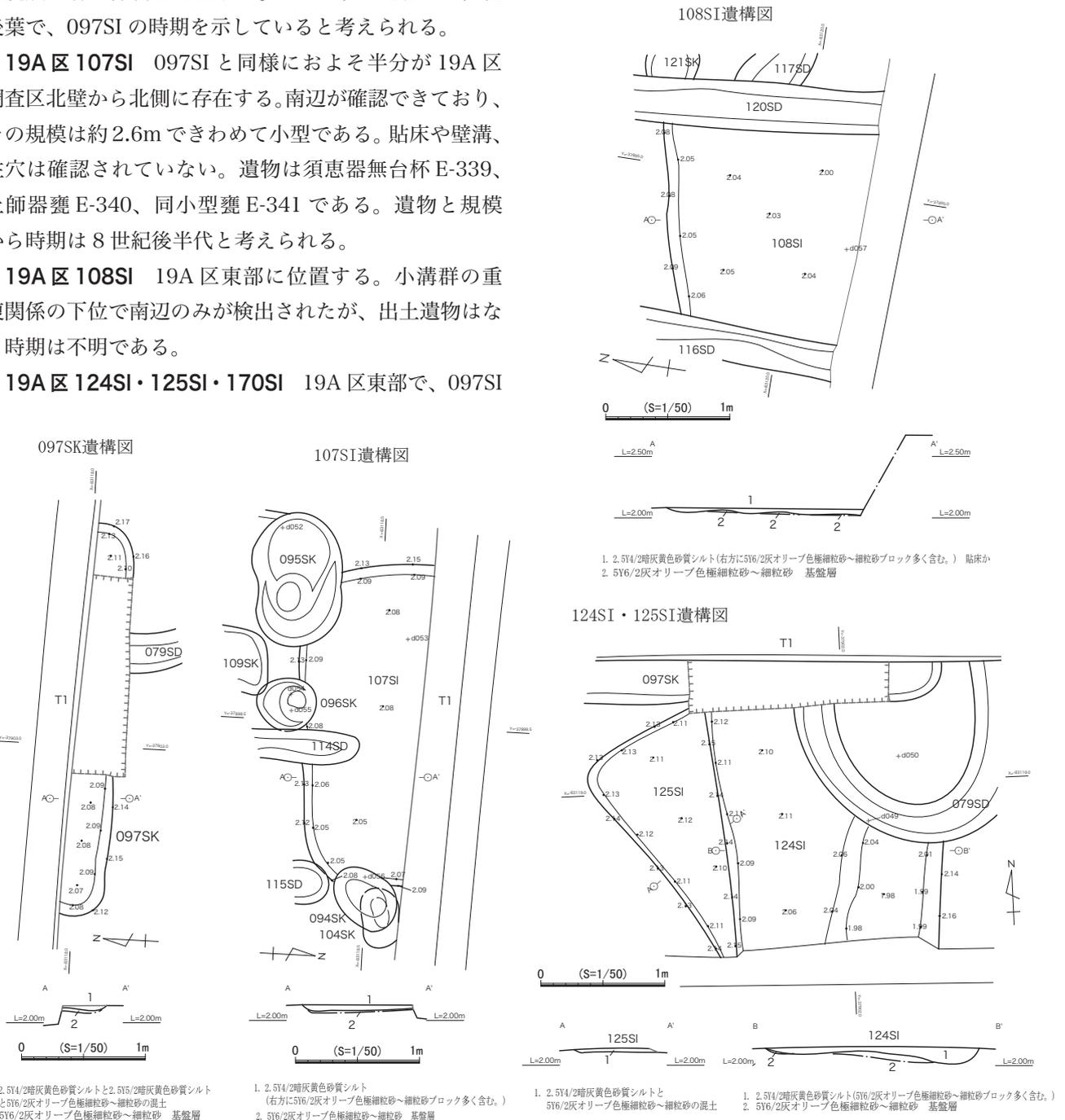
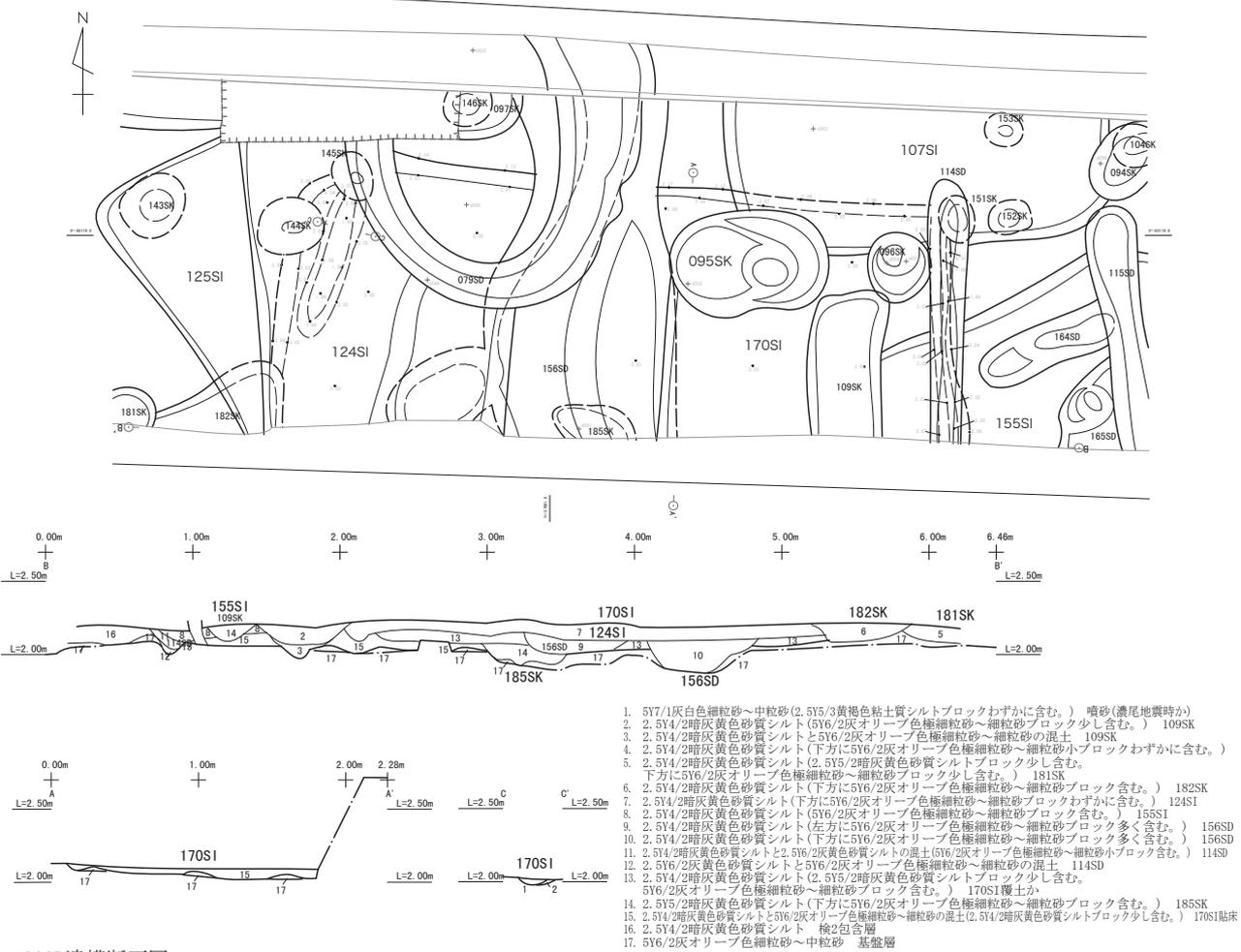


図45 19A区 097SI・107SI・108SI・124SI・125SI 遺構図

170SI遺構図



199SD遺構断面図

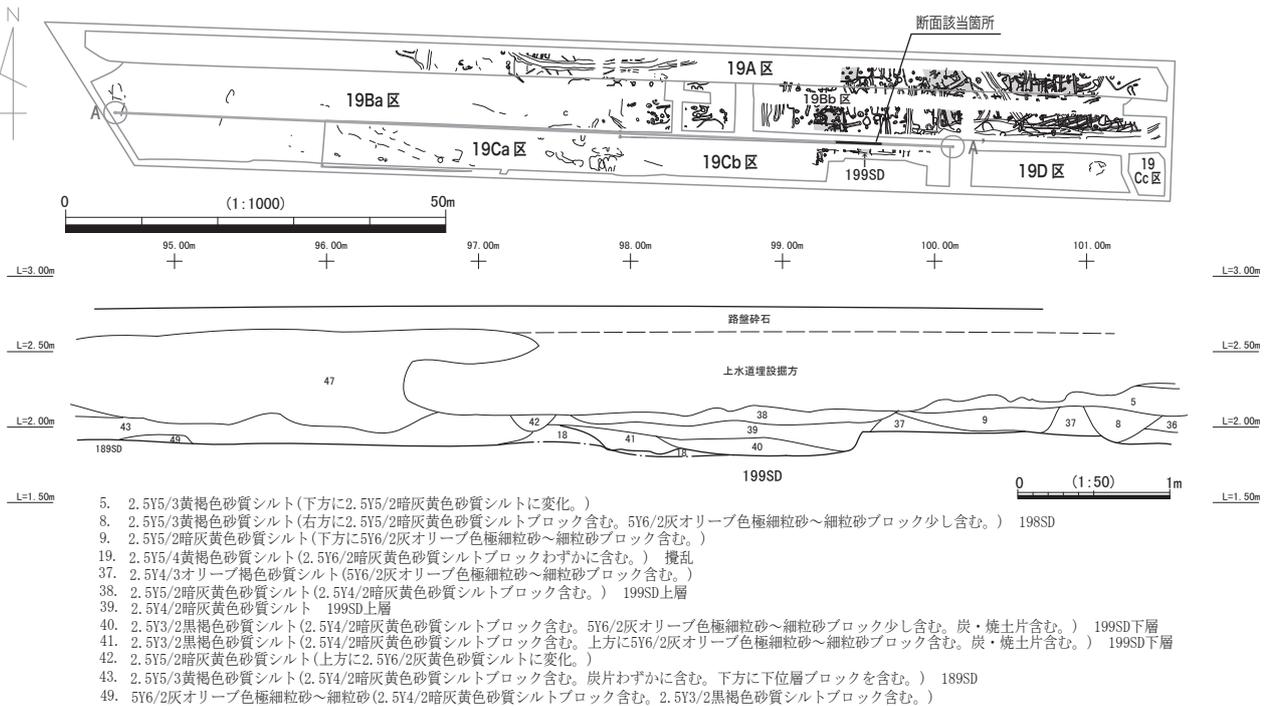


図 46 19A区 170SI・199SD 遺構図

一色城跡

124SI・125SI・125SI と重複しそれらより新しい時期になる。一方で遺構面では 107SI の下位で検出されていることから、125SI → 124SI → 170SI → 107SI の順に構築されていることになる。

19Bb 区 335SI 19Bb 区西部の検 2 面で検出された竪穴建物跡である。用水路の攪乱でほとんどが失われているが、周溝状遺構 392SD の付近で南東辺の壁溝が検出され、ついで用水路北側で北東辺の一部が検出された。ただしこちら側では壁溝までは確認されていない。南東辺はグリッド北から東へ 50° 振れている。カマドなどの

火処も不明であるが、須恵器杯 E-349 が出土しており、立ち上がり角度からして 8 世紀後半と考えられる。

19Bb 区 379SI・389SI・398SI 19Bb 区 の 検 2 面 で 検 出 さ れ た 竪 穴 建 物 跡 の 隅 部 な ど で あ る 。 用 水 路 の 攪 乱 か ら 北 側 で は 、 基 盤 層 ま で 攪 乱 を 受 け た 南 側 に 対 し て 19A 区 から 続 く 検 2 面 の 包 含 層 が 残 存 し て お り 、 そ の 下 位 で 検 出 で き た た め 、 い ず れ も 南 側 へ の 展 開 は 不 明 と な っ て い る 。 379SI は 壁 溝 が な く 、 389SI と 398SI は 壁 溝 が 確 認 さ れ た 。 出 土 遺 物 は な く 時 期 は 不 明 で あ る 。

19Bb 区 416SI・425SI 後述する布掘り掘立柱建物

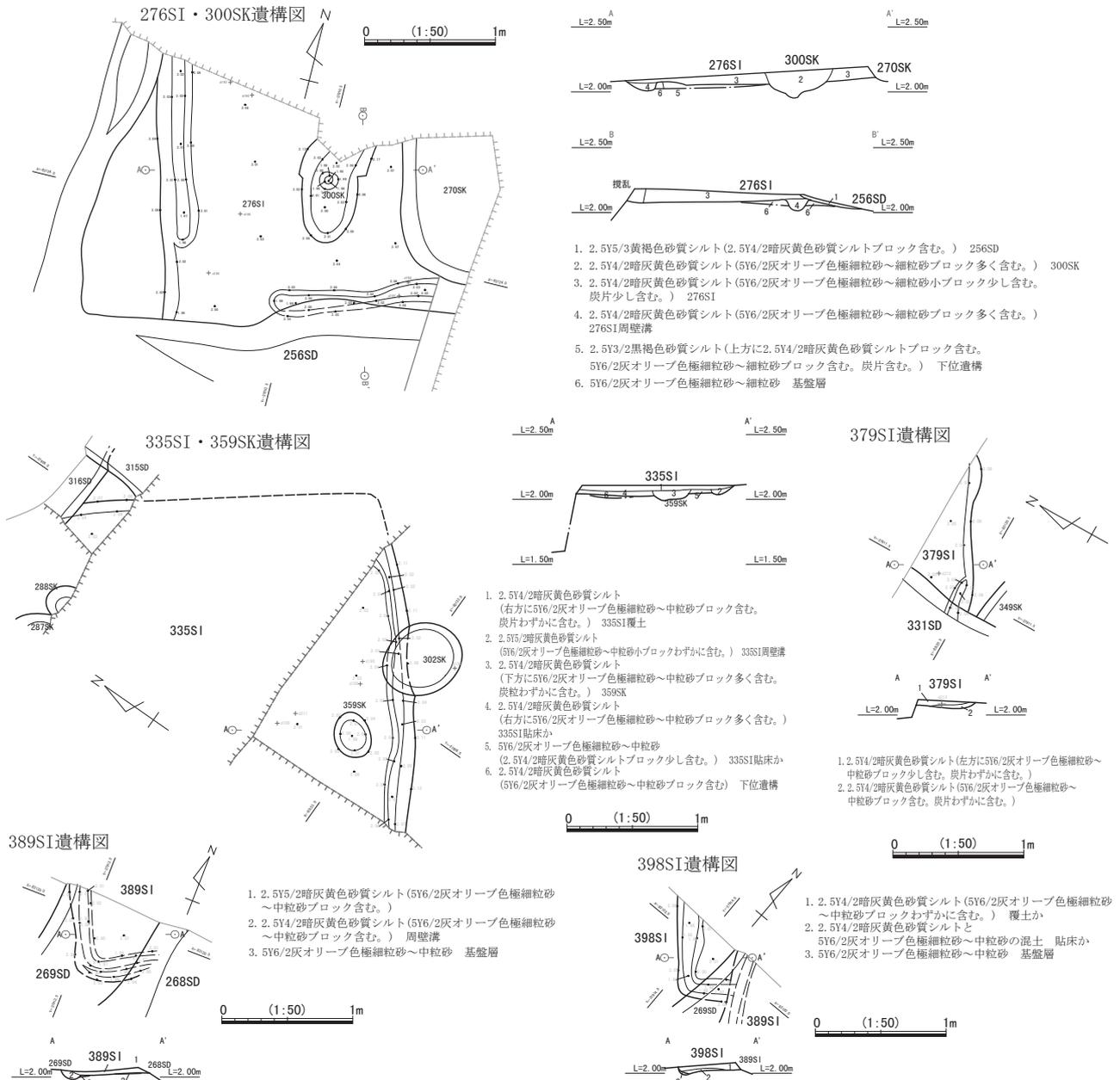


図 47 19A 区 190SK・355SI・359SK・379SI・389SI・398SI 遺構図

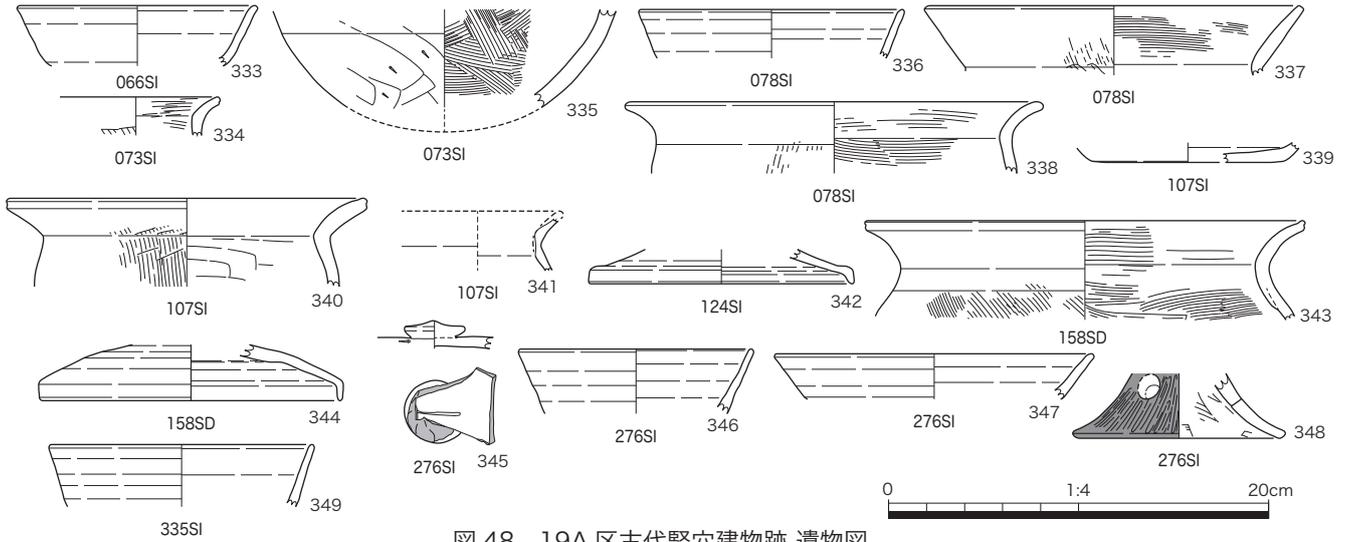


図48 19A区古代竪穴建物跡 遺物図

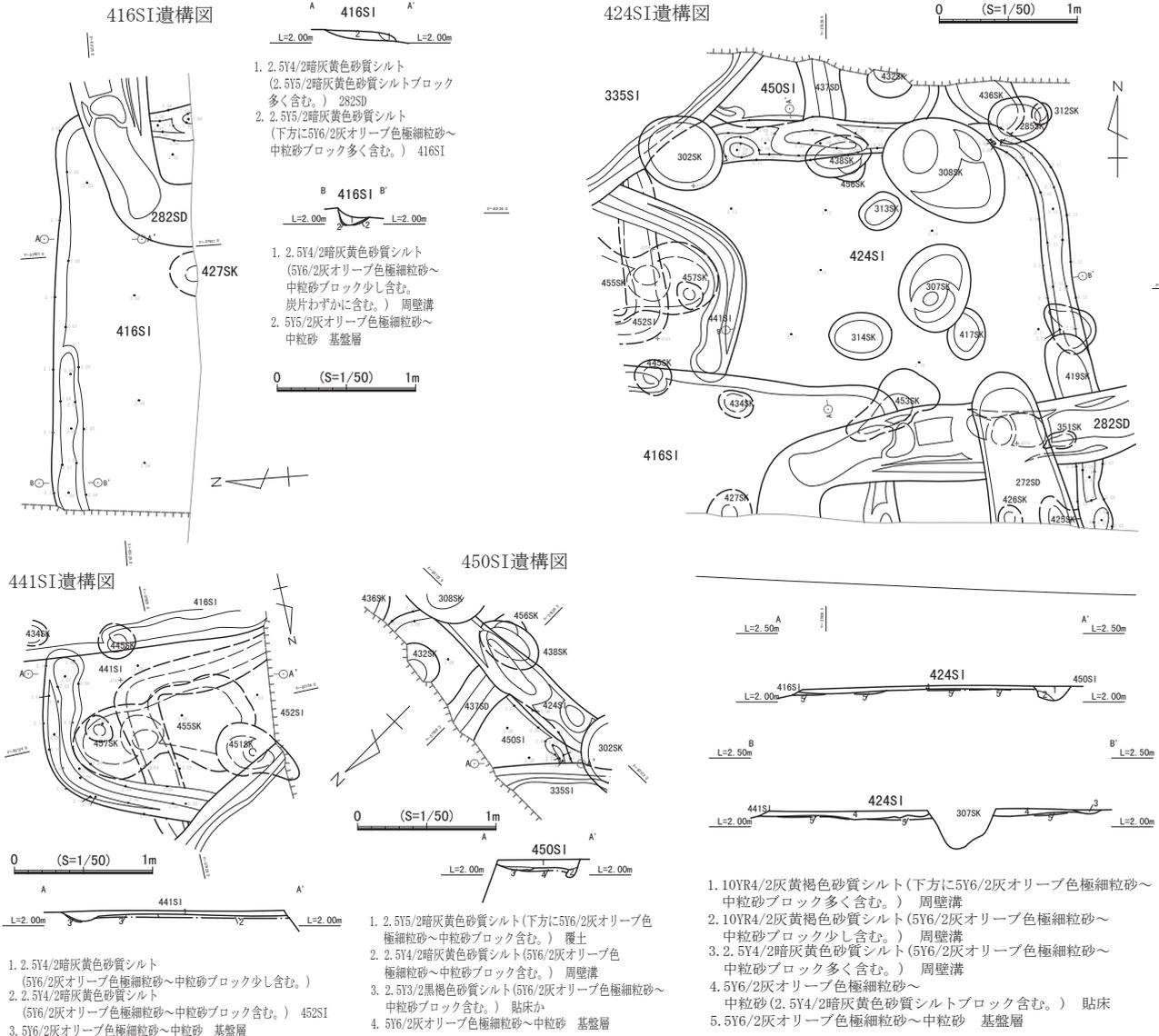


図49 19A区416SI・424SI・441SI・450SI 遺構図

一色城跡

跡 282SD に先行する竪穴建物跡で 19Bb 区西部の南壁付近の検 2 面で検出された。壁溝の一部のみで顕著な出土遺物がなく、時期は不明である。

布掘り掘立柱建物跡 19Bb 区 282SD 19Bb 区検 2 面で検出された溝状遺構であるが、その形状から掘立柱建物(または柵)の布掘り掘り方の一部である可能性高い。位置は調査区南壁際で、壁から南側に展開しているとみられるが、水道管を挟んだ 19Cb 区で類似遺構は検出されていない。溝としての検出長は 4.5m で西端で南へ屈曲する。検出面での幅 0.6m で箱形の断面となるが、東端から掘削を開始したところ底面に凹凸があることから

縦断面での埋土観察に切り換えた。すると埋土の上から 9 か所のピット状掘り込みが確認された。それらは 0.3 ~ 0.5m 間隔で並んでおり標高約 1.9m 付近に底部がある。出土遺物は掘り方埋土とみられる下層から須恵器瓶類の口縁部 E-513、層位不明だが底部へラ削りの須恵器無台杯 E-514 があり、8 世紀代と考えられる。

19Bb 区 376SK 遺跡東半部の検 2 面で検出された井戸の可能性のある土坑である。ただし井戸の構造物は検出されていない。その位置は、7 ~ 8 世紀の竪穴建物跡の分布域から南東方向へ約 6m と外れており、微高地の縁辺に相当する。遺構の北半部は用水路によって失わ

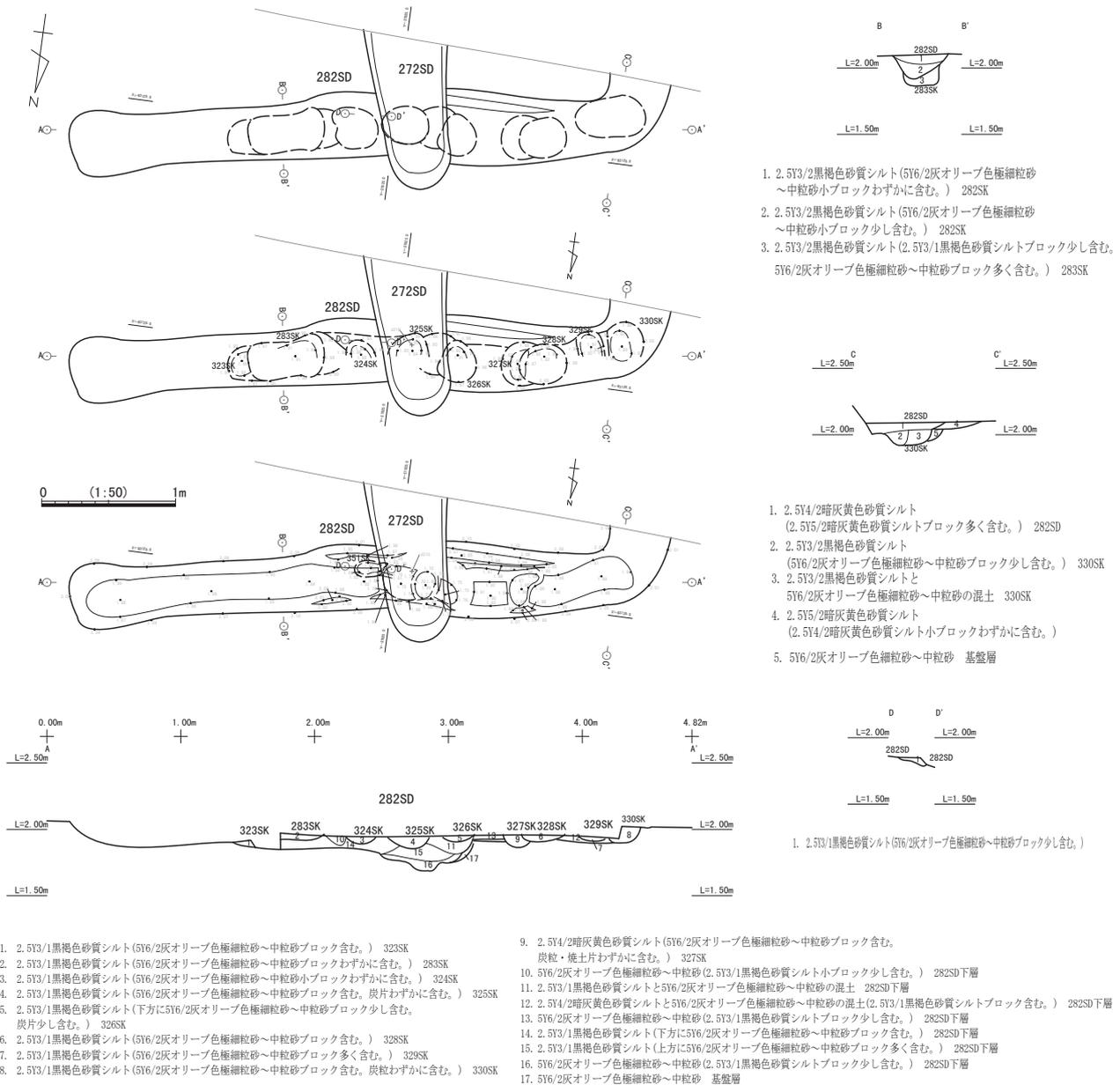
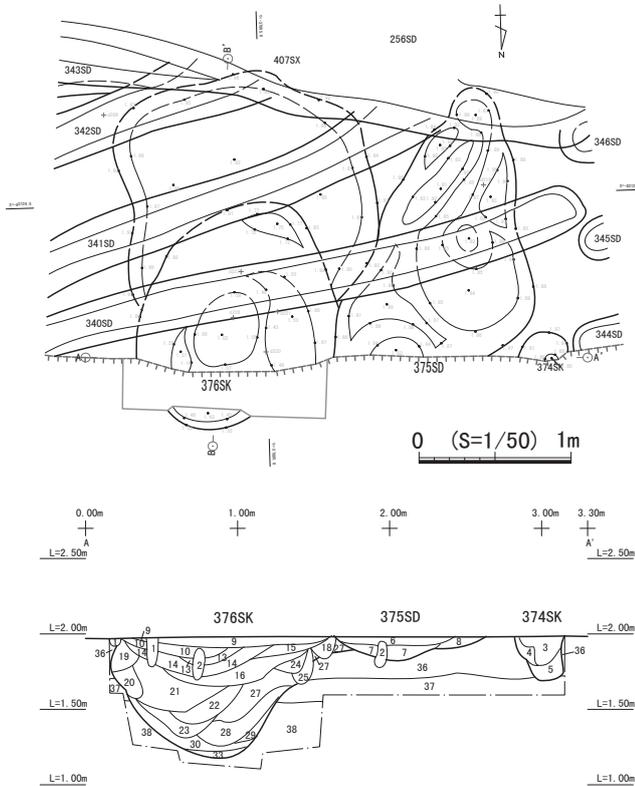


図 50 布掘り掘立柱建物跡 19Bb 区 282SD 遺構図

れていたが、その下位で遺構の底部が残存していた。検出面では南北に長径約1.5m、東西に短径約1.4m、深さ約1.0mを測る。断面形は楕円状で、2～3回の掘り返しによって形成されたこと堆積状況からわかる。断面



1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロックわずかに含む。炭片わずかに含む。) 生物擾乱か
 2. 5Y6/1灰色砂質シルト(5Y7/1灰白色中粒砂小ブロック含む。炭片わずかに含む。しまりやや弱い。) 生物擾乱か
 3. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。炭片わずかに含む。)
 4. 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂(2.5Y5/2暗灰色砂質シルトブロック含む。)
 5. 7.5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂(5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトブロック多く含む。)
 - 375SD
 6. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(下方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロック含む。炭片わずかに含む。)
 7. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂の混土(炭粒少し含む。)
 8. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂の混土
 - 376SK
 9. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
 10. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロック含む。炭粒わずかに含む。)
 11. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。炭片・焼土粒わずかに含む。)
 12. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。炭片わずかに含む。)
 13. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(中央に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。)
 14. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂の混土(2.5Y3/2黒褐色砂質シルトブロック少し含む。)
 15. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロックわずかに含む。左方に炭・焼土粒わずかに含む。)
 16. 10Y2/1黒色粘土質シルト(2.5Y4/2暗灰色砂質シルト小ブロック含む。5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロック含む。炭・焼土粒多く含む。)
 17. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂の混土(2.5Y3/2黒褐色粘土質シルト小ブロック含む。炭・焼土粒わずかに含む。)
 18. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(下方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。)
 19. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(左方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。炭粒わずかに含む。)
 20. 5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～細粒砂ブロック 崩落土か
 21. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。下方に炭・焼土片少し含む。)
 22. 2.5Y3/2黒褐色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。炭片わずかに含む。)
 23. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト(5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルト部分的に層状に含む。7.5Y6/1灰色ブロック多く含む。)
 24. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(右方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロック少し含む。炭・焼土粒わずかに含む。)
 25. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。炭・焼土粒わずかに含む。)
 26. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロックわずかに含む。5Y5/4にぶい赤褐色(焼土)を含む。)
 27. 2.5Y4/2暗灰色砂質シルト(左方に2.5Y5/2暗灰色砂質シルトブロック含む。右方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。炭片わずかに含む。)
 28. 2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂の混土(2.5Y4/2暗灰色砂質シルトブロック含む。炭片少し含む。)
 29. 2.5Y6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂(2.5Y4/2暗灰色砂質シルト小ブロック少し含む。しまりやや弱い。)
 30. 5Y6/1灰色細粒砂(2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロックわずかに含む。しまりやや弱い。)
 31. 2.5Y6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂(2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトブロック層外縁から遺構底にかけて層状に少し含む。)
 32. 7.5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂(2.5Y4/2暗灰色砂質シルトブロック少し含む。2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロックわずかに含む。)
 33. 10Y6/1灰色細粒砂～中粒砂(下方に10Y5/1灰色細粒砂～中粒砂に変化。炭片わずかに含む。しまりやや弱い。)
 34. 2.5Y6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂(2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロック層外縁から遺構底にかけて層状に含む。)
 - 407SK
 35. 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂(上方に2.5Y5/2暗灰色砂質シルトブロック少し含む。)
- 基礎層
36. 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂
37. 7.5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂(しまりやや弱い。)
38. 2.5Y6/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂(しまりやや弱い。)

図51 19Bb区376SK遺構図

A-A'の上位にある16層は極めて濃厚な炭化物の集積、また中位の26層は赤色焼土粒の集積がそれぞれみられる。それぞれを含む上層サンプル(16・21層)と下層サンプル(22・26・27層)を採取し、土壌洗別と種実

同定を行ったところ、前者からモモ・スモモ類の炭化核、後者からイネの炭化粉殻がそれぞれ目立って検出された(第3章第2節(2)参照)。このことから堆積時の環境が一様でないとともに、それぞれ異なる特定の植物を含む有機物の廃棄がなされたものと推測される。モモ核の集中は祭祀の痕跡とも考えられる。

これに対して土器などの遺物は、土師器や須恵器の小片のみで形状の判明するものはほとんどなく、かろうじて奈良時代と推測されるものである。ただしその小片中に製塩土器の杯部E-846が含まれている点は注目される。その形状から知多式第4類に相当すると考えられ、祭祀後に廃棄された可能性がある。

なお一色城跡では他に中世区画溝256SD、時期不明土坑386SKなどから出土しており、19Ba区東部からBb区に分布している。特に集

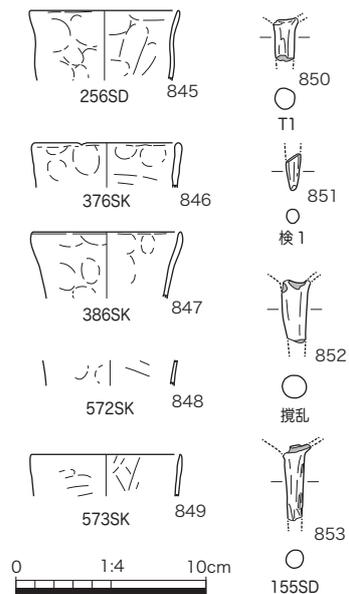
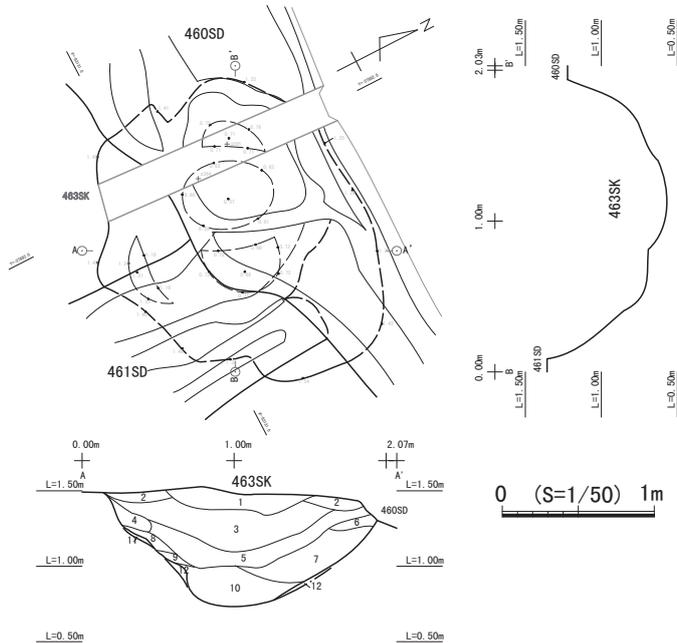


図52 一色城跡出土製塩土器遺物図

中地点があるわけではないが、竪穴建物跡の埋土ではなくそこから外れている点は注意しておきたい。また、稲沢市域の古代集落遺跡で製塩土器が複数点確認されている事例は少なく、この集落の外部との物流が比較的頻繁だったことを示している。

19Cb区 463SK 遺跡東半部でも南東隅に位置し、検2面で検出された土坑である。376SKとともに井戸の可能性はあるが構造物は出土していない。463SKの真上には中世区画溝460SDと461SDがあり両者の交差点でもある。このことから当該遺構も中世の可能性はある。検出面では東西に長径約2.1m南北に短径約1.7mの不整な楕円形をしており。深さは約1.0mを測る。断面形は椀形で底部に一段凹んだ箇所がある(断面A-A'の10層)。この形状は曲物など井戸構造物を抜き取った跡のようにも見受けられる。埋土は基盤層由来のシルトブロックを多く含むので埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は土器器濃尾型長胴甕の底部E-539があり、奈良時代以降に構築されたことが判明するが、それ以上の時期は絞り込めていない。



1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト(2.5Y5/1黄灰色砂質シルトブロック少し含む。) 261SD
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルトと10Y7/2灰白色中粒砂の混土(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂小ブロックわずかに含む。) 埋戻土か
3. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト(下方に10YR4/1褐灰色砂質シルトに変化。灰片少し含む。しまりやや弱い。) 機能層か
4. 10Y7/2灰白色中粒砂(10YR4/1褐灰色砂質シルト小ブロック含む。) 流入土
5. 10YR4/1褐灰色粘土～極細粒砂(2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂を部分的に層状に含む。しまりやや弱い。) 機能層か
6. 10Y7/2灰白色中粒砂(2.5Y5/1黄灰色砂質シルト小ブロック含む。) 流入土
7. 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトと2.5Y5/1黄灰色砂質シルトの混土(右方に10GY6/1緑灰色中粒砂ブロック多く含む。しまりやや弱い。) 埋戻土
8. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(左方に10Y7/2灰白色中粒砂ブロック少し含む。) 埋戻土
9. 10GY6/1緑灰色中粒砂(2.5Y4/1黄灰色砂質シルト砂質シルトブロック少し含む。) 流入土
10. 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルトと2.5Y5/1黄灰色砂質シルトの混土(10GY6/1緑灰色中粒砂ブロック含む。しまりやや弱い。) 流入土
11. 10Y7/2灰白色中粒砂(しまり弱い) 基盤層
12. 10GY6/1緑灰色(しまり弱い) 基盤層

図53 19Cb区 463SK 遺構図

19Bb区 418SK・440SK 392SDの西側で検出された隅丸方形の土坑である(写真図版11)。418SKが上位、下位に440SKという重複関係にある。両者はほぼ同規模で440SKは長径約1.1m、深さ約0.3mを測る。出土遺物は、須恵器杯E-531・536、横瓶E-537で、NN-32号窯式期～O-10号窯式期の8世紀後半である。底部近くで錆びた棒状の鉄のような物体が出土したが、精査したところ木根への鉄分沈着であった。遺跡内で類似する遺構がないため性格不明である。

中世区画溝 縦横に延びる中世の溝群は屋敷地などを区画するために掘られたものと考えられ、遺跡全体で検出されている。遺跡西半部では東西溝20A区176SD(181SD)や南北溝20B区088SD(183SD)があり、両者は20A区西部で交差している。176SDはその交差点から西方で、一方088SDは交差点北側で一色城の溝056SDと重複し、それによって壊されていることが明らかとなっている。そして176SD(181SD)は、やや南へ振れながら1206グリッド付近で調査区南壁から外

へ外れていく。当該箇所では溝埋土(図9の79～82層)の上位は近代水田耕作土(18・22・30層)によって削平されているが、さらに東方では一色城築城時の整地層(65層)の下位で176SD(181SD)の上層に当たる224SDや270SDの断面が確認されている。これらのことから一色城築城時にはこれら区画溝はほぼ埋没しており、それらを削平しながら全体に嵩上げする基礎工事を行ったと考えられる。176SDなどから出土する遺物は山茶碗で東濃型第7～8型式に相当し、13世紀後半～14世紀前半とみられる。これは遺跡東半部の状況と同様であるが、山茶碗E-153のように尾張型第6型式とみられる体部立ち上がりの丸みの特徴のものも含まれていることから、区画溝群の中でも比較的早い段階で構築されていた可能性がある。

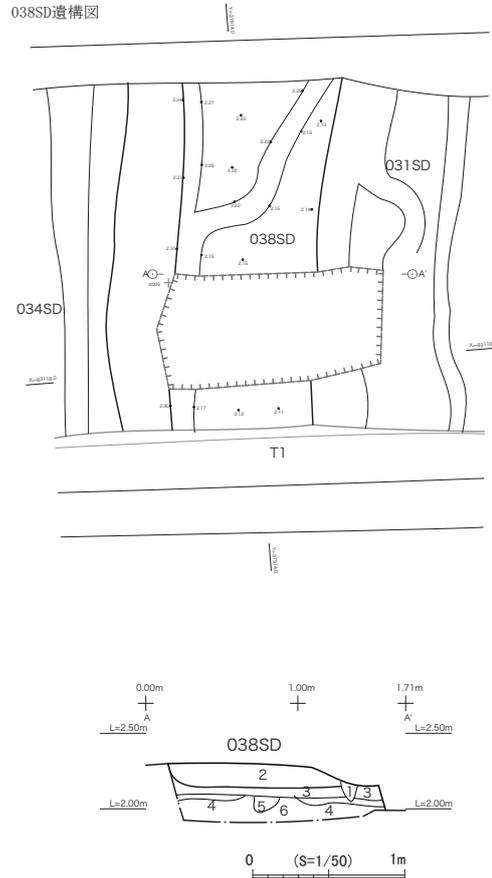
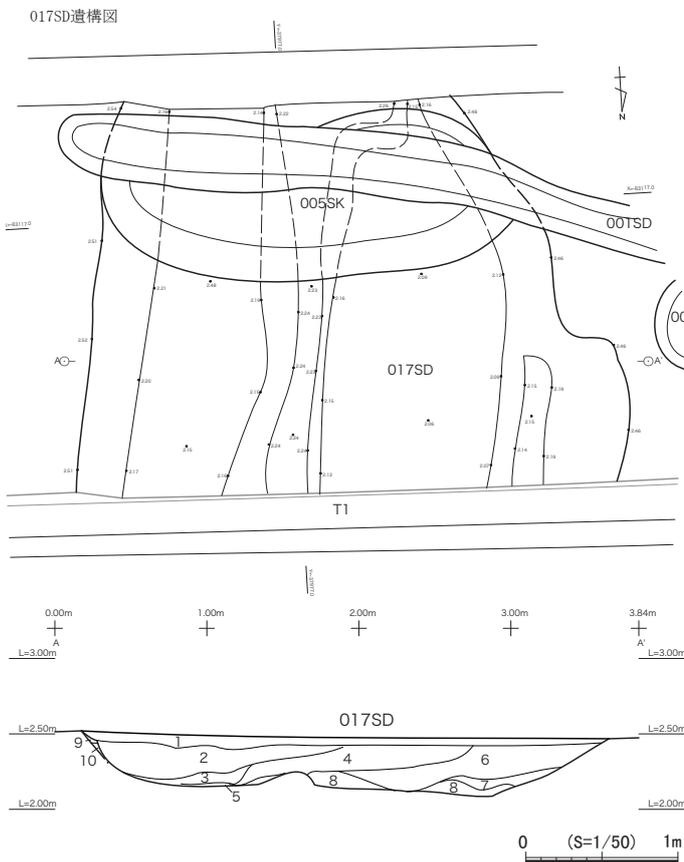
一方、遺跡西半部に対して遺跡東半部では、19A区で西から南北溝が①017SD、②045SD・044SD・052SD、③035SD・031SD・038SD・034SDの3群で分布し、それぞれの南側では①19Ba区520SD、②19Ba区

530SD・533SD・571SD、③ 19Bb 区 267SD・268SD (19Bb 区は削平を受けており、全ての遺構が第2面で検出されている) が対応関係にある。そして②は東西溝 532SD など、③は東西溝 256SD と交差・合流している。(ただし③の合流点は 268SD のみで確認し、267SD は水道管の下となっていた)。ただし、2か所ある交差点のうちさらに南側へ南北溝が延びている可能性があるのは、東側の③で 267SD の延長となる 196SD が 19Cb 区で検出されているのみである。調査地点が微高地の南端に近いことから、中世段階においても集落の端であった可能性は高く、区画溝群の末端が検出されたものと考えられる。

19A 区 017SD 19A 区西部の検1面で検出された南北溝である。近世の溝 001SD や土坑 002SK と重複し

先行する時期である。南延長は 19Ba 区 520SD であるが、基盤層が砂層であるため形状は不明瞭でその先にある江戸時代の溝 494SD との関係も明らかではない。東西幅約 3.5m の全幅に対してほぼ中央に土手状の高まりがあるので2本の溝のようにみえるが、断面 A-A' によれば東半部が先行してそれが埋没した後に西方へずれるような位置で再掘削された結果であることがわかる。出土遺物は山茶碗類の小皿 E-454 と山茶碗 E-455 でいずれも東濃型第 8～9 型式とみられ、概ね 14 世紀代に機能し埋没したと考えられる。

19A 区 038SD 19A 区東部の検1面で検出された南北溝である。東側に 034SD、西側に 031SD が並列し、031SD とは重複関係があつて、それに先行する時期である。南側延長には 19Bb 区 274SD (031SD の延



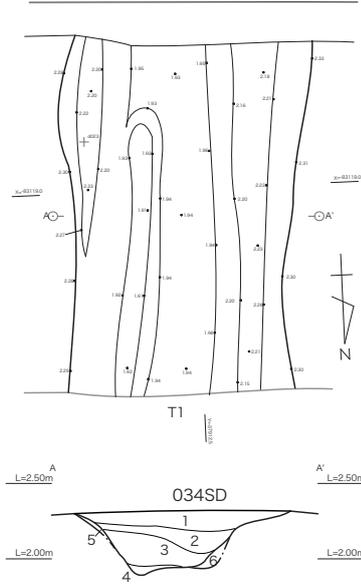
1. 2. 5Y5/1暗灰黄色砂質シルト(2. 5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂小ブロック少し含む。)
2. 2. 5Y6/2灰黄色砂質シルト(2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック含む。)
3. 2. 5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂(2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック少し含む。炭片わずかに含む。しまりやや弱い。)
4. 2. 5Y6/2灰黄色砂質シルト(2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック少し含む。)
5. 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトと2. 5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂の混土
6. 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルト(2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック含む。)
7. 2. 5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂(2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック少し含む。しまりやや弱い。)
8. 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルト(2. 5Y6/2黄灰色細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。)
9. 2. 5Y6/2灰黄色粘土質シルト 別遺構か
10. 2. 5Y6/2灰黄色砂質シルト 別遺構か

1. 5Y7/1灰白色細粒砂～中粒砂(2. 5Y6/3黄褐色粘土質シルトブロックわずかに含む。) 噴砂
2. 2. 5Y6/3にふい黄色砂質シルト 038SD
3. 2. 5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト(5Y6/2灰オリブ細粒砂ブロック少し含む。炭粒含む。) 検2包含層か
4. 2. 5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト(5Y6/2灰オリブ細粒砂ブロック含む。炭粒含む。) 2面遺構か
5. 5Y6/2灰オリブ色砂質シルト(2. 5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトブロック含む) 2面遺構か
6. 5Y6/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂(しまりやや弱い。) 基盤層

図 54 19A 区 017SD・038SD 遺構図

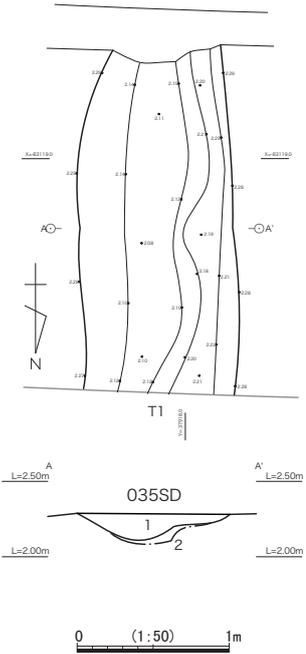
一色城跡

034SD遺構図



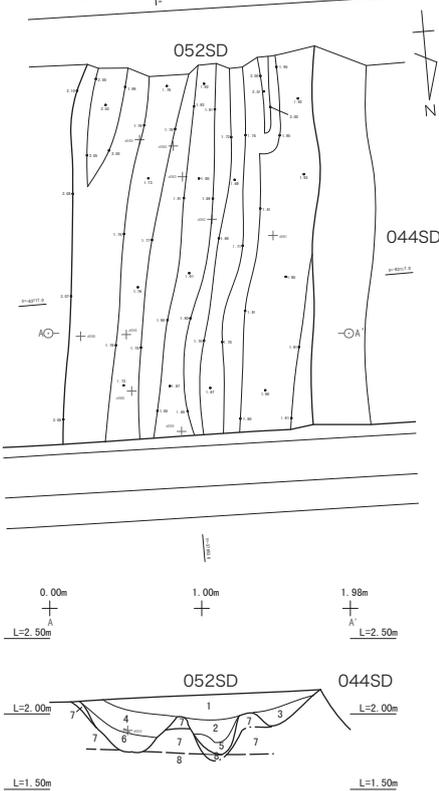
1. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト
2. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック含む。)
3. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
4. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色細粒砂ブロック多く含む。)
5. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト(5Y6/2灰オリーブ細粒砂ブロックわずかに含む。炭粒含む。) 検2包含層か
6. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト(5Y6/2灰オリーブ細粒砂ブロック少し含む。炭粒含む。) 検2包含層か

035SD遺構図



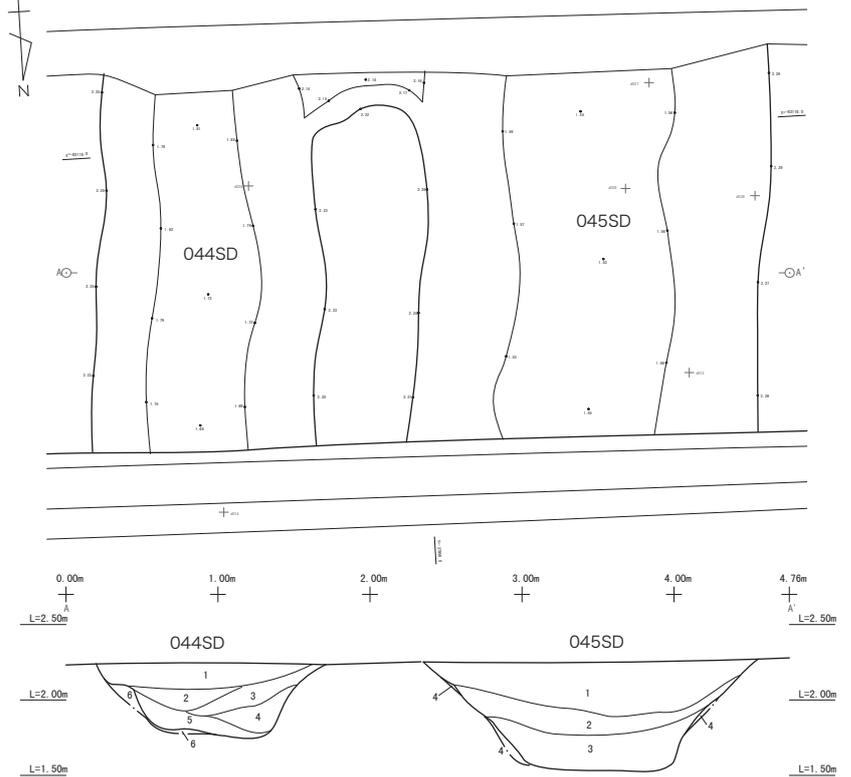
1. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック少し含む。)
2. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～細粒砂の斑土

052SD遺構図



1. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック少し含む。)
2. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック多く含む。)
3. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
(下方に2.5Y4/2暗黄灰色粘土質シルトブロック少し含む。)
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(右方に2.5Y5/3黄褐色砂質シルトに変化。)
5. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト
(上方に2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。炭片わずかに含む。粘性やや強い。)
6. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
(下方に2.5Y4/2黄灰色粘土質シルトに変化。粘性やや強い。)
7. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 検2包含層
8. 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂
(上方に2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。) 基盤層

044SD・045SD遺構図



- 044SD
1. 2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト
(2.5Y6/2灰黄色砂質シルトブロック水平に帯状に含む。)
2. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルト少し含む。)
3. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(2.5Y6/2灰黄色砂質シルト少し含む。右方に2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
4. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト
(2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック含む。)
5. 2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト
(2.5Y6/2灰黄色粘土質シルトブロック含む。)
6. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトブロック含む。粘性やや強い。)

- 045SD
1. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルト
(2.5Y5/3黄褐色砂質シルトブロック少し含む。2.5Y7/2灰黄色細粒砂～中粒砂多く含む。)
2. 2.5Y7/2灰黄色細粒砂～中粒砂
(2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルトブロック含む。2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。)
3. 5Y5/1灰色粘土質シルト(下方に5Y6/1灰色粘土質シルトに変化。上方に炭片少し含む。粘性強い。)
4. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 検2包含層

図55 19A区 034SD・035SD・044SD・045SD・052SD遺構図

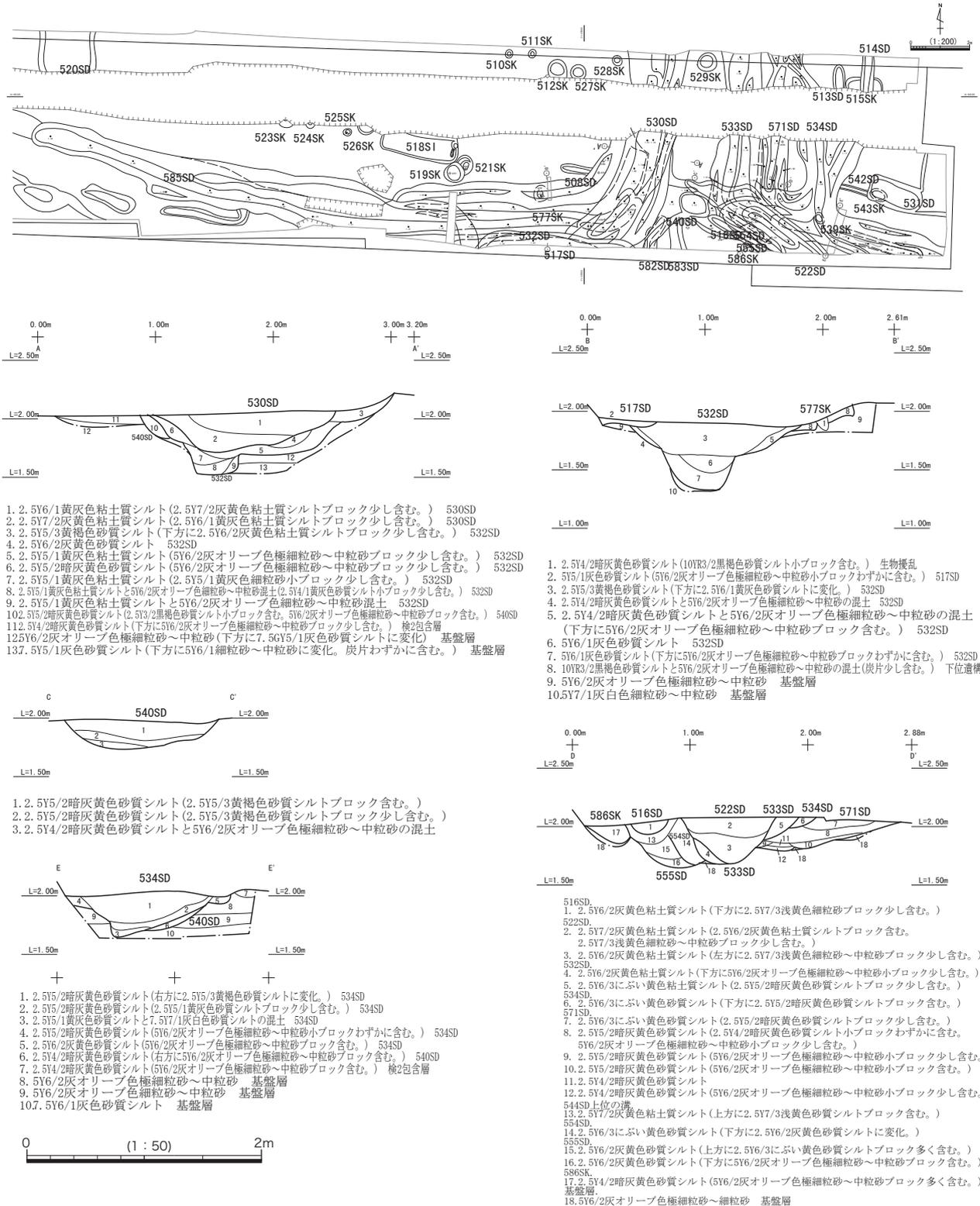


図56 19Ba 区 522SD・530SD・534SD・540SD 遺構図

長は267SD)があるが用水路の攪乱からさらに南側では検出できておらず不明となっている。断面は皿状で他の溝に比べて掘り込みが浅い。031SDからは須恵器杯E-457や東濃型山茶碗E-458が出土しており、後者が第9型式であるから、038SDはそれより古い時期と考えられる。

19A区034SD・035SD 19A区東部の検1面で検出された南北溝である。034SDは038SDの東側に位置し、他の溝との重複関係がない。幅約1.6m、深さ約0.4mの断面が逆台形をしており、当初の規模(3層まで)に対して掘り返しの層(1・2層)は幅広となっている。その南延長は19Bb区268SD・331SDで掘り返しの際に位置が西へずれたことで2条の溝の重複のようにになっている。一方035SDは031SD・038SDの西側に位置し、これも他の溝と重複関係がない。幅約1.1m、深さ約0.2mで比較的浅くて不整形な掘り込みが特徴である。出土遺物は034SDに須恵器無台杯E-461があり8世紀前半～半ばであるが、035SDからは東濃型山茶碗E-462がある。第8～9型式とみられ、この溝が概ね14世紀代に機能して埋没したと考えられる。

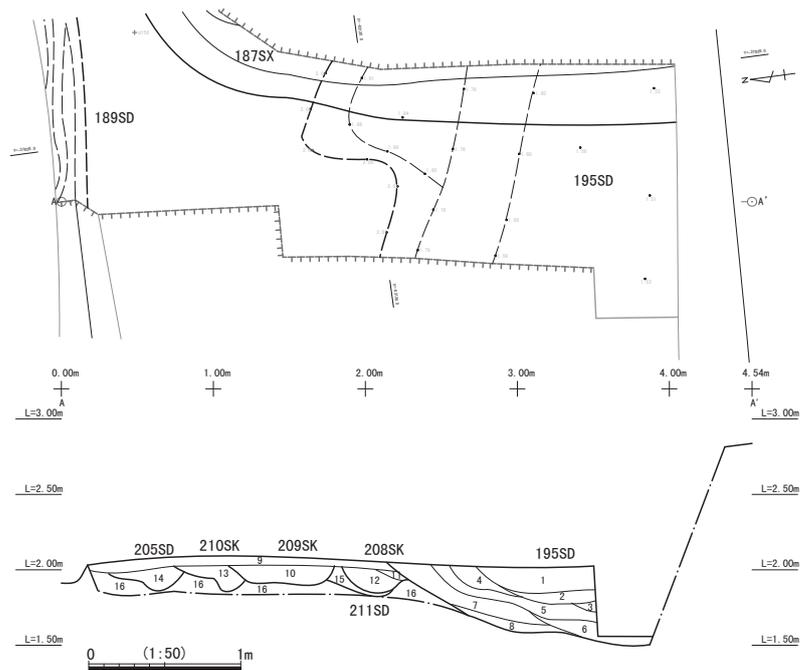
19A区044SD・045SD 19A区西部の第1面で検出された南北溝である(図55)。検出状態では両者に重複関係はないが、第2章第1節で述べたように調査区北壁における断面観察では、中世整地層の上から掘り込まれた044SD埋没後、さらに上位の整地層が入り、その上から045SDが掘り込まれていることを確認した。また、044SDの南側延長には19Ba区533SDがあり、東西溝522SDの下位にあることが確認された。

044SDは検出面での幅約1.5m、深さ約0.6mを測り、断面は逆台形となっている。断面A-A'によれば3回以上の掘り返しがあったと推測され、1・2層は白色系のシルト堆積で極めて緩い水流に伴うものとみられる。これらの形状や堆積状況は19A区034SDに似ている。出土遺物は少なく、東濃型山茶碗E-357があり、比較的底径が大きいタイプで第7～8型式とみられ

13世紀後半代にさかのぼる可能性がある。

045SDは検出面での幅約2.2m、深さ0.8mを測り、断面は逆台形となっている。044SDと同様に2回の掘り返しを伴う堆積であるが、全体に対して掘り返しており、堆積も水平である。当該溝の南側延長は19Ba区530SDで東西溝との重複関係においても最上位にあることが判明している。また、出土遺物では遺跡東半部で少数しかない手捏ね土師器小皿E-361・364やロクロ成形土師器小皿E-362・363があり、15世紀後半～16世紀前半とみられる。このことから、一色城と同時期に機能していた数少ない溝の1つに位置付けられる。

19A区052SD 19A区西部の検1面で検出された南北溝である(図55)。西隣に044SDが平行し、わずかながら044SD→052SDの重複関係がある。検出面での幅約1.6m、深さ0.4mを測るが、最深部は3か所に分かれており、それらの上層が共通する形状となってい



1. 5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。炭片少し含む。) 195SD
2. 5Y6/1灰色砂質シルト(5Y7/1灰白色極細粒砂を部分的に薄層状に含む。炭片少し含む。) 195SD
3. 5Y7/1灰白色極細粒砂～細粒砂(2.5Y6/1灰色砂質シルト小ブロック少し含む。) 195SD
4. 5Y7/1灰白色砂質シルトと5Y5/1灰色砂質シルトの混土 195SD
5. 5Y5/1灰色砂質シルト(5Y7/1灰白色極細粒砂を部分的に薄層状に含む。炭片わずかに含む。) 195SD
6. 5Y4/1灰色砂質シルト(下方に5Y4/1灰色粘土質シルトに変化。炭片わずかに含む。下方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック含む。) 195SD
7. 5Y5/1灰色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。) 195SD
8. 5Y4/1灰色砂質シルト(右方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。) 195SD
9. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(下方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロックわずかに含む。) 検2包含層
10. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック多く含む。) 209SK
11. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。下方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック少し含む。) 208SK
12. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。右方に5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック含む。) 208SK
13. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂ブロック多く含む。) 210SK
14. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂の混土 205SD
15. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂の混土 211SD
16. 5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂 基盤層

図57 19Cb区O95SD遺構図

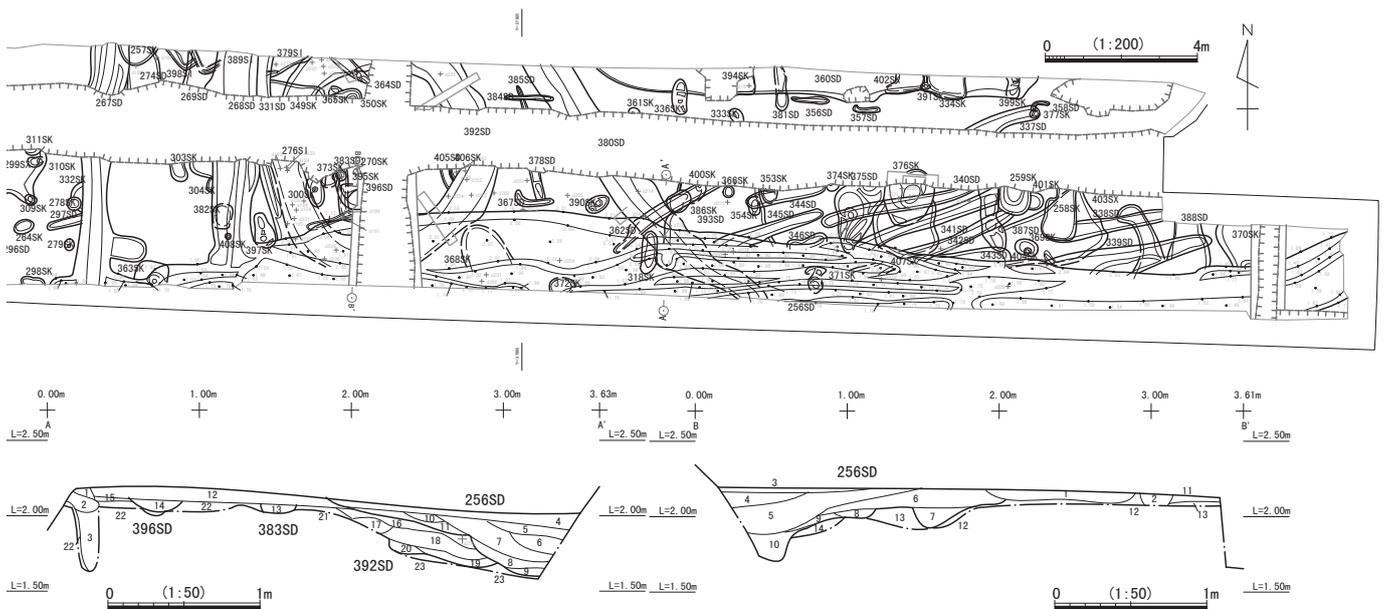
る。そのため最深部相互の先後関係は明らかではないが、複数小溝の掘り返しによって生じたものと推測される。出土遺物は東側の最深部(4・6層)に多いが、須恵器平瓶E-371や杯E-372、甕E-373は045SDによって掘り起こされた古墳時代後期の溝128SDに関わるものであろう。一方山茶碗類E-374～385は器高が5cm以上あることから東濃型第8型式を主体とするであろう。また古瀬戸折縁深皿は中期様式Ⅲ期に相当し、14世紀第2四半期頃である。このことから溝が機能し埋没したのは主に14世紀前半と推測される。

19A区046SU 052SDの東側で検出された中世陶器の集中遺構である。古墳時代後期の溝128SDを覆う黒褐色シルトの上位にあるが、そこから上は江戸時代以降の水田耕作によって削平されているため中世整地層あるいは溝などとの関係は不明である。出土遺物は完形品は

なかったが比較的大きな破片であることが特徴である(写真図版2)常滑産甕E-367、古瀬戸瓶子E-368、東濃型山茶碗第8型式E-370や金床石の可能性のある被熱痕のある礫S-5がある。S-5に関して、530SDからフイゴの羽口E-563が出土している。

19Ba区522SD・530SD・532SD 19Ba区東部の検2面で検出された溝群の一部である。最上位で検出されたのは532SDで、045SDから南西方向へ湾曲しながら延びている。ここからはロクロ成形土師器小皿E-566が出土しており、16世紀前半にかけて機能していたことになる。522SDは532SDの湾曲部付近から「人」字形に南東方向に延びる溝で、これも重複関係で最上位にある。530SDと522SDは重複関係にないことから、両者は同時に存在していた可能性が高い。

一方これらに先行するのが東西溝532SD(一部



1. 515/1灰色砂質シルト(515/2灰オリブ色ブロック少し含む。516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。) 覆土か
2. 515/1灰色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 覆土か
3. 515/1灰色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。) 覆土か
4. 2.515/4黄褐色砂質シルト(右方516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。) 256SD
5. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。) 256SD
6. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(2.513/1砂質シルトブロックわずかに含む。516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 256SD
7. 2.515/3黄褐色砂質シルト(2.515/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。) 256SD
8. 2.515/3黄褐色砂質シルト(右方に2.515/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。) 256SD
9. 516/2灰オリブ色極細粒砂～細粒砂(2.515/2砂質シルトブロック少し含む。) 256SD
10. 2.515/3黄褐色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 256SD
11. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(下方に2.514/2砂質シルトブロック少し含む。) 256SD
12. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(下方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 27055か
13. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。) 383SD
14. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(下方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 396SD
15. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(下方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。)
16. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(下方に2.513/2黒褐色砂質シルトブロック少し含む。516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロックわずかに含む。) 392SD
17. 516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂(2.515/2暗灰黄色砂質シルトブロックわずかに含む。)
18. 2.513/2黒褐色砂質シルト(2.514/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。) 392SD
19. 2.513/2黒褐色砂質シルトと2.514/2暗灰黄色砂質シルトの混土(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。) 392SD
20. 2.513/2黒褐色砂質シルト(2.514/2暗灰黄色砂質シルトブロック含む。左方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック多く含む。) 392SD
21. 516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂(2.513/2砂質シルトブロックわずかに含む。) 基礎層か
22. 516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂 基礎層
23. 2.517/1明オリブ灰色細粒砂～中粒砂(しまりやや弱い。) 基礎層

1. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(炭粒少し含む。) 検1包含層
2. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(下方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。炭粒少し含む。) 検1包含層
3. 2.515/4黄褐色砂質シルト 256SD
4. 2.515/3黄褐色砂質シルト(2.516/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。) 256SD
5. 2.515/3黄褐色砂質シルト(下方に2.516/2暗灰黄色砂質シルトブロック少し含む。) 256SD
6. 2.515/3黄褐色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂小ブロック含む。炭粒少し含む。) 256SD
7. 2.515/3黄褐色砂質シルト(下方に2.515/2暗灰黄色砂質シルト小ブロック少し含む。) 256SD
8. 2.515/2暗灰黄色砂質シルト(下方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。) 256SD
9. 2.515/3黄褐色砂質シルト(517/2灰白色細粒砂～中粒砂小ブロック少し含む。炭粒わずかに含む。) 256SD
10. 515/3灰オリブ色砂質シルト(下方に7.517/1灰白色中粒砂ブロック少し含む。) 256SD
11. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(右方に516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック含む。) 380SD
12. 2.514/2暗灰黄色砂質シルト(516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂ブロック少し含む。炭粒含む。) 380SD
13. 516/2灰オリブ色極細粒砂～中粒砂 基礎層か
14. 7.517/1灰白色細粒砂～中粒砂(しまりやや弱い。) 基礎層

図58 19Bb区256SD遺構図

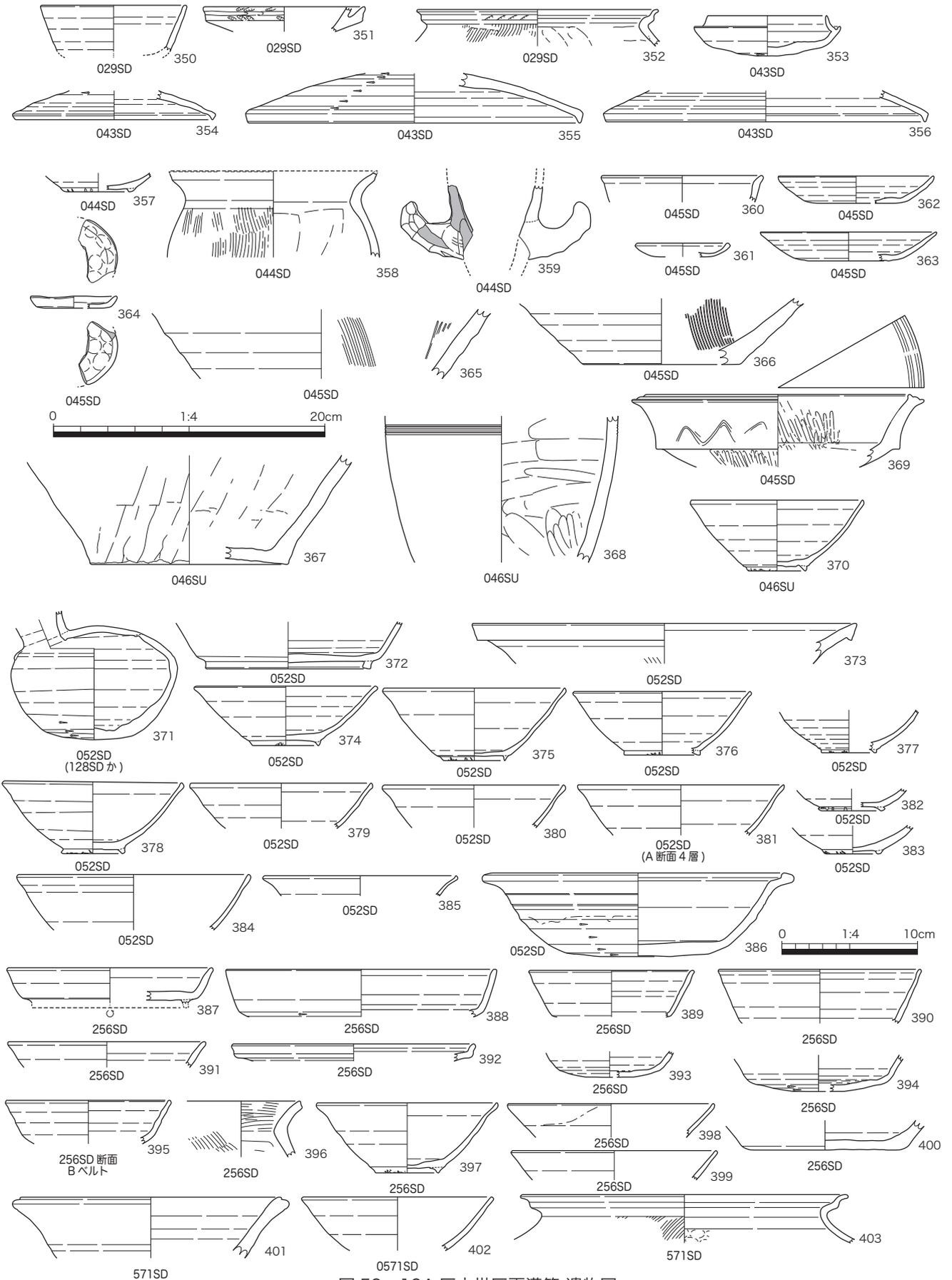


図59 19A区中世区画溝等遺物図

540SD)である。当該溝は江戸時代の溝494SDと重複する地点から東へやや南へ振れる方向で約10.2m延びて19Ba区南東隅から調査区外へ抜けている。検出面では幅約1.5m、深さ約0.7mの皿状の断面形であるが、最深部は底面の幅約0.4mの断面箱形となっており、当初の形状は幅が狭かったと推測される。それを底面幅約1.0m規模の幅広に改変した上層部分を経て最終的にほぼ同規模で530SDが掘り込まれている。

532SDと044SDの関係は522SDが掘り込まれているので不明である。一方052SDと532SDの関係は、用水路付近で2つに分岐した052SDのうち西側の溝は532SDに先行し、東側の溝は532SDと合流しており重複関係がない。この二者は先述した052SDの3つの最深部のうちの中央と東側のものにそれぞれ対応し

ており、14世紀前半の遺物が集中していた東側の最深部の延長が532SDと合流していることになる。よって532SDの機能時期も主に14世紀前半と推測される。

19Cb区 195SD 19Ba区532SDの東側延長に相当する。周囲は攪乱による滅失部分が多く、195SDはほぼ断面で確認されるにとどまる。しかしこれにより19Ba区532SD～19Cb区195SD～19Bb区256SDと東西溝は蛇行しながら延びていることが明らかとなる。195SDの検出面での幅は約2.0m以上、深さ約0.5mの皿状の断面形である。埋土は掘り返し後の堆積だけでなくラミナ堆積もみられるので水流のあった時期も含まれる。出土遺物はわずかだが瀬戸・美濃窯産陶器の播鉢E-486・487(図58)がある。口縁部のみであるが大窯期第1～2段階とみられ、16世紀前半である。出土層

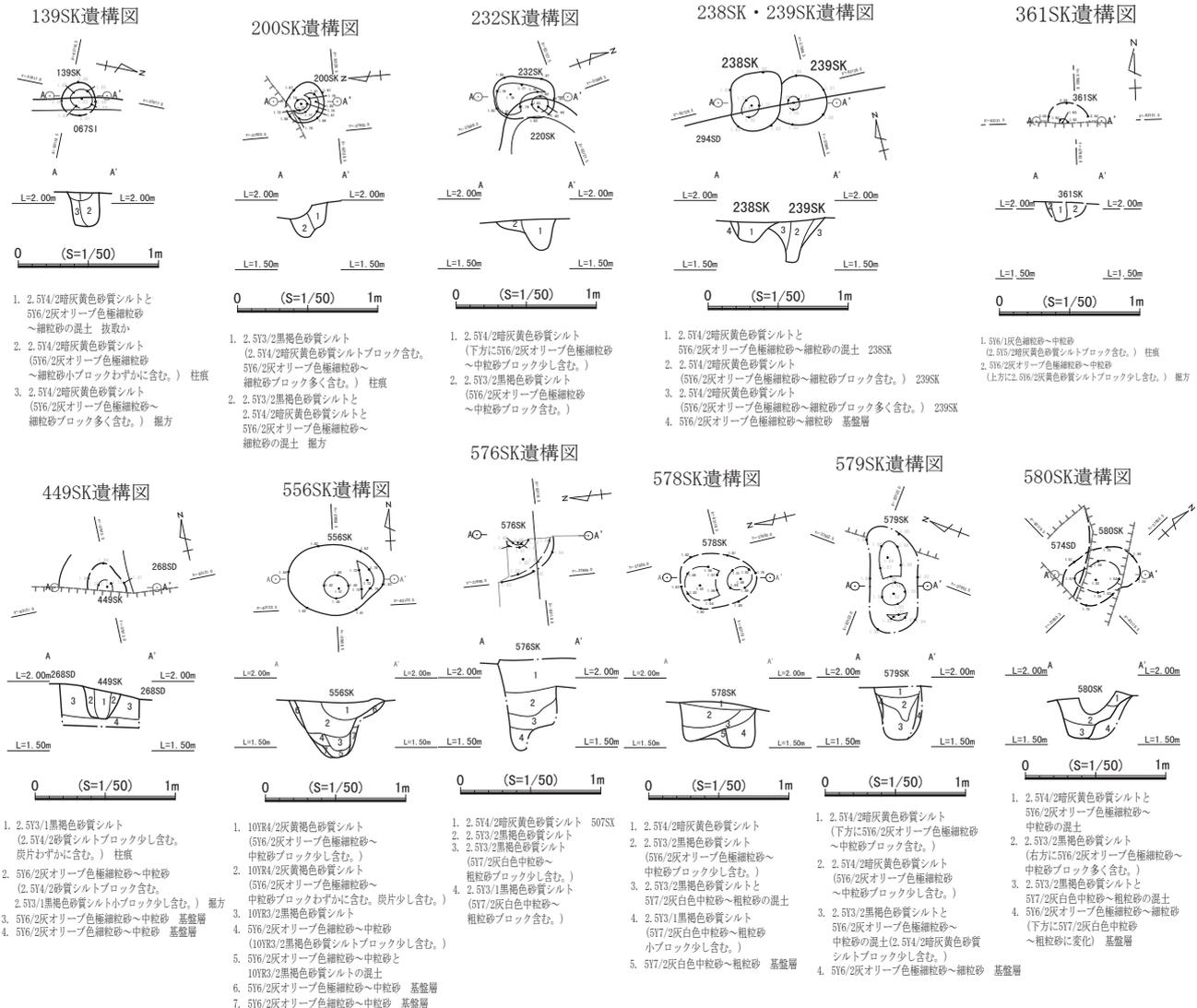


図60 19区139SK・200SK・232SK・238SK・239SK・361SK・449SK・576SK・579SK遺構図

一色城跡

位が不明であるが、西方の522SDに対応する層位があると考えられる。

19Bb区 256SD 19Bb区の調査区南壁に沿って検出された東西溝である(図57)。先述の195SDの位置から東北東へ約15mの地点で南壁から調査区内に入り、そこから約30m東へ直線で延びてそのまま調査区東壁から東方へ抜ける。西方の532SDから合計すると90m以上存在することになる。蛇行する理由は微高地南縁の形をトレースしているためであろう。断面A-A'では8世紀の周溝状遺構392SDの埋土を掘り返しており、出土遺物(図58)も須恵器・土師器が多い(E-387～

E-396)のもそれが関係しているとみられる。それ以外では東濃型山茶碗第8型式E-397や陶器鉢E-401などがあるが、戦国・江戸時代まで下るものはなかった。

柱穴と掘立柱建物跡 19A・Bb区では明確な柱穴は少なく、あってもそこから柱の並びが見出せたものはなかった。一方19Ba区東端の第2面では時計回りに580SK・578SK・556SK・579SKを柱穴とする1間×1間の掘立柱建物跡が想定される(図65)。平面規模は南北に約1.4m、東西に約1.1mである。柱穴はいずれも長径約0.5mで深さは0.3～0.5mを測る。埋土の状況から柱は抜き取られたうえで埋め戻されたものと考えら

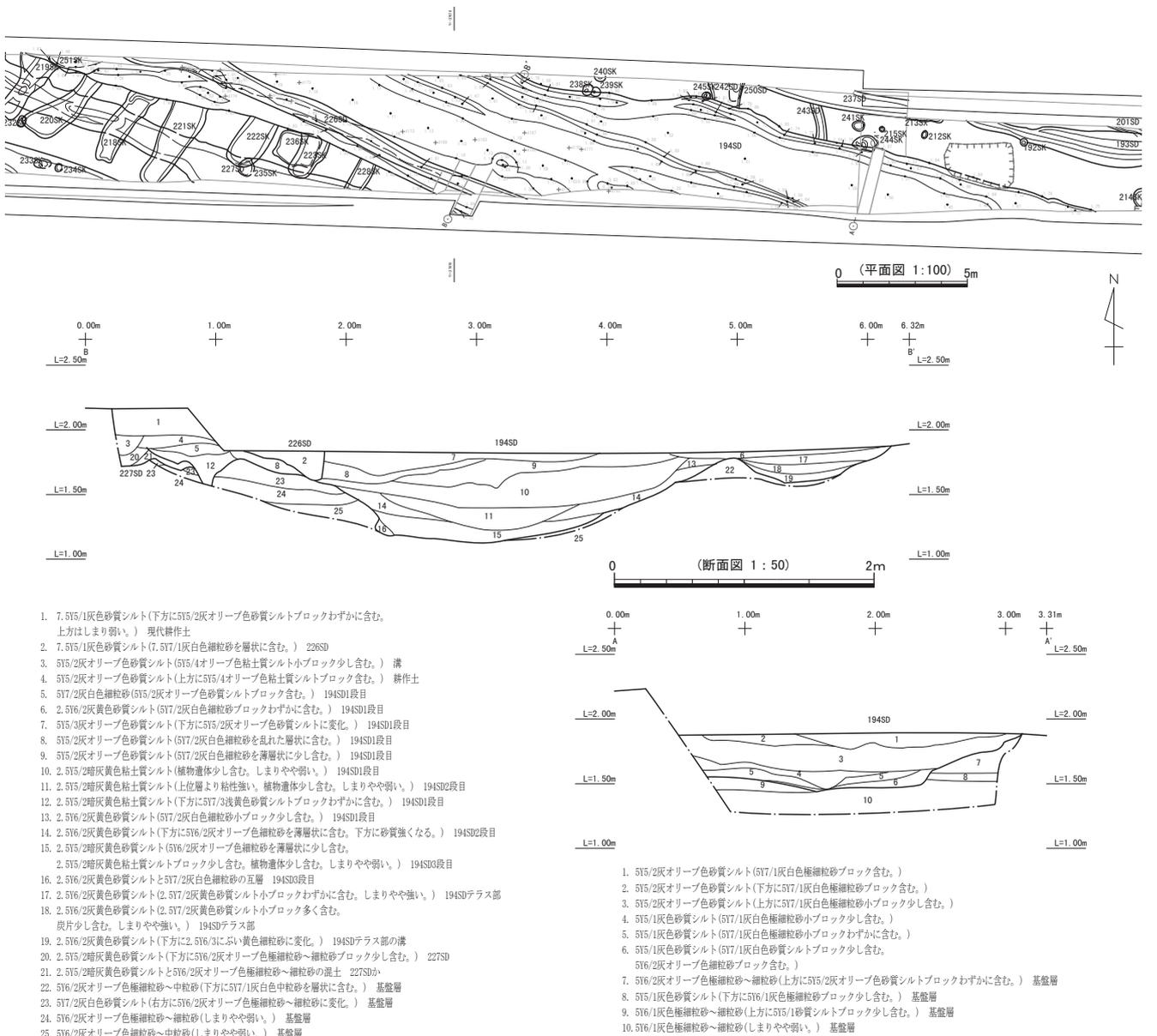


図61 19Ca区 194SD 遺構図

れる。これらの遺構が検出された 19Ba 区は基盤層まで削平されており、後述する古墳時代の包含層も残存していなかった。そのため時期は古墳時代～江戸時代のいずれの可能性もあるが、埋土に黒褐色シルトが多く含まれていることや、先行する時代を含めて遺物がほとんど出土しないことから、古墳時代前期と推定する。これは柱の並びが不明の 557SK・576SK も同様である。

村境の溝 193SD・194SD・494SD 19Ba 区西部から同区と 19Ca 区南壁から南東方向へ抜ける江戸時代の溝である。同一遺構に対して西から 494SD、194SD、193SD の順で遺構番号が付されている。これらの総検出長は約 77m である。

494SD は一色城東堀 464SD の北端部分で重複しており、464SD の上層部分と連続していたと考えられる。一方 494SD から先行する時期においては、464SD から東へ屈曲して延びる部分が断面でのみ確認しており（図 10 中右）、規模は不明ながら東方へ延びているものと思われる。それは、045SD・530SD から西方へ湾曲して 585SD へ至る最も新しい時期の中世区画溝へ連なる可能性があるが、494SD の掘り返しによって断ち切られているため不明である。

494SD はそのまま南東方向へ直進するため（194SD）、

先述の 530SD などそのまま踏襲したものでなく別の意図で構築されたものであることはあきらかである。そこで遺構の形状が最も明確な 194SD で規模を確認すると、検出面での幅約 5.8m、深さ約 1.1m の皿形の断面形を呈する。そしてその南北両脇に小溝状の凹みが付属しており、テラス状となっている。堆積は複数回の掘り返しがあったと考えられ、その度に溝幅が少しずつ狭くなったようである。埋土の最下層にはラミナ状（層状）堆積があり（図 60 断面 B-B' の 14・15 層）、それを掘り返した後の堆積とみられる 10・11 層には植物遺体が含まれているので、当初水流のあった状態から最終的には滞留した状態へと変遷したものと考えられる。

出土遺物は、大半が開削以前のもので須恵器や山茶碗が多い（図 62）。しかし近世陶器丸碗 E-428 が含まれており、17～18 世紀にも溝が機能していたと考えられる。木製漆碗の破片も出土しており、その放射性炭素年代測定の較正年代によれば 15 世紀末～17 世紀中頃という時期幅で製作年代が示されており、一色城東堀 464SD や西堀 230SD のものより一段階新しい時期と推測される。これらの遺物から、江戸時代になって南に片原一色村、北に西島村が成立した際に機能していたと考えられる。そして明治時代の地籍図との対照によって当

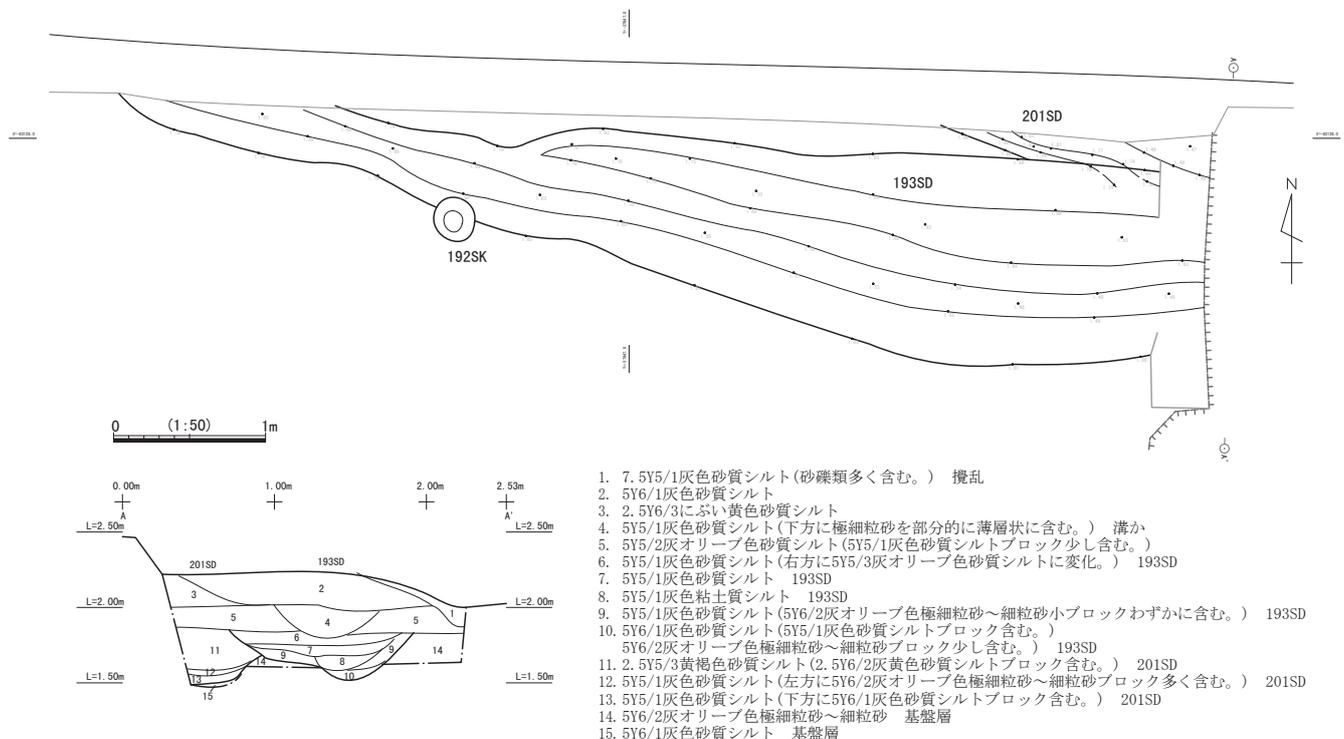


図 62 19Ca 区 193SD 遺構図

該溝の位置が村境に重なることも確認できる。堆積層の一部に水流の痕跡があることから、用水路をであるとともにも村境の表示も兼ねていたとも考えられる。

古墳時代前期の包含層 507SX 19Ba 区北西部の用水路北側から 19A 区西部で確認された古墳時代前期の土器が出土する包含層である。19A 区では同後期の溝

128SD によって掘り返されており、その南側では基盤層面が降下するにつれて厚さ 0.1～0.2m で残存していた。層中には廻間式後期段階の高杯や器台 E-578、S 字状口縁台付甕 E-580・581 から松河戸式の高杯 E-579 が含まれる。特に E-579 は完形に近く、廃棄からあまり攪拌を受けない地点だったことを示している。

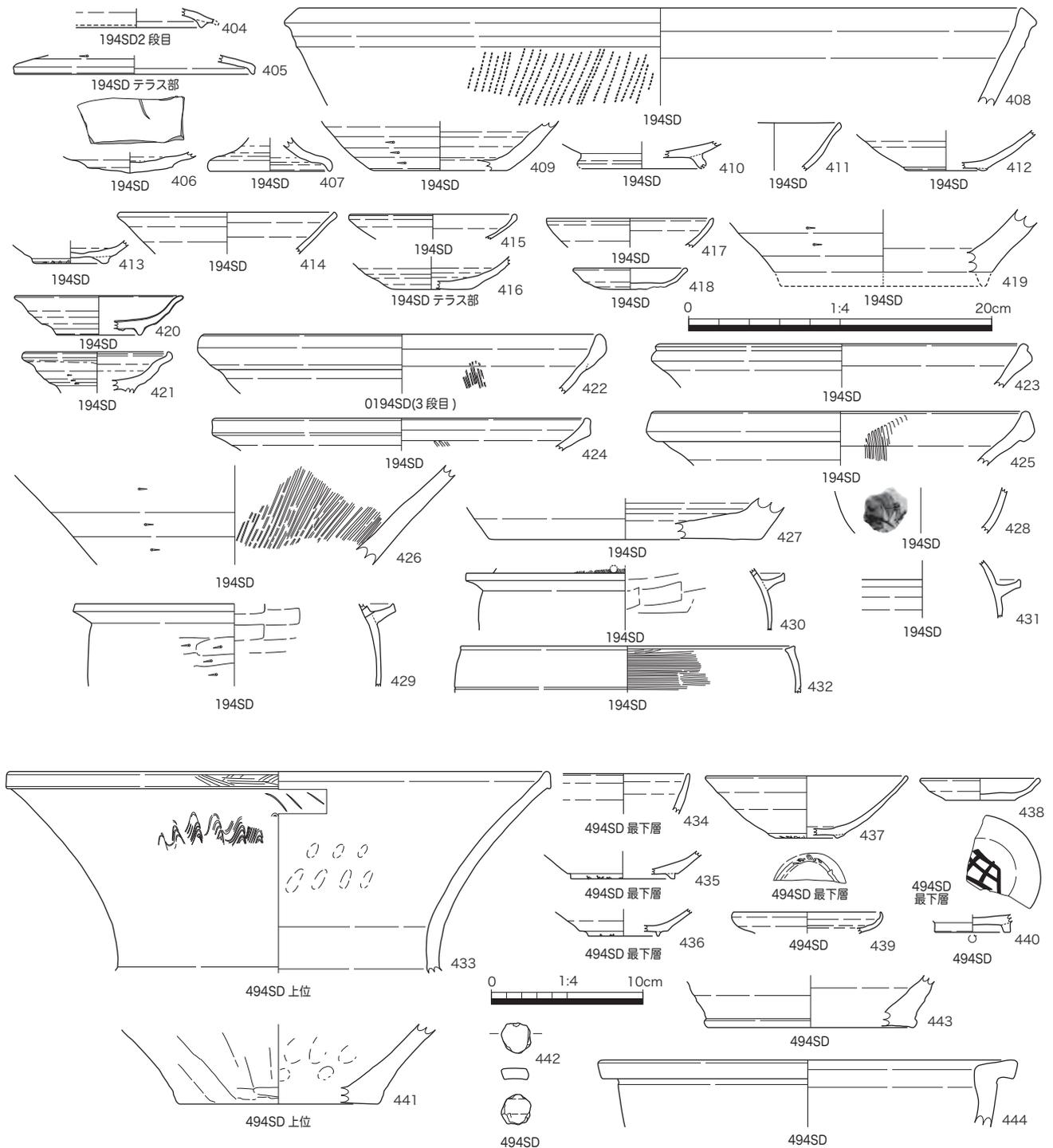


図 63 19Ba 区 194SD・494SD 遺物図

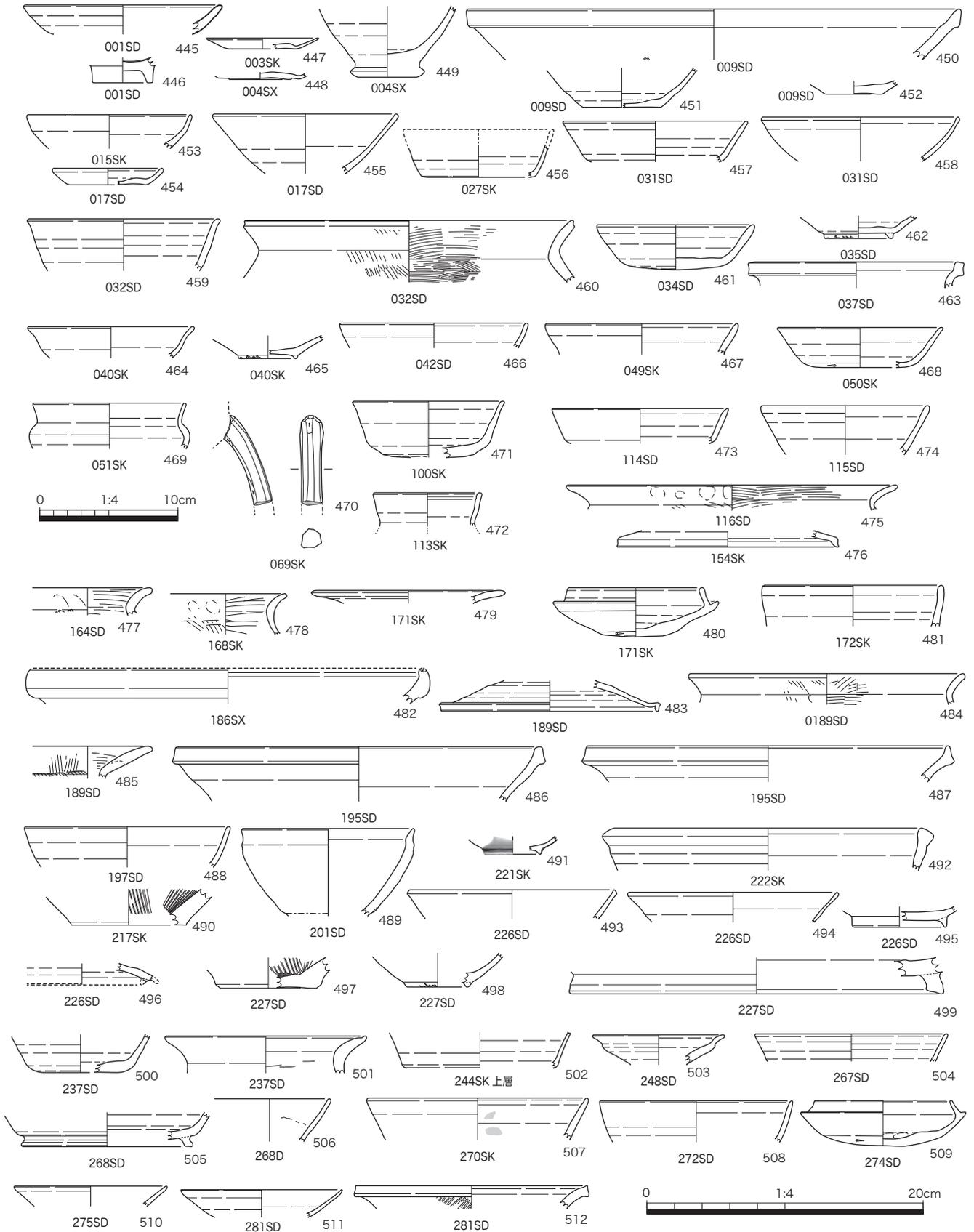


図64 19A～D区各遺構 遺物図

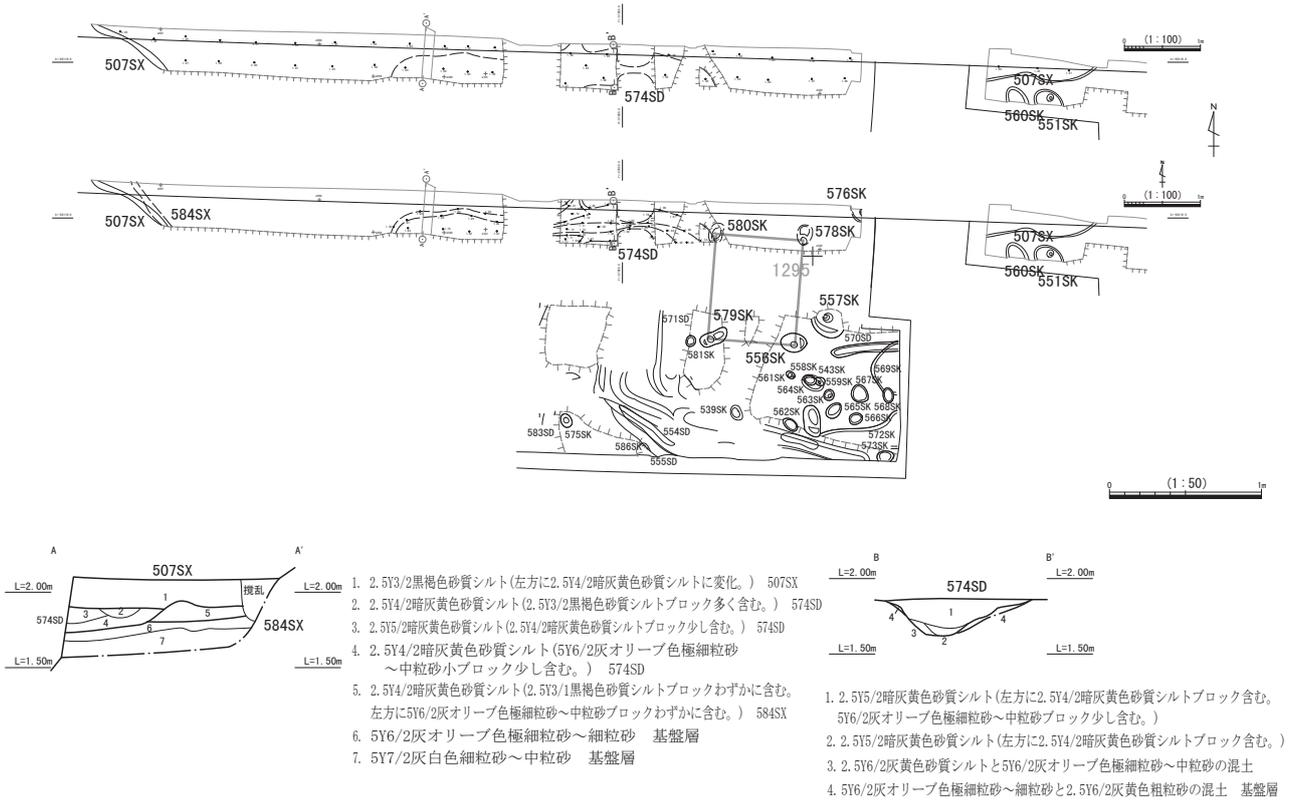


図66 19Ba区 507SX・574SD 遺構図

以上の土器群に対して19A区128SD周辺でも検2(第2面)で多数の高杯や器台、加飾壺E668～675、S字甕状口縁台付甕E-686～696が出土している。時期は弥生時代後期～古墳時代前期である。これらは特に集中地点が見られないが、当該地点から西方に古墳時代前期まで存在した河道(230SD下位)が位置することから、河川近くの集落縁辺に廃棄されたものと考えられる。なお、507SX下位で遺構検出を試みた(第3面)が顕著な遺構は見当たらなかった。

518SI 507SXの南側では基盤層上にて小型竪穴建物跡とみられる遺構がある。遺物がなく時期特定ができないが、古墳時代前期～古代と推定される。いずれの時期の集落からも外れた位置である点が特徴である。

包含層中の遺物 遺構外からも多数の遺物が出土している。検1面(検1)は中世整地層より上位での出土である(図69・70)。古墳時代～江戸時代まで時期幅がある。特記すべきものとして瀬戸・美濃窯産陶器香炉E-607や火鉢E-608がある。特に前者は19A区中部からの出土で、その付近は江戸時代の村絵図によれば元文元(1736)年まで恵日寺が所在したと記されている。同寺

は現在日光川沿いの微高地に移転しているが、その旧地に関わる遺物の可能性がある。また須恵器無台杯E-638は底部内面に「美濃」刻印が確認できる。稲沢市内では北丹波・東流遺跡で複数出土しているが、市域西部での出土は初めてである。このように須恵器には一定量美濃須衛窯産の製品が含まれている。

遺跡東半部では検1面と検2面の間主に古代の土器が出土する包含層(検2)がみられた(図72・73)お

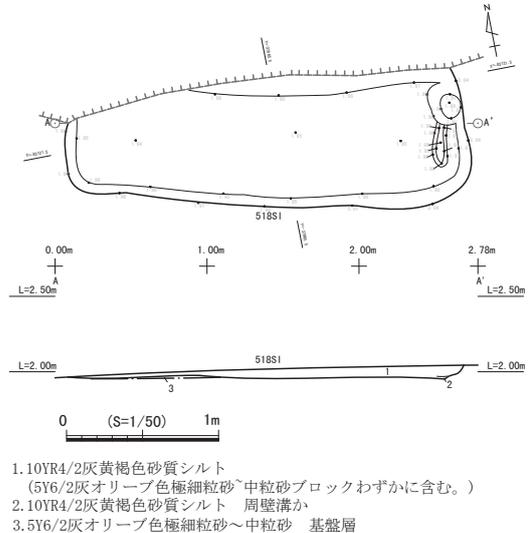


図67 19Ba区 518SI 遺構図

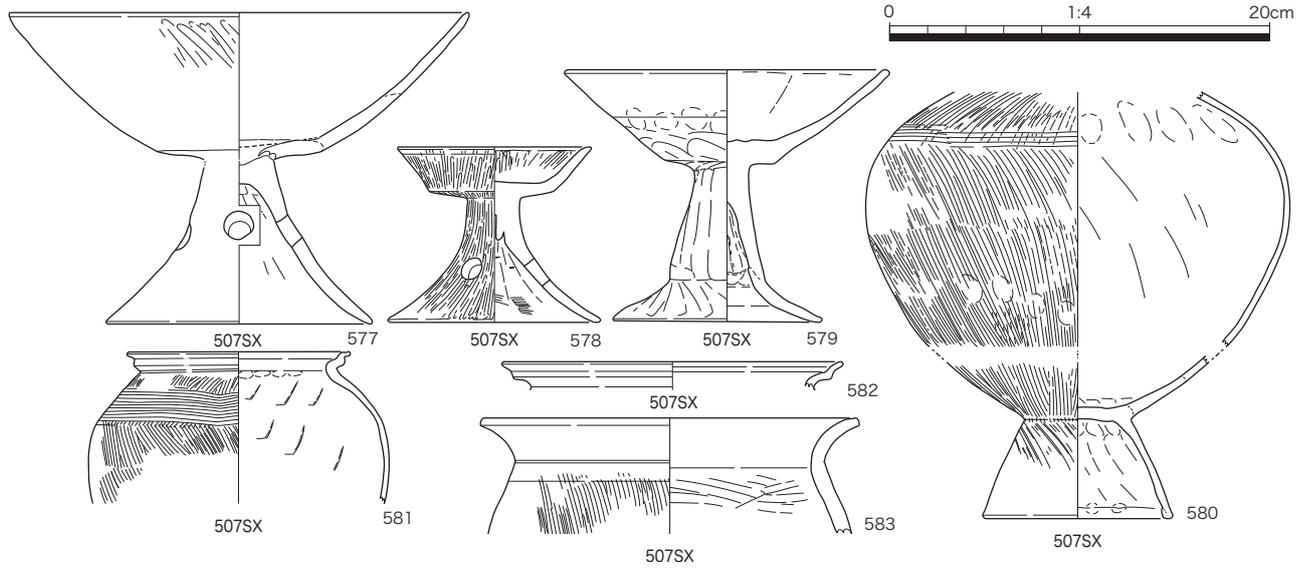


図68 19A区507SX遺物図

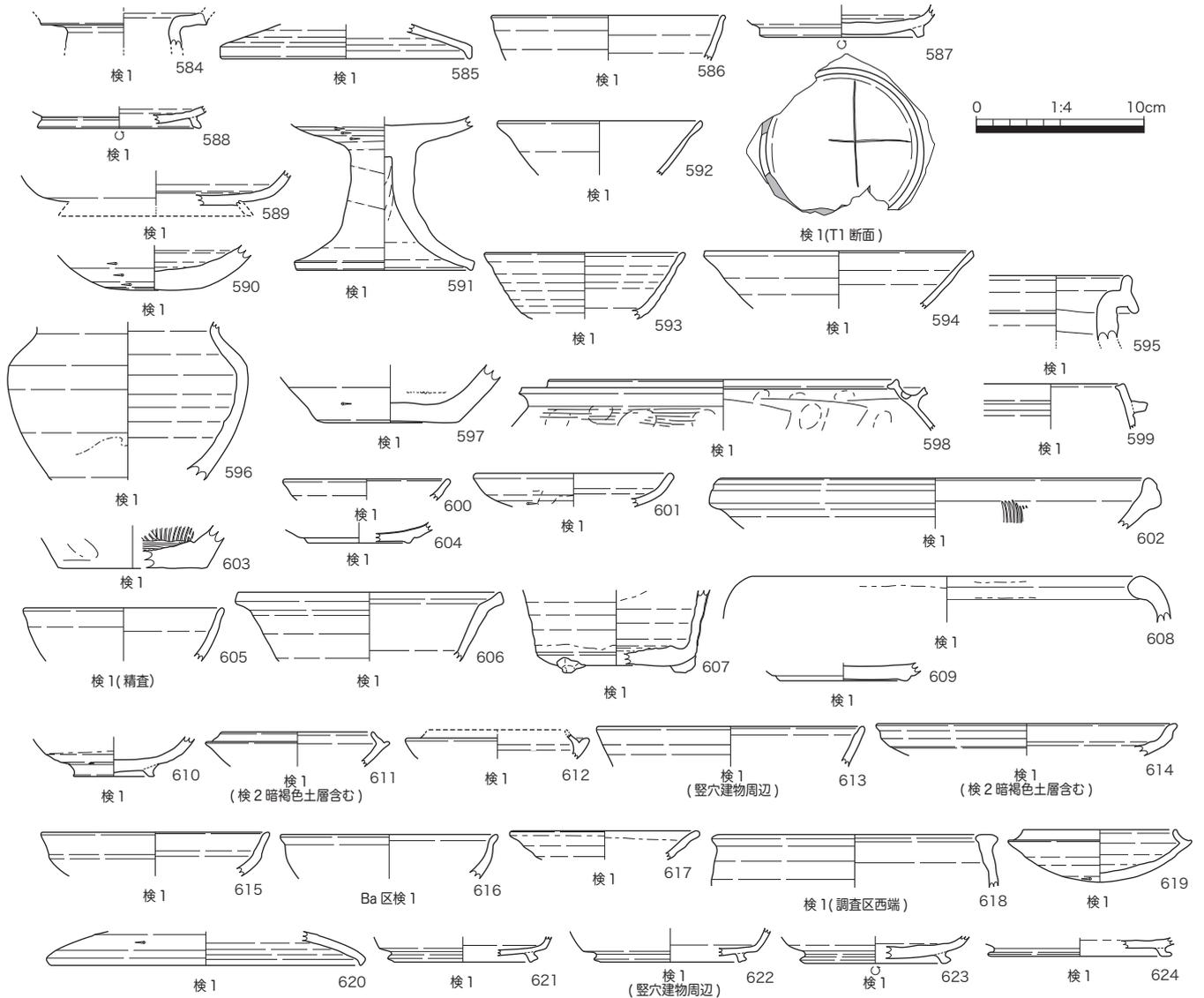


図69 19A～D区検1面遺物図

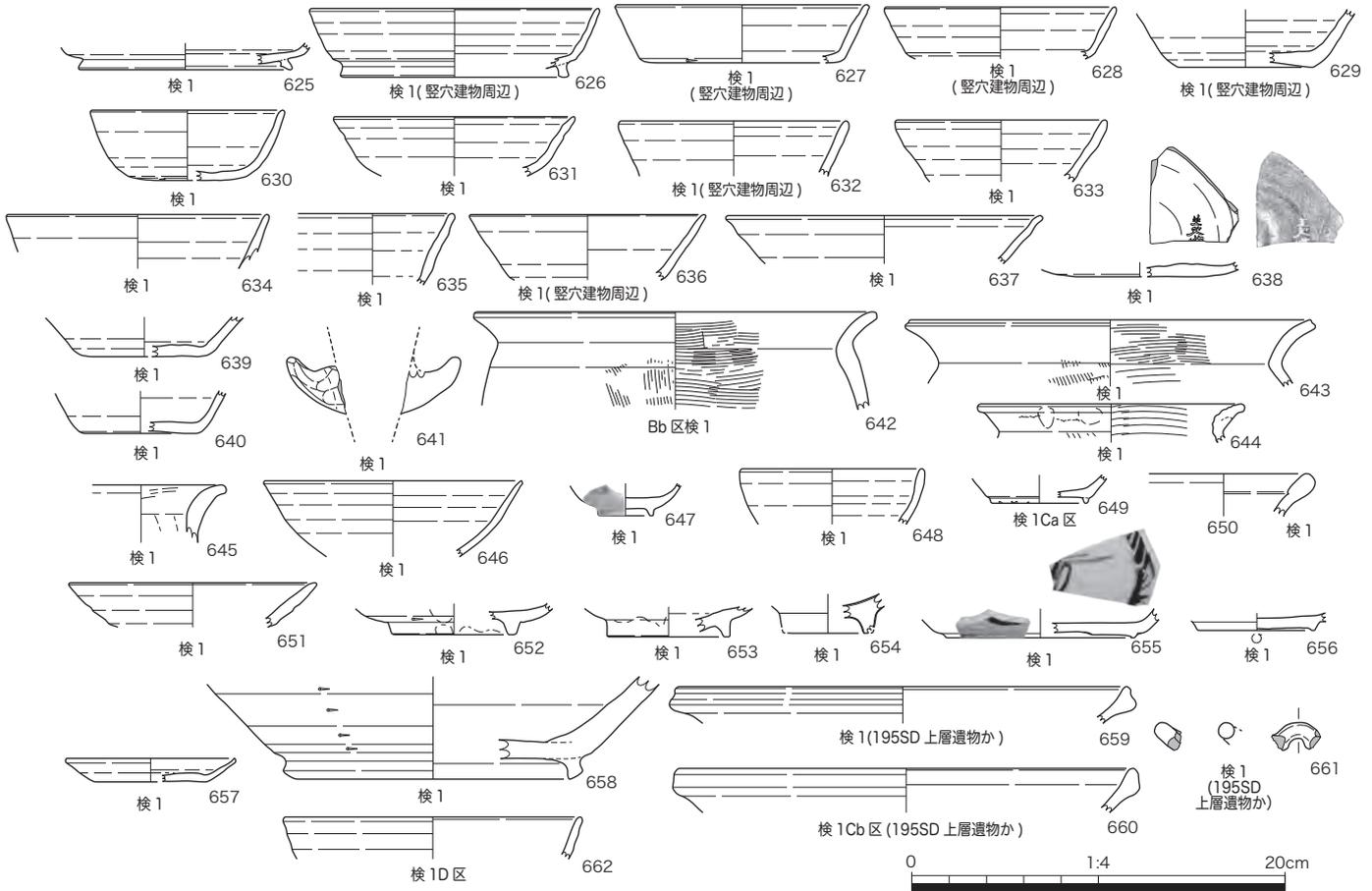


図70 19A～D区検1面遺物図

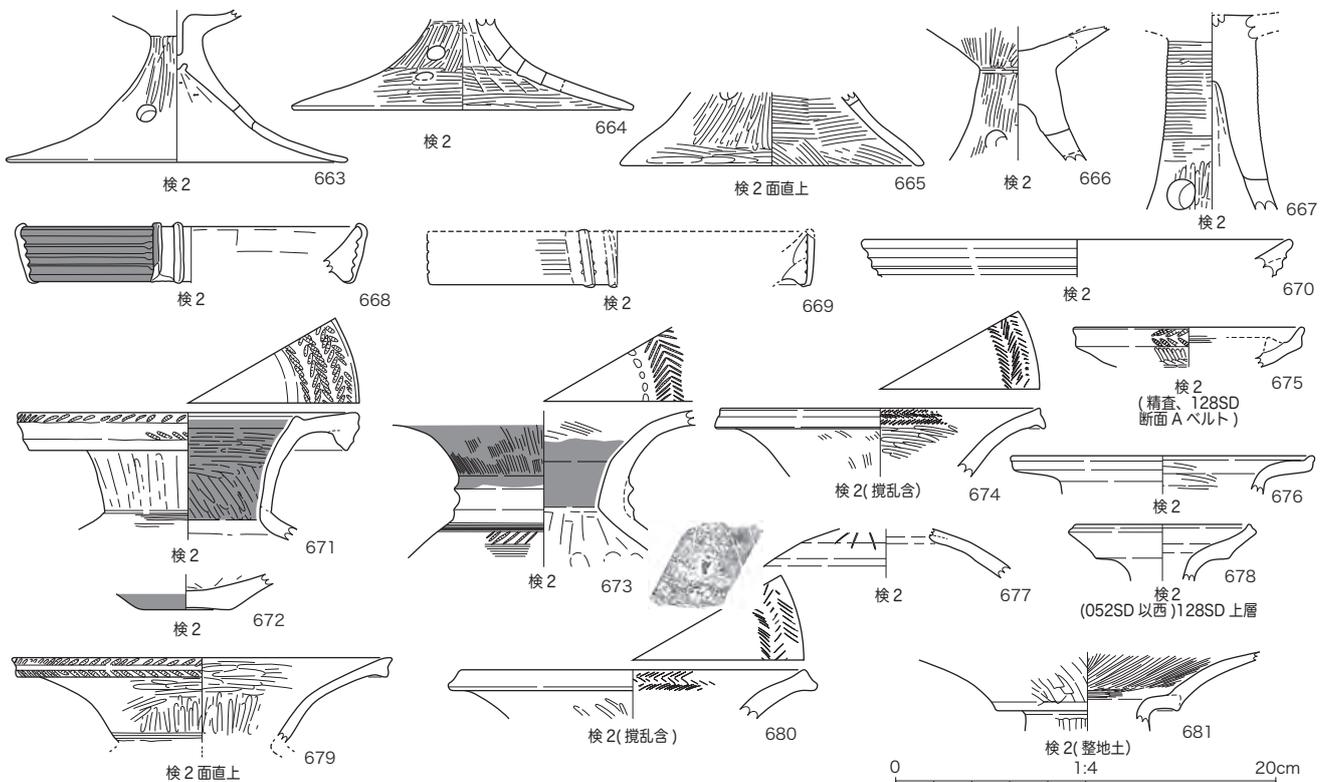


図71 19A～D区検2面遺物図

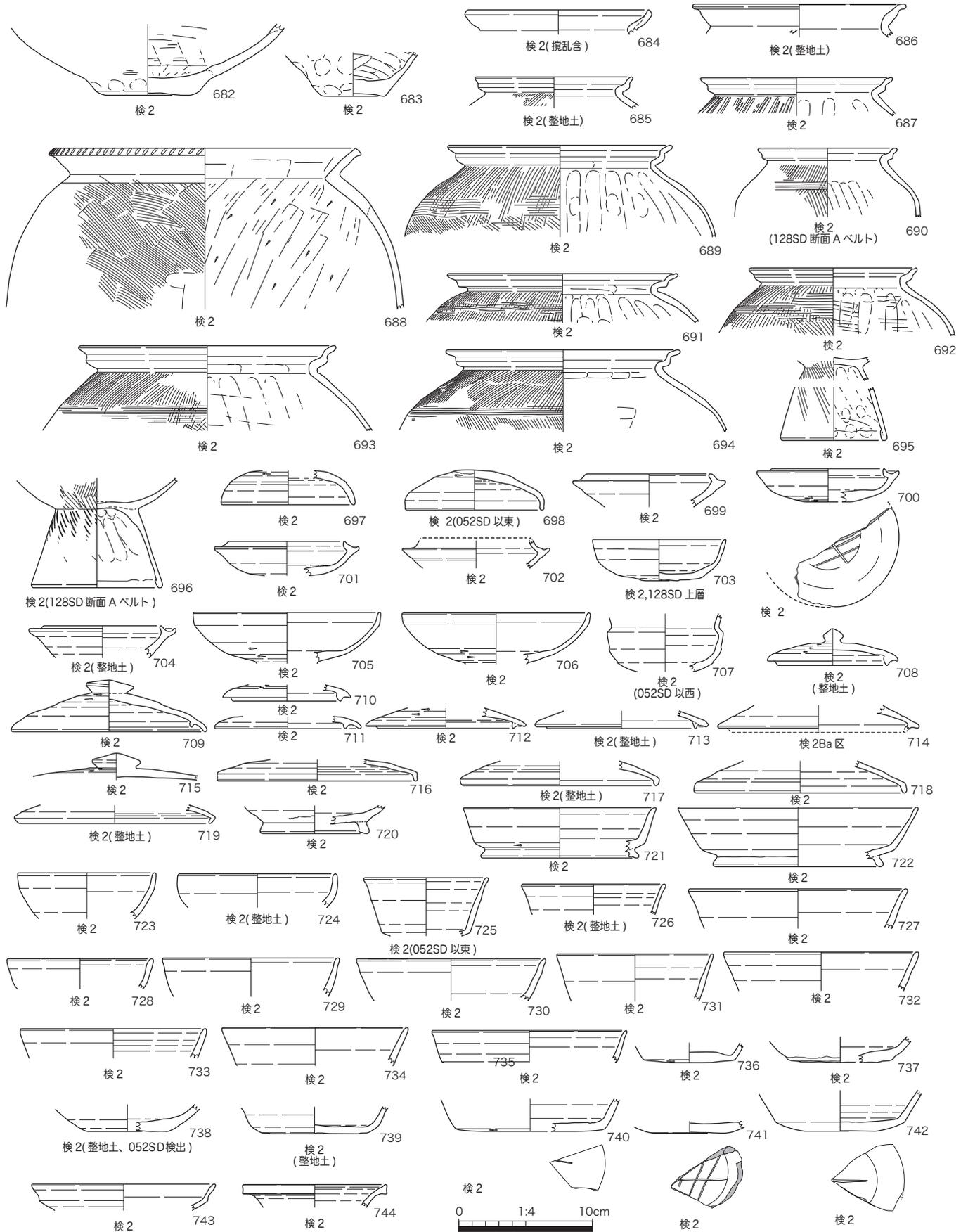


図 72 19A～D区検2面遺物図

そらくこれらの多くが検2面で検出された竪穴建物跡に関わるものと考えられる。須恵器にはかえり付蓋 E-708～714があり、杯 E-721～742の一部がこれに対応するものでI-17号窯式期～I-41号窯式期である。杯には無台杯 E-736～742もあるのでC-2号窯式期以降の8世紀代も一定量ある。土師器の煮炊具類 E-745～776は大半が8世紀代の濃尾型甕で長胴タイプと小型タイプの両者がみられる。前者はカマド設置が前提なので

が、検出された竪穴建物跡で明確なカマド遺構はない。一方、中世陶器類は整地層に関わるもので、ほとんどが東濃型で第8～9型式である。区画溝 044SD・045SDのそれぞれに先行して整地が行われていることから、上位の整地に比較的新しい時期の山茶碗が対応すると考えられる。その後江戸時代の遺物は少なく、長らく耕作地であったこととも関係するのであろう。

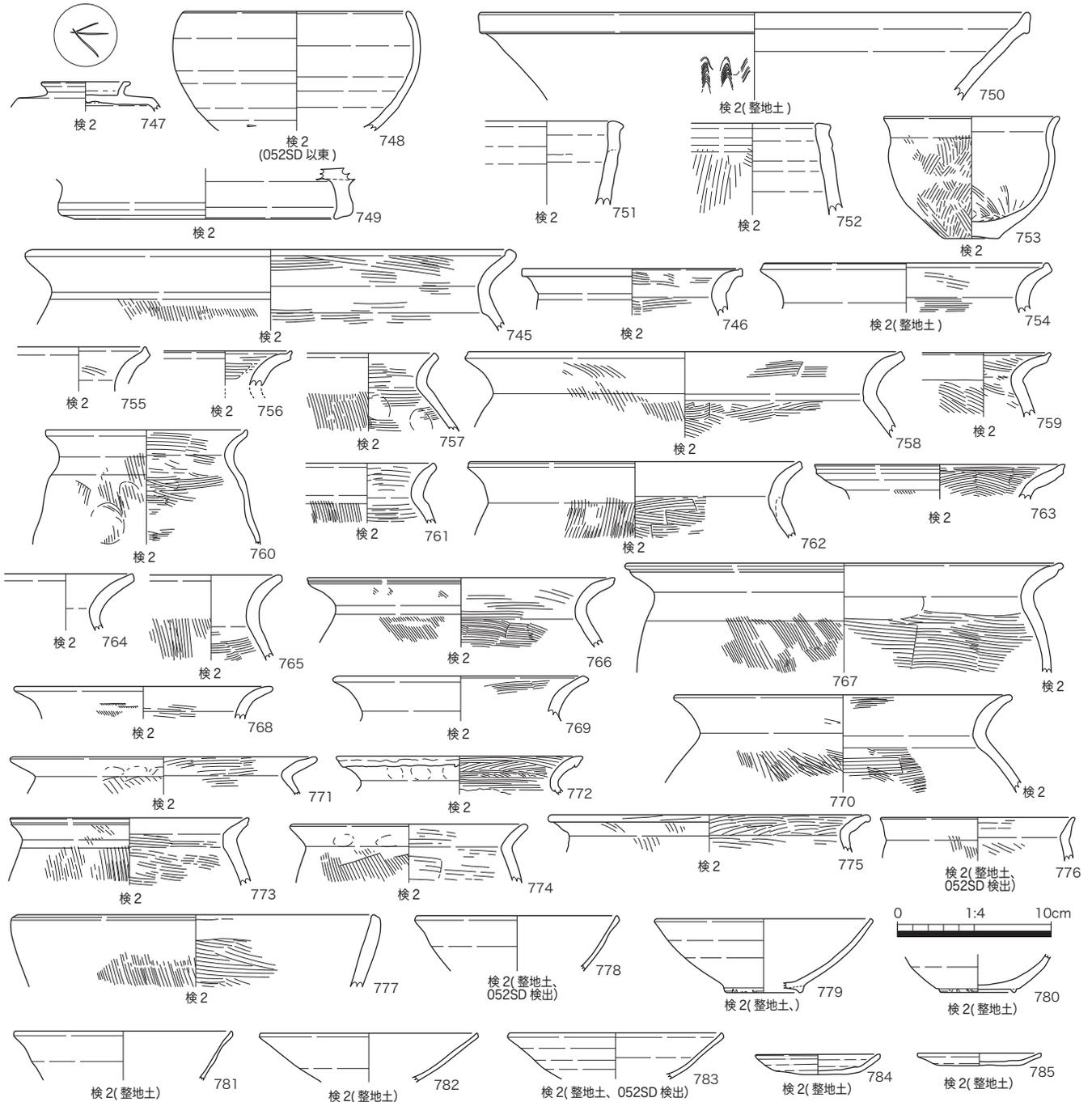


図 73 19A～D区検2面遺物図

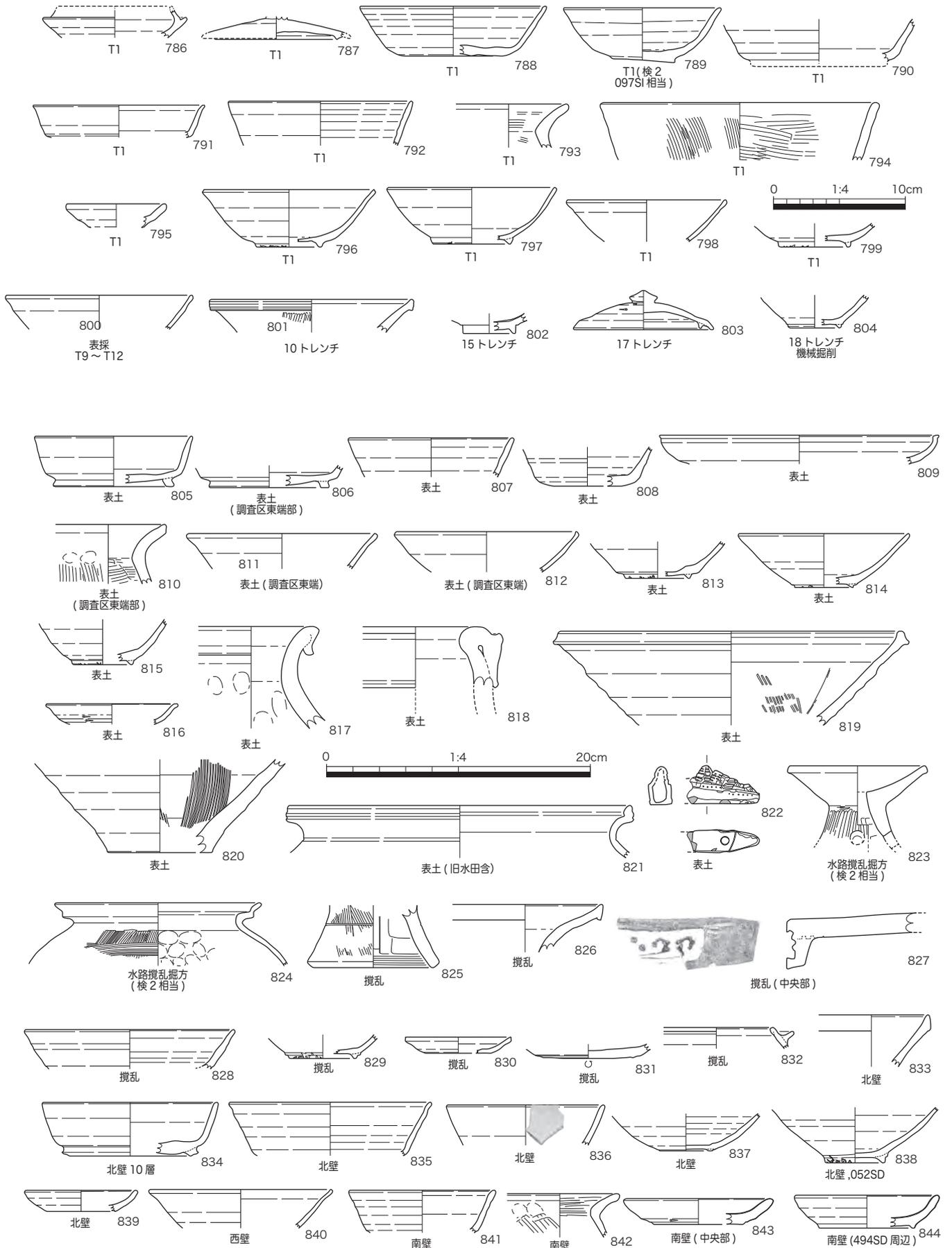
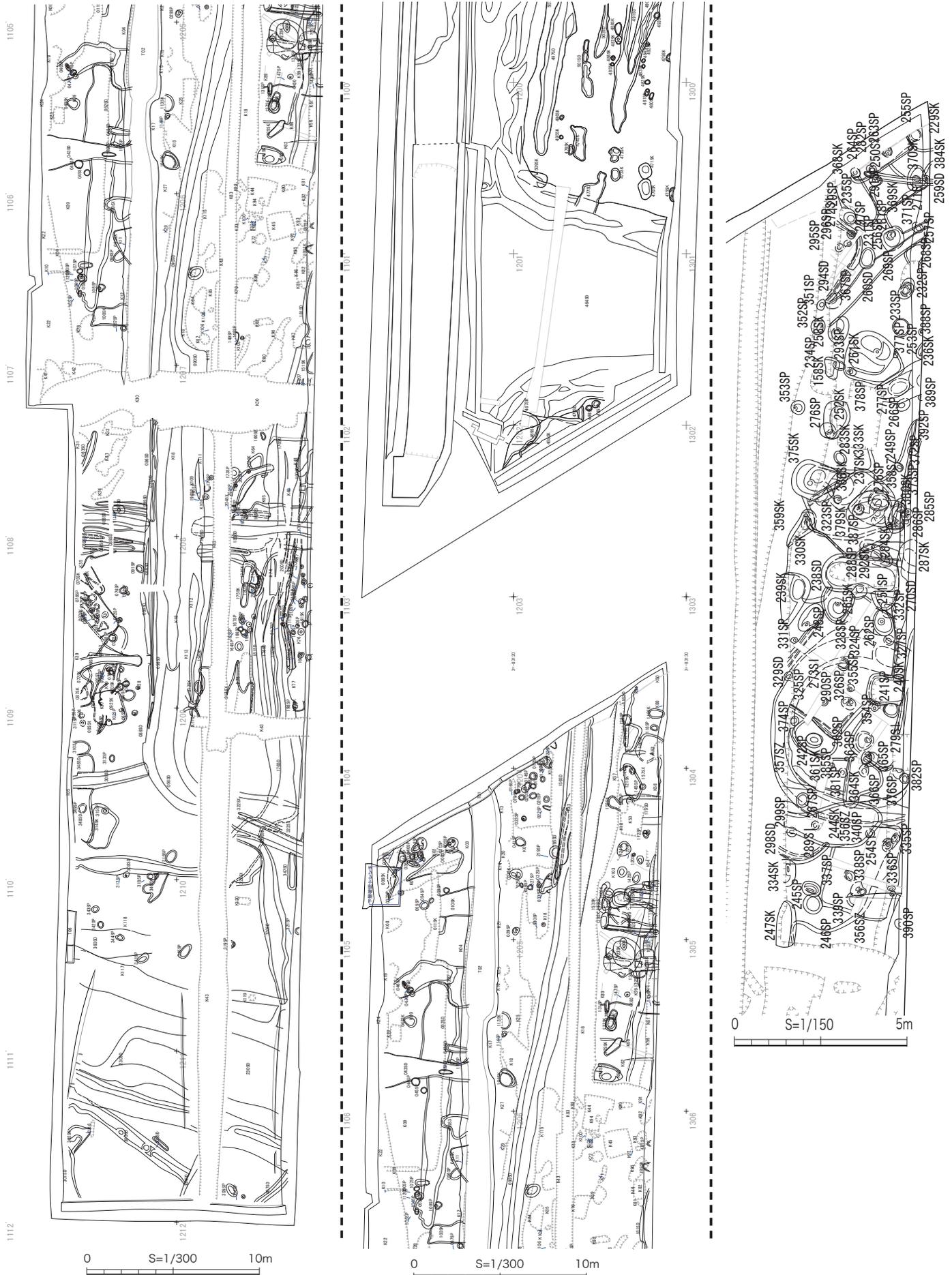


図74 19A～D区トレンチ・表土遺物図



一色城跡

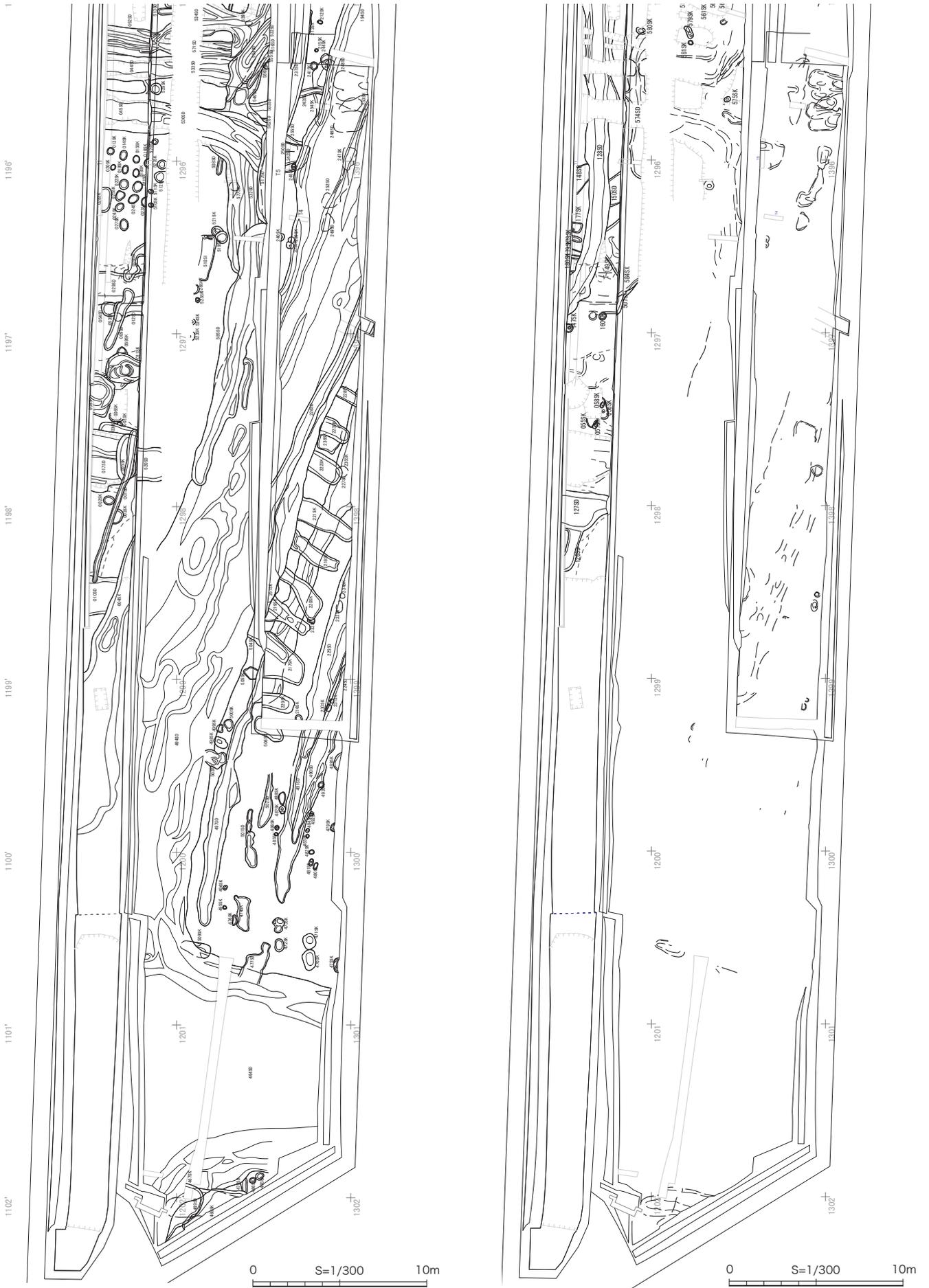


図76 遺構基本図(左:19A・Bb・Ca・Cb区第1面、右:同第2面)



図77 遺構基本図 (左: 19A・Bb・Ca・Cb・Cc・D区第1面、右: 同第2面)

第3章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

(1) 放射性炭素年代測定【その1】

試料と方法 試料は、片原一色城の東堀 Ba 区 464SD 中層出土の漆碗塗膜（試料 No.1：PLD-41202）、近世村境の溝 Ca 区溝 194SD 出土の漆碗塗膜（試料 No.2：PLD-41203）、東堀 Ba 区溝状遺構 464SD 下層出土の漆碗塗膜（試料 No.3：PLD-41204）、464SD 下層深掘り（Ba 区 P-1 灰色粘土層）出土の種実（試料 No.4：PLD-41205）、その下位砂層出土の生の葉（試料 No.5：PLD-41206）の、計5点である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果 表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の

確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分

表1 測定試料および処理方法

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-41202	試料No.1 調査区：Ba 位置：1201 遺構：464SD 層位：中層 遺物No.d274	種類：塗膜（漆） 器種：碗 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41203	試料No.2 調査区：Ca 位置：1297 遺構：194SD 遺物No.d169	種類：塗膜（漆） 器種：碗 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41204 W-1	試料No.3 調査区：Ba 位置：1201 遺構：464SD 層位：下層 遺物No.d272	種類：塗膜（漆） 器種：碗 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41205	試料No.4 調査区：Ba 位置：P-1深掘 層位：灰色粘土層 その他：南壁断面	種類：生の種実 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-41206	試料No.5 調査区：Ba 位置：P-1深掘 層位：下位砂層	種類：生の葉 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果【その1】

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-41202 試料No.1 遺物No.d274	-29.96 \pm 0.34	354 \pm 22	355 \pm 20	1475-1522 cal AD (35.9%) 1575-1585 cal AD (6.0%) 1590-1625 cal AD (26.3%)	1455-1529 cal AD (46.0%) 1551-1634 cal AD (49.4%)
PLD-41203 試料No.2 遺物No.d169	-29.35 \pm 0.33	322 \pm 21	320 \pm 20	1520-1530 cal AD (8.7%) 1538-1593 cal AD (46.1%) 1619-1635 cal AD (13.4%)	1490-1603 cal AD (75.6%) 1612-1643 cal AD (19.8%)
PLD-41204 試料No.3 遺物No.d272	-27.43 \pm 0.33	564 \pm 22	565 \pm 20	1325-1344 cal AD (33.9%) 1394-1412 cal AD (34.3%)	1314-1357 cal AD (51.4%) 1387-1420 cal AD (44.0%)
PLD-41205 試料No.4	-22.23 \pm 0.29	341 \pm 19	340 \pm 20	1493-1523 cal AD (24.3%) 1559-1564 cal AD (3.2%) 1570-1602 cal AD (26.4%) 1613-1631 cal AD (14.3%)	1472-1530 cal AD (34.5%) 1539-1635 cal AD (60.9%)
PLD-41206 試料No.5	-30.78 \pm 0.30	1949 \pm 21	1950 \pm 20	25-76 cal AD (68.2%)	3- 88 cal AD (91.0%) 104-121 cal AD (4.4%)

布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察 以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理すると、464SD 下層から出土した漆椀は 14 世紀前半から 15 世紀前半、中層から出土した漆椀は 15 世紀中頃から 17 世紀前半、194SD の漆椀は 15 世紀末から 17 世紀中頃に製作された可能性が高いと考えられる。また、Ba 区の P-1 の灰色粘土層から出土した種実 (試料 No.4 : PLD-41205) は、15 世紀後半から 17 世紀前半の暦年代を示した。種実試料の測定結果は、結実した年代を示すと考えられる。Ba 区の P-1 の

下位砂層から出土した葉 (試料 No.5 : PLD-41206) は、1 世紀初頭から 2 世紀前半の暦年代を示し、1 世紀代の確率が高い。ただし、較正曲線が更新された場合、測定結果よりも新しい暦年代を示す可能性があるため、再較正をする必要がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

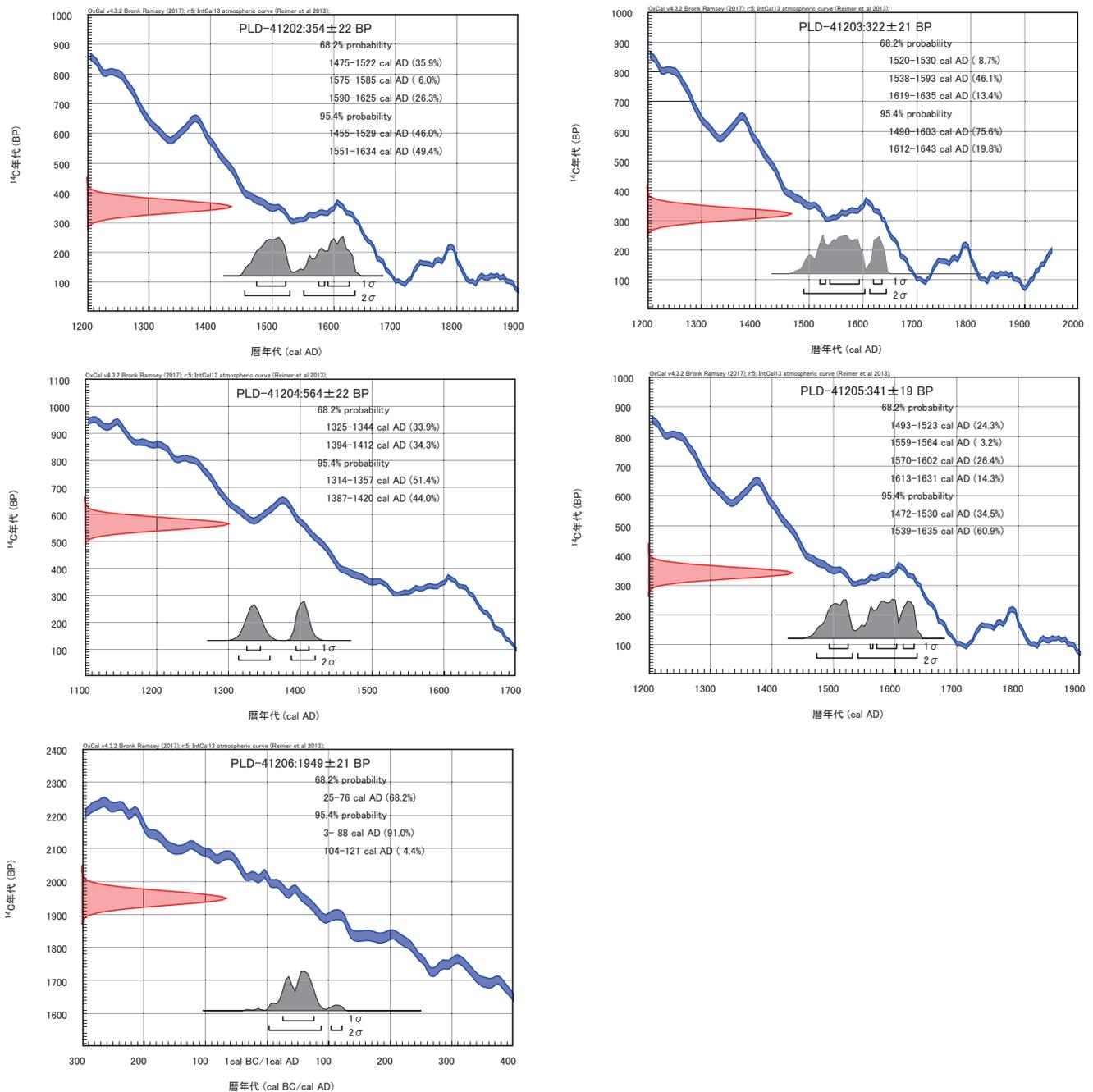


図 78 暦年代較正図【その 1】

尾崎大真 (2009) 日本版較正曲線の作成と新たな課題. 西本豊弘編「弥生農耕のはじまりとその年代 新弥生時代のはじまり4」: 4-8, 雄山閣.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

(2) 放射性炭素年代測定【その2】

試料と方法 試料は、片原一色城東堀 464SD 下層出土の漆椀 (d-272) の塗膜 (試料 No.1 : PLD-44546)、同西堀 230SD 出土の漆椀 (d-780) の塗膜 (試料 No.2:PLD-44547)、同西堀 230SD 上層出土の漆椀 (d-879) の塗膜 (試料 No.3:PLD-44548)、同内堀 056SD 出土の漆椀 (d-010) の塗膜 (試料 No.4 : PLD-44549) の、計 4 点である。測定試料の情報、調製データは表 3 のとおりで、測定方法は【その 1】と同じである。

結果 表 4 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、図 2 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察 以下、2 σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して、遺構ごとに暦年代の古い順に結

果を整理する。また、測定結果のマルチプロット図を図 1 に示す。なお、測定試料はいずれも漆塗膜であり、測定結果は漆液が採取された年代を示す。

464SD 下層の試料 No.1 (PLD-44546) は、15 世紀中頃～16 世紀初頭および 16 世紀末～17 世紀前半の暦年代を示した。230SD の上層の試料 No.3 (PLD-44548) は 15 世紀代の暦年代を示した。同じ 230SD の試料 No.2 (PLD-44547) は、15 世紀後半～17 世紀前半の暦年代を示した。056SD の試料 No.4 (PLD-44549) は、15 世紀末～17 世紀前半の暦年代を示した。(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ: 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・三谷智広)

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

表 3 測定試料および処理方法

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44546 W-1	試料No.1 調査区: 19Bb区 遺構: 464SD下層	種類: 塗膜 (漆) 器種: 漆器椀 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-44547 W-12	試料No.2 調査区: 20B1区 遺構: 230SD 遺物No.d-780	種類: 塗膜 (漆) 器種: 漆器椀 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-44548 W-13	試料No.3 調査区: 20B1区 遺構: 230SD上層	種類: 塗膜 (漆) 器種: 漆器椀 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-44549 W-20	試料No.4 調査区: 20C1区 遺構: 056SD 遺物No.d-010	種類: 塗膜 (漆) 器種: 漆器椀 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

表 4 放射性炭素年代測定と暦年較正の結果【その2】

測定番号	$\delta^{13}C$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP \pm 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP \pm 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-44546 試料No.1 464SD下層	-28.73 \pm 0.17	399 \pm 18	400 \pm 20	1451-1480 cal AD (68.27%)	1445-1503 cal AD (86.68%) 1598-1617 cal AD (8.77%)
PLD-44547 試料No.2 230SD	-28.52 \pm 0.17	350 \pm 18	350 \pm 20	1488-1521 cal AD (29.77%) 1577-1622 cal AD (38.50%)	1473-1527 cal AD (40.17%) 1551-1634 cal AD (55.28%)
PLD-44548 試料No.3 230SD上層	-26.89 \pm 0.17	433 \pm 19	435 \pm 20	1441-1457 cal AD (68.27%)	1435-1474 cal AD (95.45%)
PLD-44549 試料No.4 056SD	-27.84 \pm 0.17	331 \pm 19	330 \pm 20	1505-1528 cal AD (17.55%) 1551-1596 cal AD (36.88%) 1617-1634 cal AD (13.85%)	1491-1604 cal AD (75.70%) 1607-1637 cal AD (19.75%)

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L.,

Adolphi, F., Buntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

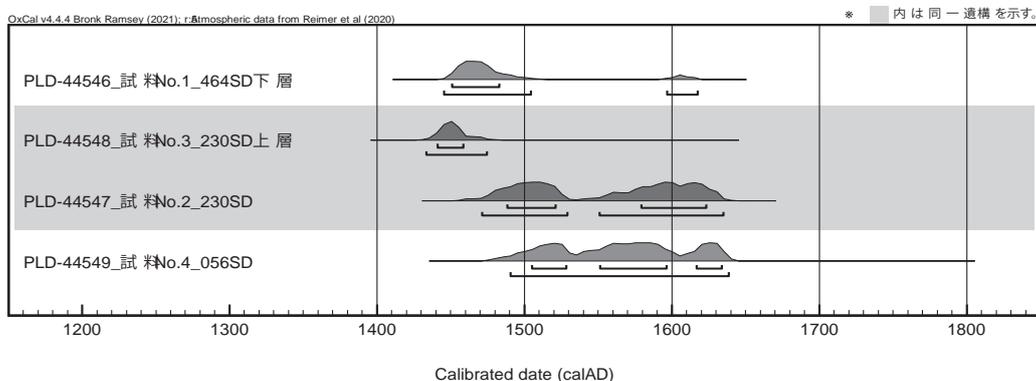
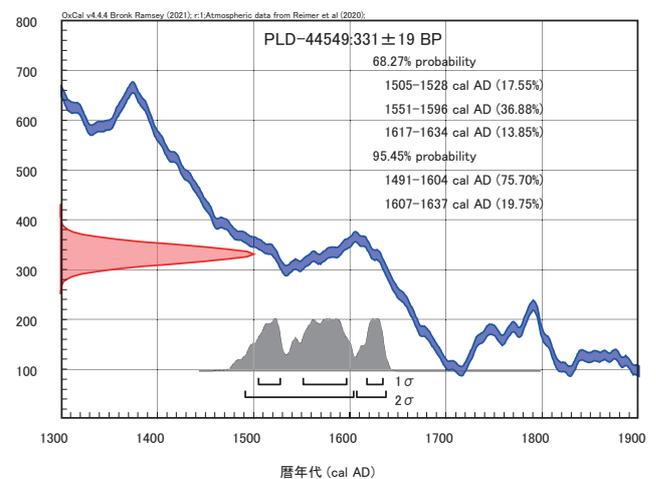
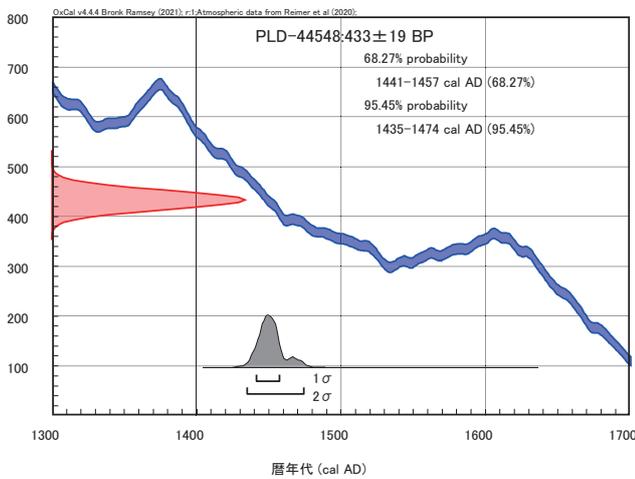
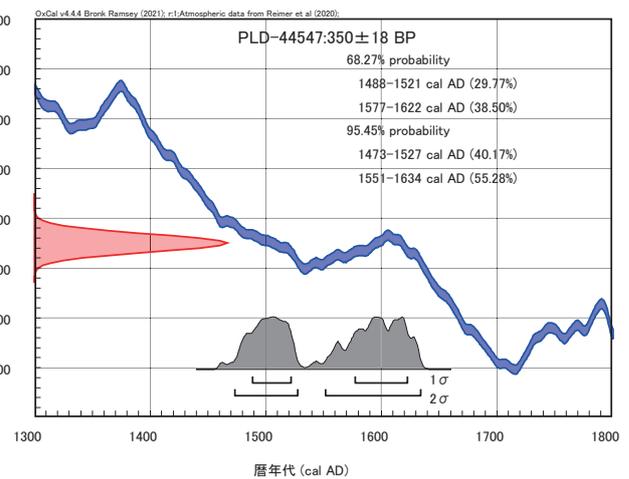
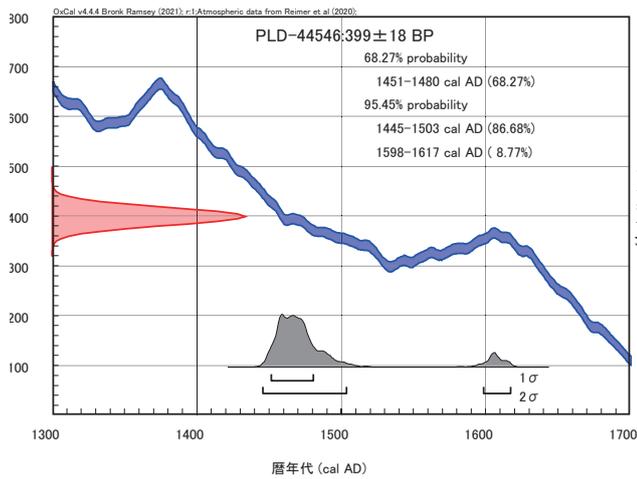


図 79 暦年代較正図【その2】

第2節 樹種・種実同定

(1) 漆碗の樹種同定

はじめに 本項では漆器碗の樹種同定を報告する。同一試料の漆塗膜を用いた放射性炭素年代測定【その2】も実施した。

試料と方法 試料は、片原一色城の堀 056SD、230SD、464SD 出土の漆碗 4点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

結果 同定の結果、広葉樹のブナ属とトチノキの2分類群がみられた。トチノキが3点で、ブナ属が1点であった。同定結果を表5に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図82 1a-1c(No.2)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～10列である。

ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分

布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(2) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 図82 2a-2c(No.1)、3a-3c(No.4)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

考察 漆器碗の木胎は、ブナ属とトチノキであった。ブナ属は堅硬な材で、トチノキは軽軟な材であるが、共に漆器などの木胎として多く利用される樹種である（伊東ほか、2011）。愛知県内で確認されている戦国時代の漆器碗には、ブナ属とトチノキが多く（伊東・山田編、2012）、傾向は一致する。（パレオ・ラボ：小林克也）

参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—、449p、海青社。

表5 一色城跡出土漆碗の樹種同定結果

	試料No.	調査区	グリッド	遺構	遺物No.	器種	樹種	木取り	時期	年代測定番号
W-1	1	19Bb区		464SD下層	d-272	漆器碗	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44546
W-12	2	20B1区	1211	230SD	d-780	漆器碗	ブナ属	横木取り	戦国時代	PLD-44547
W-13	3	20B1区	1110	230SD上層	d-879	漆器碗	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44548
W-20	4	20C1区	1207	056SD	d-010	漆器碗	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44549

(2) 大型植物遺体の同定

試料と方法 分析試料は、堆積物試料7試料と現地取り上げ試料5試料の計12試料である。堆積物試料の内訳は、19A区 of 古墳時代後期溝 128SD 上層、中層、下層から各1試料、19Bb区 of 奈良時代井戸 376SE の16、21層と22、26層から各1試料、20C区 of 片原一色城内堀 090SD から2試料である。現地取り上げ試料の内訳は、19A区 of 遺構不明から1試料、20A区と20C区 of 溝 090SD から各1試料、20B区 of 西堀 230SD 下層から1試料、20C区 of 内堀 056SD から1試料である。

堆積物試料は、パレオ・ラボにて515cc～600ccを

最小0.5mm目、残り全量は最小1.0mm目の篩を用いて水洗した。水洗量は表6を参照されたい。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残存している個体を1個体とした。その他の小穂軸以外の籾殻と昆虫遺体の破片はおおよその数を記号(+)示した。

結果 同定した結果、木本植物では広葉樹のブドウ属種子とモモ炭化核、スモモ炭化核、オニグルミ炭化核、アカメガシワ種子、センダン核、サンショウ種子の7分類群、草本植物ではオニバス種子とヒトリシズカ種子、

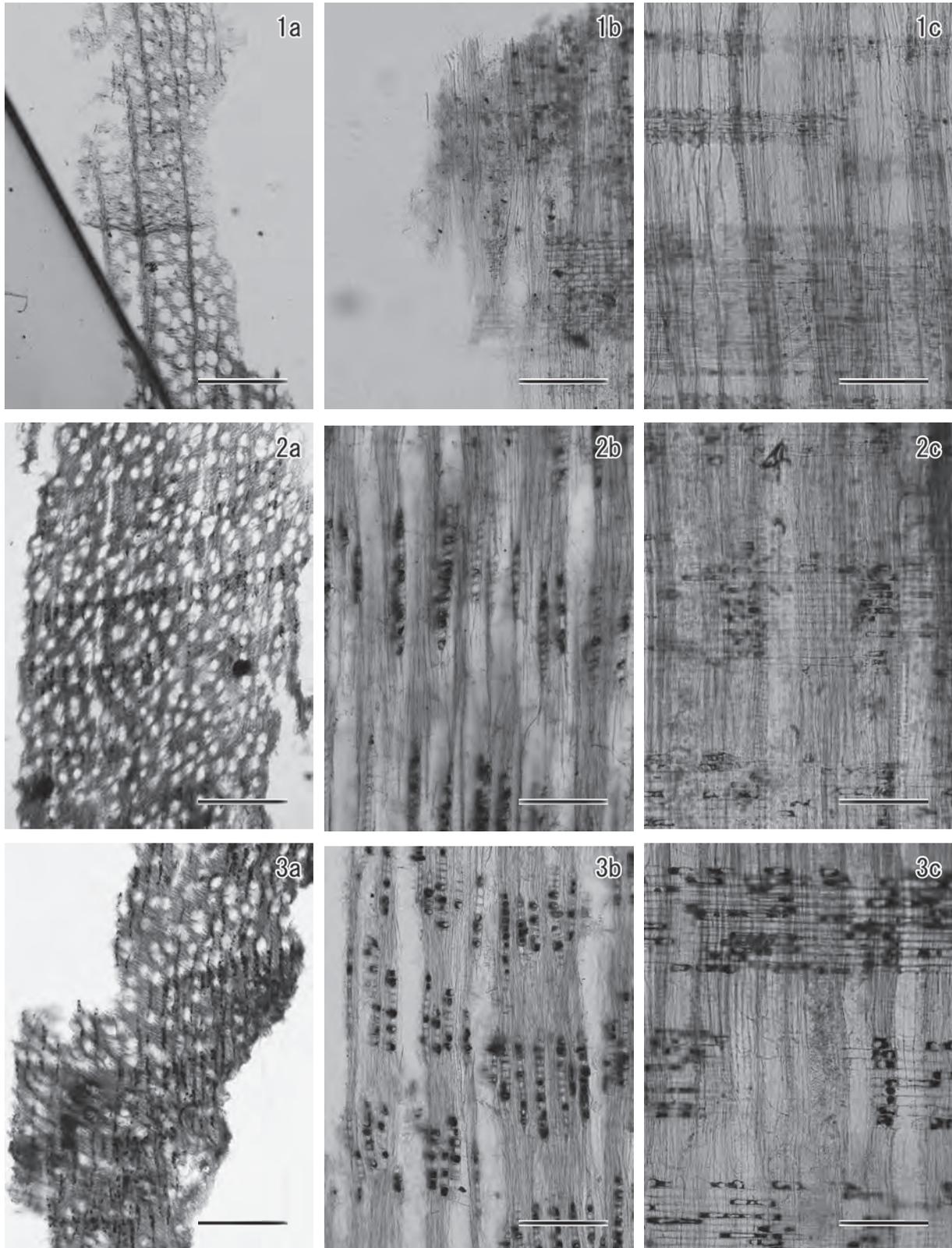


図80 一色城跡出土の漆碗の光学顕微鏡写真

1a-1c. ブナ属 (No. 2)、2a-2c. トチノキ (No. 1)、3a-3c. トチノキ (No. 4)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)

表6 一色城跡の土壌水洗結果

試料 No.	発掘区	グリッド	遺構・土層	日時	時期	重量	篩サイズ	採取試料						
								炭化材	炭化種実	生材	生の種実	昆虫遺体	土器	
1-1	19A	-	128SD上層	-	古墳時代	1.625 kg	1.0mm	○						
1-2	19A	-	128SD上層	-	古墳時代	500 cc	0.5mm				○	○		
2-1	19A	-	128SD中層	-	古墳時代	0.655 kg	1.0mm	○						
2-2	19A	-	128SD中層	-	古墳時代	500 cc	0.5mm		○				○	
3-1	19A	-	128SD下層	-	古墳時代	1.065 kg	1.0mm	○						
3-2	19A	-	128SD下層	-	古墳時代	500 cc	0.5mm		○					
4-1	19Bb	-	376SK 16,21層	-	奈良時代	8.630 kg	1.0mm	○	○					
4-2	19Bb	-	376SK 16,21層	-	奈良時代	500 cc	0.5mm	○			○	○		
5	19Bb	-	376SK 16,21層	-	奈良時代	12.190 kg	1.0mm	○	○					○
6-1	19Bb	-	376SK 22,26層	-	奈良時代	8.05 kg	1.0mm	○	○					
6-2	19Bb	-	376SK 22,26層	-	奈良時代	500 cc	0.5mm		○					
7-1	20C	1106	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	2.580 kg	1.0mm	○	○	○	○			
7-2	20C	1106	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	500 cc	0.5mm	○	○		○	○		
8	20C	1106	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.600 kg	1.0mm	○	○	○				
9	20C	1106	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.950 kg	1.0mm	○	○	○				
10	20C	1106	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.650 kg	1.0mm	○	○					
11-1	20C	1206	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	2.860 kg	1.0mm	○	○					
11-2	20C	1206	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	500 cc	0.5mm	○	○		○	○		
12	20C	1206	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.495 kg	1.0mm	○	○					
13	20C	1206	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.565 kg	1.0mm	○	○	○	○			
14	20C	1206	090SD土壌サンプル	2021/2/8	戦国時代	3.390 kg	1.0mm	○	○					○

カワツルモ炭化果実、イボクサ種子、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属オニナルコ節果実、スゲ属A果実、スゲ属B果実、スゲ属C果実、テンツキ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果・炭化種子（穎果）、イネ籾・籾殻・炭化籾殻・炭化種子（穎果）、エノコログサ属有ふ果・炭化種子（穎果）、オオムギ炭化有ふ果・炭化種子（穎果）、キンポウゲ属果実、ヒシ属炭化果実、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、マメ科A炭化種子、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、ズメウリ種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、タネツケバナ属種子、サナエタデ-オオイヌタデ果実、イヌタデ果実、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、オカトラノオ属種子、ヤエムグラ属種子・炭化種子、ナス種子、ゴマ種子、キラソウ属果実、シソ属果実、タカサブロウ果実、ヤブタビラコ属果実の40分類群、シダ植物のスギナ近似種無性芽の1分類群の、計48分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実を不明A、残存状態が悪く、微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な一群を同定不能炭化種実とした。また、種実以外には、昆虫遺体と動物遺体が得られたが、同定の対象外とした（表7、8）。

以下に、大型植物遺体の産出傾向について時期ごとに、

遺構と層位別に記載する（同定不能炭化種実を除く）。

<堆積物試料>

[古墳時代] 128SD 上層：ウシハコベが1点得られた。128SD 中層：オニグルミとサナエタデ-オオイヌタデが各1点得られた。128SD 下層：同定可能な種実は得られなかった。

[奈良時代] 376SK 16, 21層：カワツルモが多く、モモとスモモ、ヒエ属、イネが少量、サンショウとヒトリシズカ、イボクサ、テンツキ属、エノコログサ属、オオムギ、ササゲ属アズキ亜属、マメ科Aがわずかに得られた。376SK 22, 26層：イネが少量、モモとアカメガシワ、ヒトリシズカ、スゲ属アゼスゲ節、テンツキ属、ヒエ属、ヒシ属がわずかに得られた。

[戦国時代] 090SD：サナエタデ-オオイヌタデが非常に多く、スゲ属アゼスゲ節とタネツケバナ属が多く、イボクサがやや多く、スゲ属Aとオオムギ、メロン仲間、エノキグサ属、ウシハコベ、ヤブタビラコ属が少量、アカメガシワとサンショウ、スゲ属オニナルコ節、スゲ属B、メヒシバ属、ヒエ属、イネ、エノコログサ属、キンポウゲ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カタバミ属、ノミノフスマ、アカザ属、ヤエムグラ属、ナス、ゴマがわずかに得られた。これら以外の分類群は、産出数が各1点であった。



スケール 1, 2, 18, 19:5mm, 3-9, 10-17, 20-23:1mm
図81 一色城跡出土の大型植物遺体

1. モモ炭化核 (376SK、No. 4-1)、2. スモモ炭化核 (376SK、No. 4-1)、3. カワツルモ炭化果実 (376SK、No. 4-1)、4. イボクサ種子 (090SD、No. 7-2)、5. スゲ属A果実 (090SD、No. 13)、6. スゲ属B果実 (090SD、No. 14)、7. スゲ属C果実 (090SD、No. 11-2)、8. ヒエ属有ふ果 (090SD、No. 11-2)、9. ヒエ属炭化種子 (376SK、No. 4-1)、10. イネ籾 (090SD)、11. イネ籾殻 (090SD)、12. イネ炭化種子 (376SK、No. 4-1)、13. オオムギ有ふ果 (090SD、No. 11-1)、14. オオムギ炭化種子 (090SD、No. 11-1)、15. ヒシ属炭化果実 (376SK、No. 6-1)、16. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (376SK、No. 4-1)、17. マメ科A炭化種子 (376SK、No. 4-1)、18. メロン仲間種子 (090SD、No. 13)、19. ヒョウタン仲間種子 (090SD、No. 7-2)、20. サナエタデーオオイヌタデ果実 (090SD、No. 7-2)、21. ナス種子 (090SD、No. 11-1)、22. ゴマ種子 (090SD、No. 7-1)、23. 不明A炭化種実 (376SK、No. 6-1)

<現地取り上げ試料>

[戦国時代] 遺構不明のグリッド1196:スギナ近似種が1点得られた。090SD:イネが多く、センダンが1点得られた。230SD下層:オニバスがわずかに得られた。056SD:同定可能な炭化種実は何も得られなかった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。表面には不規則な深い皺があり、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。下端に大きな着点があるが残存していない。残存高9.5mm、残存幅9.7mm。

(2) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 炭化核 バラ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。残存高11.9mm、残存幅9.2mm。

(3) カワツルモ *Ruppia maritima* L. 炭化果実 カワツルモ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は両端が尖る卵形、先端が突出する。表面は平滑で、強い光沢がある。長さ2.2mm、幅1.2mm。

(4) イボクサ *Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz. 種子 ツユクサ科

薄い青灰色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。中央部に狭楕円形で褐色の着点がある。表面にはやや凹凸がある。長さ1.5mm、幅1.6mm。

(5) スゲ属A *Carex* sp. A 果実 カヤツリグサ科

赤褐色で、側面観は倒卵形、断面は三角形。表面には微細な網目状隆線がある。先端と着点がやや突出する。長さ1.7mm、幅1.0mm。

(6) スゲ属B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科

黄褐色で、上面観は三稜形、側面観は倒卵形。先端が捩じれたように曲がる。長さ2.6mm、幅1.2mm。

(7) スゲ属C *Carex* sp. C 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、上面観は三稜形、側面観はやや下端が窄まる狭倒卵形。表面には微細な網目状隆線がある。先端に円形の穴がある。長さ1.5mm、幅1.0mm。

(8) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果・炭化種子(穎果) イネ科
有ふ果は黄褐色。側面観は紡錘形で、縦方向に細かい

筋がある。内穎は膨らまず、外穎は中央部が最も膨らむ。有ふ果は、長さ2.2mm、幅1.4mm。炭化種子(穎果)の側面観は卵形。断面が片凸レンズ形で、厚みは薄く、やや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。種子は、長さ1.5mm、幅1.2mm。那須(2017)に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエやイヌビエの長幅比に近かった。

(9) イネ *Oryza sativa* L. 粃・粃殻・炭化粃殻・炭化種子(穎果) イネ科

粃は赤褐色で、上面観が楕円形、側面観が長楕円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。粃は、長さ8.1mm、幅3.1mm。粃殻は、長さ8.2mm、幅3.7mm。炭化種子(穎果)の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚があり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。種子は、長さ4.2mm、幅2.7mm。

(10) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化有ふ果・炭化種子(穎果) イネ科

炭化有ふ果の上面観は円形、側面観は紡錘形で縦方向に筋がある。有ふ果は、長さ6.6mm、幅3.6mm、厚さ2.9mm。炭化種子(穎果)は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。断面は楕円形である。種子は、長さ5.6mm、幅2.7mm、厚さ2.3mm。

(11) ヒシ属 *Trapa* spp. 炭化果実 ヒシ科

破片であるが、完形ならば不整三角形で、先端が尖った角が2～4方向にのびる。萼片が肥厚してできた腕の破片のみが産出した。先端は尖るが、残存していない。残存高3.1mm、残存幅5.0mm。

(12) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Ceratotropis* spp. 炭化種子 マメ科

完形ならば上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分～2/3ほどの長さであるが、残存していない。長さ5.5mm、幅3.1mm。

(13) マメ科A *Fabaceae* sp. A 炭化種子 マメ科

上面観は扁平、側面観ともに狭卵形。ほぼ中央に楕円形の臍の痕跡がある。表面は平滑。長さ4.0mm、幅2.1mm、厚さ1.2mm。

(14) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅は狭く、やや厚みがある。図版に示した種子は、長さ7.1mm、幅3.4mm。藤下(1984)によると、メロン仲間は種子の大きさからおおむね次の3群に分けられ、長さ6.0mm以下は雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmはマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上はモモルディカメロン型である。今回、090SDから出土した状態の良い5点の大きさは、長さ6.2~7.1(平均6.6±0.3)mm、幅3.0~3.5(平均3.3±0.2)mmとなっており、藤下(1984)の分類に充てるとマクワウリ・シロウリ型の大きさであった(表3)。

(15) ヒョウタン仲間 *Lagenaria* sp. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は完形ならば逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。残存長11.4mm、幅6.3mm。

(16) サナエタデーオオイヌタデー *Persicaria scabra* (Moench) Mold.-P. *lapathifolia* (L.) S.F.Gray 果実 タデ科

褐色で、上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ2.2mm、幅1.7mm。

(17) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

淡褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ2.7mm、幅3.4mm。

(18) ゴマ *Sesamum orientale* L. 種子 ゴマ科

淡褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面は平滑で、縁に沿って浅い溝がある。残存長2.5mm、残存幅1.2mm。

(19) 不明A Unknown A 炭化種実

状態が悪いが、完形ならば上面観は楕円形、側面観は卵形。表面は平滑。残存長3.5mm、残存幅2.5mm。

考察 古墳時代の溝128SDからは、種実はほとんど得られなかったが、木本植物では食用可能な種実であるオニグルミがわずかに得られた。オニグルミの核は、炭化した破片であり、食用となる子葉を取り出したのち、不要な核が燃やされて、堆積した可能性がある。草本植物ではサナエタデーオオイヌタデーとウシハコベがわずかに得られており、溝周辺に生育していた可能性がある。

奈良時代の井戸376SEからは、栽培植物で果樹のモモとスモモ、水田作物のイネ、畑作物のオオムギが得ら

れた。モモやスモモの核は、果肉を食べた後に不要な核が燃やされて、土坑に堆積した可能性などがある。イネとオオムギ、野生種でも食用にされた可能性のあるヒエ属とヒシ属、ササゲ属アズキ亜属、マメ科Aなどがいずれも炭化して産出しており、何らかの人為的要因で火を受け堆積したと思われる。また16, 21層では沈水植物のカワツルモが多く得られ、すべて炭化していた。近傍に浮葉植物や沈水植物が生育できる溜池状の湿地があった可能性や、この地点がもともとは浮葉植物や沈水植物が生育できる停滞した水域で、ある時期に火を受け埋没した可能性などが考えられる。

片原一色城の内堀090SDからは、栽培植物のイネとオオムギ、メロン仲間(マクワウリ・シロウリ型)、ヒョウタン、ナス、ゴマが得られており、食べられない部位や残滓が廃棄された可能性が考えられる。イネは籾や籾殻が多量に産出しており、オオムギも殻付きの状態である有ふ果も産出しているため、殻付きのまま保管されていた穀類がなんらかの要因で溝に堆積した可能性もある。さらに、抽水植物のイボクサ、湿地性植物のスゲ属アゼスゲ節とスゲ属オニナルコ節、スゲ属A、スゲ属B、スゲ属C、ヒエ属、タネツケバナ属、ノミノフスマ、タカサブロウが産出した。ほかに、乾いた草地や荒地、畑などに生育するメヒシバ属Aやエノコログサ属、キンポウゲ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カナムグラ、スズメウリ、カタバミ属、エノキグサ属、サナエタデーオオイヌタデー、イヌタデー、イヌタデー属A、ウシハコベ、アカザ属、ヤエムグラ属、キランソウ属、シソ属、ヤブタバコ属も産出しており、これらの草本類が溝周辺に生育していたと考えられる。木本植物では食用可能な種実であるブドウ属とサンショウがわずかに得られ、利用された可能性や、食用とならないアカメガシワやセンダンを含め周辺に生育していた可能性などがある。西堀230SD下層からは、わずかながら浮葉植物のオニバスが得られたため、当時滞水があった可能性がある。

(パレオ・ラボ：バンダリ スタルシャン)

引用文献

藤下典之(1984) 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法、渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学-総括報告書」:638-654, 同朋舎出版。
那須浩郎(2017) 縄文時代にヒエは栽培化されたのか? SEEDS CONTACT, 4, 27-29.
米倉浩司・梶田 忠(2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

(3) 樹種同定【その1】

試料と方法 試料は、検出面や深掘りの際に出土した自然木9点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

結果 同定の結果、広葉樹のクワ属とコナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、ハンノキ属ハンノキ亜属（以下、ハンノキ亜属）、ヤナギ属、カエデ属の、計6分類群がみられた。コナラ節が3点で最も多く、ヤナギ属が2点、クワ属とアカガシ亜属、ハンノキ亜属、カエデ属が各1点であった。同定結果を表9に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図84・85に光学顕微鏡写真を示す。

(1) クワ属 *Morus* クワ科 図84 1a-1c(No.6)

年輪のはじめに大型の道管が並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜め方向に断続的に複合する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～6列となる。クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し、日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図84 2a-2c(No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が、火炎状に配

列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図版84 3a-3c(No.8)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(4) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科 図85 4a-4c(No.5)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同集合放射組織がみられる。ハンノキ属ハンノキ亜属にはヤマハンノキやハンノキなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。ヤマハンノキは山林部に、ハンノキは平地の湿地や河川などの湿潤地に多い。材の重さは中庸で、切削加工なども中庸から容易である。

(5) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図85 5a-5c(No.9)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端

表9 一色城跡出土の自然木の樹種同定結果

試料No.	地区	出土位置	器種	樹種	木取り
1	19Ba	検出面（根あり）	自然木	コナラ属コナラ節	割れ
2	19Ba	検出面（根あり）	自然木	コナラ属コナラ節	芯持丸木
3	19Ba	深掘 下位砂層中の木材 P-1	自然木	カエデ属	芯持丸木
4	19Ba	深掘 下位砂層中の木材 P-1	自然木	コナラ属コナラ節	芯持丸木
5	19Ba	深掘 下位砂層中の木材 P-1	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木
6	19Ba	深掘 下位砂層中の木材 P-1	自然木	クワ属	芯持丸木
7	19Ba	さらに東に拡張した地点の木片 P-2 No.1	自然木	ヤナギ属	割れ
8	19Ba	さらに東に拡張した地点の木片 P-2 No.2	自然木	コナラ属アカガシ亜属	割れ
9	19Ba	さらに東に拡張した地点の木片 P-2 No.3	自然木	ヤナギ属	芯持丸木

1～3列が直立する異性で、単列となる。ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で、強度が強く、切削加工などは容易である。

(6) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 図85 6a-6c(No.3)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

考察 同定の結果、クワ属とコナラ節、アカガシ亜属、ハンノキ亜属、ヤナギ属、カエデ属がみられた。遺跡周辺にクワ属やコナラ節、カエデ属などの落葉広葉樹と、アカガシ亜属などの常緑広葉樹の混交林がみられ、水辺にはハンノキ亜属やヤナギ属など、湿潤地を好む樹木が生育していたと考えられる(佐竹ほか, 1989)。

引用文献

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(1989)日本の野生植物 木本1, 321p, 平凡社。

(4) 樹種同定【その2】

試料と方法 本項では木製品の樹種同定結果を報告する。なお、一部の試料(漆椀)については放射性炭素年代測定【その2】も行われている。

試料は、溝跡から出土した木製品や自然木、計90点である。一部の試料については、炭化が著しく、走査型電子顕微鏡による観察を行った。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

生材の樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金

蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行った。

結果 同定の結果、針葉樹ではモミ属とマツ属複維管束亜属、コウヤマキ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、カヤ、針葉樹樹皮の8分類群、広葉樹ではサクラ属とバラ属、クリ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、ハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)、カバノキ属、ヤナギ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ、ハイノキ属、マタタビ属、広葉樹樹皮の15分類群、単子葉ではタケ亜科1分類群の、計24分類群がみられた。ヒノキが26点で最も多く、サワラが12点、マツ属複維管束亜属が7点、ハンノキ亜属が6点、タケ亜科が5点、モミ属が4点、アスナロとアカガシ亜属、ヤナギ属、カエデ属、トチノキが各3点、サクラ属とコナラ節が各2点、コウヤマキとカヤ、針葉樹樹皮、バラ属、クリ、ブナ属、カバノキ属、ムクロジ、ハイノキ属、マタタビ属、広葉樹樹皮が各1点であった。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図84 1a-1c(No.14)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* マツ科 図84 2a-2c(No.80)、3a-3c(No.42)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図84 4a-4c(No.41)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～5列となる。分野壁孔は窓状となる。コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

(4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図84 5a-5c(No.76)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性

が高い。

(5) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図84・85 6a-6c(No.87)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1～6細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(6) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図85 7a-7c(No.20)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。

表10 一色城跡出土木材の樹種同定結果

樹種/器種	ま		木		角		竹		合計	
	漆器	曲物	札	折敷	板	状	角材	木製		
モミ属								1	3	4
マツ属複維管束亜属					1	1			1	4
コウヤマキ										1
ヒノキ		1	1	1	1	2	2	2	6	1
サワラ									7	1
アスナロ						1				2
カヤ										1
針葉樹樹皮										1
サクラ属										2
バラ属										1
クリ						1				1
ブナ属		1								1
コナラ属アカガシ亜属										3
コナラ属コナラ節								1		1
ハンノキ属ハンノキ亜属										6
カバノキ属						1				1
ヤナギ属										3
カエデ属										3
トチノキ		3								3
ムクロジ										1
ハイノキ属										1
マタタビ属										1
広葉樹樹皮										1
タケ亜科										1
総計	4	1	1	1	1	2	1	3	3	15
										3
										1
										1
										2
										3
										2
										1
										2
										40
										1
										1
										90

針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油分が多く、耐朽性に優れている。

(7) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図85 8a-8c(No.48)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～5細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個みられる。また、仮道管の内壁には2本1対のらせん肥厚がみられる。カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で、弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(8) 針葉樹樹皮 *Conifer Bark* 図85 9a(No.12)

篩部細胞が放射組織に並ぶ針葉樹の樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

(9) サクラ属(広義) *Prunus s.l.*バラ科 図85 10a-10c(No.25)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(10) バラ属 *Rosa* バラ科 図85 11a-11c(No.7)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。バラ属にはノイバラやヤマイバラなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉性のつる性植物である。現在では材利用は行われていない。

(11) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図85・86 12a-12c(No.83)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(12) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図86 13a-13c(No.2)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～10列である。ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(13) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図86 14a-14c(No.22)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(14) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図86 15a-15c(No.52)、16a(No.33)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が、火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(15) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科 図86・87 17a-17c(No.5)、18a-18c(No.32)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと集合放射組織がみられる。ハンノキ属ハンノキ亜属にはヤマハンノキやハンノキなどがあり、温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。ヤマハンノキは山林部に、ハンノキは平地の湿地や河川などの湿潤地に多い。材の重さは中庸で、切削加工なども中庸から容易である。

(16) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図87 19a-19c(No.64)

中型の道管が単独または2～4個放射方向に複合し

表11 一色城跡出土木材の樹種同定結果

試料No.	調査区	グリッド	遺構	遺物No.	器種	樹種	木取り	時期	年代測定番号
1	19Ba	1201	464SD下層 W1	d272	漆器椀	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44546
2	20B1	1211	230SD W12	d780	漆器椀	ブナ属	横木取り	戦国時代	PLD-44547
3	20B1	1110	230SD下層 W13	d879	漆器椀	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44548
4	20C1	1207	056SD W20	d010	漆器椀	トチノキ	横木取り	戦国時代	PLD-44549
5	19Ba	1201	464SD		自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	割れ	戦国時代	
6	19Ba	1201	464SD		自然木	ヤナギ属	芯持丸木	戦国時代	
7	19Ba	1201	464SD		自然木	バラ属	芯持丸木	戦国時代	
8	19Ba	1201	464SD		自然木	タケ亜科	丸	戦国時代	
9	19Ba	1201	464SD		自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木	戦国時代	
10	19Ba	1201	464SD		自然木	ヤナギ属	芯持丸木	戦国時代	
11	19Ba	1201	464SD		自然木	サワラ	割れ	戦国時代	
12	19Ba	1201	464SD		自然木	針葉樹樹皮	割れ	戦国時代	
13	19Ba	1201	464SD		自然木	ヤナギ属	芯持丸木	戦国時代	
14	19Ba	1201	464SD		自然木	モミ属	割れ	戦国時代	
15	19Ba	1201	464SD		自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	戦国時代	
16	19Ba	1201	464SD		自然木	モミ属	芯持丸木	戦国時代	
17	19Ba	1201	464SD		自然木	サクラ属	芯持丸木	戦国時代	
18	19Ba	1201	464SD		自然木	モミ属	割れ	戦国時代	
19	19Ba	1201	464SD		自然木	カエデ属	芯持丸木	戦国時代	
20	19Ba	1201	464SD		自然木	アスナロ	芯持丸木	戦国時代	
21	19Ba	1201	464SD		自然木	タケ亜科	丸	戦国時代	
22	19Ba	1201	464SD		自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	戦国時代	
23	19Ba	1201	464SD		自然木	サワラ	割れ	戦国時代	
24	19Ba	1201	464SD		自然木	カエデ属	芯持丸木	戦国時代	
25	19Ba	1201	464SD		自然木	サクラ属	割れ	戦国時代	
26	19Ba	1201	464SD		自然木	ヒノキ	芯持丸木	戦国時代	
27	19Ba	1201	464SD		自然木	マタタビ属	芯持丸木	戦国時代	
28	19Ba	1201	464SD		自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	戦国時代	
29	19Ba	1201	464SD		自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木	戦国時代	
30	19Ba	1201	464SD		自然木	カエデ属	芯持丸木	戦国時代	
31	19Ba	1201	464SD		自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木	戦国時代	
32	19Ba	1201	464SD		自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木	戦国時代	
33	20A	1205	090SD	d368	自然木	コナラ属コナラ節	芯持丸木	戦国時代	
34	20C	1108	056SD	d026	自然木	アスナロ	芯持丸木	戦国時代	
35	20C	1106	090SD	d085	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
36	20C	1106	090SD	d083	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
37	19Ca	1296	194SD3段目	No.350	自然木	ハンノキ属ハンノキ亜属	芯持丸木	戦国時代	
38	19Ca	1299	194SD3段目	No.329	自然木	ヒノキ	芯持丸木	戦国時代	
39	20B	1210	320SD	-	木片	ヒノキ	板目	戦国時代	
40	20B	1210	230SD	d772	木片	広葉樹樹皮	樹皮	戦国時代	
41	20C	1108	056SD上層	-	自然木	コウヤマキ	割れ	戦国時代	
42	20C	1205	090SD	d111	自然木	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	戦国時代	
43	20C	1205	090SD	d118	自然木	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	戦国時代	
44	20C	1205	090SD	d110	自然木	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	戦国時代	
45	20C	1205	090SD	d110	自然木	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	戦国時代	
46	20C	1205	090SD	d082	自然木	ハイノキ属	芯持丸木	戦国時代	
47	20A	1205	090SD	d241	自然木	ヒノキ	割れ	戦国時代	
48	19Ba	1101・1201	464SD	No.707	木製品?	カギ	みかん割り	戦国時代	
49	19Ba	1101・1201	464SD	No.718	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
50	19Ba	1101・1201	464SD	No.709	板状	サワラ	板目	戦国時代	
51	19Ca	1297	194SD3段目	No.338	自然木	ムクロジ	芯持丸木	戦国時代	
52	19Ba	1101・1201	464SD	No.723	角材?	コナラ属コナラ節	みかん割り	戦国時代	
53	20C	1205・1206	090SD	d101	竹	タケ亜科	丸	戦国時代	
54	20B	1110	230SD下層	No.572	竹地下茎	タケ亜科	丸	戦国時代	
55	20C	1106	090SD	d084	板状	サワラ	板目	戦国時代	
56	20C	1207	090SD	d078	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
57	20C	1106	090SD	d129	板状	マツ属複雑管束亜属	板目	戦国時代	
58	20C	1206	090SD	d128	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
59	20C	-	090SD	No.154	板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
60	20C	1205	090SD	d105	板状?	サワラ	板目	戦国時代	
61	19Ba	1299	494SD大ベルト W10	686	角棒状木製品	モミ属	角材	戦国時代	
62	19Ba	1101・1201	464SD W3	720	板状木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
63	19Ba	1101・1201	464SD W2	725	箸	ヒノキ	芯去削出	戦国時代	
64	19Ba	1101・1201	464SD W8	729	扉	カバノキ属	みかん割り	戦国時代	
65	19Ba	1199・1298・1299	464SD W11	732	板状木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
66	19Bb	-	464SD W4	d268	木札状木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
67	19Bb	-	464SD W7	d270	木札状木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
68	19Bb	-	464SD W5	d271	角棒状木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
69	19Bb	-	464SD W6	d273	板状木製品	アスナロ	板目	戦国時代	
70	20A	1203	090SD下層 W32	d323	薄板状	サワラ	板目	戦国時代	
71	20B	1211	230SD W14	d714	折敷	ヒノキ	板目	戦国時代	
72	20B	-	230SD下層 W16	417	曲物	ヒノキ	板目	戦国時代	
73	20B	1210	230SD W17	d769	薄板状	ヒノキ	板目	戦国時代	
74	20B	1111	230SD W15・18	d787	まな板・札?	ヒノキ	板目	戦国時代	
75	20B	1110	230SD W19	d793	棒状	ヒノキ	角材	戦国時代	
76	20C	1207	056SD(3) W21	d011	板へら状	ヒノキ	板目	戦国時代	
77	20C	1106・1206	090SD下層 W26	d064	木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
78	20C	1106	090SD下層 W31	d089	木製品	ヒノキ	板目	戦国時代	
79	20C	1205・1206	090SD下層 W30・33	d101	建築部材	ヒノキ	板目	戦国時代	
80	20C	1106	090SD下層 W28	d109	薄板状	マツ属複雑管束亜属	板目	戦国時代	
81	20C	1205	090SD下層 W34	d116	板状	サワラ	板目	戦国時代	
82	20C	1205	090SD下層 W36	d119	建築部材	ヒノキ	芯持丸木	戦国時代	
83	20C	1205・1206	090SD下層 W35	d122	建築部材	クリ	芯持丸木	戦国時代	
84	20C	1206	090SD下層 W29	d135	板状	サワラ	板目	戦国時代	
85	20C	1106	090SD下層 W27	d068	板状	サワラ	板目	戦国時代	
86	20C	1106	090SD下層 W37	d080	角材?	マツ属複雑管束亜属	半割	戦国時代	
87	20C	1205	090SD下層 W25	d100	板状	サワラ	板目	戦国時代	
88	20C	1205	090SD下層 W22	d103	角棒状木製品	サワラ	板目	戦国時代	
89	20C	1205	090SD下層 W23	d117	板状	タケ亜科	丸	戦国時代	
90	20C	1205	090SD下層 W24	d133	板状	サワラ	板目	戦国時代	

てやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10～20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～4列である。カバノキ属にはマカンバやダケカンバ、ウダイカンバなどがあり、代表的なマカンバは北海道から本州北中部の温帯の、日当たりの良い場所に生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で強靱だが、切削加工は容易である。

(17) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図87 20a-20c(No.6)、21a-21c(No.13)
小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、単列となる。ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で、強度が強く、切削加工などは容易である。

(18) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 図87 22a-22c(No.24)
小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(19) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 図87・88 23a-23c(No.1)、24a-24c(No.4)
小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、単列である。また、放射組織は層階状に配列する。トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

(20) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図88 25a-25c(No.51)
年輪の始めにやや大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が数個複合して配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、連合翼状～帯状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で幅1～4列となる。ムクロジは関東、新潟、富山県境以西の本州、四国、九州に分布す

る落葉高木の広葉樹である。材は中庸ないしやや重硬である。

(21) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 図88 26a-26c(No.46)
小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は40段以上の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～3列となる。また、放射組織の多列部と単列部は同じ幅となる。

ハイノキ属にはハイノキやクロバイなどがあり、代表的なクロバイは房総・伊豆半島以西の本州、四国、九州などの暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬だが、切削加工などは困難ではない。

(22) マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科 図88 27a-27c(No.27)
年輪の始めに大型の道管が1～2列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管がほぼ単独で配列する半環孔材である。道管は、単穿孔と40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端2～4列が直立する異性で、1～3列となる。マタタビ属にはマタタビやサルナシなどがあり、代表的なマタタビは北海道、本州、四国、九州などの山地、原野、丘陵地などに群生する、落葉つる性木本である。材は、現在では割り裂いてヒゴとし、かごなどの原材料として利用される。

(23) 広葉樹樹皮 *Broadleaf-wood Bark* 図88 28a(No.40)
師管要素と放射組織で構成される広葉樹の樹皮である。放射組織は単列である。対象標本が少なく、同定には至っていない。

(24) タケ亜科 *Subfam. Bambusoideae* イネ科 図88 29a(No.8)、30a(No.53)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の科である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本には12属がある。

考察 漆器椀の木胎は、ブナ属とトチノキであった。ブナ属は堅硬な材で、トチノキは軽軟な材であるが、共に漆器の木胎として多く利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。愛知県内で確認されている戦国時代の漆器椀は、ブナ属とトチノキが多く(伊東・山田編, 2012)、傾向は一致する。

曲物とまな板・札?、箸、折敷、木札状木製品は、い

ずれもヒノキであった。ヒノキは木理直通で、まっすぐに生育しする加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。愛知県内で確認されている戦国時代の曲物や箸、折敷、木札では、いずれもヒノキが多く（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

扉はカバノキ属、建築部材はヒノキとクリであった。クリとカバノキ属は共に堅硬な樹種であるが、カバノキ属は加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。愛知県内で確認されている戦国時代の扉にはマツ属複雑管束亜属が、建築部材全般にはマツ属複雑管束亜属やヒノキを中心とした針葉樹が多く用いられている（伊東・山田編，2012）。

板状木製品および板状、薄板状、板材？、板へら状などの板状の木製品、棒状および角材？、角棒状木製品などの棒状の木製品、木製品および木製品？、木片では、モミ属やマツ属複雑管束亜属、ヒノキ、サワラ、アスナロ、カヤ、広葉樹樹皮がみられた。いずれも木理直通でまっすぐに生育する加工性の良い樹種である。愛知県内で確認されている戦国時代の板や加工材などには、マツ属複雑管束亜属やヒノキ、サワラを中心とした針葉樹が多く利用されており（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

自然木では、モミ属とマツ属複雑管束亜属、コウヤマキ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、針葉樹樹皮、サクラ属、バラ属、アカガシ亜属、コナラ節、ハンノキ亜属、ヤナギ属、カエデ属、ムクロジ、ハイノキ属、マタタビ属、タケ亜科が、竹および竹地下茎ではタケ亜科がみられた。モミ属やコウヤマキ、ヒノキ、サワラ、アスナロなどの針葉樹と、サクラ属やバラ属、コナラ節、カエデ属、マタタビ属などの落葉広葉樹、アカガシ亜属やハイノキ属などの常緑広葉樹の混交林が遺跡周辺に生育していたと考えられ、水辺にはハンノキ亜属やヤナギ属、ムクロジなどの水湿性の樹木も生育していたと考えられる（佐竹ほか，1989）。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。
佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫（1989）日本の野生植物 木本Ⅰ，321p，平凡社。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。
佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫（1989）日本の野生植物 木本Ⅰ，321p，平凡

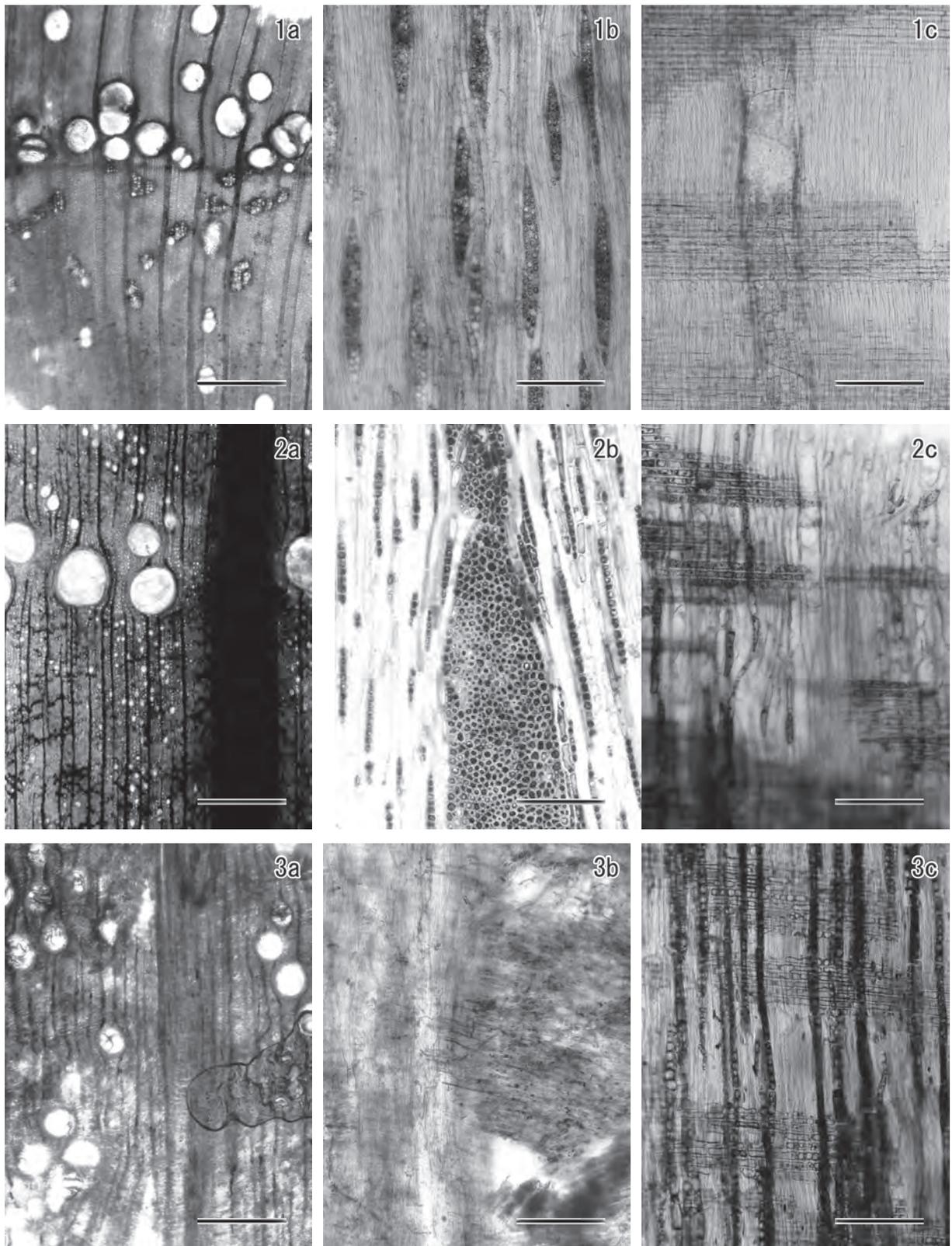


図82 一色城跡出土の自然木の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. クワ属(No. 6)、2a-2c. コナラ属コナラ節(No. 2)、3a-3c. コナラ属アカガシ亜属(No. 8)
a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

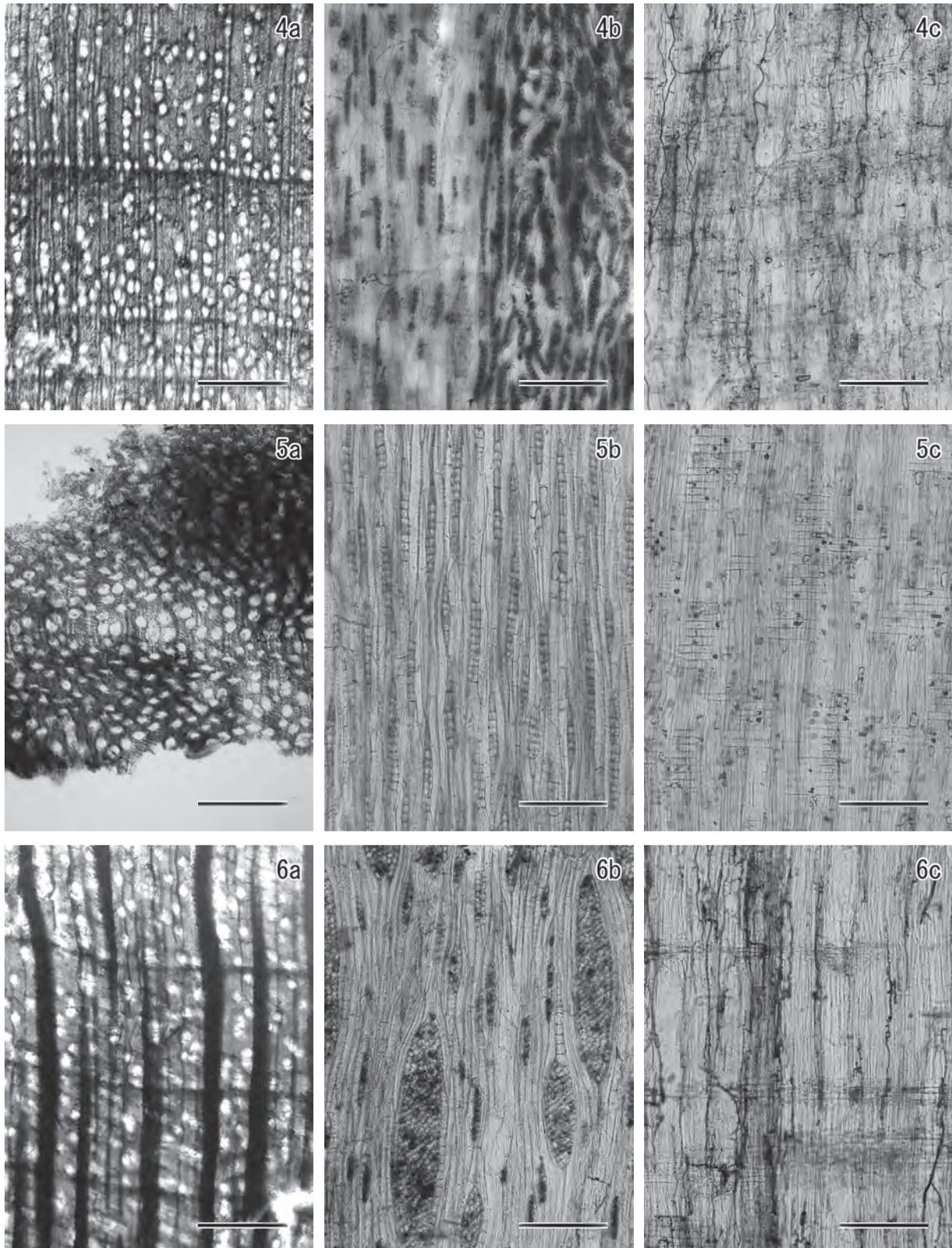


図83 一色城跡出土の自然木の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. ハンノキ属ハンノキ亜属(No. 5)、5a-5c. ヤナギ属(No. 9)、6a-6c. カエデ属(No. 3)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

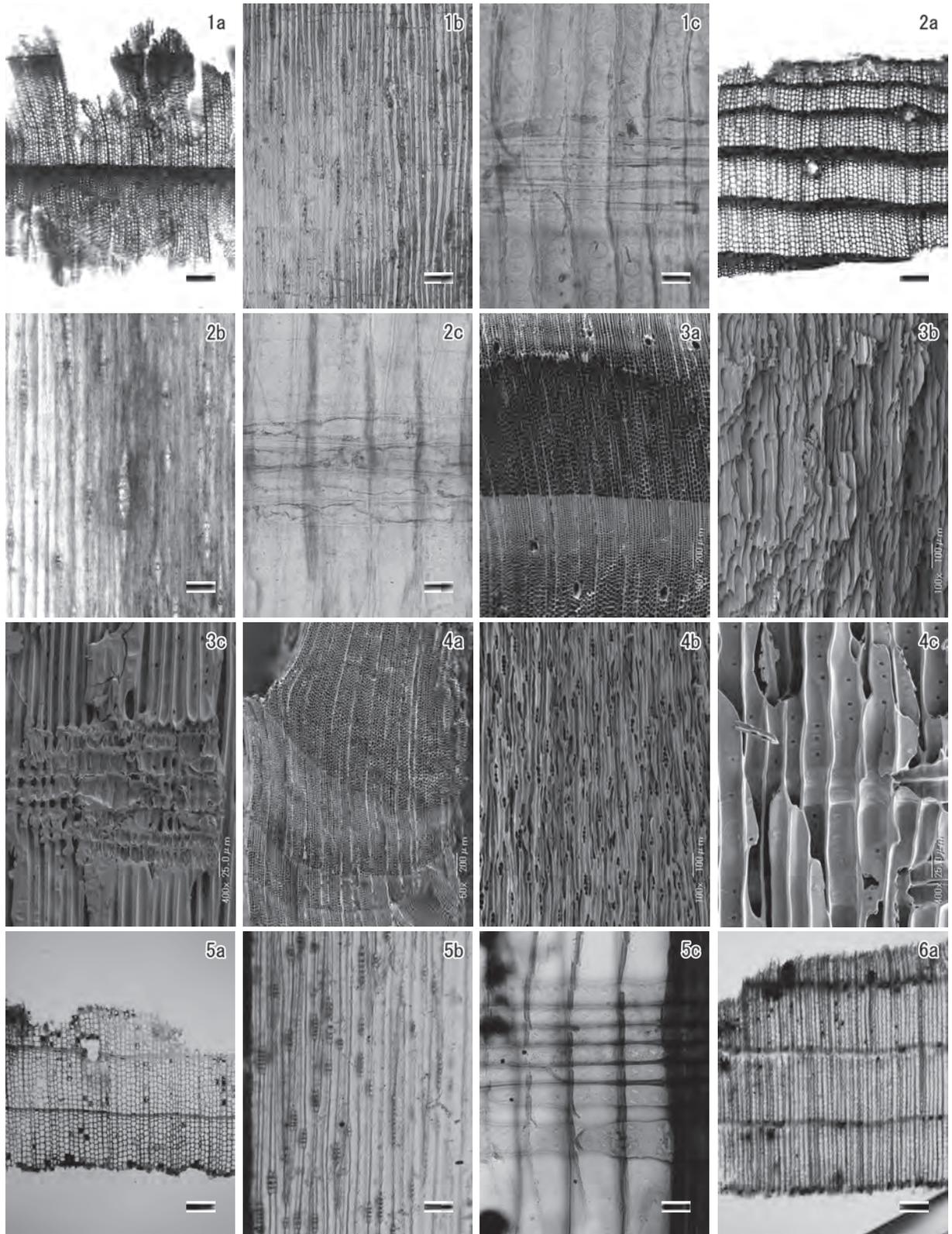


図84 一色城跡出土の木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c. モミ属(No. 14)、2a-2c. マツ属復維管束亜属(No. 80)、3a-3c. マツ属復維管束亜属(No. 42)、4a-4c. コウヤマキ(No. 41)、5a-5c. ヒノキ(No. 76)、6a. サワラ(No. 87)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=針:25 μm)

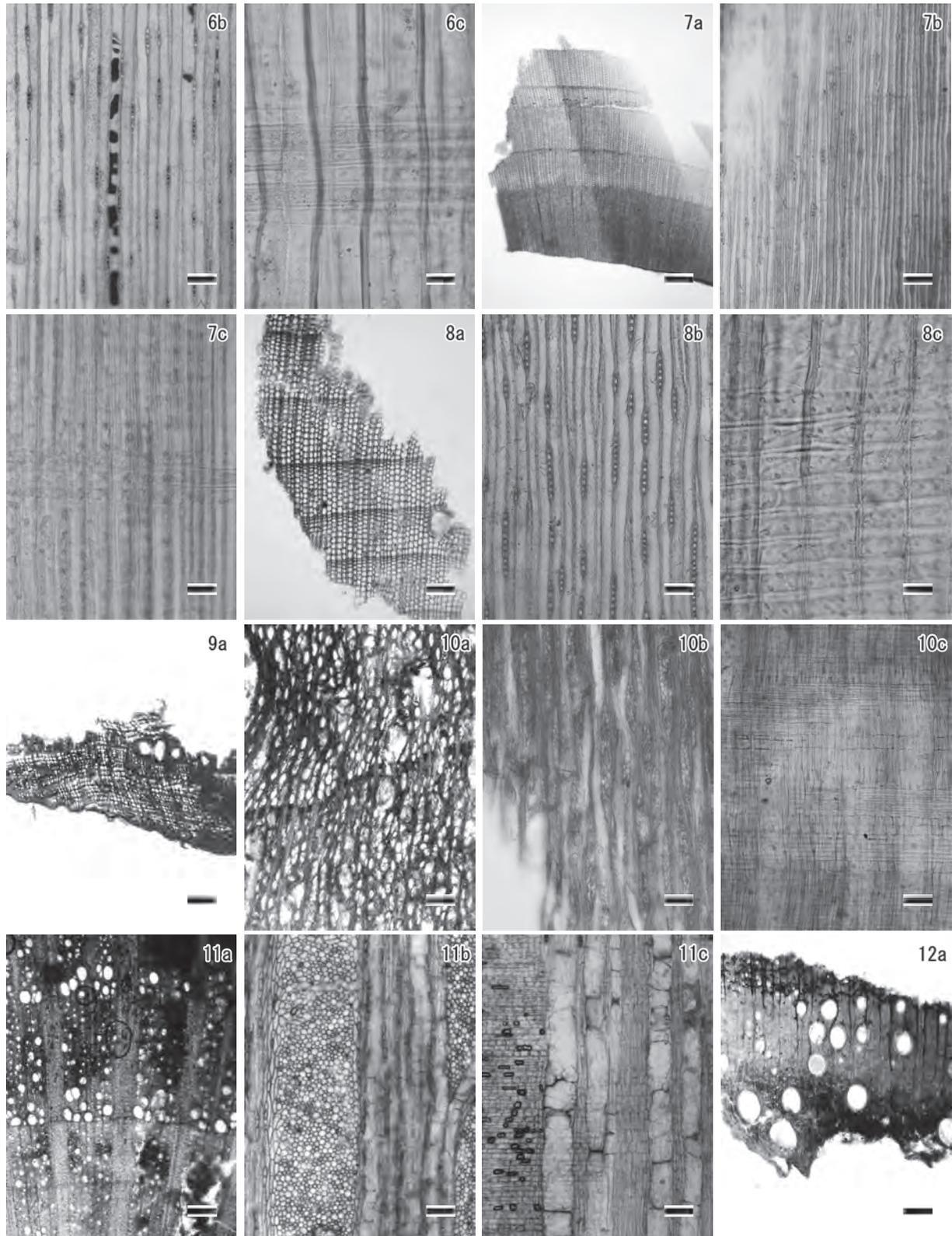


図85 一色城跡出土の木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真(2)

6b-6c. サワラ(No. 87)、7a-7c. アスナロ(No. 20)、8a-8c. カヤ(No. 48)、9a. 針葉樹樹皮(No. 12)、10a-10c. サクラ属(No. 25)、11a-11c. バラ属(No. 7)、12a. クリ(No. 83)

a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=6-8:25 μm ・9-11:100 μm)

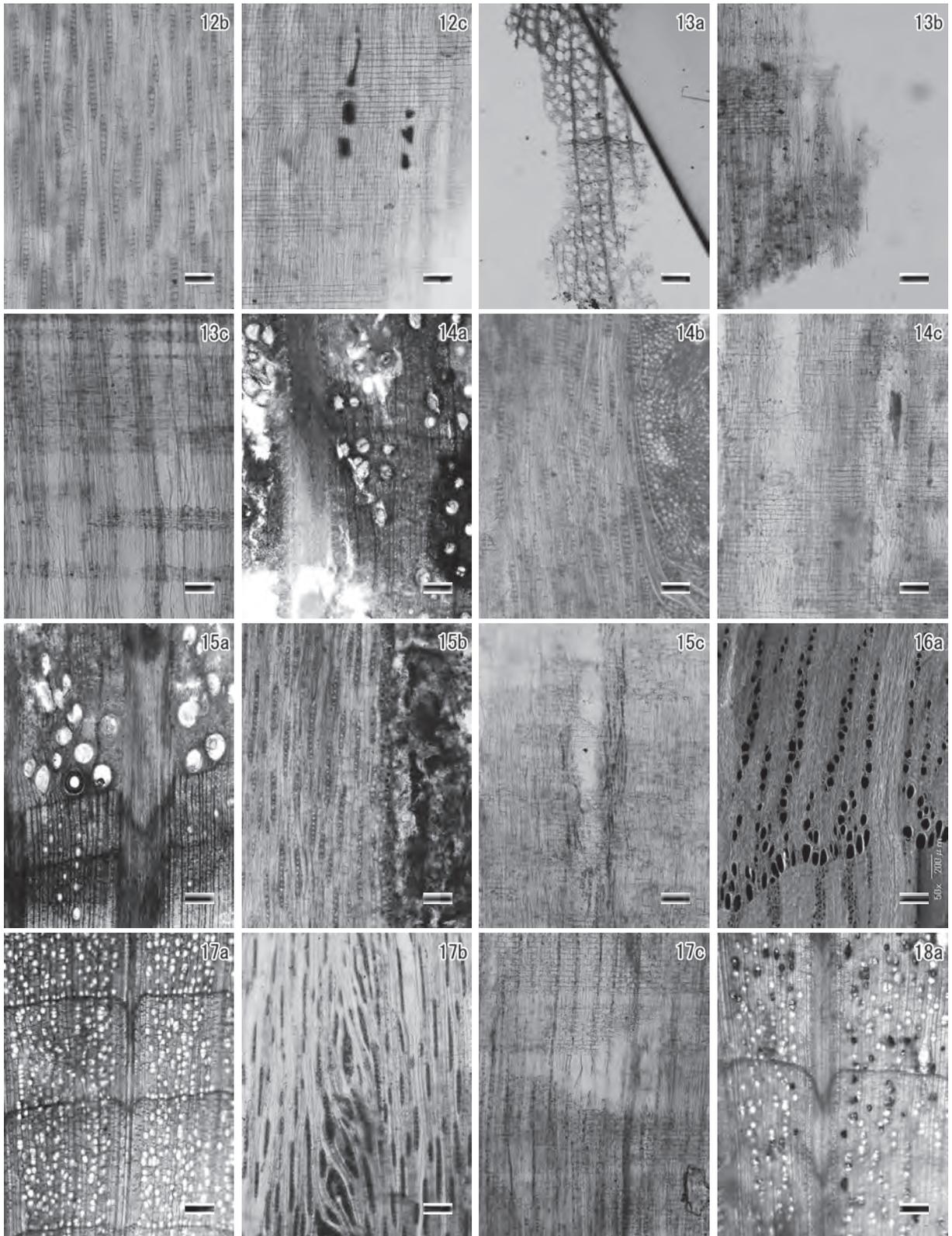


図 86 一色城跡出土の木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (3)

12b-12c. クリ (No. 83)、13a-13c. ブナ属 (No. 2)、14a-14c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 22)、15a-15c. コナラ属コナラ節 (No. 52)、16a. コナラ属コナラ節 (No. 33)、17a-17c. ハンノキ属ハンノキ亜属 (No. 5)、18a. ハンノキ属ハンノキ亜属 (No. 32)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

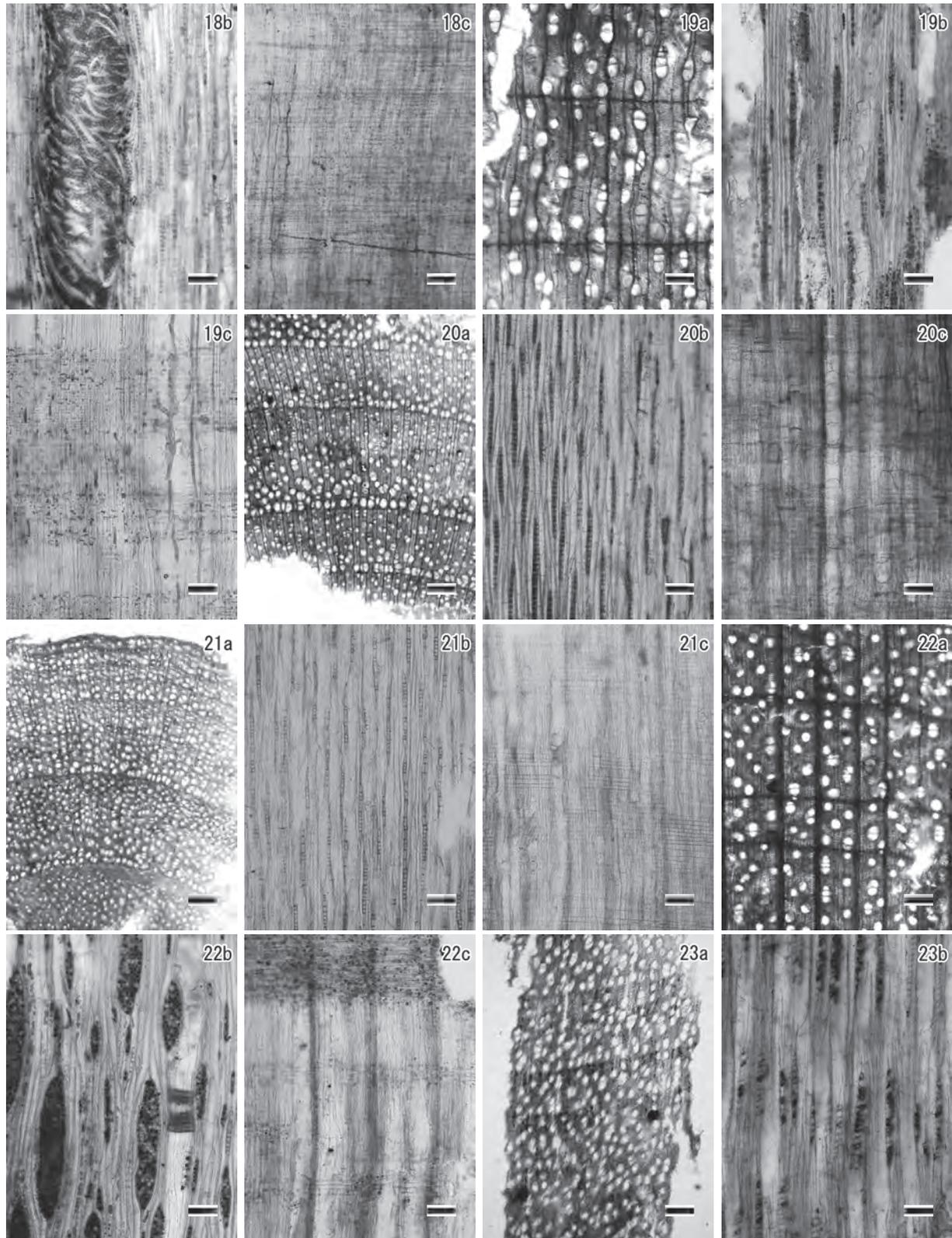


図 87 一色城跡出土の木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真(4)

18b-18c. ハンノキ属ハンノキ亜属 (No. 32)、19a-19c. カバノキ属 (No. 64)、20a-20c. ヤナギ属 (No. 6)、21a-21c. ヤナギ属 (No. 13)、22a-22c. カエデ属 (No. 24)、23a-23b. トチノキ (No. 1)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

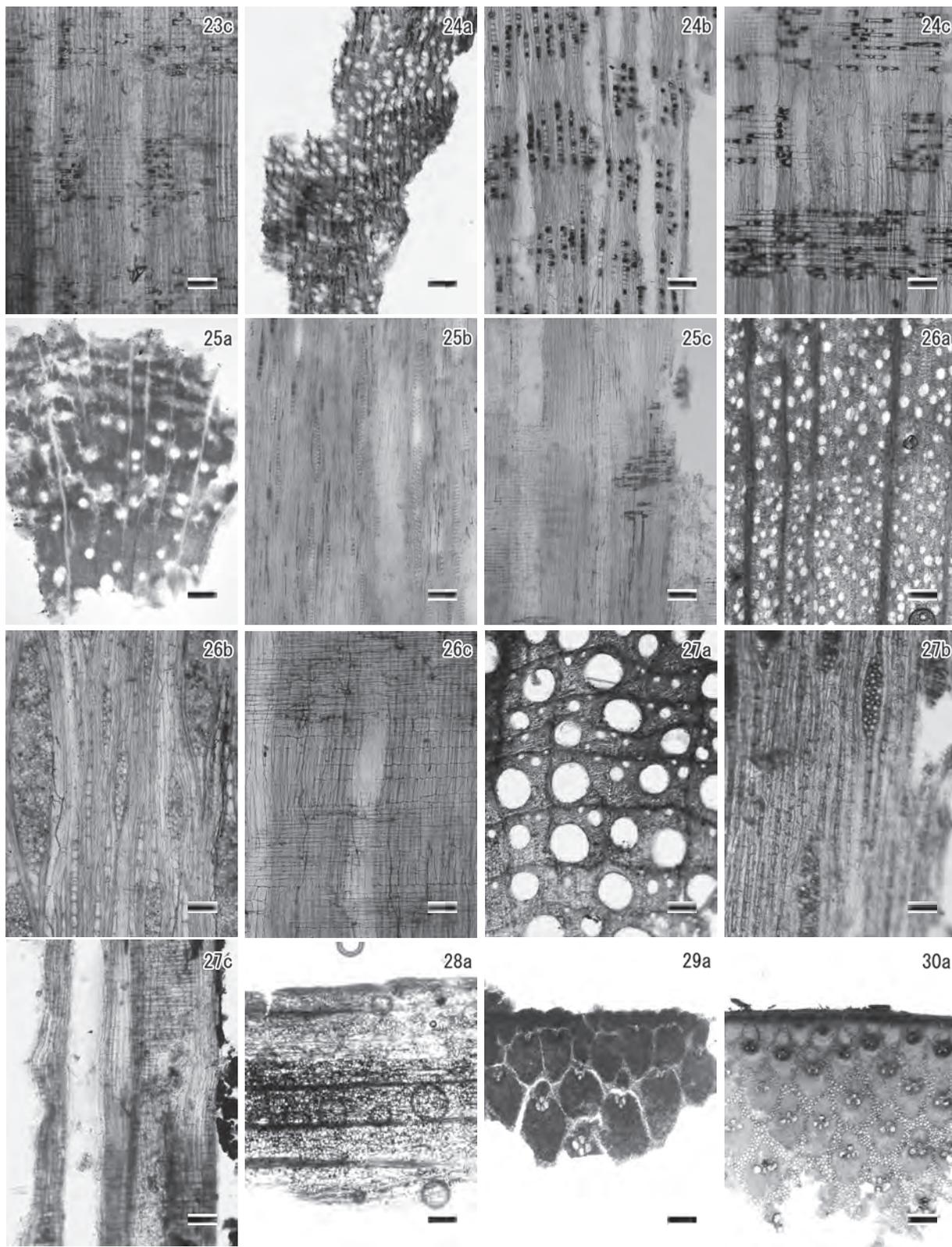


図 88 一色城跡出土の木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 (5)

23c. トチノキ (No. 1)、24a-24c. トチノキ (No. 4)、25a-25c. ムクロジ (No. 51)、26a-26c. ハイノキ属 (No. 46)、
27a-27c. マタタビ属 (No. 27)、28a. 広葉樹樹皮 (No. 40)、29a. タケ亜科 (No. 8)、30a. タケ亜科 (No. 53)
a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

第3節 一色城跡における層序と古環境

はじめに 一色城跡にて試錐調査を実施した。また、各調査区にて深掘を実施し、地下層序を観察する機会を得た(図91)。本論ではその層序解析、火山灰分析および放射性炭素年代測定の結果のみを報告する。

試料および分析方法 各調査区で地表から、あるいは遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、調査地点の地下層序を解析するため試錐(ボーリング掘削)調査を実施した。試錐調査は株式会社アーキジオに依頼した。油圧式ロータリー型試錐機を使用し、コアパックスリーブ内蔵型サンプラー(φ66mm)によりオールコアで実施した。また、コア資料および各調査区の層序断面からは火山灰分析、放射性炭素年代測定の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

火山灰分析の試料は古澤(2003)の方法を基本に前処理を行なった。はじめにナイロン製#255メッシュシート(糸径43μm、オープニングワイド57μm)を用い、流水中で洗浄した。残渣を#125メッシュシート(糸径70μm、オープニングワイド133μm)を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ(1/8~1/16)に粒度調整した試料を超音波洗浄器により洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉤物観察用スライドガラスの上に硬化後屈折率が1.545程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を攪拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を1.545とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子について偏光顕微鏡(100倍)を用いて観察し、火山灰純層の場合300粒子(1000粒子の平均値)を古澤(2003)の区別手法にしたがって区分した。また、火山灰固有で含有率の低い粒子

の産出層準を特定するため3000粒子(10000粒子の平均値)の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置”MAIOT“を使用した。測定精度は火山ガラスで±0.0001、斜方輝石および角閃石で±0.0002程度である(古澤,1995)。火山ガラスの主成分分析についてSEMはHITACHI製SU1510を使用し、エネルギー分散型X線マイクロアナライザー(EDX)はHORIBA製EMAX ENERGY EX-270を用いた。火山灰分析は古澤が行なった。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は125μmの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)にて測定した。測定された14C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した14C濃度を用いて14C年代を算出した。14C年代値の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。14C年代の暦年代への較正にはOxCal4.4(較正曲線データ:INTCAL20)を使用した。なお、2σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する95.45%信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループが行なった。

分析結果(試錐層序) 2020(令和2)年に19Cb区で深度27.26mの試錐を実施した(図92)。下位層より順に記す。標高-24.49m~-24.23mはシルト質極細粒砂層からなる。砂粒子の淘汰は良好である。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の下部、標高-24.47mで放射性炭素年代測定用の試料1を採取し、10159-9976

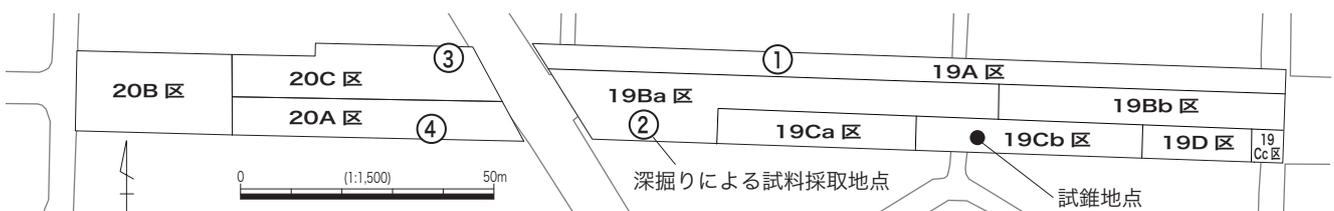


図89 試錐調査地点と地下層序観察地点

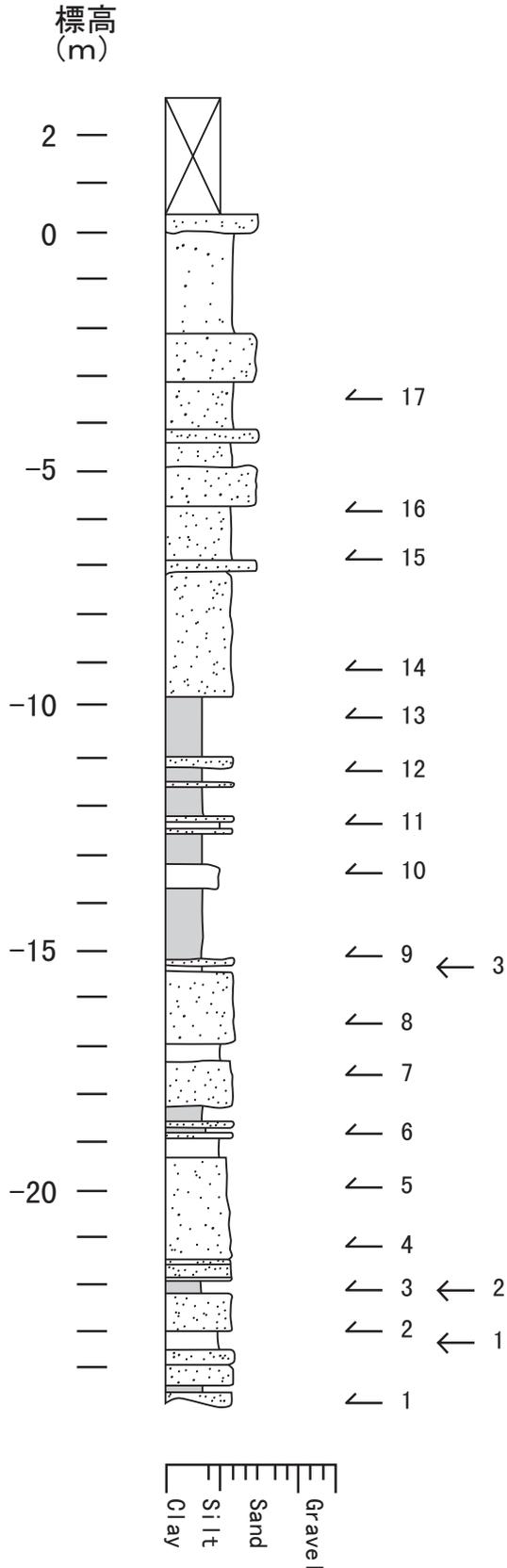


図90 試錐地点(19Cb区)における地質柱状図
(片矢印は放射性炭素年代測定用試料の採取層準、
両矢印は火山灰分析試料の採取層準を示す)

cal BP (PLD-48695) の数値年代を得た。標高 -24.23m ~ -24.14m はシルト質粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高 -24.14m ~ -23.36m は層厚 0.03m ~ 0.30m のシルト質極細粒砂層や極粗粒砂が累重する。砂粒子の淘汰は良好である。それぞれの単層は塊状・均質で堆積構造は認められない。標高 -23.36m ~ -22.97m はシルト層と砂質シルト層からなる。単層は塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の中央部(標高 -23.18m) で火山灰分析用の試料 1 を採取したが、火山灰は検出できなかった。標高 -22.97m ~ -22.30m は極細粒砂層やシルト質極細粒砂層が累重する。それぞれの単層は塊状・均質で堆積構造はみられない。標高 -22.97m ~ -22.83m の極細粒砂層には粘土層をレンズ状に挟む層準がみられ、標高 -22.93m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 2 を採取し、9678-9538 cal BP (PLD-48694) の年代値であった。標高 -22.30m ~ -22.03m はシルト層とシルト質粘土層との互層である。それぞれの単層の層厚は約 10cm である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高 -22.27m のシルト層の層準から火山灰分析用の試料 2 を採取し、始良 Tn 火山灰(AT) 起源の火山ガラスが地層中に混在していることがわかった。標高 -22.03m ~ -19.43m はシルト質極細粒砂層と極細粒砂層が互層し、その地層間に層厚 4cm のシルト質粘土層や粘土質シルト層を挟む。標高 -22.08m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 3 を、標高 -21.23m ~ -21.10m の極細粒砂混じり粘土層の標高 -21.20m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 4 を、標高 -19.96m ~ -19.91m の粘土質シルト層の標高 -19.93m の層準から放射性炭素年代測定用の試料 5 を採取した。試料 3 は 9032-8975 cal BP (PLD-48693)、試料 4 は 9140-9006 cal BP (PLD-48692)、試料 5 は 9543-9482 cal BP (PLD-48691) の年代値を得た。標高 -19.43m ~ -18.98m は砂質シルト層と粘土質シルト層との互層である。塊状で堆積構造はみられない。標高 -18.98m ~ -18.86m はシルト質極細粒砂層である。堆積構造は認められない。標高 -18.86m ~ -18.79m は砂混じりの粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。標高 -18.83m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 6 を採取し、8598-8447 cal BP (PLD-48690) の数値年代であった。標高 -18.79m ~ -18.63m はシルト質極細粒砂層である。堆積構造はみられない。標高 -18.63m ~

-18.36mはシルト質粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。標高-18.36m～-17.71mはシルト質細粒砂層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高-17.71m～-17.35mは細粒砂層からなる。堆積構造は認められない。地層中には破壊された貝殻片の分散がみられる。本層の下部、標高-17.63mの層準で放射性炭素年代測定用の試料7を採取し、9473-9294 cal BP (PLD-48689)の数値年代を得た。標高-17.35m～-15.23mはシルト質細粒砂層がみられる。塊状で堆積構造はみられない。標高-17.08mの層準から-15.23mまでには細片化した貝殻が多く検出される。本層の標高-16.55mの層準から放射性炭素年代測定用の試料8を採取し、8039-7937 cal BP (PLD-48688)の年代値であった。標高-15.36mの層準から火山灰分析用の試料3を採取した。これらのうち標高-15.36mの層準から採取した火山灰分析用の試料3から鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)起源の火山ガラスが検出された。標高-15.23m～-13.77mはシルト質粘土層と粘土層が累重する。塊状で堆積構造はみられない。標高-15.23m～-14.43mまでには径1～2mmの貝殻片の分散がみられる。標高-14.43m～-13.77mまでは貝殻片は含まれず塊状の粘土層が優占する。本層の標高-15.12mで放射性炭素年代測定用の試料9を採取し、7134-7003 cal BP (PLD-48687)の数値年代を得た。標高-13.77m～13.31mは砂混じり粘土質シルト層からなる。塊状で堆積構造はみられない。極細粒砂層の薄層をレンズ状に挟む。本層の標高-13.43mの層準で放射性炭素年代測定用の試料10を採取し、6747-6627 cal BP (PLD-48686)数値年代であった。標高-13.31m～-12.67mはシルト質粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。極細粒砂の薄層をレンズ状に挟む層準がみられる。標高-12.67m～-12.59mは砂質シルト層、標高-12.59m～12.53mはシルト質細粒砂層からなる。塊状で堆積構造はみられない。標高-12.53m～12.35mは粘土質シルト層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の標高-12.41mの層準で放射性炭素年代測定用の試料11を採取し、6740-6601 cal BP (PLD-48685)の年代であった。標高-12.35m～-9.69mは砂質シルト層、シルト質粘土層、粘土質シルト層の層厚2cm～10cmの薄層が累重する互層となる。それぞれの単層は塊状・均質で堆積構造は認められない。標高-11.26mの層準から放

射性炭素年代測定用の試料12を、標高-10.13mの層準から放射性炭素年代測定用の試料13を採取した。試料12は6651-6488 cal BP (PLD-48684)、試料13は6740-6555 cal BP (PLD-48683)の年代値であった。標高-9.69mよりも上位の地層は砂粒子の卓越する層相となり、標高0.26mまでは中粒砂層を主体として粗粒砂層を間に挟む。粘土やシルトと比較して粗粒な堆積物が卓越する。砂層は塊状で堆積構造はみられない。標高-9.69m～-8.88mのシルト質細粒砂～中粒砂層のレンズ状に挟まれたシルト質粘土層からなる層相で標高-9.14mの層準で放射性炭素年代測定用の試料14を採取し、6503-6395 cal BP (PLD-48682)の数値年代を得た。標高-6.87m～-6.63mの粘土層と中粒砂層との互層において標高-6.83mの層準で放射性炭素年代測定用の試料15を、標高-5.93m～5.81mの中粒砂と腐植層との互層において、標高-5.88mの層準で放射性炭素年代測定用の試料16を、標高-3.53m～-3.48mの腐植の混じる中粒砂層の標高-3.50mの層準で放射性炭素年代測定用の試料17を採取した。試料15は6564-6436 cal BP (PLD-48681)、試料16は2715-2459 cal BP (PLD-48680)、試料17は2719-2488 cal BP (PLD-48679)の数値年代がえられた。標高0.26m～2.77mは人工的な盛土であり、本層の頂部(標高2.77m)が地表となる。

各調査区での試料採取 19A区で1地点、19Ba区で1地点、20Aで1地点、20C区で1地点の計4地点において、調査区の壁面あるいは深掘により露出した地層断面の、層相の観察と科学分析試料の採取を行なった。詳細を順に記す。

19A区において、調査区北壁の地層断面に現れた遺構128SDの横断面がみられる場所で試料を採取した(図2・図3)。下位層の標高1.31m～1.68mまでにみられる地層が遺構128SD内の堆積物にあたる。標高1.31m～1.41mは灰褐色の粘土質シルト層である。標高1.41m～1.68mまでは同じ色調(褐色)のシルト質粘土層が累重する。遺構128SDに関わる試料として試料1(標高1.33m)、試料2(標高1.43m)、試料3(標高1.53m)、試料4(標高1.57m～1.60m)がある。試料1と試料2の放射性炭素年代測定を実施し、試料1は2304-2230 cal BP (PLD-48671)、試料2は1310-1277 cal BP (PLD-48672)の数値年代であった。標高1.68m～1.83m



標高 (m) ①
3.0 —

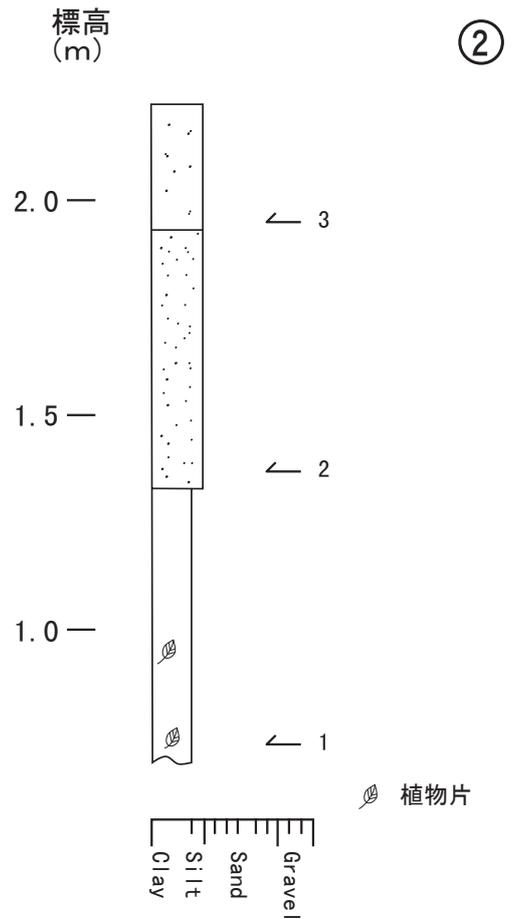
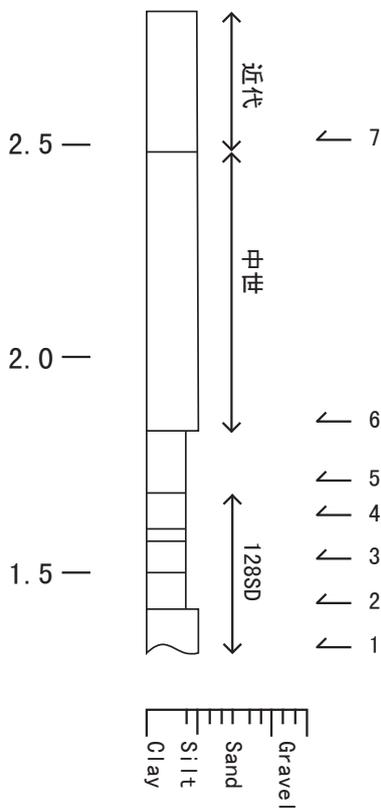


図91 19A区北壁における遺構128SDを含む地質柱状図(左)と19Ba区の深掘における地質柱状図(右)
(数字は科学分析用の試料採取層準を示す、上掲はその写真)

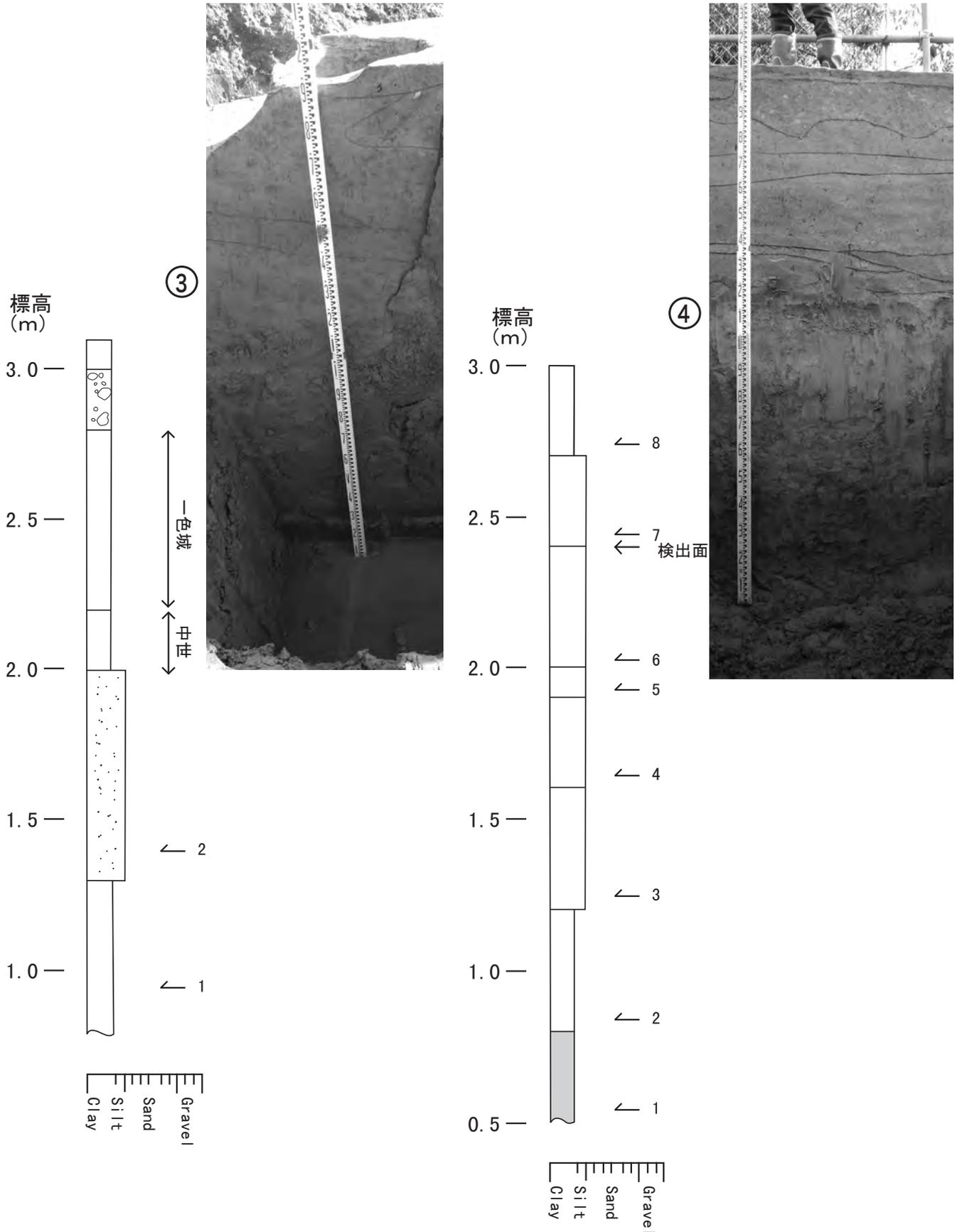


図92 20C区北東隅の深掘における地質柱状図(左)と20A区南壁の深掘における地質柱状図(右)
(数字は科学分析用の試料採取層準を示す、上掲はその写真)

は淡褐色を呈するシルト質粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の下部(標高1.71m)で試料5を採取した。標高1.83m～2.48mは黄褐色の粘土質シルト層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層より出土する考古遺物より本層は中世の地層と推定される。本層の下部(標高1.85m)で試料6を採取した。標高2.48m～2.81mは黄褐色のシルト層である。塊状で堆積構造はみられない。本層より出土する遺物より近代の地層であると推定できる。本層の下部(標高2.51m)で試料7を採取した。

19Ba区西端で検出された戦国時代の溝の東側縁辺で深掘を実施した(図2・図4)。下位層より、標高0.69m～1.33mは灰色を呈する粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。地層中には植物片が分散して含まれる。本層の下部(標高0.73m)で試料1を採取した。標高1.33m～1.93mは褐色の中粒砂の混じるシルト層からなる。シルト層は塊状で堆積構造はみられない。砂粒子の淘汰は良好である。本層の下部(標高1.37m)で試料2を採取した。標高1.93m～2.23mは灰色を呈する砂混じりの粘土質シルト層である。塊状で堆積構造はみられない。本層の頂部(標高2.23m)が地表となる。本層の下部(標高1.95m)で試料3を採取した。

20A区では調査区西端において深掘を実施した(図2・図6)。下位層より、標高0.79m～1.31mは灰色を呈するシルト質粘土層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の標高0.94mの層準より試料1を採取し、2121-1997 cal BP (PLD-48675)の数値年代を得た。標高1.31m～1.99mは灰褐色の砂質シルト層からなる。含まれる砂粒子の淘汰は良い。塊状で堆積構造はみられない。本層の下部(標高1.41m)試料2を採取し、2008-1923 cal BP (PLD-48676)の年代値であった。標高1.99m～2.19mは褐色の粘土層よりなる。また、標高2.19m～2.79mも同じく褐色の粘土層となる。塊状で堆積構造はみられない。出土する遺物より標高1.99m～2.19mでみられた粘土層が中世のころ、標高2.19m～2.79mの粘土層は一色城の時代に相当する。標高2.79m～2.99mはブロック状の粘土塊を含む褐色粘土層、それを覆う標高2.99m～3.09mは灰色の粘土層である。両地層とも堆積構造は破壊されてしまい観察されない。標高2.99m～3.09mの粘土層の頂部(標高3.09m)が地表となる。

20C区では調査区東端で深掘を実施した(図2・図6)。下位層より、標高0.50m～0.80mは黒褐色の粘土層からなる。塊状で堆積構造はみられない。本層の下部(標高0.54m)で試料1を採取し、2540-2364 cal BP (PLD-48678)の数値年代であった。標高0.80m～1.20mは灰色の粘土層である。本層の下部(標高0.84m)で試料2を採取した。標高1.20m～1.90mは灰色のシルト層からなる。色調の差により標高1.20m～1.60mまでの1層と標高1.60m～1.90mの1層の2層に層序区分できる。それぞれの地層から試料3(標高1.24m)と試料4(標高1.64m)を採取した。標高1.90m～2.40mは褐色の粘土質シルト層からなる。色調の差により標高1.90m～2.00mまでの1層と標高2.00m～2.40mまでの1層の2層に層序区分できる。それぞれの地層から試料5(標高1.92m)と試料6(標高2.02m)を採取した。本層の標高2.40mの層準が遺構検出面となる。標高2.40m～2.70mは灰褐色を呈する粘土質シルト層である。堆積構造はみられない。本層の下部(標高2.44m)で試料7を採取した。標高2.70m～3.00mは暗褐色の粘土層である。本層の頂部(標高3.00m)は地表であり、発掘調査前には耕作土であった。本層の下部(標高2.74m)で試料8を採取した。

謝辞 本論を作成するにあたり、試錐調査では株式会社アーキジオにお世話になった。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループの伊藤茂氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomtadze氏・小林克也氏にお世話になった。図表の作成では国際文化財株式会社にお手伝いいただいた。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

(鬼頭 剛・古澤 明・株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ)
文献

古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.

古澤 明, 2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別, 地質雑, 109, 1-19.

石黒立人編, 2012, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集 長野北浦遺跡・塔の越遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター, 260p.
町田 洋・新井房夫, 2003, 新篇 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東京大学出版会, 336.

第4章 総括

第1節 一色城について

(1) 文献史料にみる一色城

尾張藩の地誌 第1章でも述べたように、一色城跡の発掘調査で検出された城館遺構の名称は伝わっていない。まずは文献史料で城跡の所在がどのように記されてきたのかを確認しておこう。最も古い史料が、尾張藩が作成した藩内各村のデータを書き上げた地誌『寛文村々覚書』である。寛文11(1671)年頃に成立したとされるので、情報収集期間も含めると概ね17世紀半ばの状況となる。当該史料の片原一色村の項には「古城(中略)橋本伊賀守居城(中略)今ハ畑ニ成」とあり、耕作地化した古城(廃城)跡の所在が確認できる。また城主として「橋本伊賀守」が併記されている。その後、幕末までに尾張藩などによって編纂された地誌類では同様の記述がなされているが、いずれもその規模や村の中での詳細位置については記されていない。

これに対して、一色城跡の位置を記す史料が江戸時代後記の村絵図(徳川林政史研究所蔵)である。片原一色

村の絵図によれば、光堂川より北側に「大日如来宮」があり、さらにその北側に「字古城跡」という記述がある(稲沢市教育委員会1982『近世村絵図 解説図』)。「大日如来宮」はもと天台宗であった善応寺に関連すると思われるが、現在の神明社に相当するであろう。したがってその北側に「古城跡」を想定することになる。「古城跡」地名は現存しないが、村絵図においてその西側には「字深曾」や「字馬出し」もあり、現地名との対比からみて「古城跡」の一部が今次発掘調査地点に重なる可能性が高い。

橋本伊賀守 一方、一色城主として記された橋本氏は代々伊賀守を名乗り、太田牛一が江戸時代初めに著した『信長公記』首巻において「信長十六、七、八までは別の御遊びは御座なく、(中略)橋本一巴師匠として鉄砲御稽古(以下略)」とある。また同書の永禄元(1558)年7月の岩倉城攻略にかかる浮野の戦いで岩倉方の林弥七郎(弓の名人)と激しい戦闘を繰り広げたことが記されている(生死不明)。その後、天正13(1585)年の『織

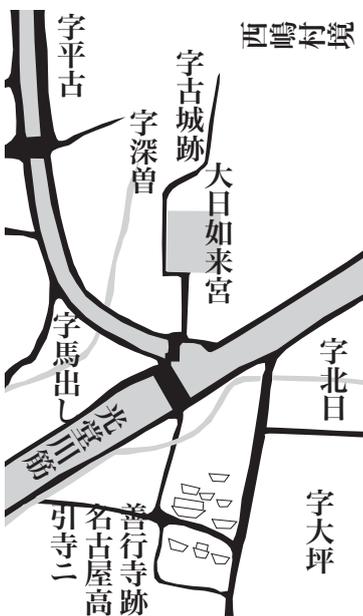


図93 片原一色村絵図北端部
(稲沢市教育委員会1982をもとに作成)

史料1 江戸時代の地誌類
にみる一色城跡

尾張志 一八四四年(天保十五) 序
片原一色城跡
かたはらいしきむらにあり。舊地は今田圃となる。橋本伊賀守の居城なりといひ傳へたり。伊賀守ハ三宅村ニ住て、この處をもかけ持にせし也。さらば持城をいふへし。府誌に橋本伊賀守居此と記せり。

尾張御行記 一八三二(文政五)年 成立

一 一色城 府志古城部目、在片原一色村。橋本伊賀守居之、今為田圃。覚書同之。悪水は光堂川へ落。

蓬州旧勝録 一七七九年(安永八) 自序

片原一色村 橋本伊賀守居城

張州府誌 一七五二(宝曆二)年 成立

一色城 在片原一色村。橋本伊賀守居之。今為田圃。
三宅城 在上三宅村。橋本伊賀守居之。今為田圃。又片原一色村有城虛云伊賀守所居。

片原一色 橋本伊賀守

尾州古城志 (愛知県図書館蔵本) 一七〇八(宝永五)年 跋

一 古城跡老ヶ所 先年橋本伊賀守居城之由、今ハ畑ニ成。

〔片原一色村誌 一八八八(明治二十二年) 上田正国著(傍線は永井)〕

橋本氏古城址

所在 上方。字古城。地租改正ノ際、深曾ト改ム。堀跡深キニヨルナルベシ。寛文九年西三月新田開墾検地帳ヲ案スルニ、内城総城トアリ。

現狀 圃トナリ、堀ハ田トナレリ。畑二丁三畝二十一歩、田一反二畝二十八歩、合二町一反六畝十九歩。

雑項 此処ハ橋本宣都寺・橋本入道寛勢・橋本伊賀守正秀・橋本伊賀守俊信・橋本伊賀守道求・橋本伊賀守道一・橋本伊兵衛尉道正・橋本甚太郎正太、八代相傳ヘテ居城セシカ、橋本甚太郎正太、幼ニシテ父伊兵衛道正ヲ失ヒ、肥後ニ至リテ加藤氏ニ食客ス。加藤氏滅亡ノ後、近江國坂田郡橋本村ニ移住ス。茲ニ於イテ家絶エタリ。古城跡ハ、元和元年貝原篤信ニ台命アリテ、崩サシメ給ヘリ。内城、東西一町程、南北四五十間、裏手ノ方二八、祖父江大膳亮信勝 一ニ祖父江五郎左衛門入道、関ヶ原陣ニ興シ改名ス、青山石見守重長ト名ノル 開基ノ寺ナル恵日寺アリ。其北ニ祖父江氏ノ居城アリ。東ニ城ノ鎮守直会ノ社アリ。南ニ総城アリテ、二重ノ堀ヲ構ヘ、西ニ日曜川ヲ叩フ。廣野川ヲ以テ要害ノ地トシ、東ニ屋曹川・光堂川ヲ以テ二ノ構トシ、南ニ挟間、馬出、馬場ヲ築キ、其南ニ矢倉下・四ツ屋ヲ置テ、西ニハ芳池、東ニ湫之内ナト要害ヲ構ヘ、其外ノ別荘ニ、浄蔵坊ヲ再建シ、隱遁ノ処トシ、其南ニ外舅平手氏ノ家老山田文内ヲ移シ、又其南熟田大宮ノ祝詞師田島某ノ弟ヲ迎ヘテ、神主ト定メテ邸ヲ与フ。其南ニ外舅ノ弟、平手(又野口トモイフ)五右衛門政利ヲ迎ヘテ女婿トシ、野口ニ居ラシメ、楠氏ノ一族ナル上田・橋ノ諸氏ヲ河内ヨリ迎ヘテ東西ニ置キ、南朝譜代ノ朝臣ト呼ハレタル津島七苗字・大橋・恒川・服部・河村・鈴木ノ諸氏ヲ郡中ニ分チ、其間ニ楠氏譜代ノ従士、渡辺・三輪・水谷・竹村・深井・林ノ諸氏ヲ散布シ、親族鵜飼・加藤ノ諸氏ヲ交ヘ、山内・桜木・構口・浅野・杉村等ノ帰郷ノ士ヲ馴附ク。其外土蕃ナル皆川・大崎・内田・鎌田・木村・館・山場・伊藤杯イフ十六氏ヲ使役シテ居住セリ。歳霜凡百七十八年、代ハ通計八世トス。一族隣里八九郷ニ蔓延シテ、領内凡十七郷、分城凡テ四ヶ所アリ。分家三城ヲ築キテ、三ヶ所ニ分カル。一ヲ知多郡生路ノ城、一ヲ海東郡芦屋城、一ヲ海西郡東早尾城トス。領ヲ改ムルコト三所、生津庄ト楽田ト當所ナリトイフ。家子郎従三十九姓アリ。

〔尾張国地名考 一九一六(大正五年) 津田正生著〕

今は一邑ながら、地のはしりの一切を片原と呼。此むら砂地にして井水いづれも清し。

史料2 明治・大正時代の地誌類にみる一色城跡】

田信雄分限帳』には「七百三拾貫文 橋本伊賀 いぼり ぎちやう ミヤケ このもと 式千式百五拾貫 同目録別に有 御鉄砲衆 御代官 都合参千貫余 御代官自分共に」とあり、この時点で橋本氏が三宅川沿いの井堀や儀長などに所領があり、さらに「鉄砲衆」も配下にあったことがわかる。この時点の橋本伊賀は、橋本道求の子(道一)である(愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 資料編 織豊2』)。ところが列举地名に片原一色はなく、橋本道一の代には一色城から離れていたと考えられる。というのは『張州府志』では、三宅城が橋本伊賀守の居城とされ、片原一色村の「城虚」がかつての居城であったと記されているからである。したがって天正13年以前に橋本氏は拠点を一色城から三宅城へ移動させていたことになる。

片原一色村誌 やがて明治時代になると、地元で地誌が作成されるようになる。そのひとつが『片原一色村誌』(上田正国著、明治21(1888)年)である。そこでは堀とその内側(田圃)を合わせた「二町一反六畝一九歩」という面積まで記されているだけでなく、「内城総城」という曲輪の構成や「内城」が東西1町という言及

である。尤も、元和元(1615)年の廢城に貝原篤信(益軒)が関与しているという記述は、その生年(1630年)より前のことであるから全く根拠がない。このように記述に混乱があるだけでなく記述の多くが典拠不明でもある。おそらく「内城」の規模は現地(耕作地)から割り出したものと思われるが、「総城」の規模や家臣は筆者の推測の部分が大きいと思われる。

史料からみた変遷 以上のことから、一色城は地誌類にみえる片原一色村の「古城」で、織田信長が鉄砲を習った橋本伊賀守の居城であったが、天正13年頃には織田信雄の家臣として鉄砲衆を率いた橋本道一が居城を三宅城に移動していたため、それまでに地域支配の拠点としての機能は失われていた可能性が考えられる。一方でその築城は文献史料では不明で、橋本氏も善応寺の伝承に2代目の橋本寛勢が出てくるが、5代目の橋本一巴(道求)まで史料で確認ができない。

(2) 発掘調査成果からみた一色城

方形の城館 つぎに発掘調査で検出された一色城跡の遺構をもとにその規模を復元してみよう。まず堀跡は、

東堀（19Ba区464SD）が検出幅約14.5m 深さ1.2m、北堀（20C区035SD）はごく一部であるが、464SD北端から東へ屈曲する部分（19Ba区494SD）があり、近世溝194SDに大部分が掘り返されているが東方へ続いていた可能性がある。西堀（20B区230SD）が検出幅約9.2m 深さ1.1mがある。次いで北堀に平行する内溝（20A区056SD・090SD）は検出幅約3.7m 深さ0.7mで20B区で南へ折れているのは堀に連動して築造されたことの表れである。そして築城にあたって古代～中世の包含層上に造成された整地層が残存部分で約0.9mの厚さがあり、その上面（20A区検1面）にて133SDなどの南北小溝が検出されている。

以上が一色城の遺構であるが、北堀と内溝の間で戦国時代の遺物が出土しない区域を土塁跡と想定すると、東・北・西堀と土塁に囲まれた曲輪の存在が明らかとなる。がそして堀の外側でほとんど戦国時代の遺物が出土しないことも考慮すると、一色城は単一の曲輪で構成されて

いたとみることできる。そして内溝から生活雑器（食器・煮炊具など）が多数出土していることからすると、この曲輪内で日常生活を営む館的機能を有していたと評価することができる。

その上で推定される規模であるが、東西長は東堀と西堀をもとに堀の外径で約106mを測り、ほぼ1町（109m）となる。また、内溝が東端でも屈曲していると想定すれば曲輪内の整地範囲は東西約67mとなる。一方不明な南堀は、地籍図で土橋状になっている畑の地点が出入口のようにみえるが、内溝の痕跡という可能性もある。

一色城の消長 出土遺物では、古瀬戸後期様式Ⅳ期～大窯第1段階が大半を占め、土師器も16世紀前半である。これらが廃棄状態にあり同時に焼けた部材も含まれることから、一色城の廃絶も16世紀半ば過ぎを想定できよう。先述した浮野の戦いに近い時期で、橋本一巴の消息が城の消長に影響しているのかもしれない。

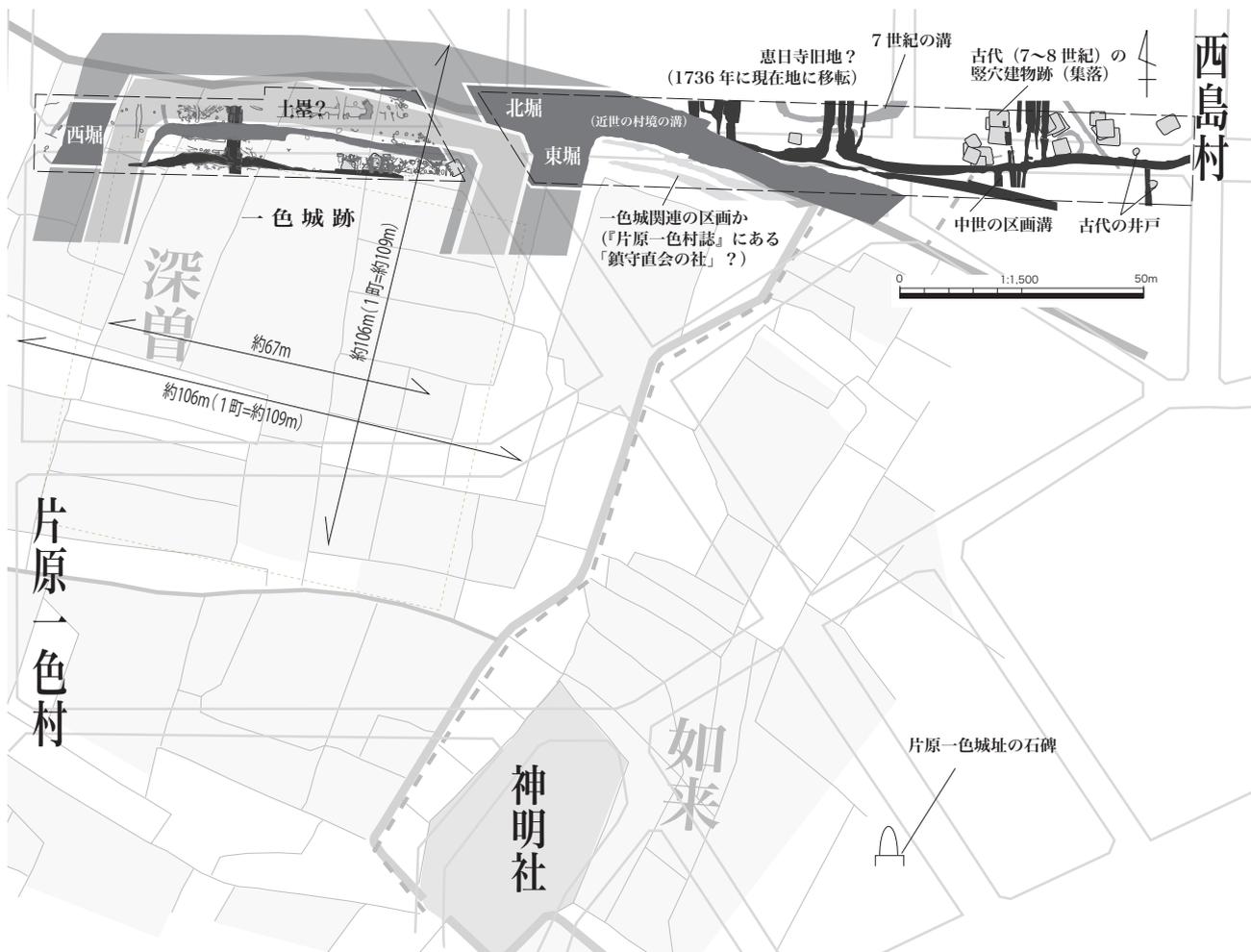


図94 一色城跡の発掘調査の概要図

第2節 一色城跡における集落の変遷

(1) 古墳時代から奈良時代

微高地上の集落 遺構の概要は第2章で述べたとおりで古墳時代前期と同後期、奈良時代の集落遺構は、今次発掘調査区の東半部（19A～D区）に集中している。それらが最も重複しているのが19A区中部や19Ba区東端部～19Bb区西端部で、ここは自然堤防状微高地の尾根筋南端に相当する。特に古墳時代前期の分布が限定的であることから、まだ利用可能な微高地が狭かったとみられる。このことは464SD下位で当該期の土器が出土する河道の堆積があることから示される。

その後5～6世紀代の活動はきわめて低調で、19A区の大溝128SDは古墳時代後期（7世紀）で、奈良時代の集落へと続いている。しかし128SD北側に想定される7世紀の集落は、やがて8世紀になるとやや低い19A区東半部へ分布域が移動する。微高地の縁から湿地帯へと開発が進んだためと思われる。当該期の集落には製塩土器や「美濃」刻印須恵器が搬入されており、西側の微高地（20A区）にある掘立柱建物の存在とともに地域の拠点的な集落であったことを示している。

(2) 中世集落から一色城の築城

中世区画溝 ところが9世紀代の灰釉陶器は数点にすぎないことから、平安時代は再び活動が低調となる。そして14世紀代には区画溝が縦横にめぐる中世集落の景観が展開するが、区画溝内の様相は削平され不明な点が多い。その区画溝も、一色城の造成に伴って整地層下に埋められていることが20A区で確認された。また、一色城が機能していた時期の遺物はこれらの区画溝から出土していない。一方、一色城関連の遺物は概ね15世紀半ば以降であるから、15世紀前半の空白期が生じることになる。したがって中世集落は築城以前に廃絶していた可能性が高い。つまり一色城跡では、集落内で城館が自生的に発達したのではなく、築城者（橋本氏）は集落の外部から入ってきたと考えられる。

村境の溝 一色城廃城後は、埋没の進んだ北堀を掘り返して大溝194SDが成立した。この溝の目的については文献史的な裏付けはないが、江戸時代の西島村と片原一色村の境界に位置し、幾度もの掘り返しで維持されていた点は重要である。



図95 一色城跡関連の遺構（令和元年度と同2年度の空撮写真を合成して作成）